

定石なるものが記憶し難い、殊に最初の内が最も記憶し難いから、時々研究を初めて見ましても、覚え難いから面白味がない、面白味がないから放擲する事となります、恰も諸君が麥酒を呑み初められたる當時、餘り美味いと思われませんか、度重りて味が判ると美味くて美味くて呑んだ後の酔ひ心持ちまで良い、之れと同じであります、定石も少し覺へて來ると面白い、覺へるのが面白い斗りでなく碁友と對局して勝つ、益々愉快を増します、碁は愈々上達いたします、此調子で進歩すればスグ初段、二段になれる、新式圍碁研究会も何も要らんと云ふ境遇になります、斯く成り得らるゝには如何なる方法によりて成り得らるゝか、記憶し難い定石を記憶し易くすれば直に此境遇に到達いたします（上達器を應用して研究すれば容易に記憶し得られます）

斯様な次第でありますから折角御入會に成りました方々は充分に上達器を御利用に成りまして定石の御研究を希望いたします、本號の卷末と次巻の卷首には又々互先の定石を掲載いたしますに就きまして一言申述べました次第であります

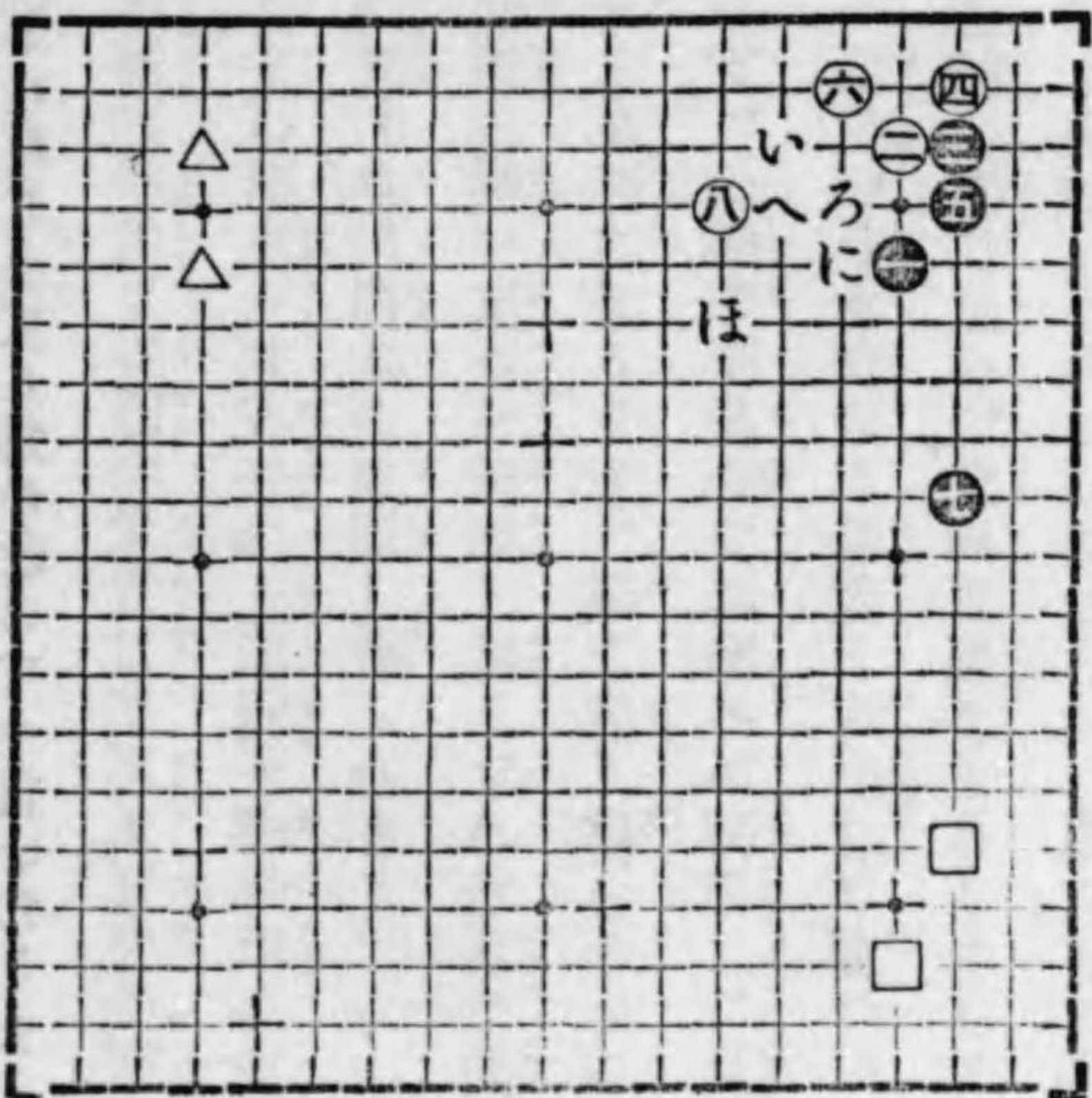
（斯様な事を此處に挿入いたしましたは何故かと申しますると、此頃本會に御來訪の

會員諸君に就て見ますると折角御入會に相成り乍ら前號の置碁定石を御研究に成つて居る方々が少ない様でありまして甚だ遺憾に存じまする爲め改めて一言いたしましたごぞ悪からず御諒承を願ひます）

●互先の定石

高目 内付

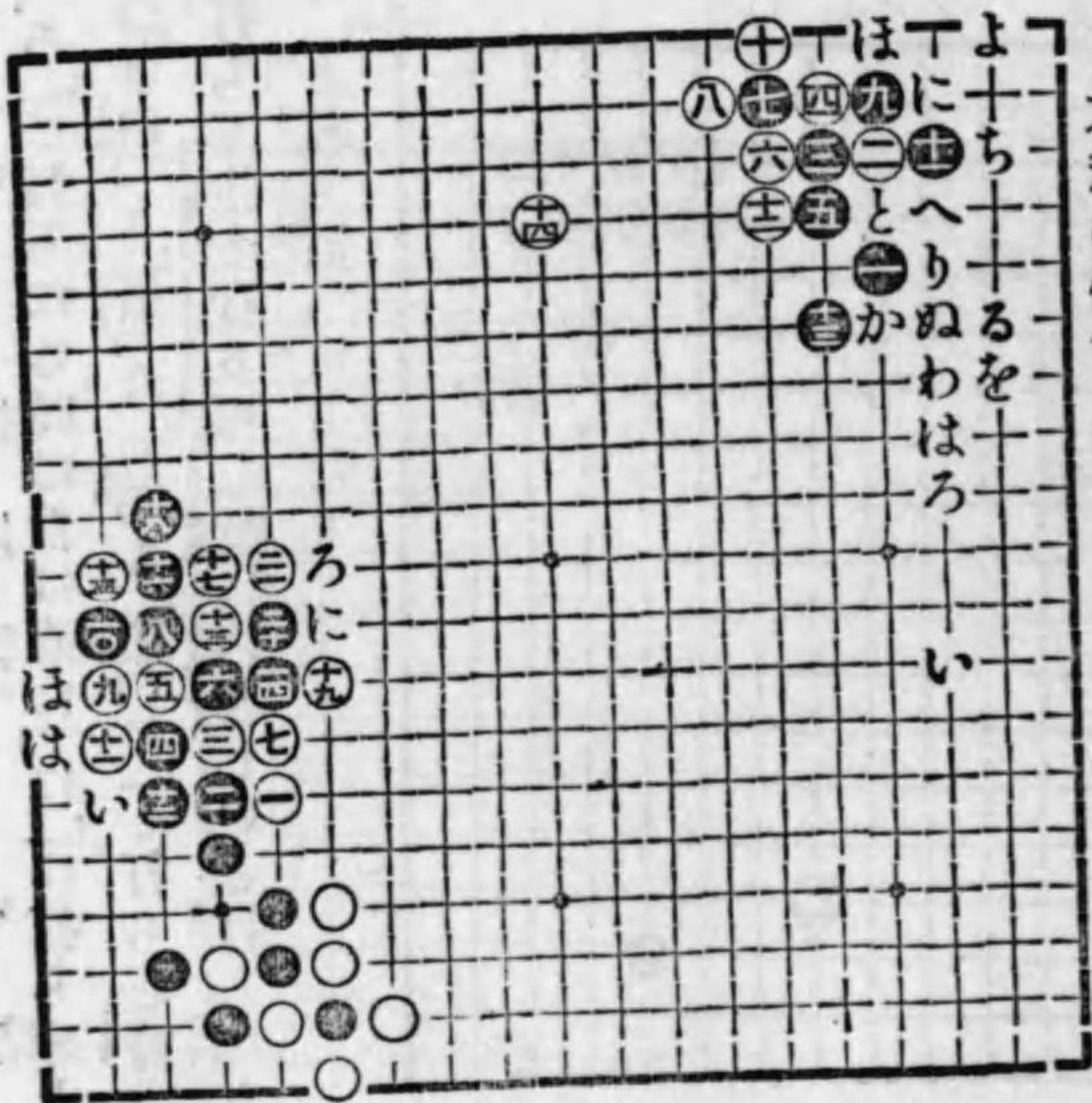
白八の手は他に急場あれば手扱するも差支なければ此場合黒は左△△印の方面に布石ある時には「い」と打ち白「ろ」黒八白に黒「ほ」と打つ可く若又右方□印の方面にあるときは黒八と打ち白「い」黒「へ」と打ちて黒の勢力非常に雄大となるなり



高目 外付

前頁の内付の反對に圖の如く外部より付ける時を示したるものなり、此時白十二と黒十三は共に最も必要なり殊に黒若し十三を手扱く如き事あらんか白は直に乙圖に示す如く白一黒二の順序となりて黒は甚だしき不利の位置に陥るものなり  
此時若黒に征の當りあるときは白は十五の手を以て直に十九に結げ黒二〇に曲り白十七に行ひ黒「い」の處へ押へたる時白は「ろ」に門にかけ黒「は」に打ち白「に」に黒「ほ」に三目取りたる時白は二十一の處に押へて結局全部包圍せられるに至るべし故に十三の手忘る可からず  
尙甲圖に就て其變化を説明せんに白若し「い」と打ち來りたる時に「ろ」と打つ事を爲さず「は」と一目

圖甲



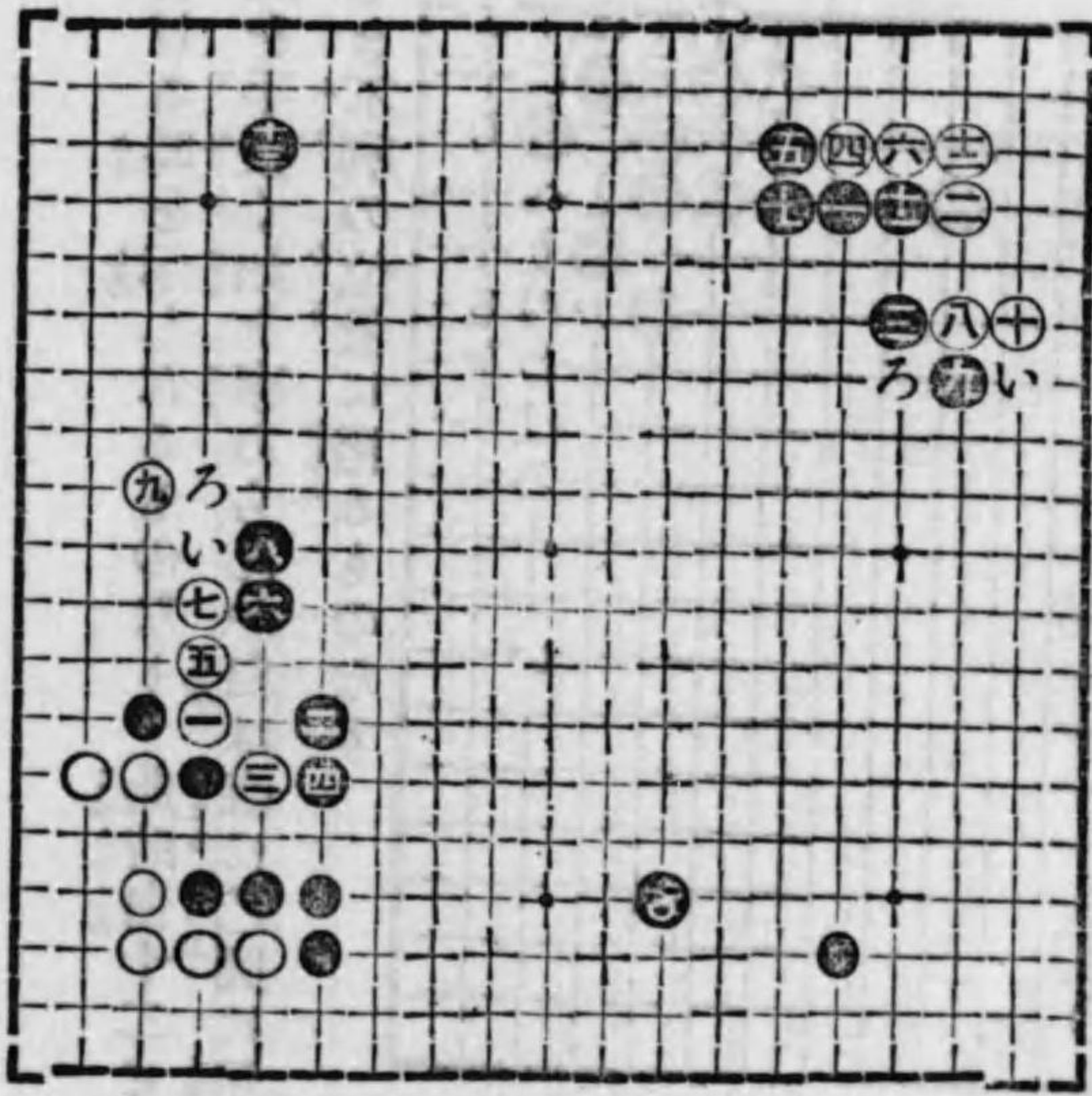
圖乙

控へて打つ可し、何んとなれば黒若し「ろ」と打ちたる時は白は直に「に」に打ち來り黒「ほ」と行び白「へ」黒「と」白「ち」黒「に」につぎ白「り」黒「ぬ」白「る」黒「を」と打ちし時、白「わ」と切り黒「か」と粘きし時白「よ」と打ちて生となる可し故に白若しいと打ち來りたるときは必ず「ろ」と打つ事を爲さず「は」と打ち置へ可きなり

高目

黒十一は場合による打方にて本圖の如く十三と打たんとする時必要なり若し「い」に押へんと欲する時には不可とす、此場合に於て白若し「ろ」に切り來りたる時は乙圖に示す如く「九」の一子を棄て、打つ可し而して白九と斜走せし時黒は十と打つ可し、本圖に於て白九の手を若し「い」に打つ時は黒は「ろ」に打ちて以下節頁之圖に於けると同様の結果に到着するを以て白は必ず「九」と斜走するを可とす

圖甲



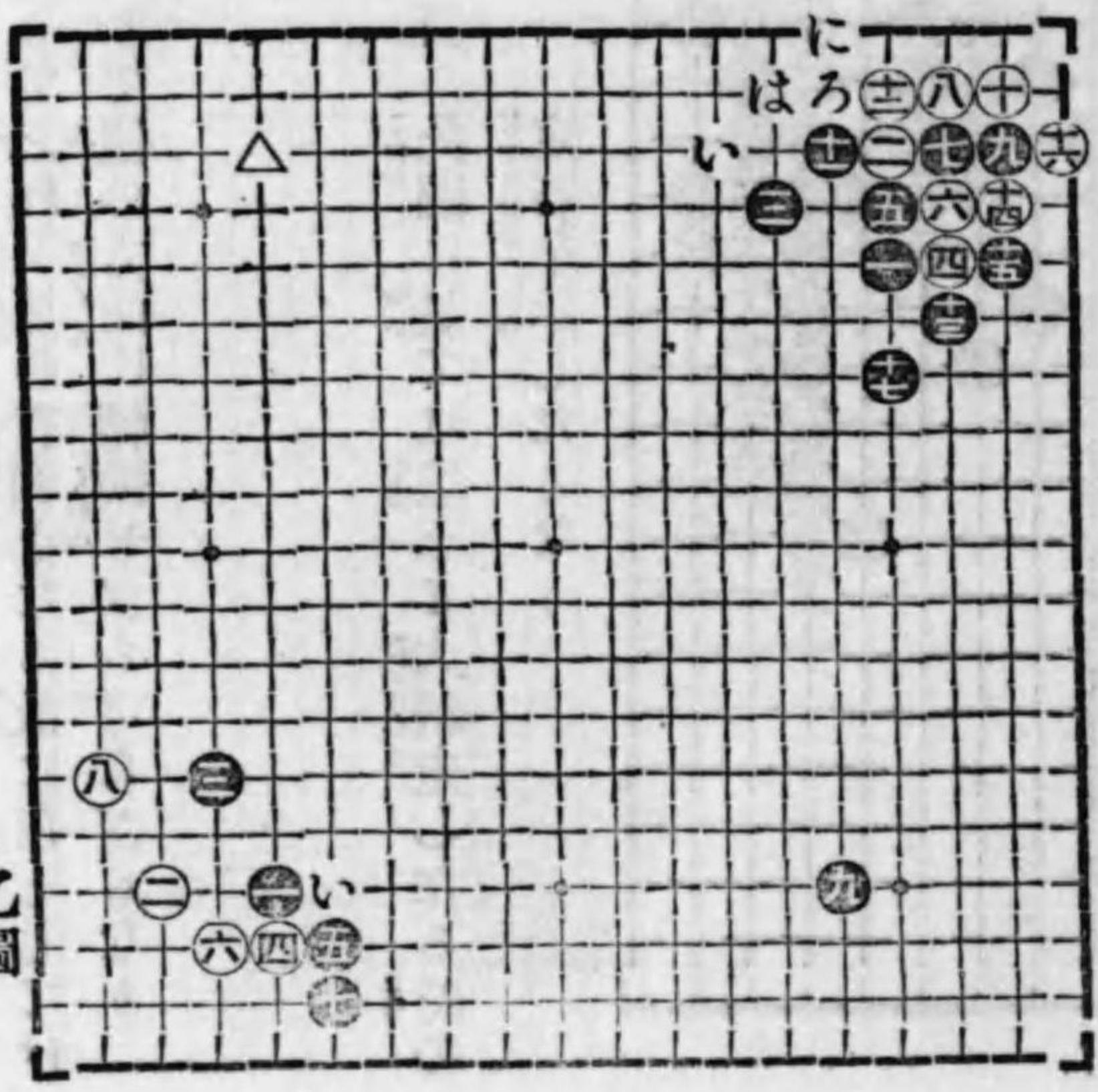
圖乙

高目

甲圖の如き定石は黒の發展上最も有利なれ共茲に注意すべきは△印の方面に既に敵の布石ある場合は大に不利に陥る事あり即ち白に「い」と打たれて黒は「ろ」に白「は」に黒「に」白「ほ」と打たれて白に大模様を打たるゝに至る之れに反し若△印の方に黒の布石既にある場合には非常に有利となるものなり

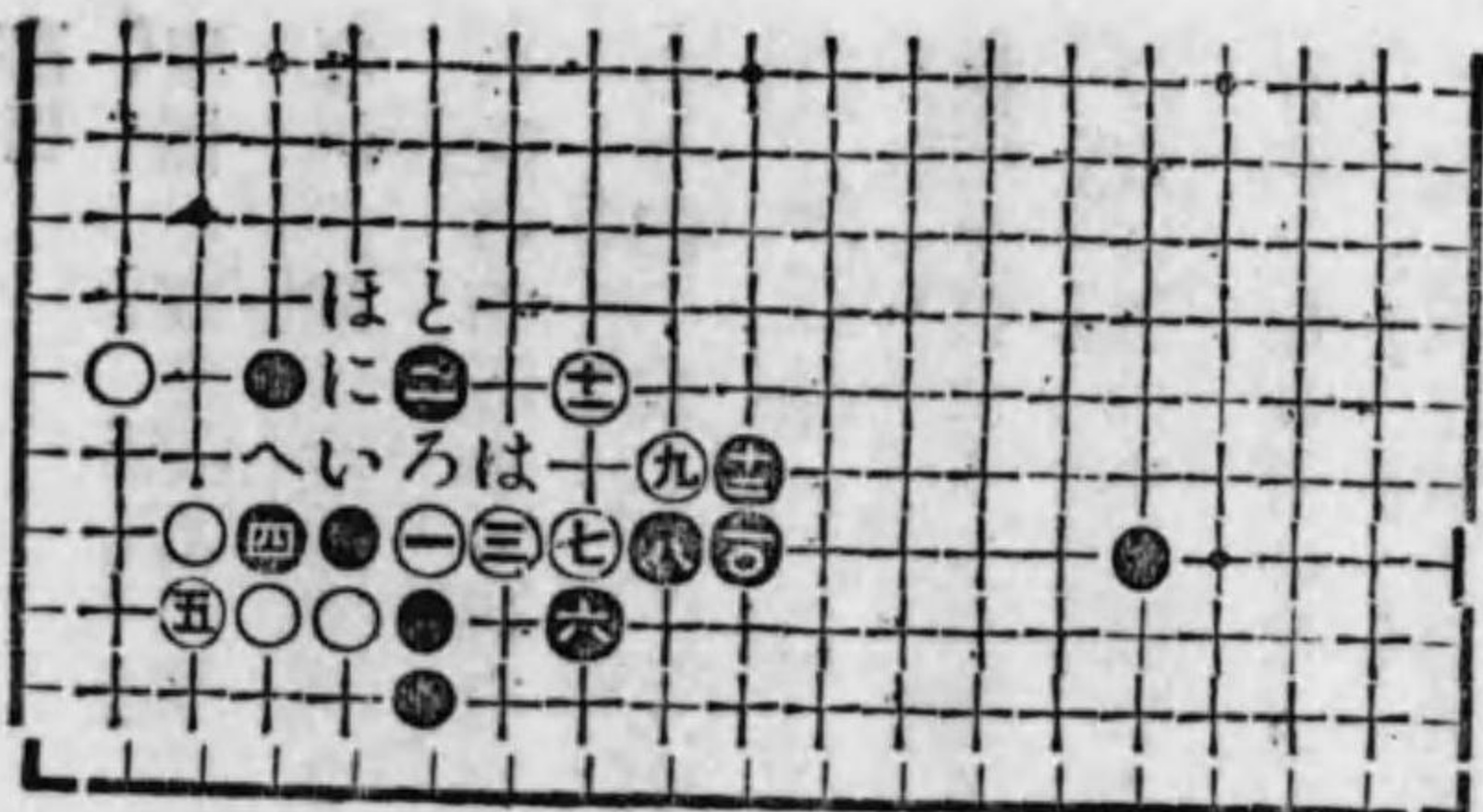
乙圖定石に於て黒九は「い」の切手を覺悟してその打手にして最もよし若し白「い」を切りたるよきの成行は次圖に説明することとせん

甲圖

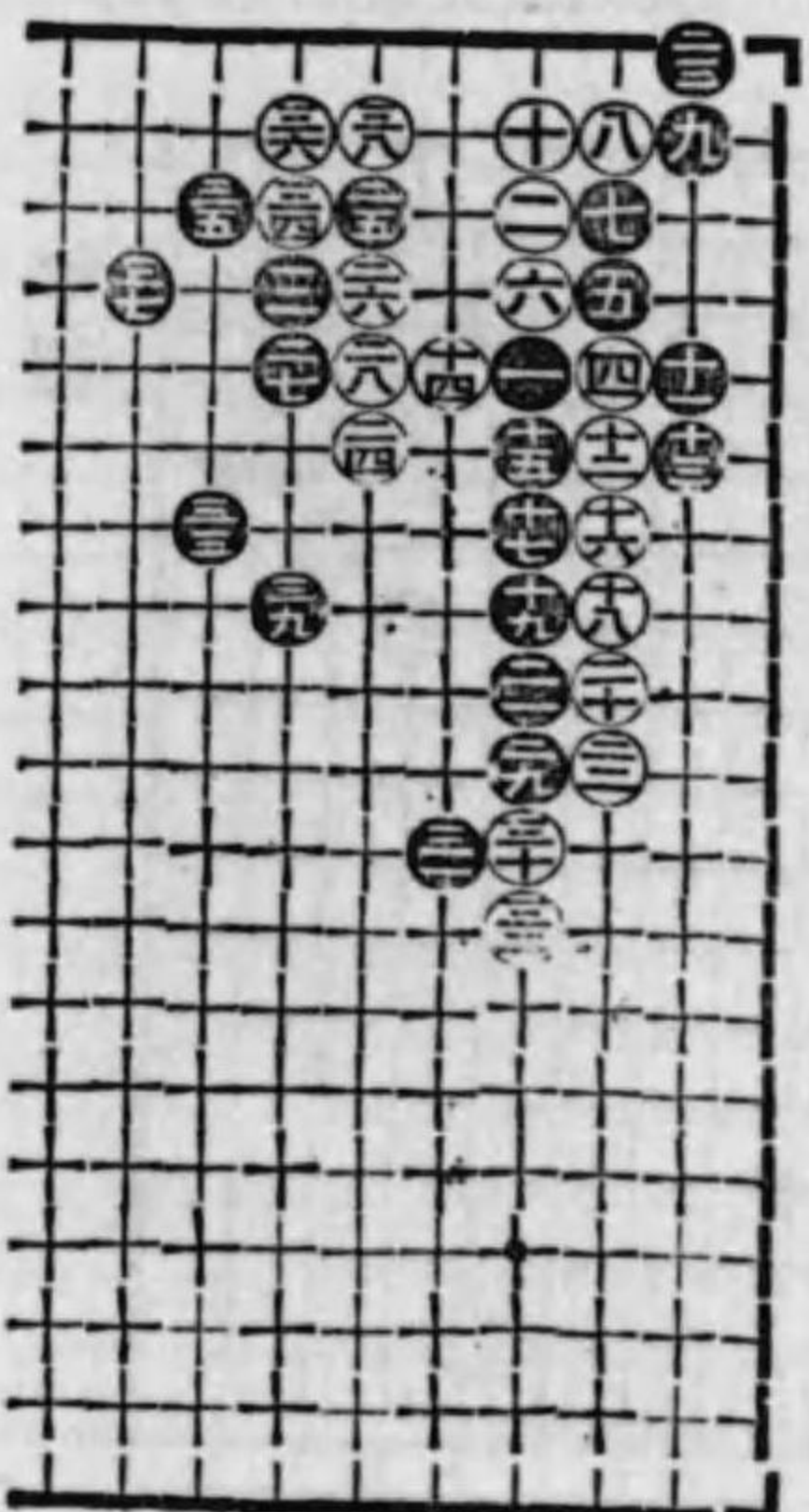


乙圖

此圖の如き結果となりて結局黒の有利となるなり  
 若又白三とのびずして「い」と打ち來るときは黒は「三」と締め、白「ろ」は「黒」は「白」に「黒」  
 「ほ」と押へ白「へ」と打ちし時に「黒」と粘きて之れ又黒の有利となる故に白としてけ  
 一の切手の此場合有利にあらざることを知りて他の方面に轉換せざる可らざるなり

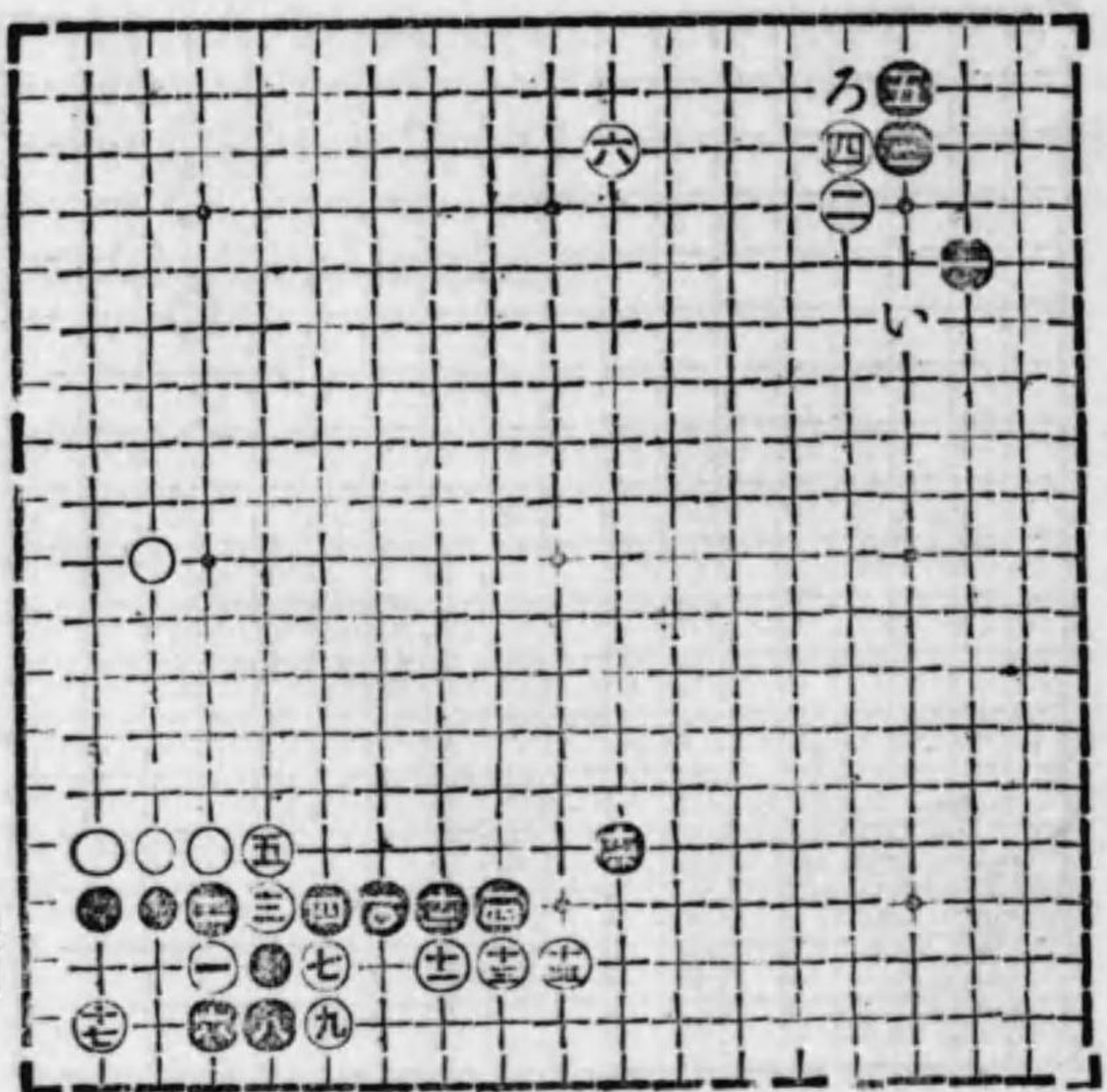


高目 此圖に於ては黒三と大斜走したる時の  
 定石を示したるなり



甲圖

目脱 高掛り  
 目脱に對し白圖の如く高掛りに打ち來り  
 たる時の定石にして此時黒「い」と尖むは  
 良き手なれども餘り急にはあらず寧ろ手  
 抜して他の有利の地歩を求むるを良しと  
 す然れ共若白「ろ」に押へし時は直に「い」  
 に尖む事を忘る可からず若し尖まるる時  
 乙圖に示す如き結果をまねき黒遂に死す  
 るに至る可し

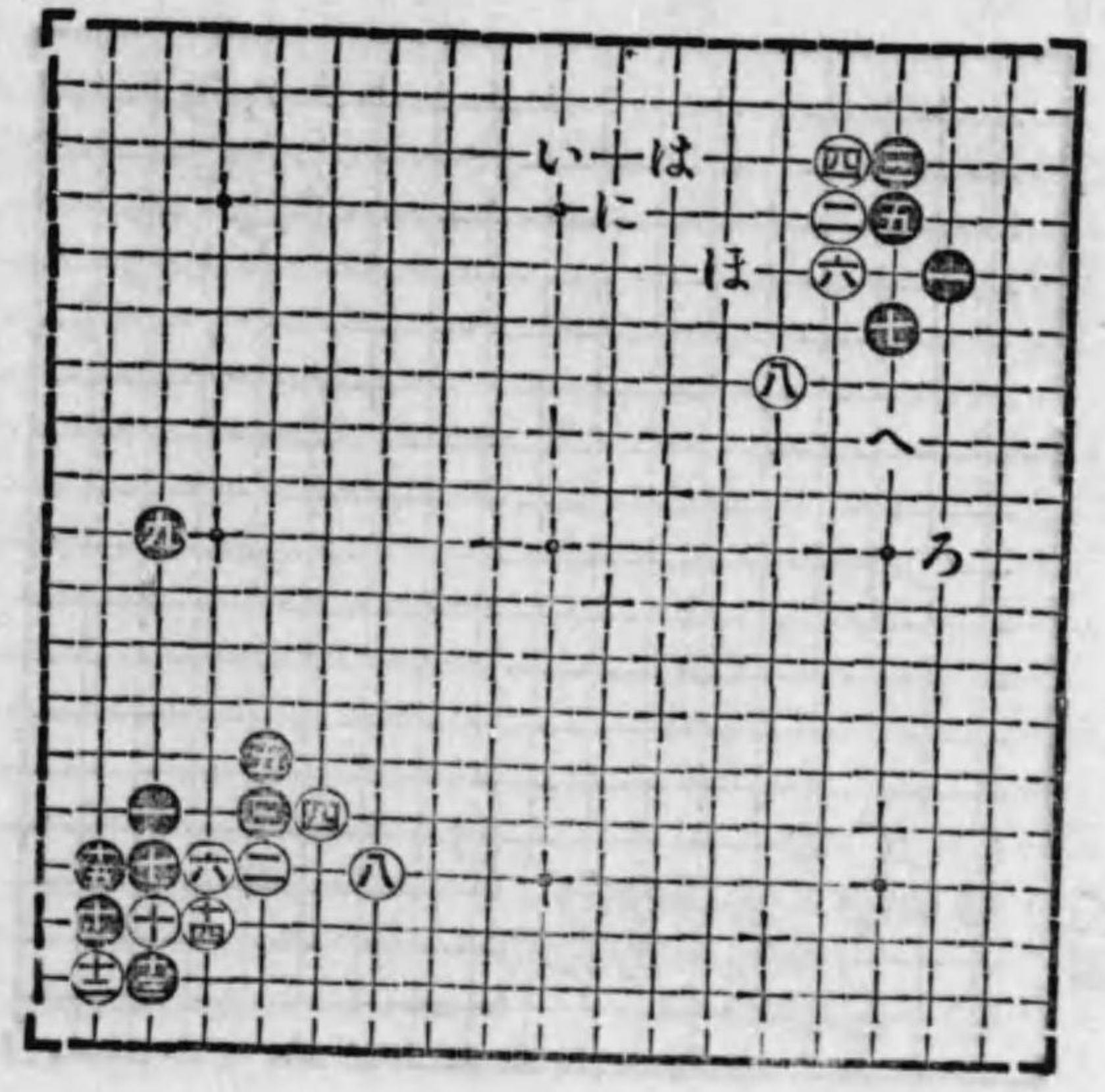


乙圖

目脱 高掛り

甲圖の定石に於ては白八の手双方共に重要視する打手なり白若し「八」に打たずして「い」に打たんか黒は直に白の八の所へ打つを良しとす而して白若し「ろ」に來らば黒は「は」に打込み白「に」に尖ば黒「ほ」に斜走するを以て黒大によし之れに反して圖の如く白八と打ちし時黒「い」に打たば白は「へ」に打ち來りて形勢大に優越となるものなり

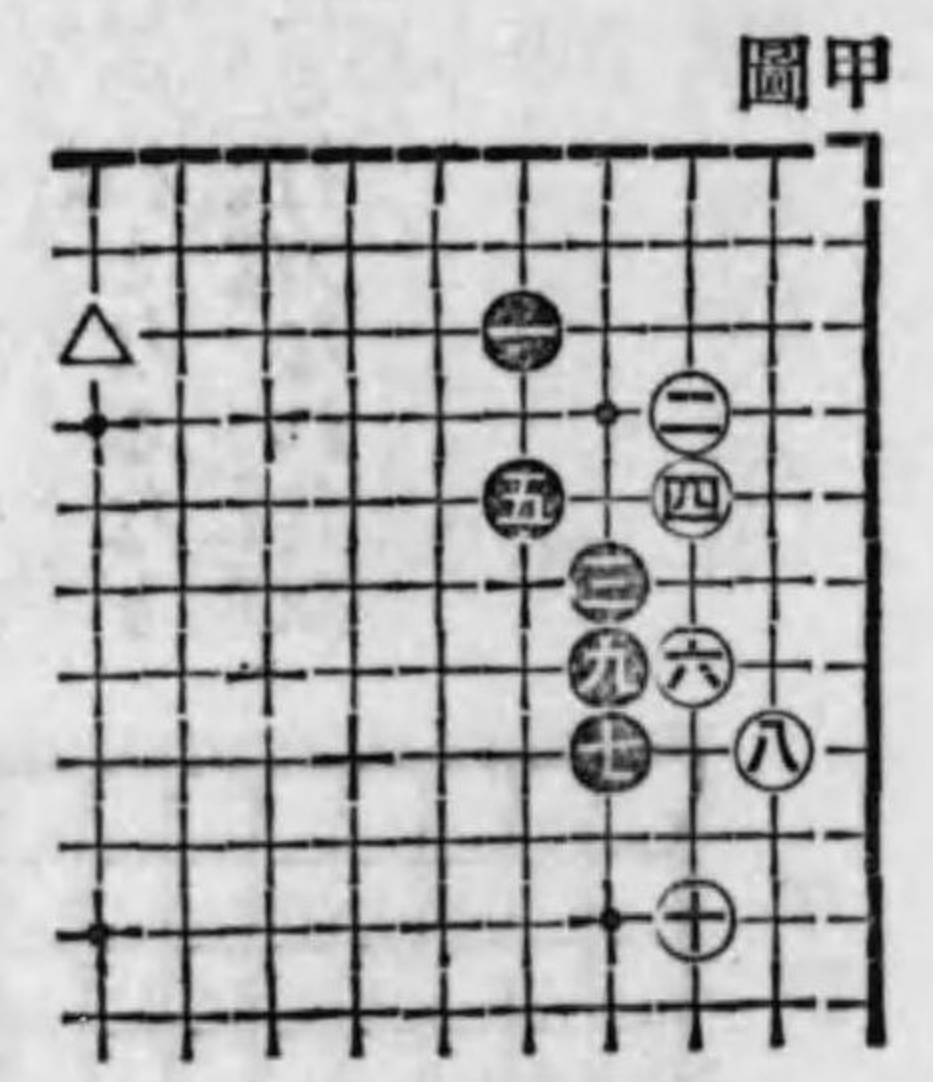
乙圖に於ては白八と掛粘く事及黒の九と啓く事共に最も重要な手なり



甲圖

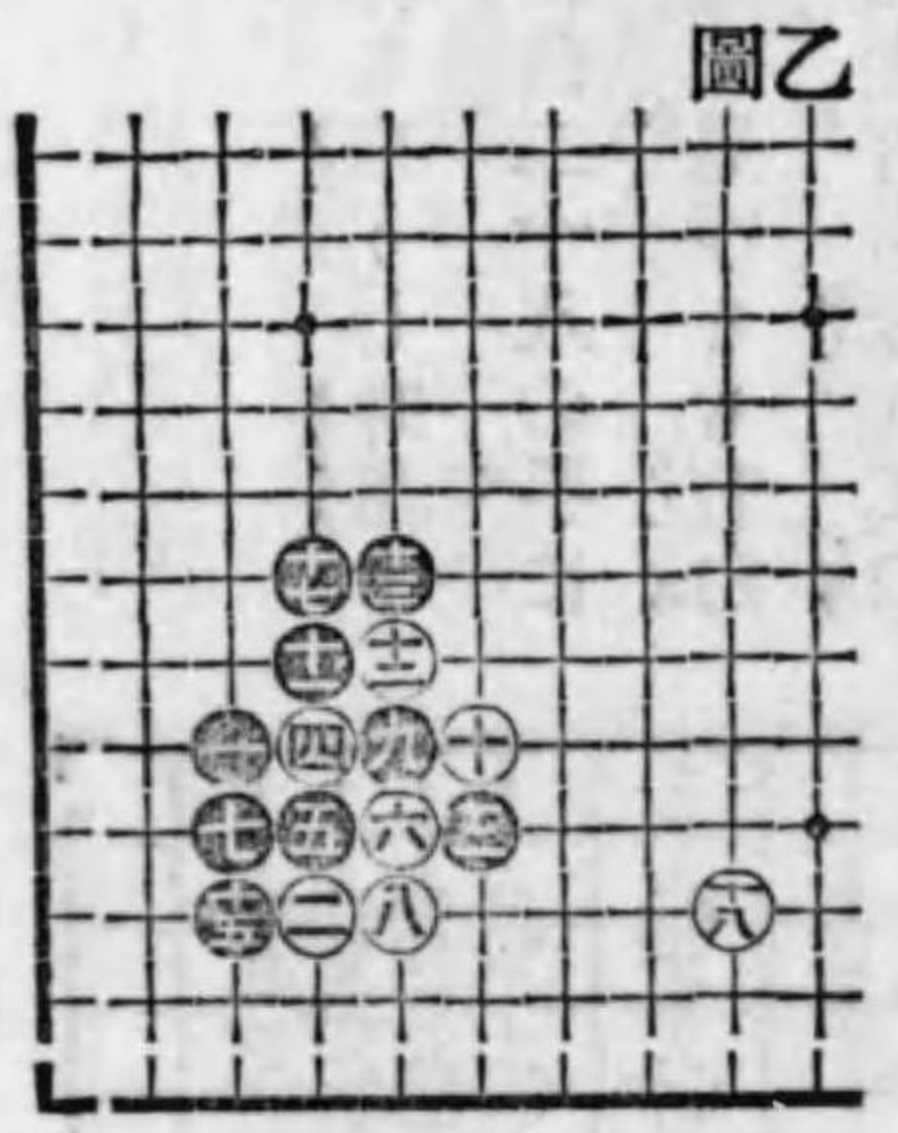
乙圖

目脱 小目掛り  
甲圖の定石は白の方低くして餘り好ましからざるも白の布石△印の邊にある時には打ちて差支なきものなり



圖甲

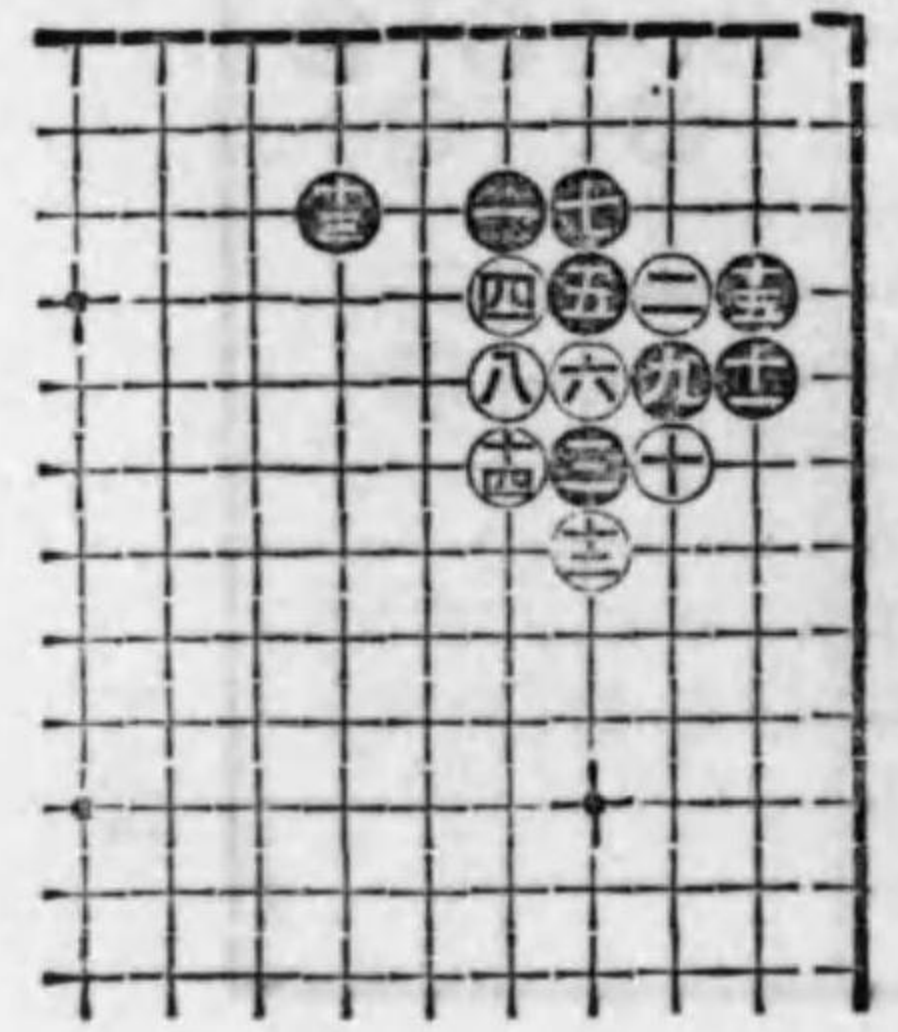
乙圖に於て注意す可きは白十二と打ち來りたるとき一目粘くは不利なり若し粘く時は黒先手を失ひ且つ白より十五の處にのびて角を占領せらるゝに至る



圖乙

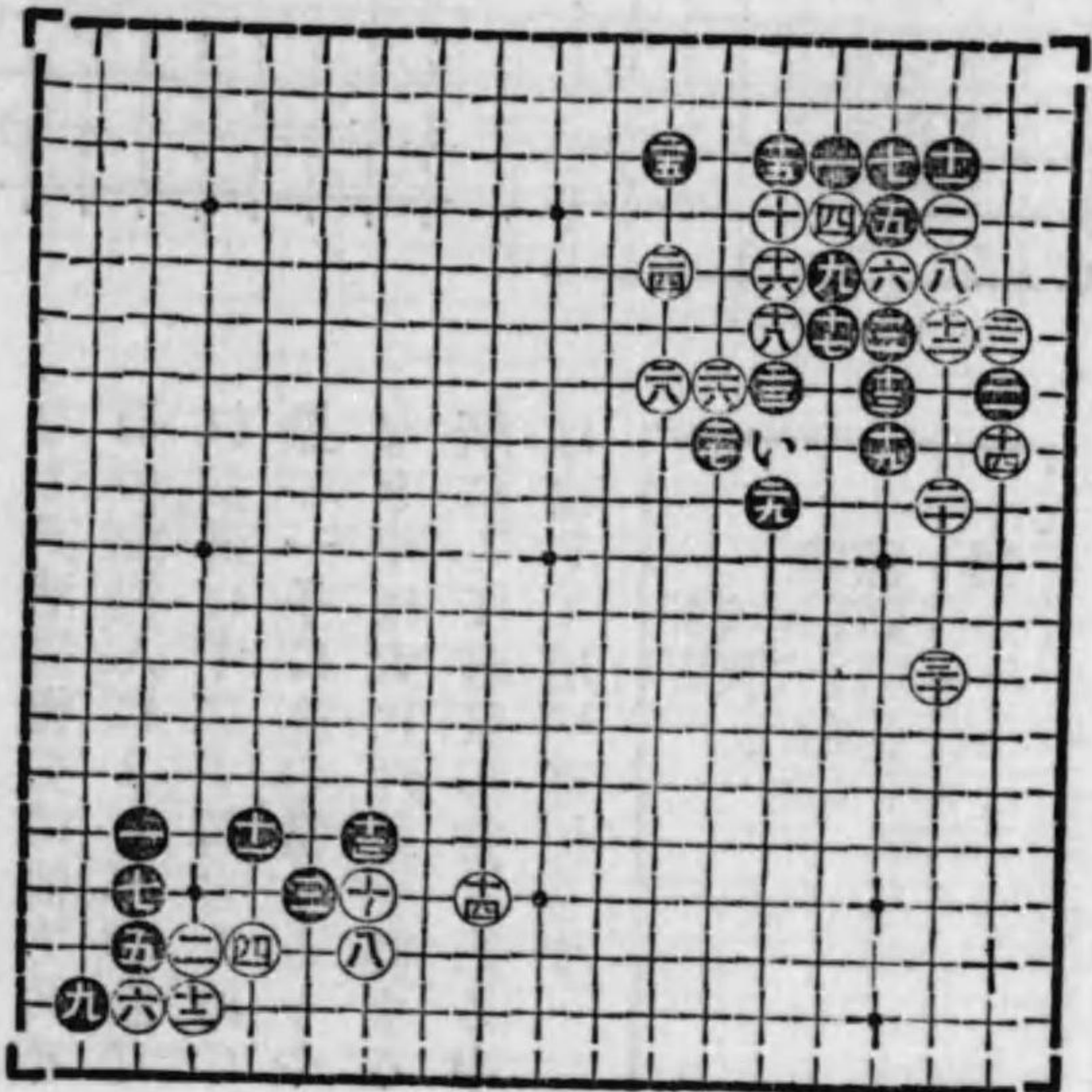
白十四 一目とる  
白十六つぐ

本圖は前圖の變化にして白八の手を上粘きたるものなり其利害得失は他方面布石の如何んによる事勿論なれ共殊に十二と縛けし時の黒の一子に征の當りありやなきやは大に注意を要する所にして若征の當りある中は決して用ゆ可からず



目脱 小目掛り

甲圖に於ては白十八と打ち來りし時黒十九と行びる手肝要なり尙白二十八の手にて「い」の處切り手ある如く見ゆるも若白此處を切らば黒は二十九と打ち來りて白二目粘にし後手となり白の損となるなり乙圖は一寸目先の變りたる打方なれ共双方大模様にて面白し

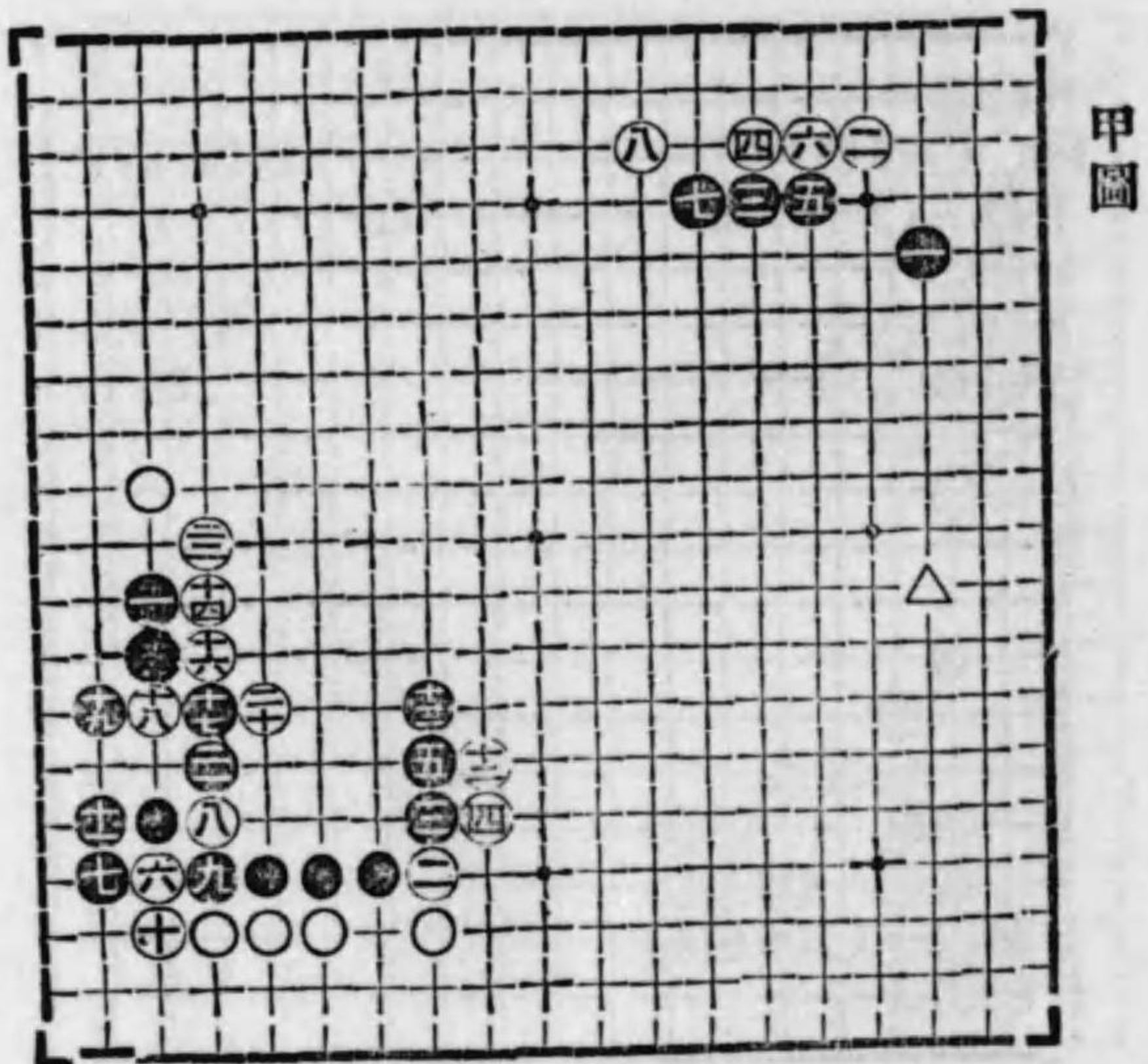


甲圖

乙圖

目脱 小目掛り

甲圖の如き定石は白は三線に壓迫を受け一見不利益の如くなるも斯の如き白の打方をなす多くの場合には既に△印の方面に白に布石ある場合に打つ定石にして此方式によりて白の所得少なきも黒も又外廓を圍みたる割合に所得少きなり即ち乙圖を以て其結果を示す事とせん乙圖によりて其結果を見る時は黒の不利となる故に黒は既に散在する布石をよく注意して斯くの如き定石は必ず甲圖△印の方面に白の布石なき時に限り打つべきものなり



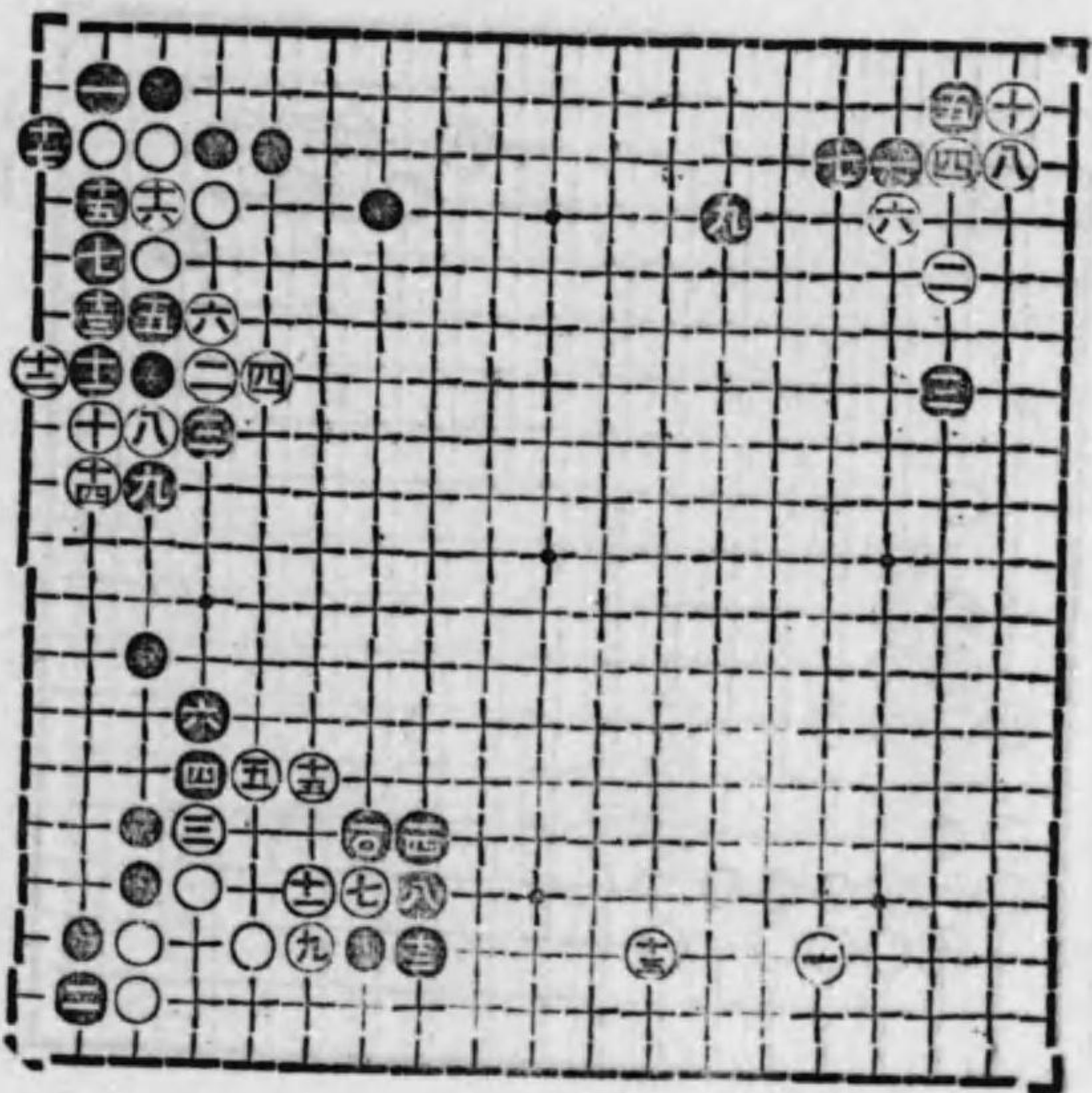
甲圖

乙圖

小目 一間夾

甲圖定石に於ては白十の手肝要なり若白手抜きする如き事あらんか黒は直に乙圖に示す如く懸り來りて白甚だしき不利に陥る可し

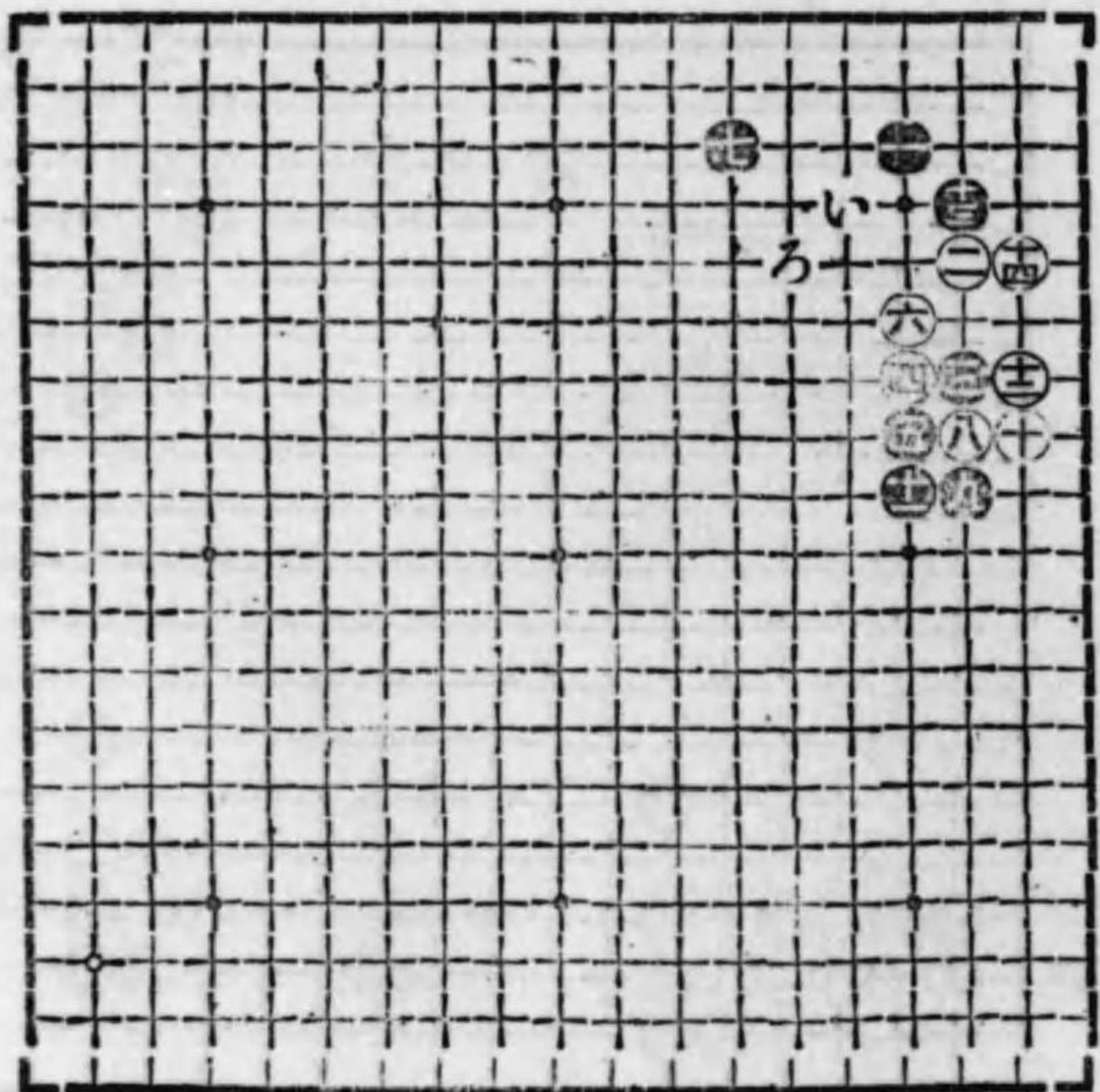
尙甲圖に示したる如く黒九と斜走する事肝要なり若し黒九の手二間啓に打つ事ありとせんか其結果は丙圖の如く白は活ながら手抜して他の方面に發展の餘力を得せしむるに至る故に九の手は小斜走に打つ事を忘る可からず



甲圖

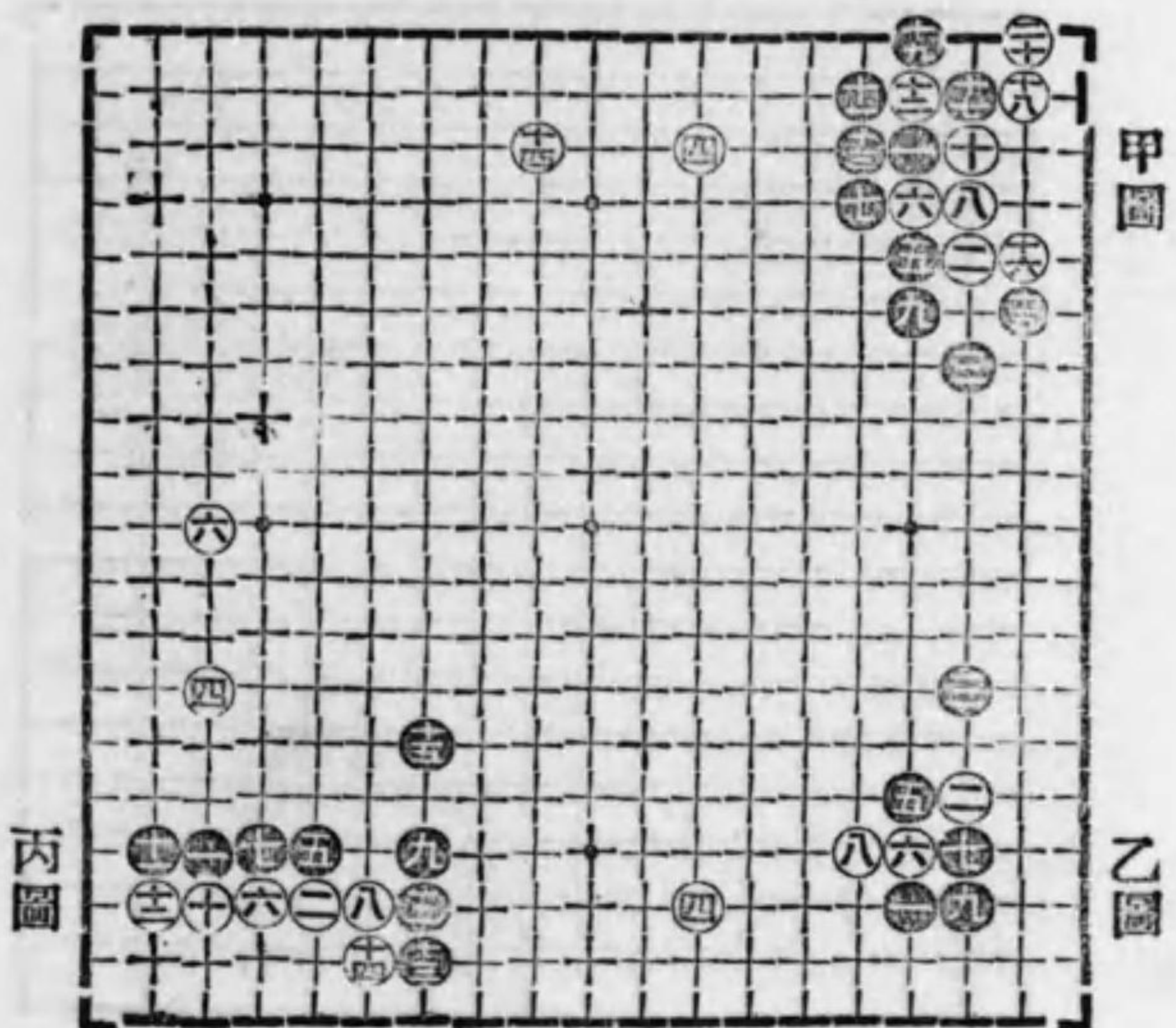
小目 一間夾

此定石に於て黒三の一子を捨て七と啓きたる處肝要なり若し三の一子を呑みて援護して居るときは白は直に七の處に打ち來り黒「い」に尖みたる時「ろ」と斜走せられて白に充分の發展勢力を與ふるに至る可し尙又白十四の手一見不急の様なれ共決して左にあらず此一子によりて確實安全に三方面に飛出す事を得る構へとなるなり



小目 一間夾

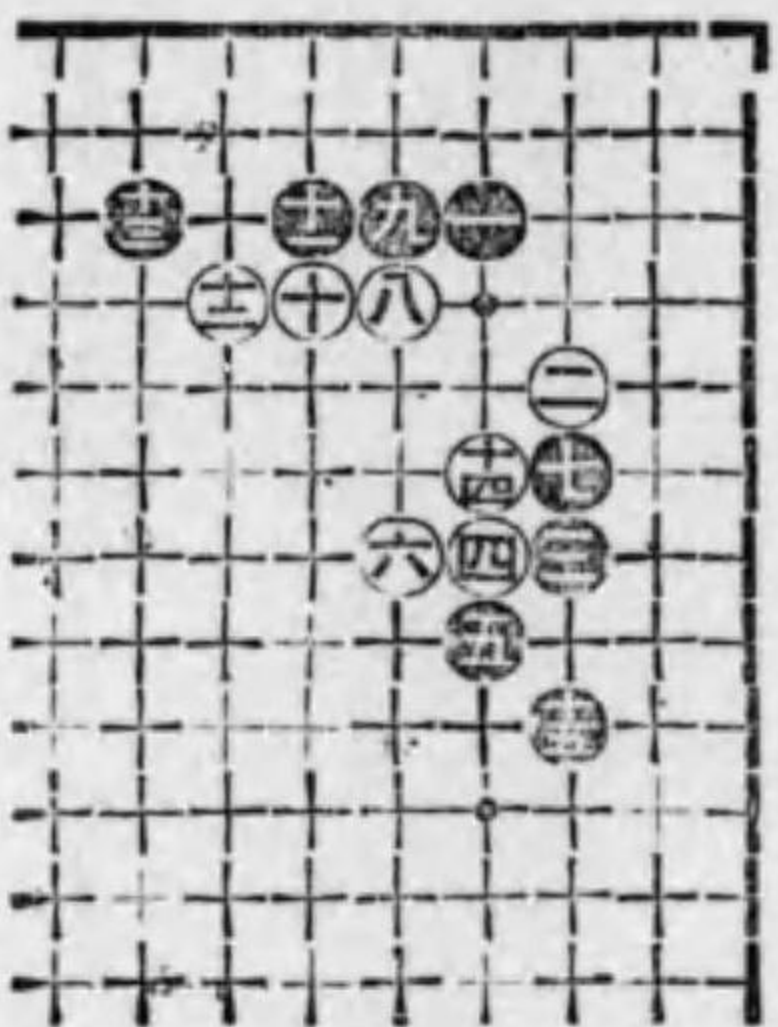
甲圖定石に於て大に注意する手は白六及  
 黒七なり即ち乙圖を以て示す如く黒五の  
 石征の當りて脱出し得る時には黒は七  
 の手を以て八の方から切るを良しとす故  
 に白は黒の五の石の征に掛け得る事を知  
 りて甲圖の如く打ち來りたるも若し征の  
 當りある時は丙圖の如く打ち來る外なき  
 なり



丙圖

小目 一間夾

本圖に於ては白八の手最も肝要なり白八の手の  
 如きは初心の内は如何にも危険の如く見ゆるも  
 のなれ共よく調ふる時は此場合として最も良き  
 打手なる事を知るべし





### ●圍碁上達に就て

こは明治三十九年一月東京成功雜誌社發行の「成功城」に掲載せられたものであつて、本因坊土屋秀榮先生の口話を成功記者が筆記したものとこのことであるが、斯道研究上有益の談話であるからこゝに轉載す。

圍碁の稽古と云つて別に方法があるではない、唯だ上手な人に打つて貰うて、調べを聞いたり、古い人が打つた碁經を見て調べたり、自分が工夫をしたりする。此三點より外稽古の仕方、即ち研究の方法は無いのである。

碁打となる目的にて師匠の許に内弟子に這入ると先づ始めに其者の技量を試みるために、師匠が一番打つて呉れる外、二年三年と経過するうち漸く二番か三番打つて貰ふが關の山で、其の他は絶えず、盤面に向つて素人客の對手をする。碁經に因つて石を

列べるばかりである。上手なるものに打つて貰ふが何よりの稽古であるが、その機会を得る事が中々難い。師弟の關係あるものとても二年に一番五年に三番より打つて呉れぬのであるから況して他のものが對手に成つて鬪石はして呉れない。それを望むには其上手な方に謝禮をしなければならぬのである。けれども内弟子に成つて居る位のもので中々にそんな金のあるべき理由がないから空しく指を啣へて引込んで居ると云ふ始末である。斯くして師匠の許にある中は自分の工夫を凝らして研究に研究を重ねるが碁打に来る富有の人達に最負にされ愛されると其人が謝金を出して上手な方と打たして呉れるものである。此様なことで漸次技術も進歩し、井目で打つたものも三四年も絶過とグット上達して初段には成れるものである。是から先きを踏張つて修業するは少なく初段の許しでも得ると一旦歸國するものが多い。併し素人側になると餘程器用な人でないと左様は進歩しない何故と云ふに素人には月謝を貰うて教授して居るのだから幾度でも教へるが弟子となつて將來碁打とならんとするものには同じ事を二三遍もきくと最う教へない、師匠の傍に居るから何時でも勝手に習はれると云ふ氣に

弛みがあると到底上達するもので無いので無慈悲なやうであるが決して一遍より教へない事になつて居るで一度聞けば二度聞かれぬと思ふから聞く時に注意して覺へ以後忘れないのである。而して一を聞いて十を探ぐる事にのみ心を用ひ師匠の一言一句を疎そかに聞いてぬぬので術も進み藝も漸次に熟練するが素人側になると放心と聞いて習ひし事を直ぐ忘れて了ふから上達が遅いのである。又その上達の度合は其の人の器用不器用に依つて大いに遅速はあるが上手となる人は最初より器用な人は尠く多くは不器用より練り揚げて一定の區域を脱するので、彼の大器晩成とか申すも此處の事ならんと思はれる、而して鬪碁の三段までは誰れにても到達する事が出来るものであるが是れ以上となるには誠に困難である、畢竟三段位までは師匠の教授も受けられる、其教授を受けつゝ自分で工夫すると何うにか油りつかれるが、四段以上になると宛然お手本を失ふに均しく漠々たる天外を仰ぐが如く茫々たる原野を歩むが如き有様となつて了ふ。其處で以て進む可き方針が取れぬ。其域を一步出づるは容易ならぬ苦心である。諄いやうであるが素人側の進歩の遅々たるは教

へられたる事を能く忘れるのが一大原因であつて碁打とならんとするもの、進歩の速かなるは授けられたる教を忘れず其教へに對して自己の工夫を重ねる結果に外ならぬ同じく盤面に向ひ同じく石を卸すに於ては異ならざるも其心の用ひ方に輕重があるのである。

自分などは八歳のときより盤面に向はせられたか其頃は無我夢中でホンノお勤めであつて、一二年は全々空々であつた。十歳頃から少しく注意する氣も出で十二歳で初段となり十三歳に二段に進み十五で三段となり十七歳で四段二十歳で五段になると云ふやうに歩み來つたのである。碁打と成つて成功し、名人上手と云はれるには二十歳前後で相當に打つて成功の門まで到達して其門を開くべき鍵を握る事を得なければ上手の域に達することは難いのである。碁打は七段に達すると「上手」と云はれる、で其免許狀の如きにも上手に對し幾個々々と云ひ又初段の免許狀にも「上手に對して三棋子手合を許す」云々と書するのである、初段のものか七段のもの即ち上手に對し僅々三目の差とは甚だ不思議なやうな感じがする人もあらんか、斯道に於て三目の差は實

に莫大の懸隔で同一技量のものならずとも先手となれば必ず勝つべき性質を備へて居る、況して二目盤面に置かれたら最早手の出しやうが無くなるものである。

處で圍碁の修業期の血氣壯んな二十歳前後が最も大切な時であるが、兎角その期を外すと上達も遅々たるが多いやうである。併し進歩が遅いからと云つて必ず上手が出来ないとは限らない。天稟の才能ある人もあつて技術が進歩し上手まで漕附けられた方もあるけれども屈指するほどより無いのだ。

素人側では能く定石々々と云つて書籍に因つて石を下ろすやうに言囃されるが碁打を修業するものには先づそんな局量の狭い事はさせぬ、即ち書籍などに因つて石を打つことはさせぬけれども書籍は讀さぬかと申せば古人が打殘した碁經は成るべく廣く見させる、出來得るだけ廣く研究させて碁經に因つて石を列べる工夫をさせる、此の碁經を列べるのが非常に初學者の修業になる、内弟子の上達を速かならしむる原因も一は碁經の研究が十分に腹に染み居る結果もあらう、素人側は直きに飽きて了ふから研究が不十分な結果と健忘性が上達を遅からしむるのであらう。

又素人側では書籍を暗記するまでに研究される方もあるが碁打の方になると暗記までさせる事は決してせぬ、其書籍を暗記させたとして夫れが直ちに活用されるものでないから寧ろ活用し得られる物に向つて全力を集注することを奨励してゐる。

夫れから「手を引く」事は深く戒めて苟且にも石を盤面に下した以上假令その一目にて全面の石が皆死すとも手を引くは汚穢なき所業として嚴重に制止する、畢竟輕卒に石を打つから起る過りにして熟考靜思の上で遣ればそんな間違はあるべき筈はない、是れ等は最も注意すべき要點であらう。

尙ほ誰れにても負けるは好まぬ事であるが、殊に素人側には負けると云ふを強く嫌ふ癖がある。千人が千人、萬人が萬人皆負けると顔色に出る、假令負けても厭な顔を見せぬことに最も多大の注意を拂はなければ圍碁の修業は到底出來ない、自分より少しでも強いものに係ると負けるは知れてあることで其者が決して三番に一番負けて呉れると云ふものでない皆ビシビシ頭から遣つ附けるのだ、其處で厭な顔を見せると中には娑婆氣のある師匠などは偶には負けてやる、負る筈のないものが負けるには利目

へ石を打ぬからである。左様なると此人は幾ら修業しても上達することがない。師匠より教授さるべき所を自から習はぬのと同じ事である。手を引く卑劣な振舞ひと厭な顔をする事だけは碁道修業者の常に忘るべからざる最大要點である。

### ●圍碁の話

こは子爵秋元與朝氏の談話であつて、参考となるもの多きを以て、こゝに録するのである。

圍碁の話と云つても別に新しい話は無い、自分の考へは曩に蔚堂閑話とふのに載せてあるから今日話をするといつても畢竟同じやうな事になるだらうと思ふ。昔時から圍碁の本もあり、それに圍碁の話も少しづつ載つて居るやうであるが纏まつた圍碁の話といふのは極めて少い、併し圍碁の手の正不正或は損得と云ふやうな事については本因坊を初め、それ々の専門家の名手が遺憾なく説明し又本にもなつて居るやうである。別して近頃の名人であつた丈和が打つた碁の圍技觀光と云ふ本がある、それは

二冊になつて居つて、上卷の方は村瀬秀甫が説明をした下卷の方はまだ説明がしてない、丈和の末子である中川龜三郎が説明をするとか言つて居つたが是れも近頃没したので出来たか出来ぬか知らないが若し出来なければ甚だ遺憾な事である、さういふ譯で具體的の説明は逆も吾々如きに分るものでもなし、是れまでも大家先生が段段説明を與へたことであるから今日ほさう云ふ話をするのでなく唯現今の學問上から圍碁を見たら、どういふものであるかといふ漠然たる話になるのである。

圍碁は一の遊戯的のものであるが人間の考へを相互に現はすのであるから随分複雑したもので吾々の考へでは東洋西洋を問はず慰み物の中で圍碁ぐらゐ難かしいものはなからうと思ふ。併し其の根源に戻つて考へて見ると總ての他の學術と同じ理由によつて極く簡單なものであらうと考へる、それはどう云ふことであるかといふと、碁盤は四角で十九づゝ筋があつて其上に石を立てていくのであるから、どこまでも幾何學の理に漏れないであらうと思はれる、それで圍碁の極く本の手は三つしかない、即ち「こすむ」のびる」之には名稱が種々あるが「のびる」「引く」「横に開く」「縦に飛ぶ」是等

は同一種の手である、それに「桂馬」といふ三つである、「こすむ」といふのは幾何學の斜線である、又「のびる」とか、それから「桂馬」これは圓形を作る線とも少し違つてハラポール見たいな形である、畢竟楕圓形をなす線で約めていふと直線斜線、圓形の線の三つに歸着して極く簡單なものになる。

さて其線を應用して碁を打つといふことになる、三つか四つの別があるやうに思はれる、即ち第一が「筋」次に「形」割「順」といふものである、「筋」といふのは是れは蔚堂閑話にも話してあつて餘ほど説明が仕にくい、畢竟自分の石からも敵の石からも關係から起る言葉で自分の方から言ふと進退屈伸自在にいく手、敵の方の關係からいふと彼の急所にいく手を「筋」と稱へてある、「形」といふのは一手毎にあるのではなくすべて萬物の形に集合したものであるから圍碁の形も其理に基いて人間の身體でいつて見ると眼ばかりあつた所がいかず、耳ばかりでもいかず、五體を備へて初めて人間の身體が出来るといつたやうな譯で圍碁も自分の石と敵の石が十なり十五なり集つて初めて相互の間に形が出来るのである、どういふ譯でそれを「形」と云ふか

といふと人間の形に牛の角が生へたといふやうなのでは形をなさない矢張り人間には人間の五體に備はるべきものは總べて遺憾なく備つて居つて其他の無駄なものはないと云ふやうな譯で圍碁も敵にとつても味方にとつても要るだけの石は必ず有つて餘計な石の一もないやうに配置するのを簡單に言へば「形」と云ふのである、又割と云ふのは即ち損得であつて是れは無論敵味方から生ずる言葉であるが、味方の石も十五敵の石も十五あつて兩方に十五目ぐらゐづゝの地が出来れば損得なしである、併し兩方に十五目の地が出来たけれども吾が方では十の石を打つて十五目の地を拵へたのは敵は十二打つて十五目の地を拵へたとすると吾れの方が手数少いだけ手の割合が得であるといふことを「割」といふ、それから「順」といふのは地にするにしても活るとか死ぬとかいふことにしても手の順が悪いと活くべき石が死んだり捕れべき石が捕れないかつたり圍ふことの出来る石が圍へなかつたりすることになる、それだからといつて方角違ひにいくのかと云ふと決してさうでない、矢張り同じ道をいくのであるが、一つ手順が悪いとさう云ふことになる、例へば覗くとした所で順のよい所で覗くから敵も

是非つぐといふことになるが順が悪いと敵が繼がずにおくかも知れない、さうなると覗いた手は殆ど無益に歸することになるから順は非常に大切な事である、畢竟「筋」「形」「割」「順」といふ事が第二に於ける圍碁の必要條件である。

併しそれを唯空に論じた所で初心の者には呑込めないから、そこで定石なるものが生じたのであらうと思はれる、定石といふと、どう解釋して良いかと云つて皆な困るのであるが畢竟筋、形、割、順と云ふものを具體的に示してそれに依つて前に言つた四つの箇條を呑込せる雛形を定石といふのであらうと思ふ。

圍碁についての大略の話をすると先づ此位なものである、あとは圍碁に付いての心得といふやうなものになるのであつて直接なる圍碁の説明とは違つて來る圍碁に付いての間接といへば畢竟心得であるがさう云ふ事になると一にして足らず數限りもないことであるがそれを一々擧げた所で是れは銘々の見込もあるので興味もあるまいと思ふからこゝでは其一二を話すに止めて置かうと思ふ。

圍碁に付つての心得は初めには損をすると思ふことが一番禁物である、それ故に何で

も損をしないやうに手の割合、手の順に注意して打つが良いと専門家は多く言つて居る、第二に来る大切な場合は勝負の分れる所である、専門家は勝負所と言つて居る、是れはどうかと云ふと圍碁には巧拙は萬々あるけれども相撲など、違つて拙な者は巧みな者に對して石を置くのであるから對當の力になることが出来る對當の力になると必ず一番の圍碁の中に勝負所と云ふものが起る、そこが注意すべき大切な場合である即ち勝負所に付ての心得は無論精細に思慮を下してやるのである、それもどう云ふ方針と云ふ確かな方針がなければ精細に見た所で仕方がないが、其時には先づ踏込んでいくと云ふことより外に方法はない、若し讓歩すると云ふやうな考へを起せば負けるに極つて居る、尤も類似勝負所と云ふやうなものもある、それは敵が負けて居るから捨鉢に勝負を挑んで来る場合であるがさう云ふ所は此所で退讓して其の危険を避けてもまだ勝つて居るならば退讓することが往々あるけれども是れは眞の勝負所に於ては退讓するのが一番の禁物であると思ふ。

その他心得については前に言つた通り數限りもなくあるけれども蔚堂閑話にも一通り

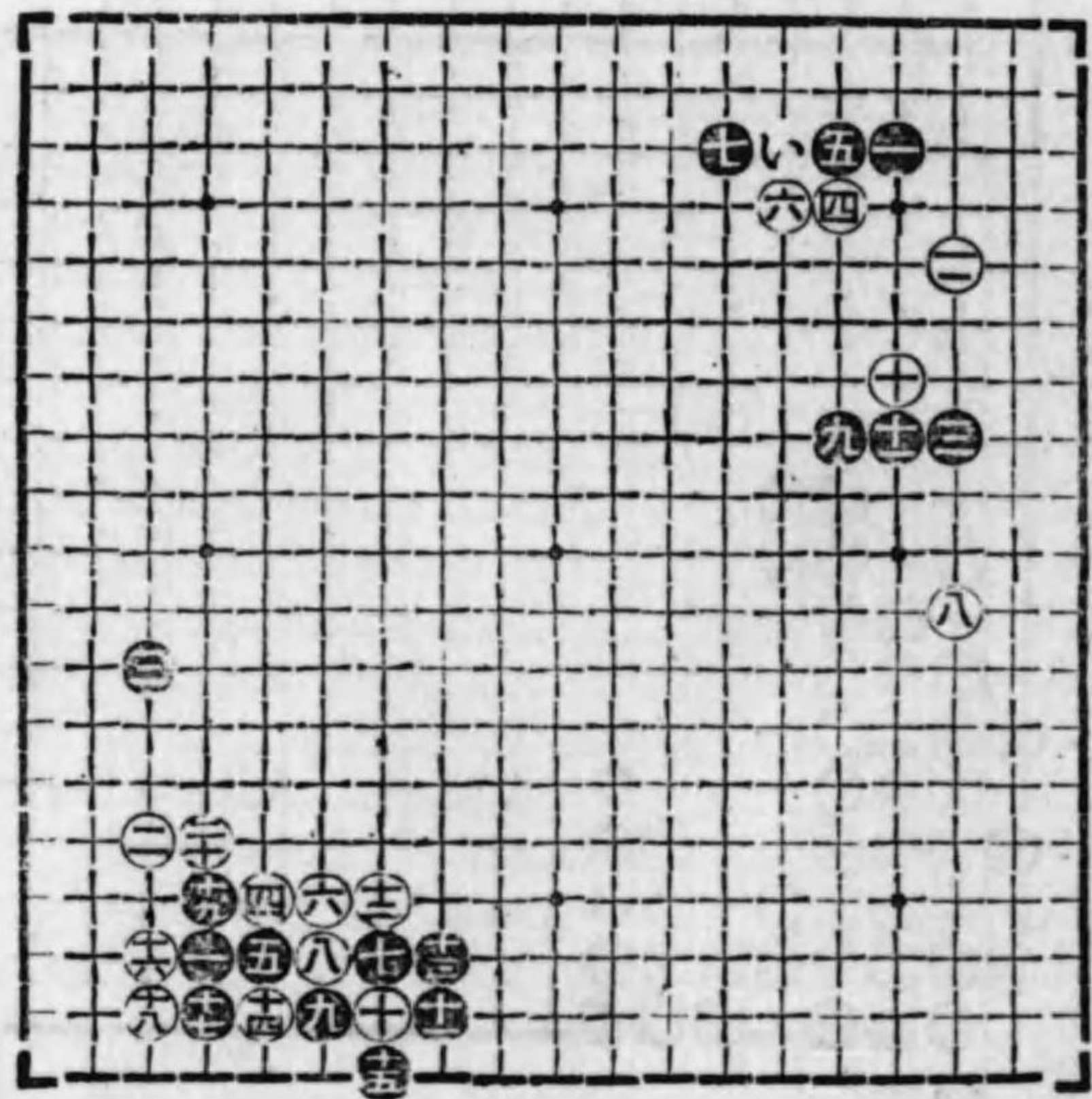
話してあるし唯長くなるだけであるから是れだけで止めて置かうと思ふ。

◎ 定石の研究

小目二間夾

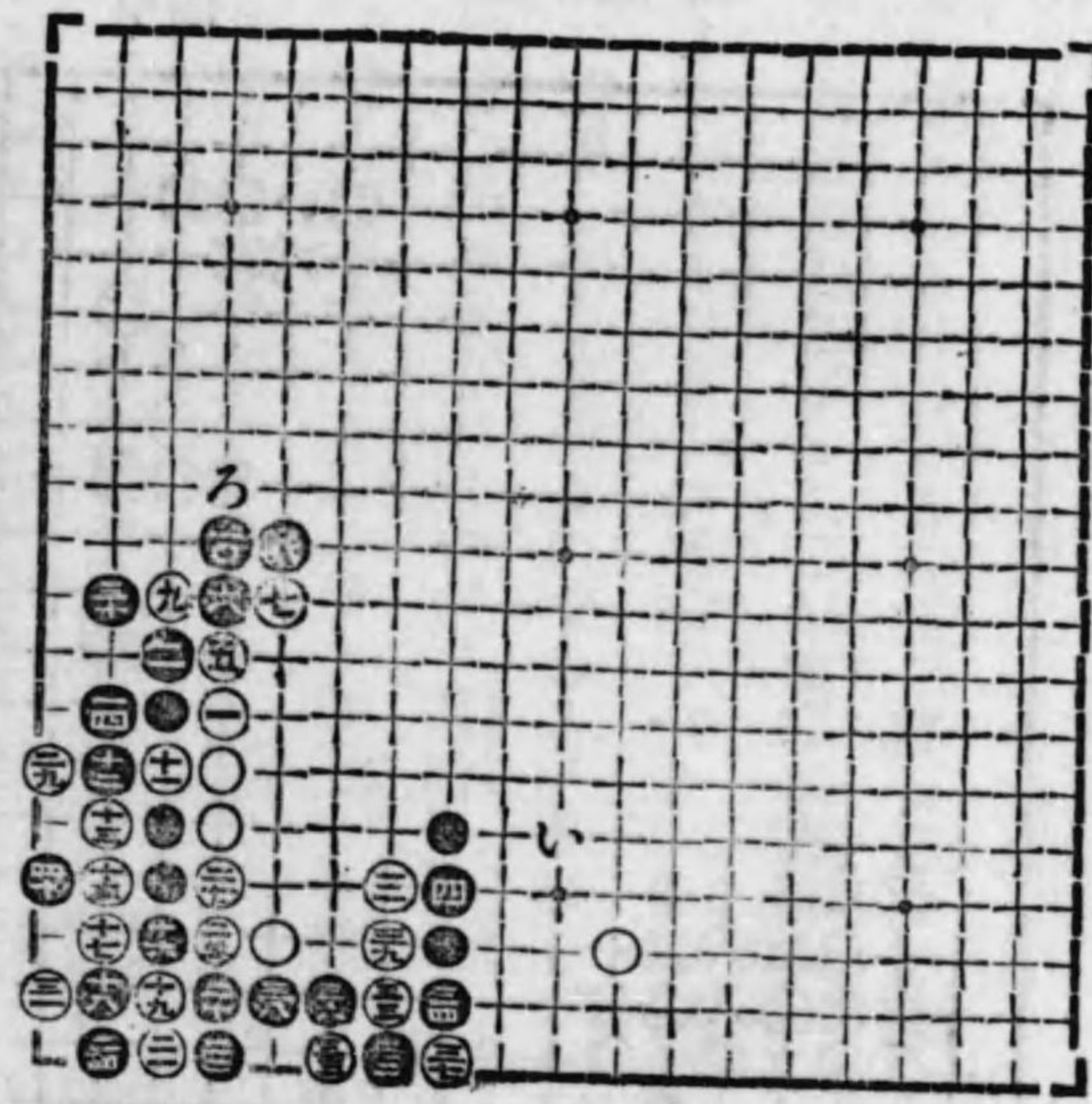
此定石にて白八の手を以て「い」にわりこむ事あり其場合の手筋は乙圖の如くなるものとす、而して白十八の手は他に急務あれば手抜きするも可なり。

圖甲



圖乙

又前甲圖に於て白十の手を丙圖の如く打ちたる成行如何は大に研究の價值あるものにして其變化と共に充分に翫味せらる可し即ち黒八の手を以て十にのびる時は白は八の處につけ來り黒「ろ」にのびたる時白「い」と打たれて黒大に不利となる又黒三十二へ打つ手必要なり若し黒三十二へ打たずして三十六の處に打たんか黒遂に活くる能はざるに至る可し。



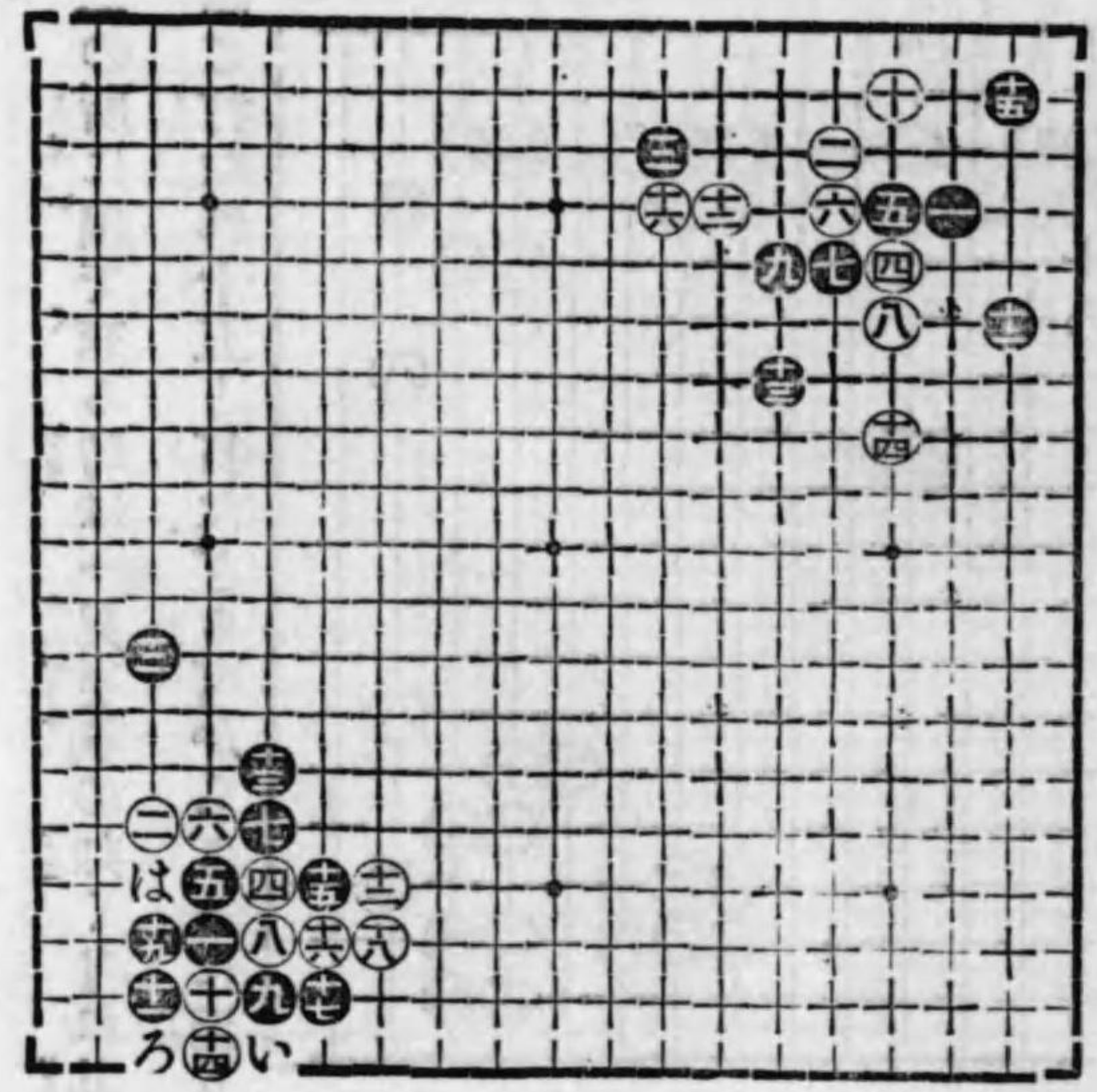
圖丙

白二五は十九の處  
 黒二六は二一の處へ一目とる  
 黒二八は一九の所粘

小口 二間夾

甲圖の如き定石に於ては黒五と出で七と切りたる手餘り良しからざる爲め結局七九十三の三目浮石となるの不利に陥りたり而して此の形勢に至りたるは白十及十二の手最も良ろしきによる若乙圖の如く白八と打ち來りたる場合には白が十四と下りたる時決して「い」に打つべからず圖の如く黒十五と打ち十七と打ちたる手最も肝要なり若し「い」と打つ時は白は直に十九の所に來る可く黒「ろ」に二目收りし時更に十の所に打込み來り黒十四の所に一目收りたる時白「は」に黒十に粘き白十八の所に打ちて黒は遂に死石となるなり。

圖甲



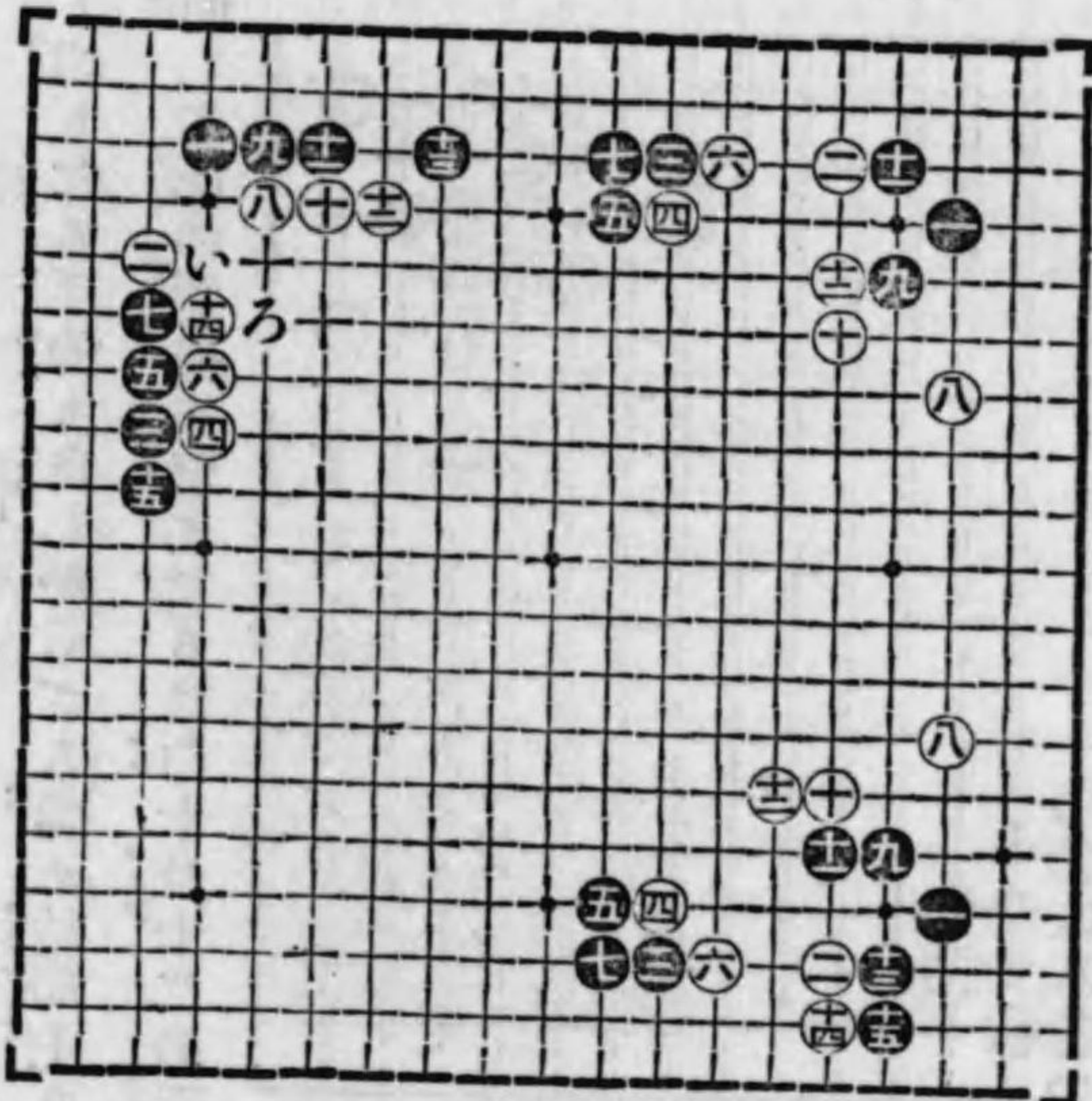
圖乙



小目 二間夾

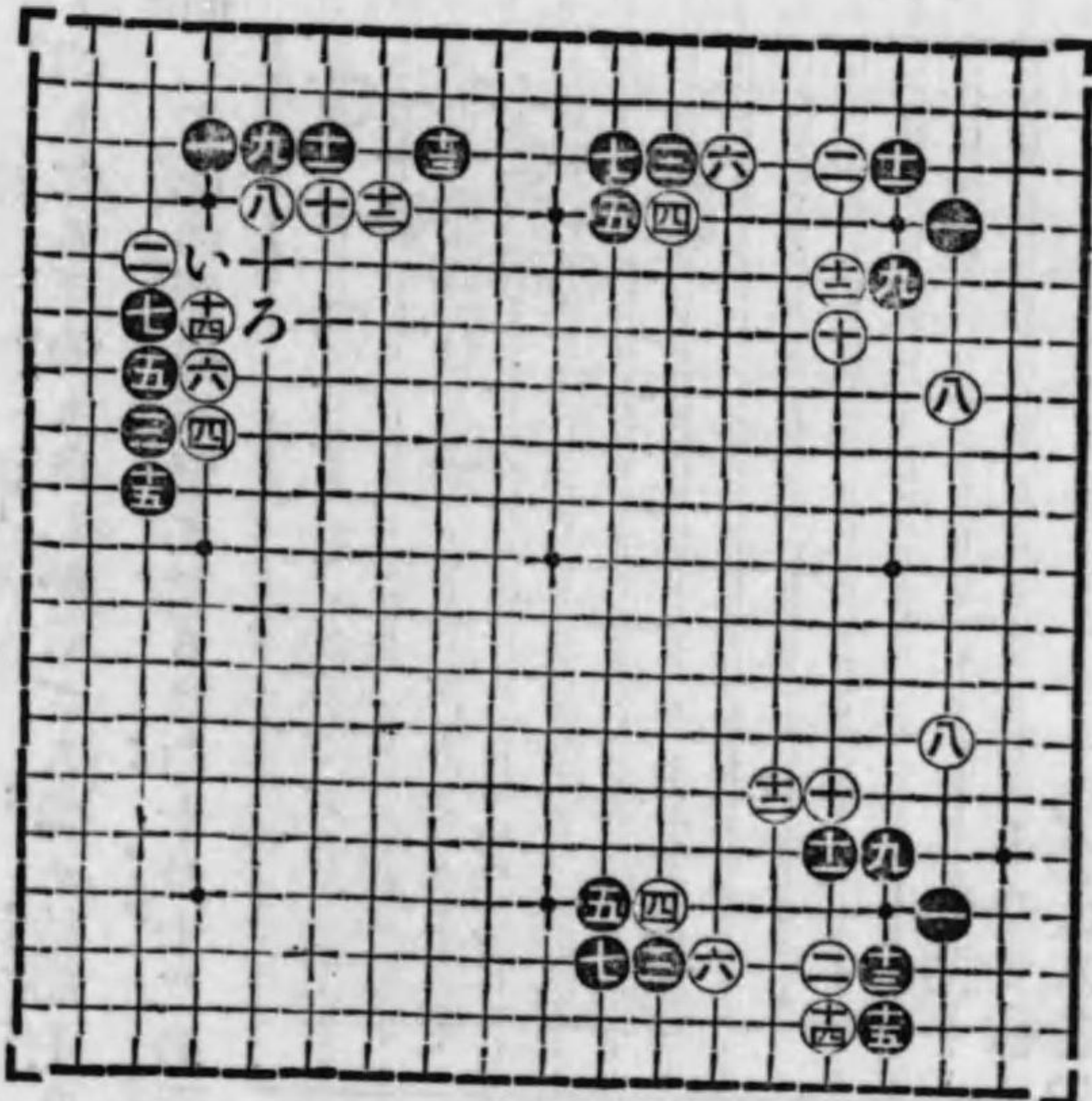
甲圖に示す定石にて黒十一と尖ます十二の所に出で来る時は一見有利の如くなれ共結局乙圖の如く後に尖みたる時白に十四と打たれ十五と打たざる可からざるに至り得る所少くして白に先手を打たるに至る故に甲圖の如く打ちて黒より他の好地點に先手を附くる方遙に有利の打方とす尙配石の模様によりては黒は丙圖の如く五と打つを良しとす此場合白は八と打ちし時、黒十四の所に曲出て來らば「い」に打ち黒が九の所に來るを待ちて「ろ」に打つを良しとす。

圖甲



圖乙

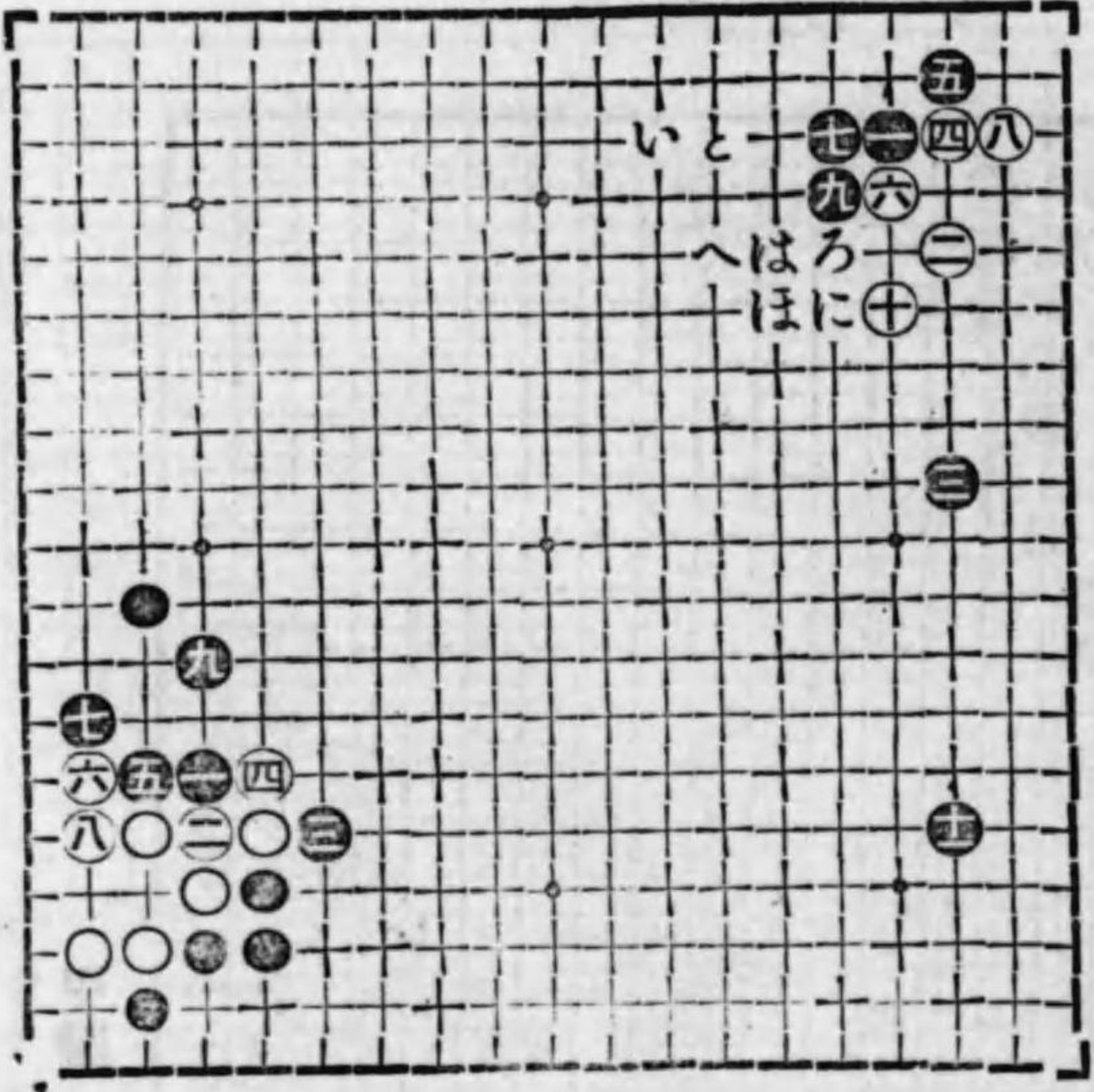
圖丙



小目 三間夾

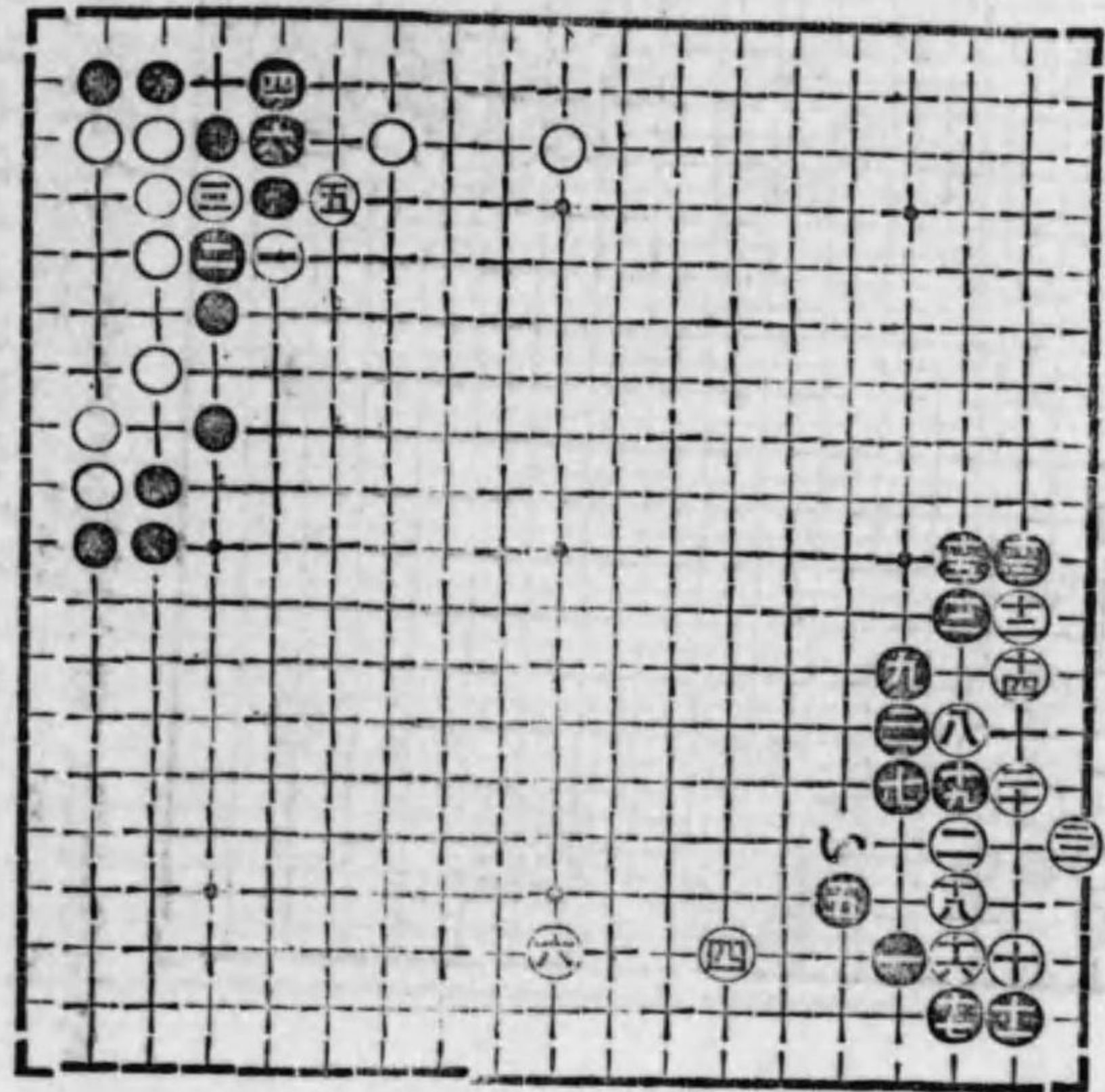
甲圖に於て黒九の手白をして十と打たざる可からざらしめ更に十一と打ちたる手良し黒九の手を以て「い」に打たば白は手抜して他方面へ着手するも差支へなし白十の手を「ろ」に打つは悪し若し十の所に打たんか乙圖に示す如くなりて黒を有利の地位に立たしむるに至る、尙更に甲圖に就て説明せんに白若し十二の手を以て「は」に打ち來りたるときは黒は「ろ」に出で白「に」に押へし時黒「ほ」を切り白「へ」へのびる時「と」に一間夾みに打つを良しとす。

圖甲



小目 三間夾

甲圖に於て白十八と打ちたる時黒手抜し  
 すれば白は「い」に頂越を打つ可く其結果  
 は乙圖に示す如く非常に不利を招くに至  
 る可きを以て黒は必ず十九と突き出し白  
 を二十と防がしめ二十一と打たざる可  
 らず。



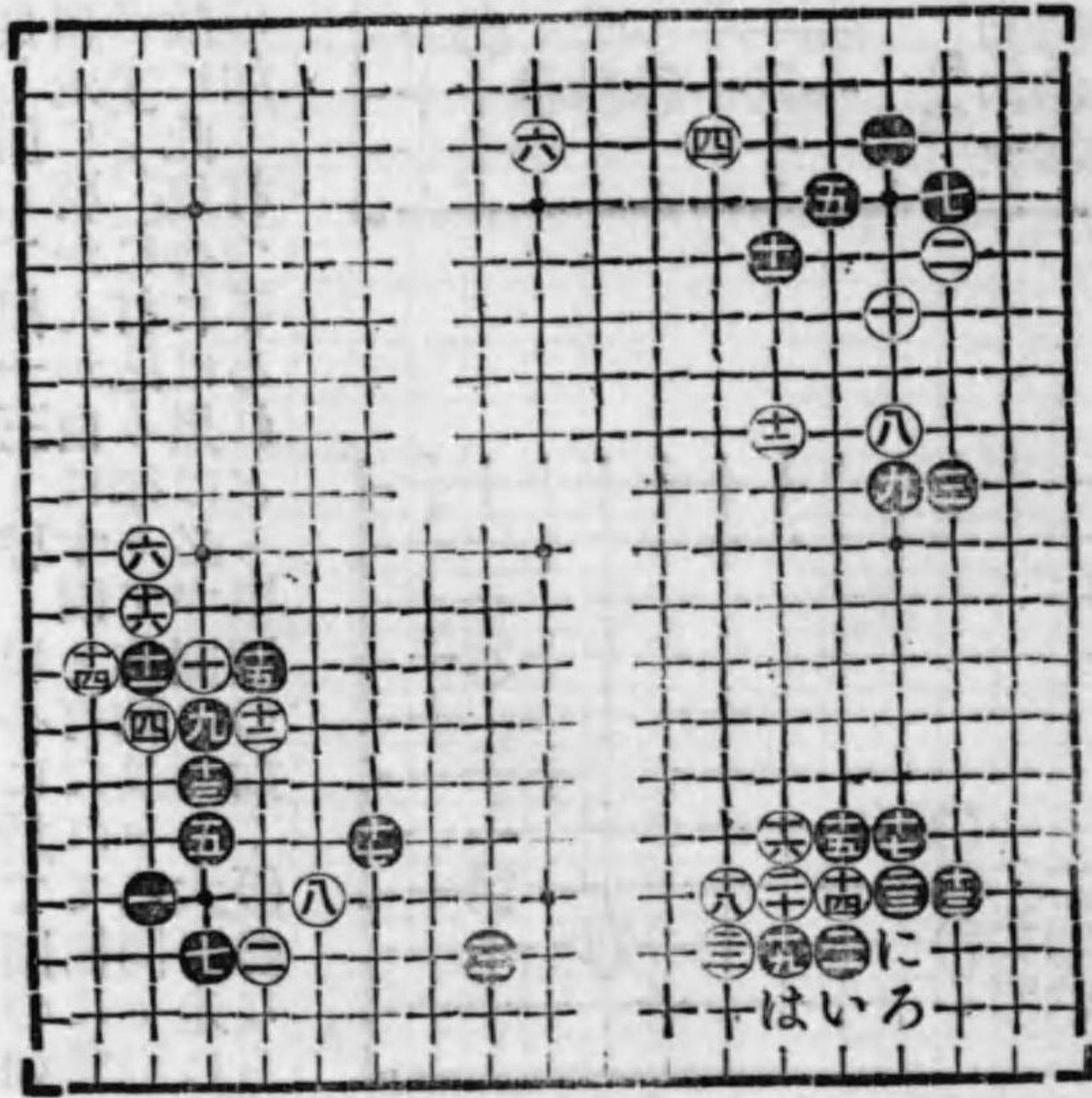
甲圖

乙圖

小目 三間夾

本圖に示す定石に於て白八十二の順序良し若し八と圖の如く打たずして十の所へ打  
 たんか乙圖の如くなりし白は不利となるなり尙甲圖黒十九のぞき定石にしてよし若  
 し此時白二十一の所に下ることあ  
 らんか黒は「い」に綽け白「ろ」に押  
 へ黒「は」に粘き白「に」に粘きたる  
 時黒二十の所を切る手あり、又白  
 「に」に粘かすして二十の所を粘け  
 ば黒は「に」の所を切る手あり故に  
 黒十九と打つは定石にして斯る場  
 合常に此の如く打つ事を心懸く可  
 きなり。

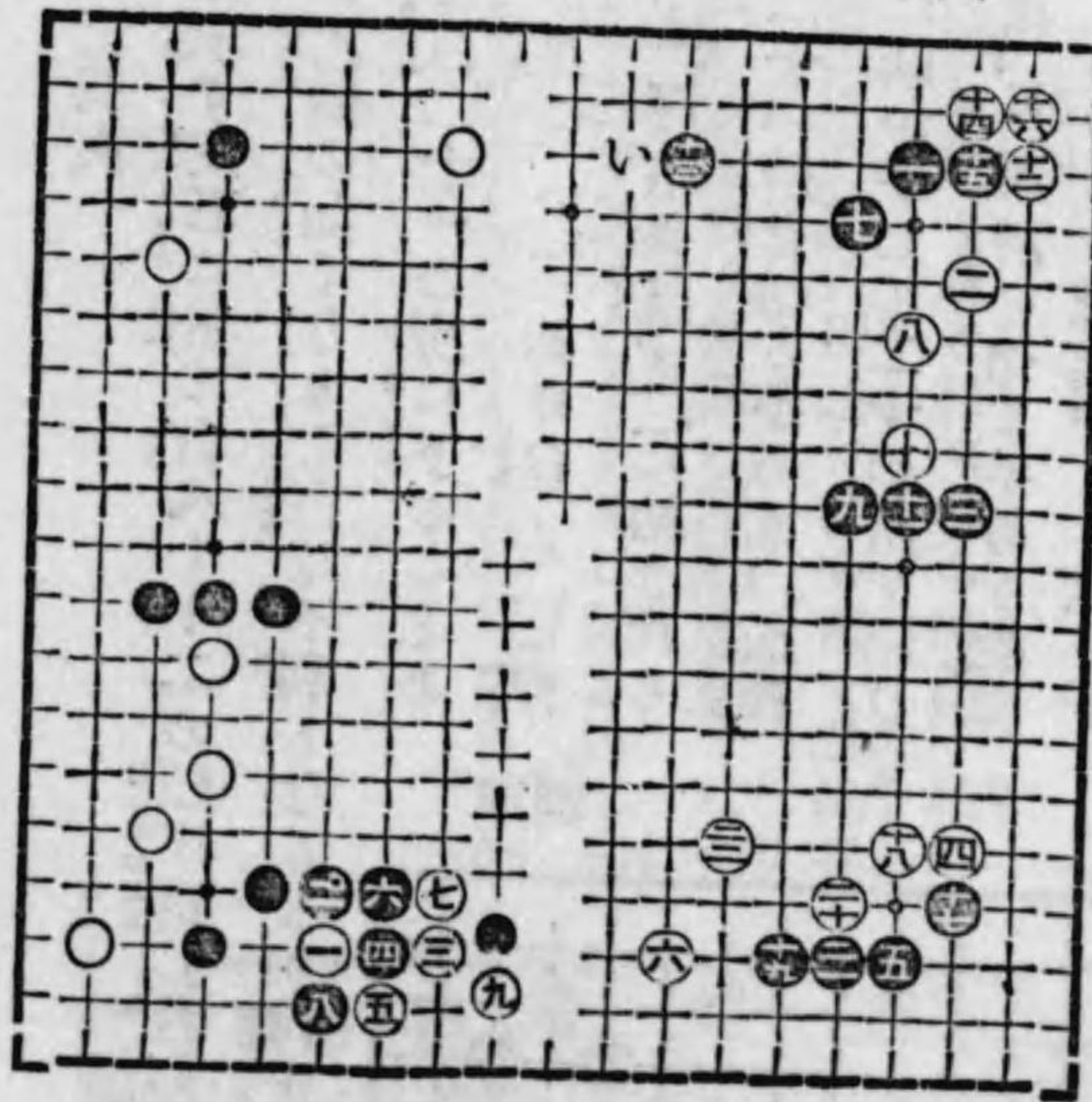
圖甲



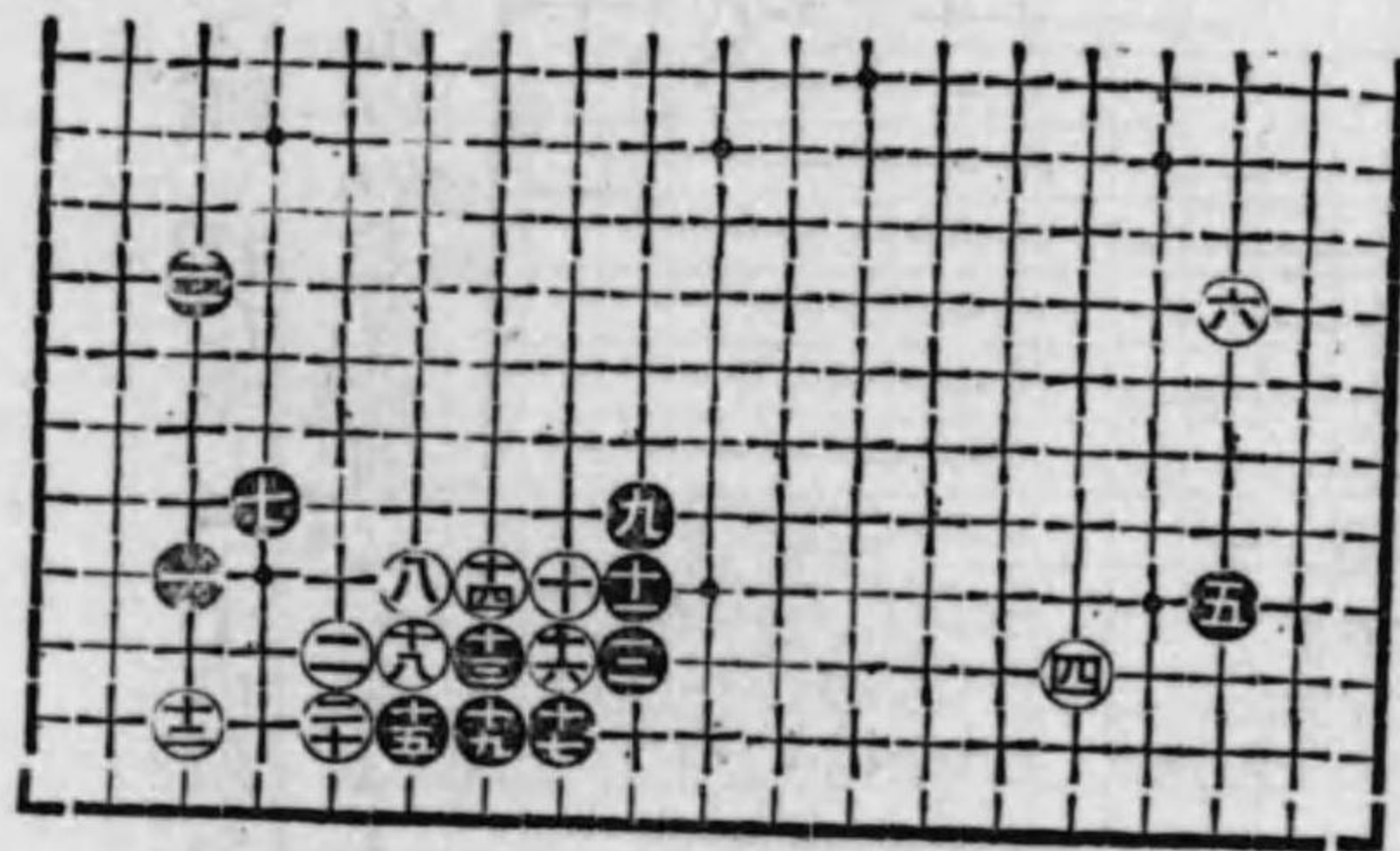
圖乙

小目 三間夾  
 此定石に於て黒七白八黒九白十、十二良し而して黒十三と啓く場合於て圖の如く大斜走に打つを良しとす若し「い」に大々斜走に啓かんか白に十四と打たれて他に急場あるも趣く事能はず強て手抜く時は白は必ず「ろ」に打込み來りて其結果を乙圖を以て示す如くなりて黒は大に不利となるなり故に此場合には黒は必らず甲圖の如く優勢ならす啓くことを忘る可からず尙黒十三の手丙圖の如く打つ手あれども甲圖の如く優勢ならす啓く

圖甲



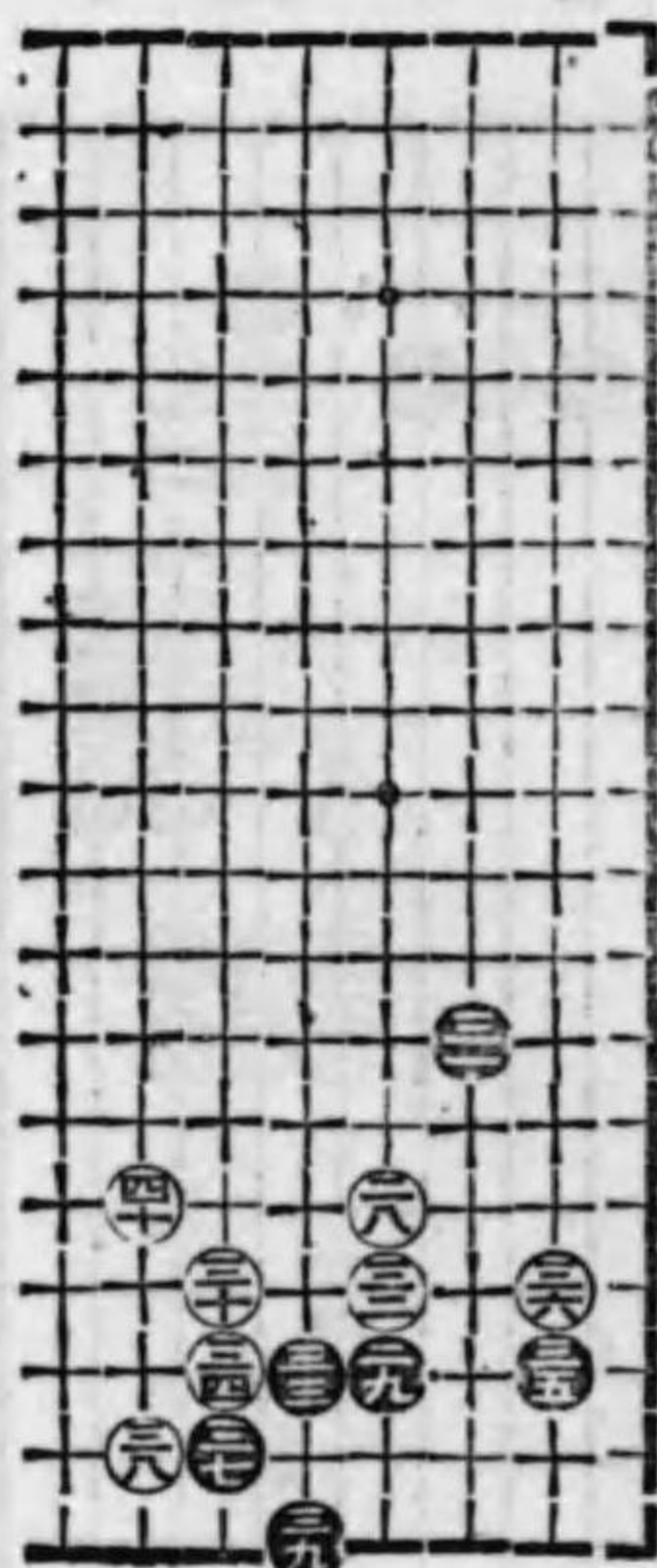
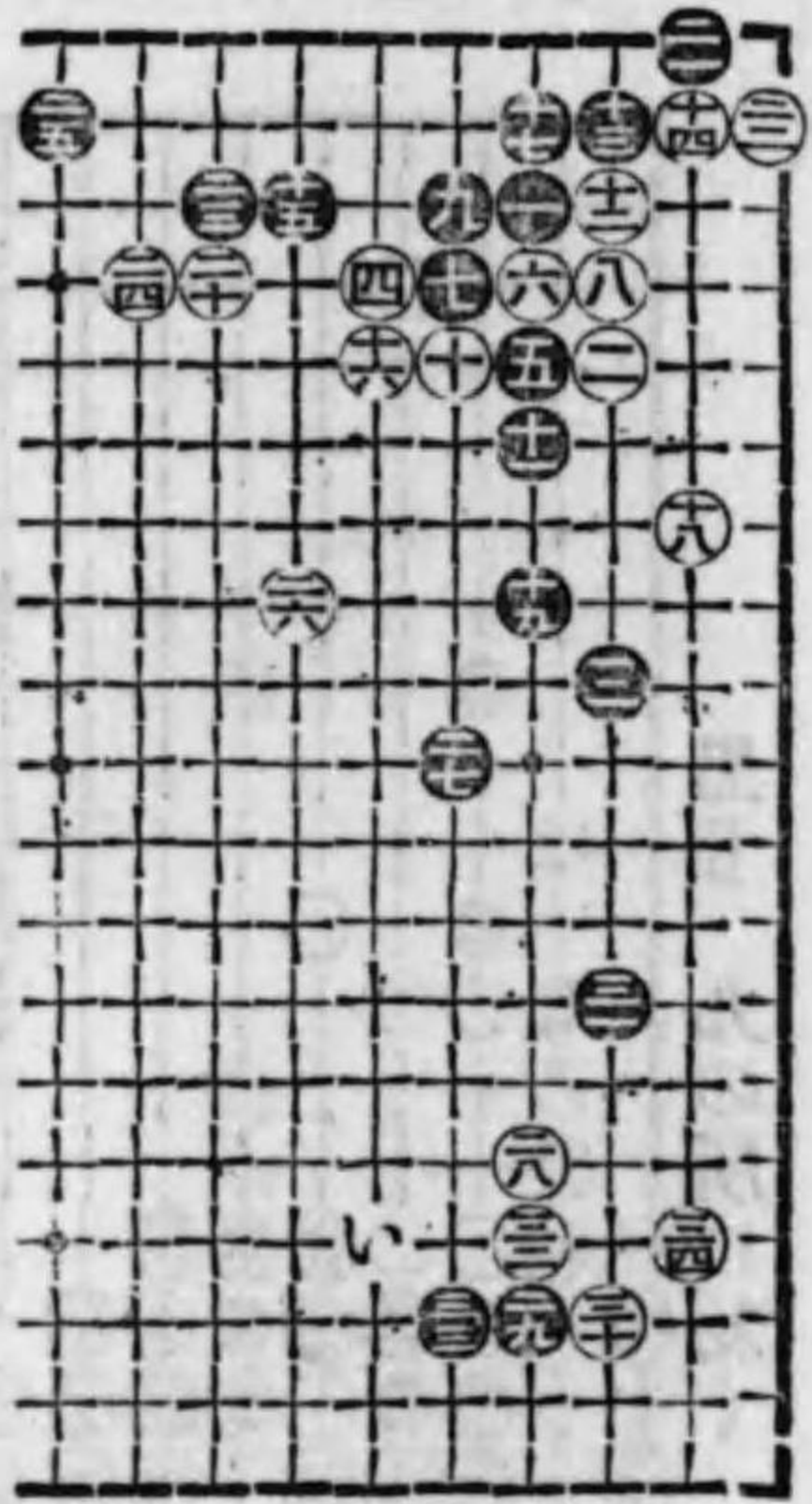
圖乙



圖丙

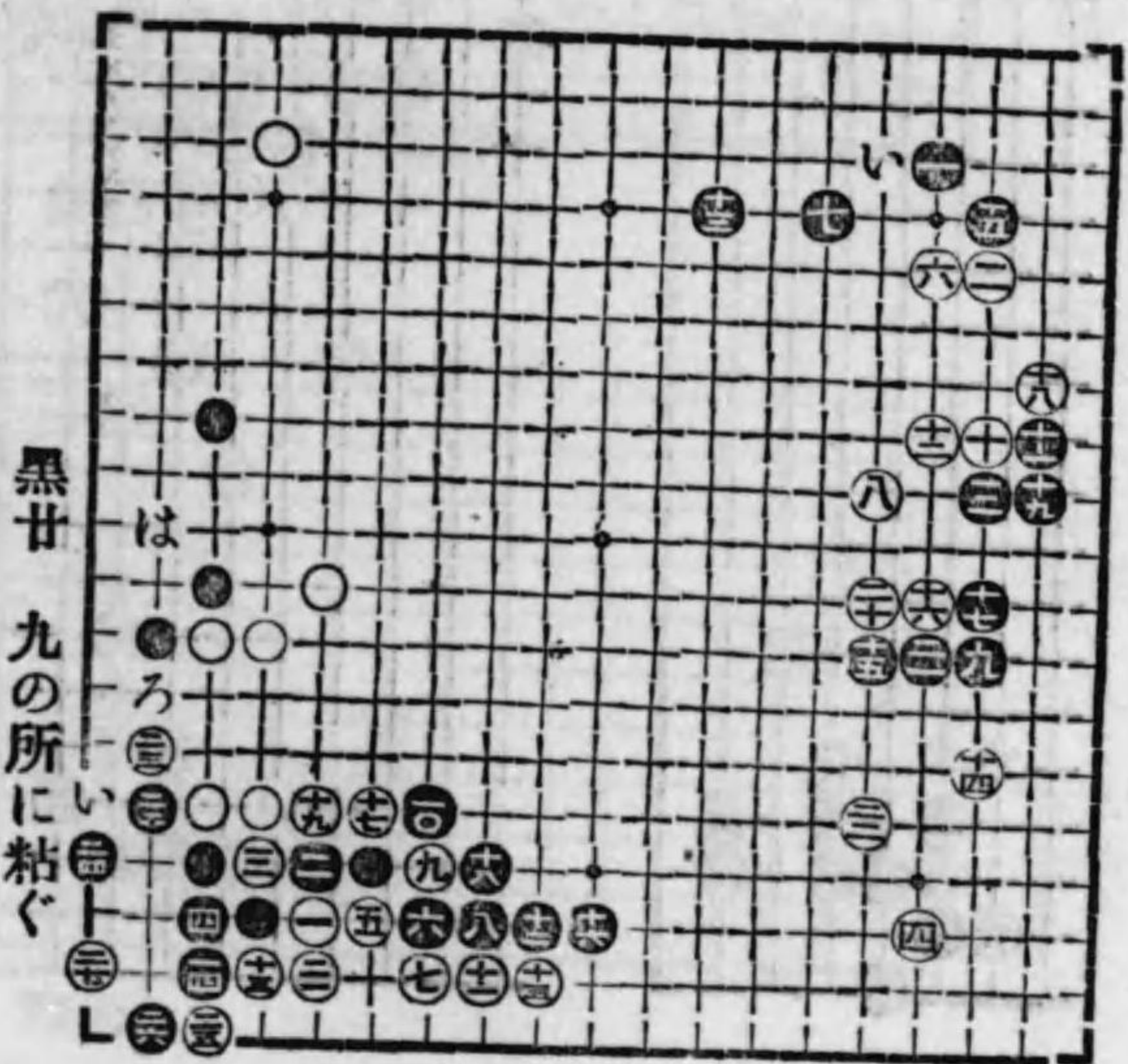
小目 三間夾

本圖に於ては黒十三と緯て十五ととび白十六と粘きたる時十七と粘きたる手良し尙二十七と打ち三十と打ちたる手順良し斯くして黒堅固となるなり若白三十の手を圖の如く打ち來らずして「い」の處に打ちたる場合の應手は乙圖に示す如くにして依然として先手を失なはざるを見るべし



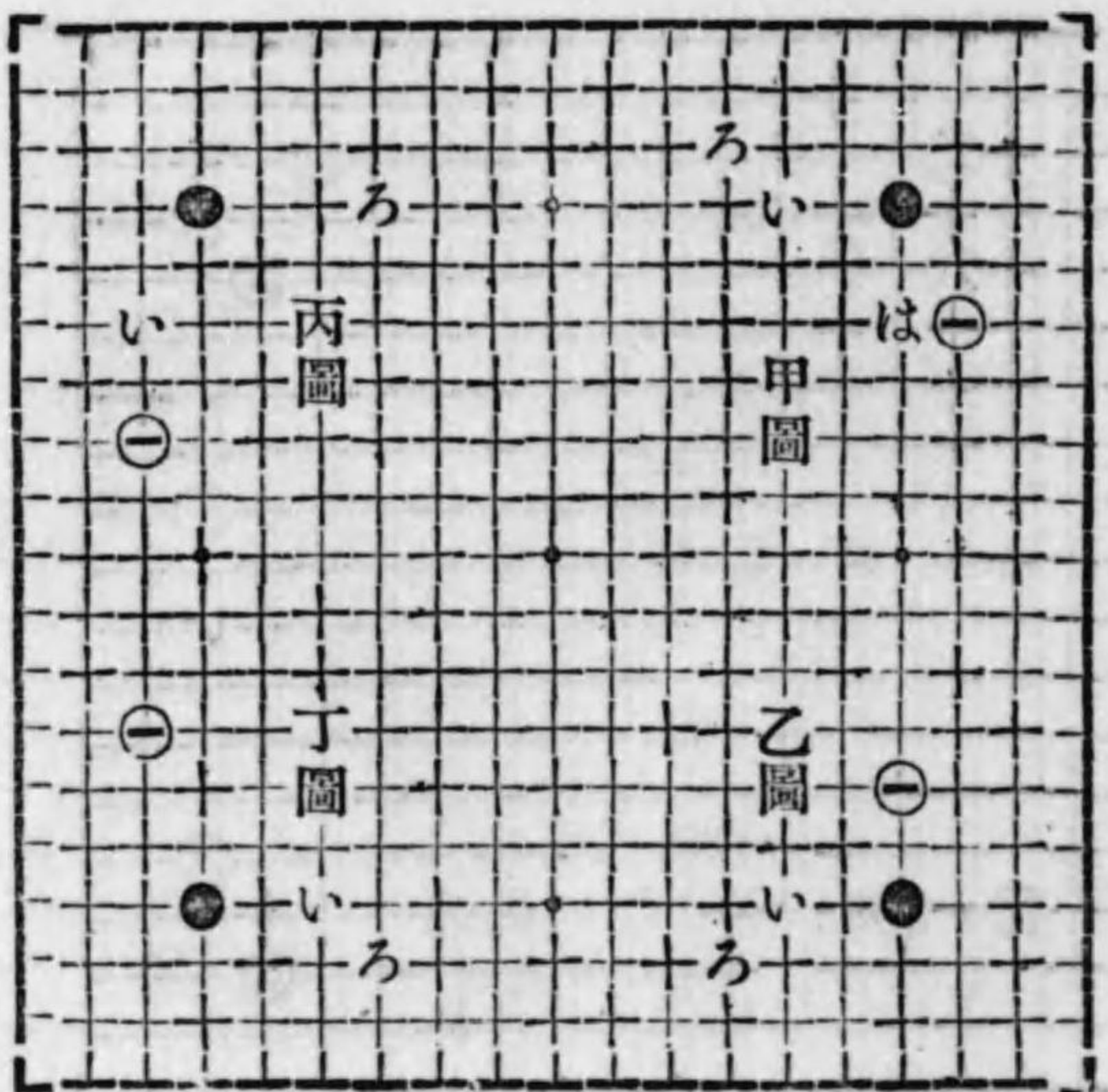
小目 三間夾

此定石に於て注意を要するは黒十三の手なり若し本圖の如く打たす手抜するか或は他方面に打つ事あれば白は「い」につけ來り其結果乙圖に示す如くなりて白廿七と打たれて死するに至る而しながら黒廿四の手を「い」に打ち白「ろ」に打ちたる時黒は廿七の所に活を打ち得ると雖も白は「は」と打つ事を得て黒の形勢非常に悪しくなるにつき甲圖十三の手を忘る可からず。



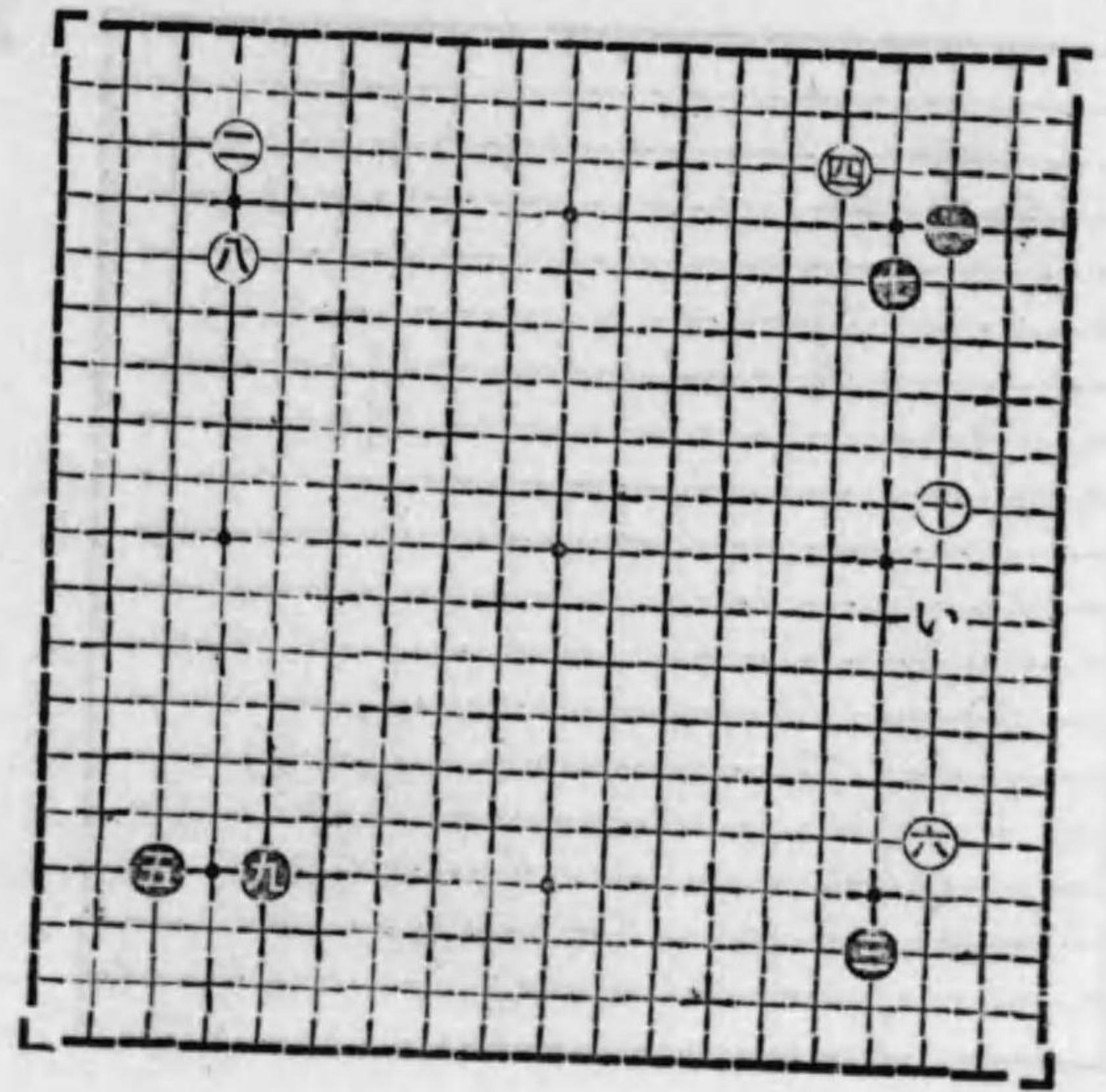
● 置碁の打始の注意

甲圖の白一に對しては黒は必ずいろはの三點より他に打つてはならぬと心得てよろしい白一に對し黒はいろの二點のいづれかに打ち隅の置石と協力して此隅を守るのである乙、丙、丁の三圖に於ても白一に對してはいづれもい又はろに打つて各置石と協力して隅の大なる地域を占領しやうと言ふのである凡て黒は己れの地域を廣く且つ確實に取る様に心懸けねばならぬ甲圖のはは白一を壓迫しつゝ己れは此隅に於て得をしやうとする時打つ手である。



● 互先の打始の注意

圍碁の戦は隅が最も大切である事は今迄度々述べて置いた通りである故に互先の碁に於ては白黒共に隅を守ろう守ろうとし且つ敵に隅を確實に占領すまいと打つのである下圖に於て黒一白二黒三は共に隅を占領せんとし白四白六は黒の占領せんとした隅を妨げ黒七はいに挟んで六を壓倒する手なり白八は白二と相俟つて先づ此隅を占領し黒九は黒五と相俟ち此隅を占領したのであるがいに挟むも又宜し白十は白六を助け且つ六と十の間を占領しやうとして居るのである凡て始めはかくの如く打つのである。

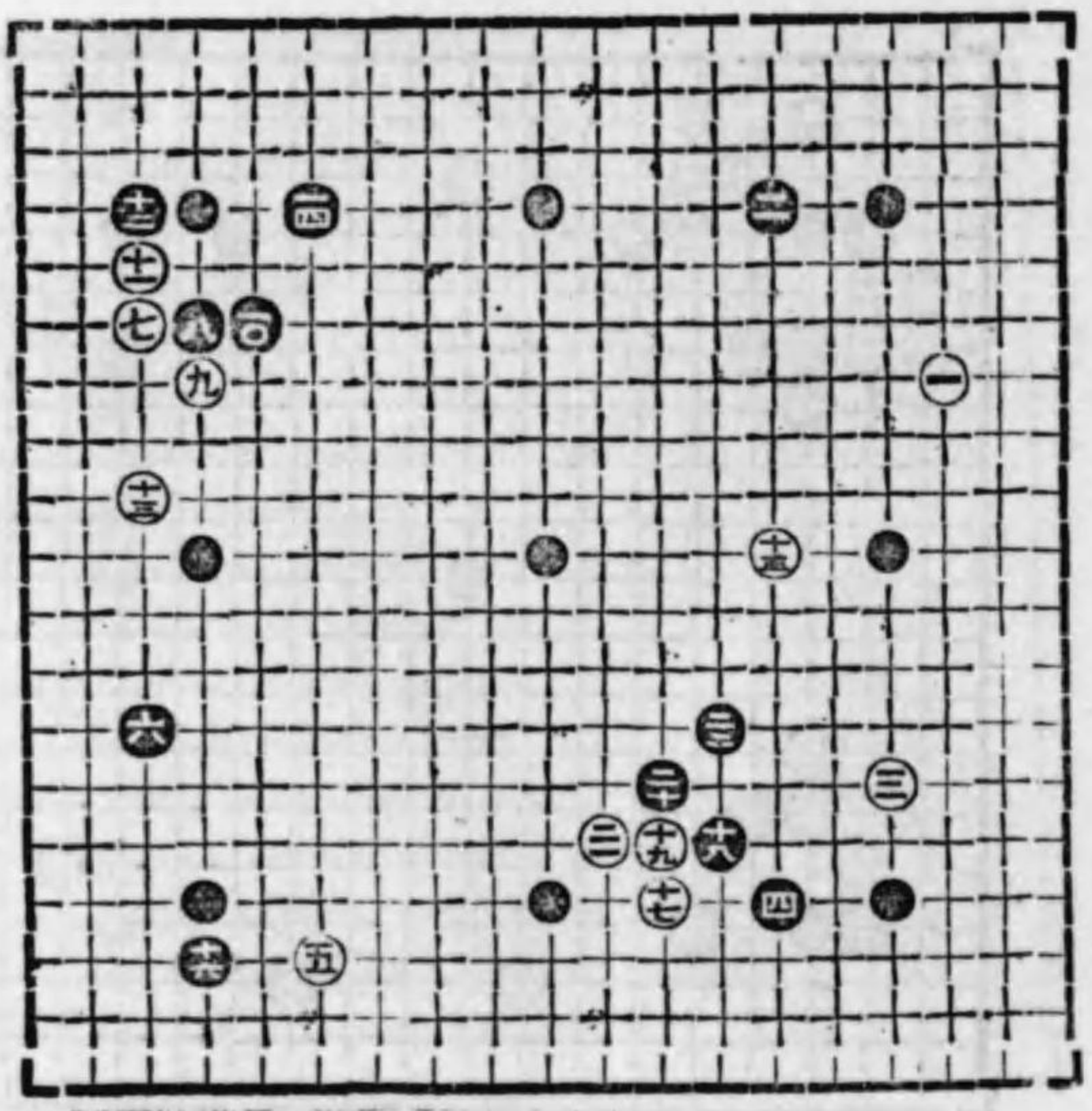


● 布石の研究

布石は定石と共に相俟つて圍碁の陣立になるもので盤中で一番利益な點へ先に先にと己れは廣き地域を占め敵には廣き地域を占めさゝぬ様に打つて行くのである

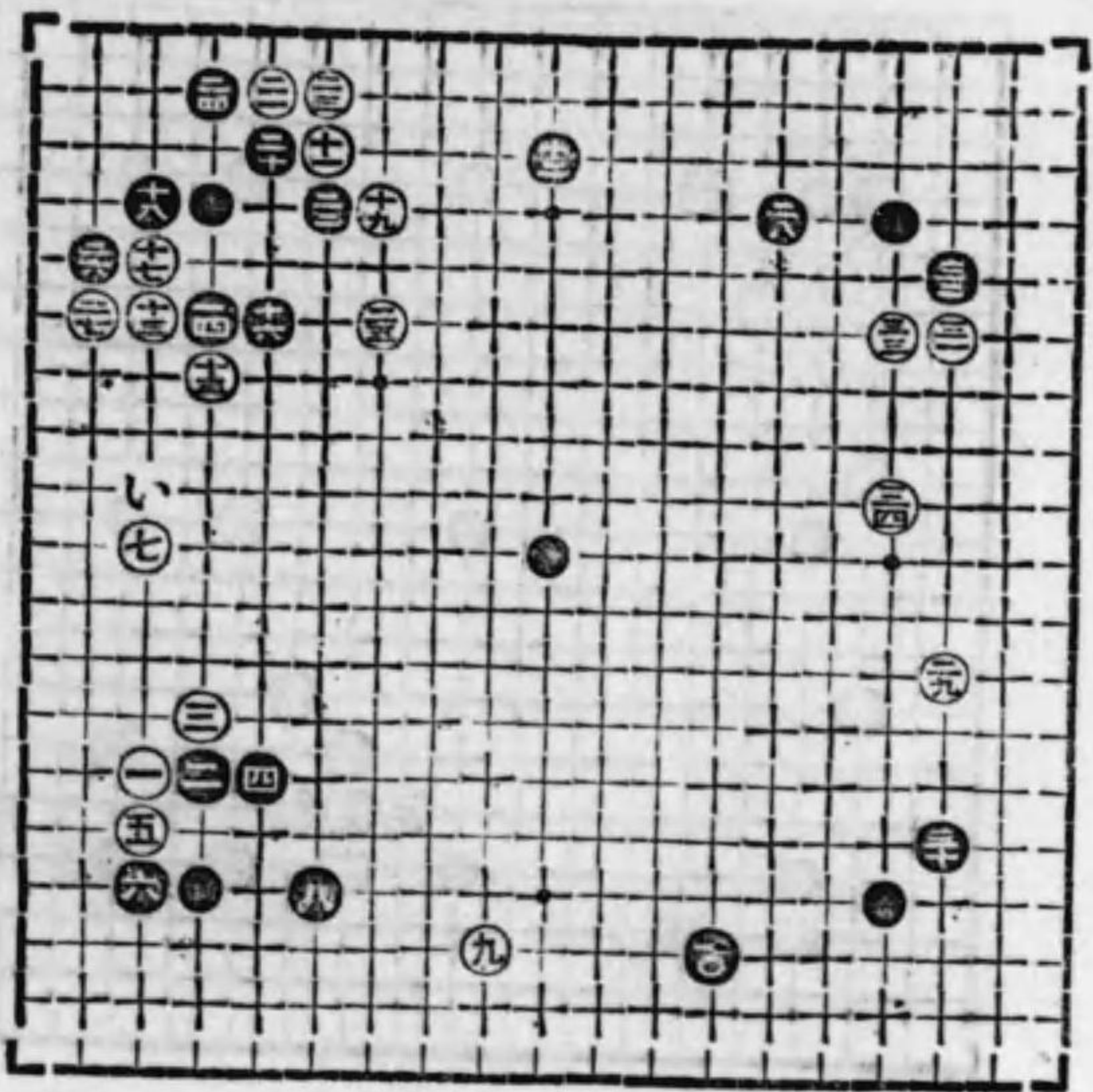
● 九目の布石

白十三の時黒十四は肝要である黒十六と隅を占めしは大いに宜し黒十八より二二迄の手順も大いに宜し。



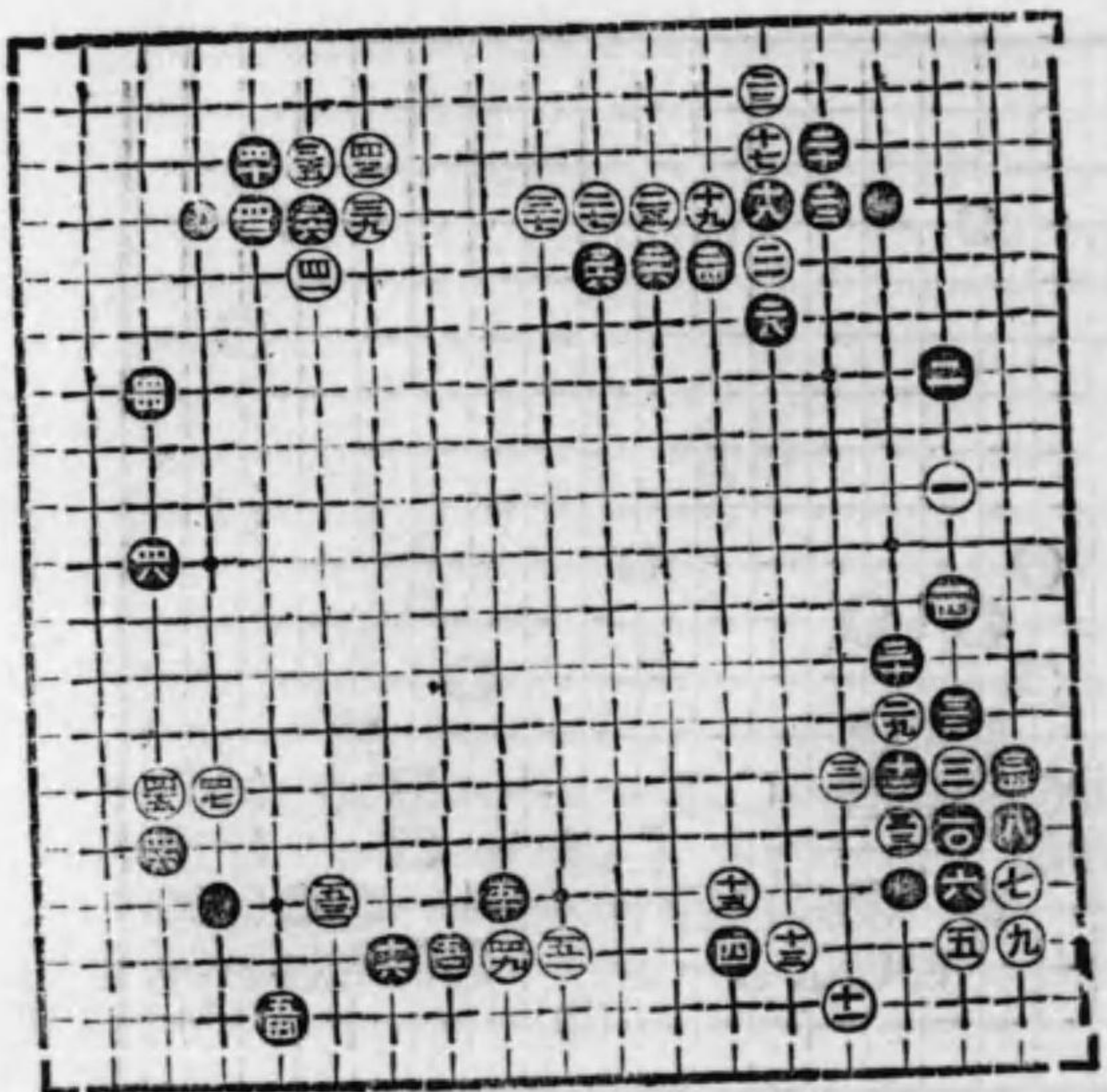
五目の布石

黒二六の緯ねは白七の石いにある時は必ず打つ手である然し七と大桂馬の時は手を抜き他に轉じても差支はない黒三二と打つ白を三三と立たせ三四と打ち込みしは大いに宜し。



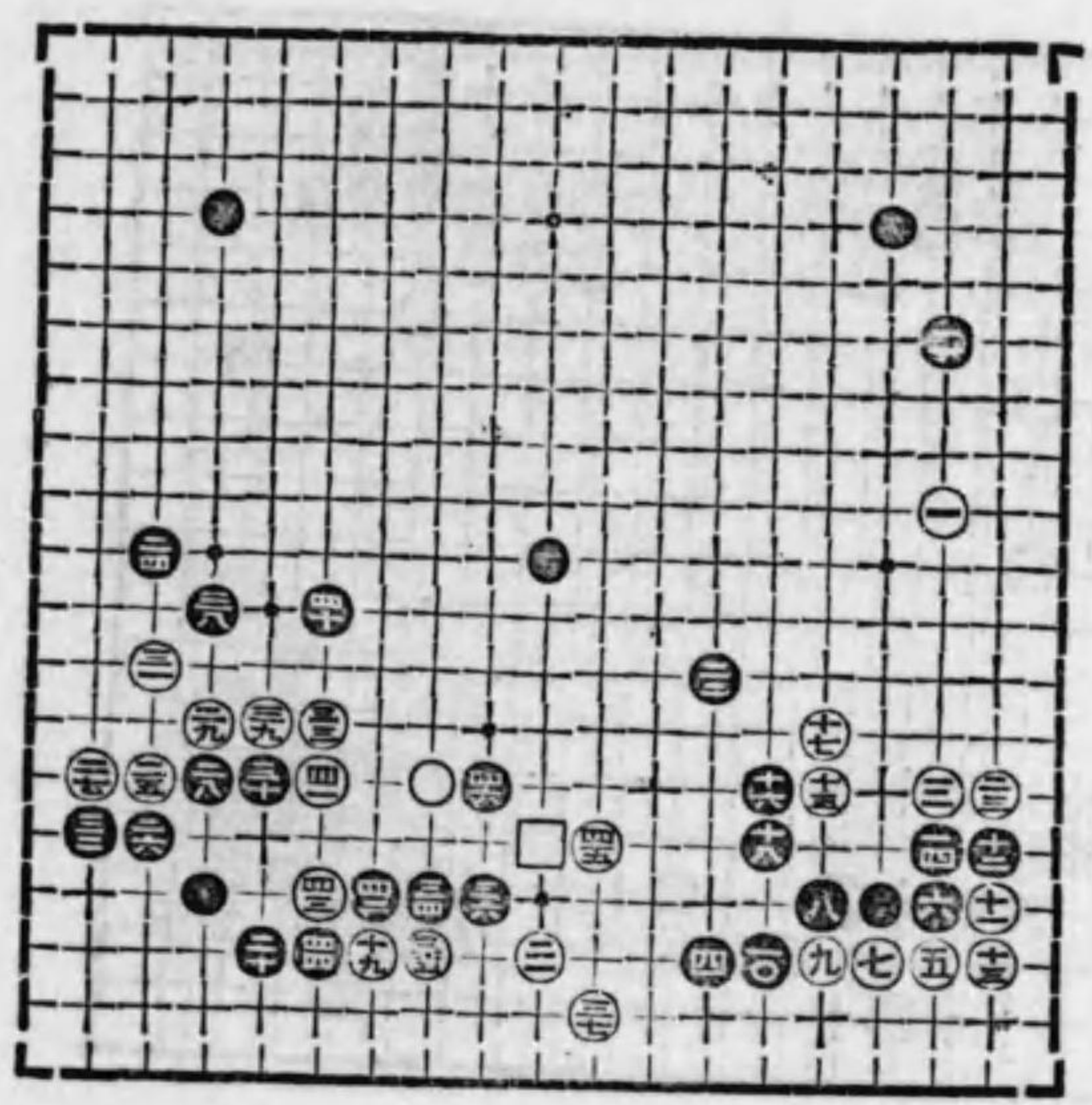
◎五目の布石

黒(十二)此場合にてはよしころ三二と軽く一目打ち捨るよし二四の所を押し(三八)と打手段前にもあり心得べし此處にては別てよし。



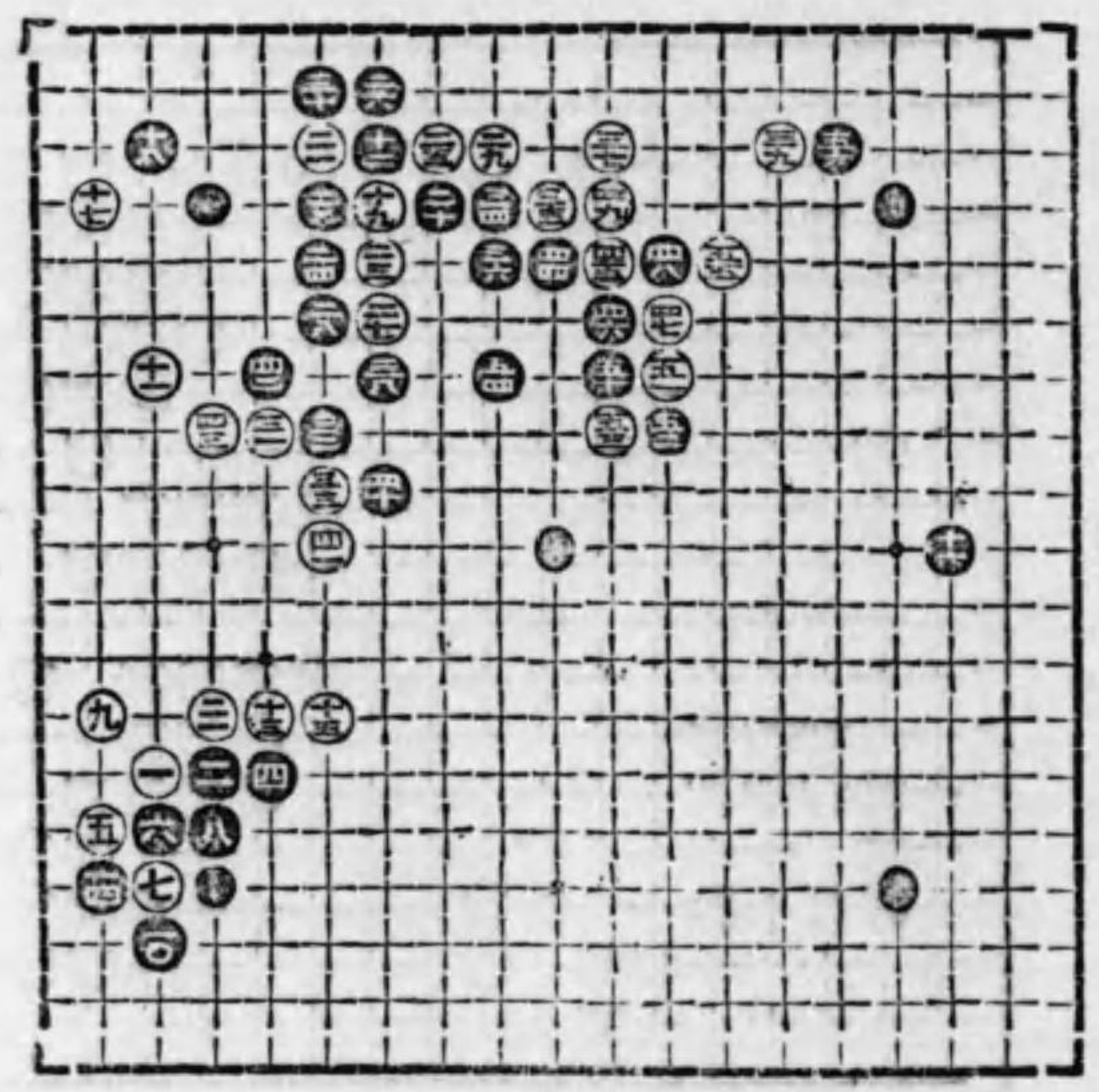
◎五目の布石

白(二三)の手とき捨置大位に如是  
 打手段也所により勿て打なり心得べし  
 白(四五)の手を□印へ打は黒も○印へ  
 一間飛に打なり。



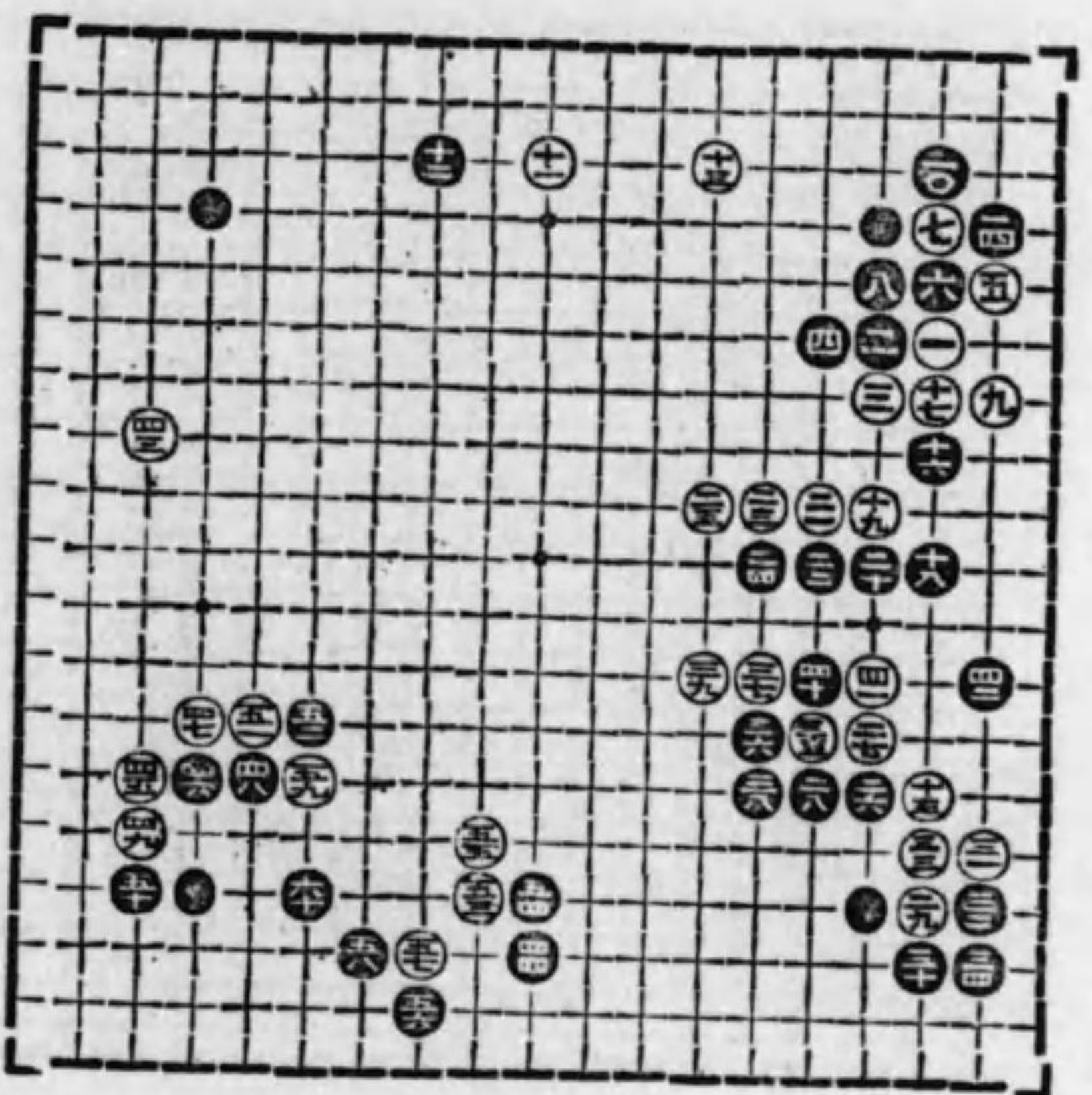
◎五目

黒(二八)の手にて白の(二九)へ打ても  
 よし手筋の次第を知らしむるたる記之  
 此石立紛れなし。



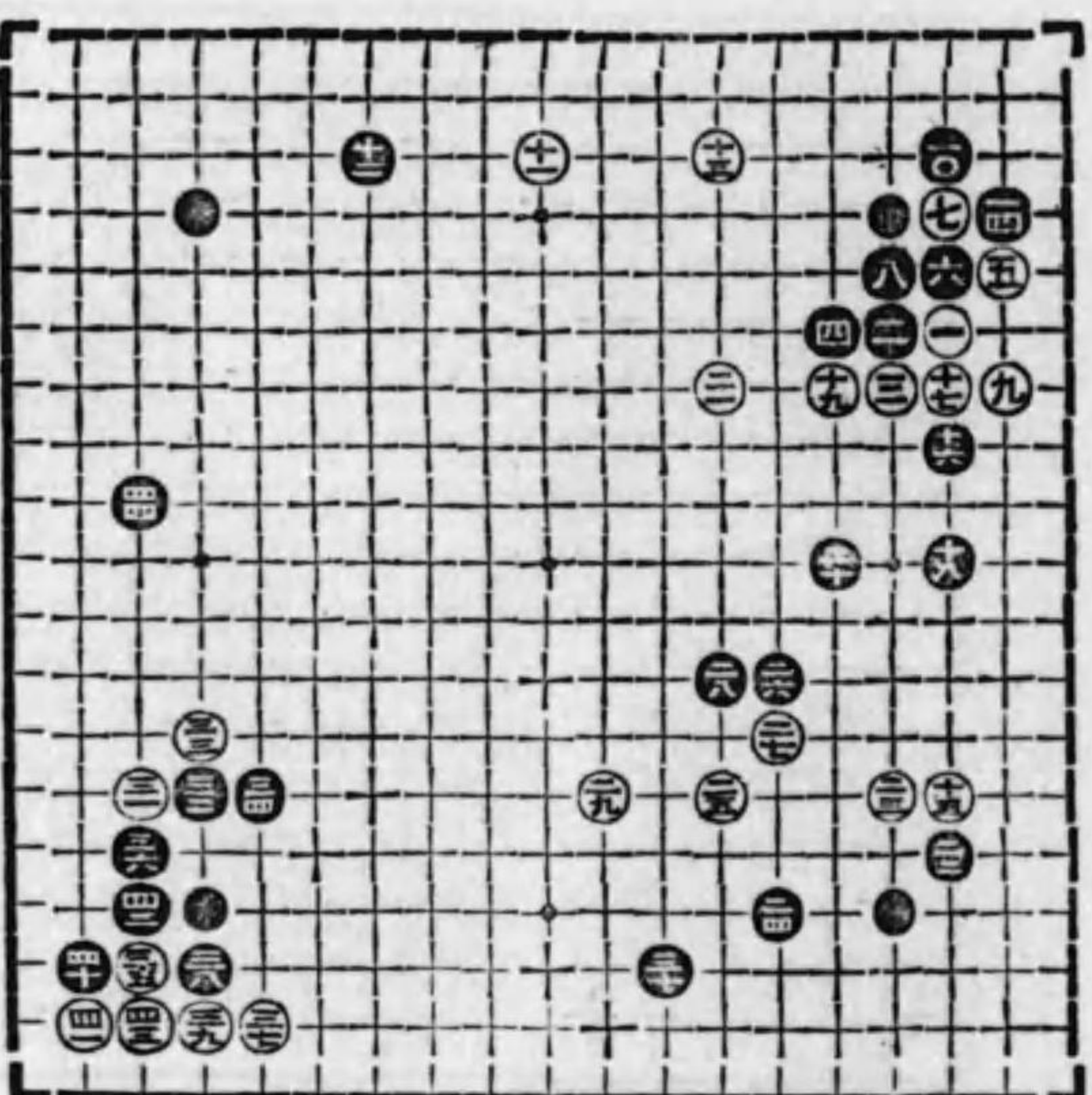
●四目

(四十)(四二)の手は吉し。



●四目

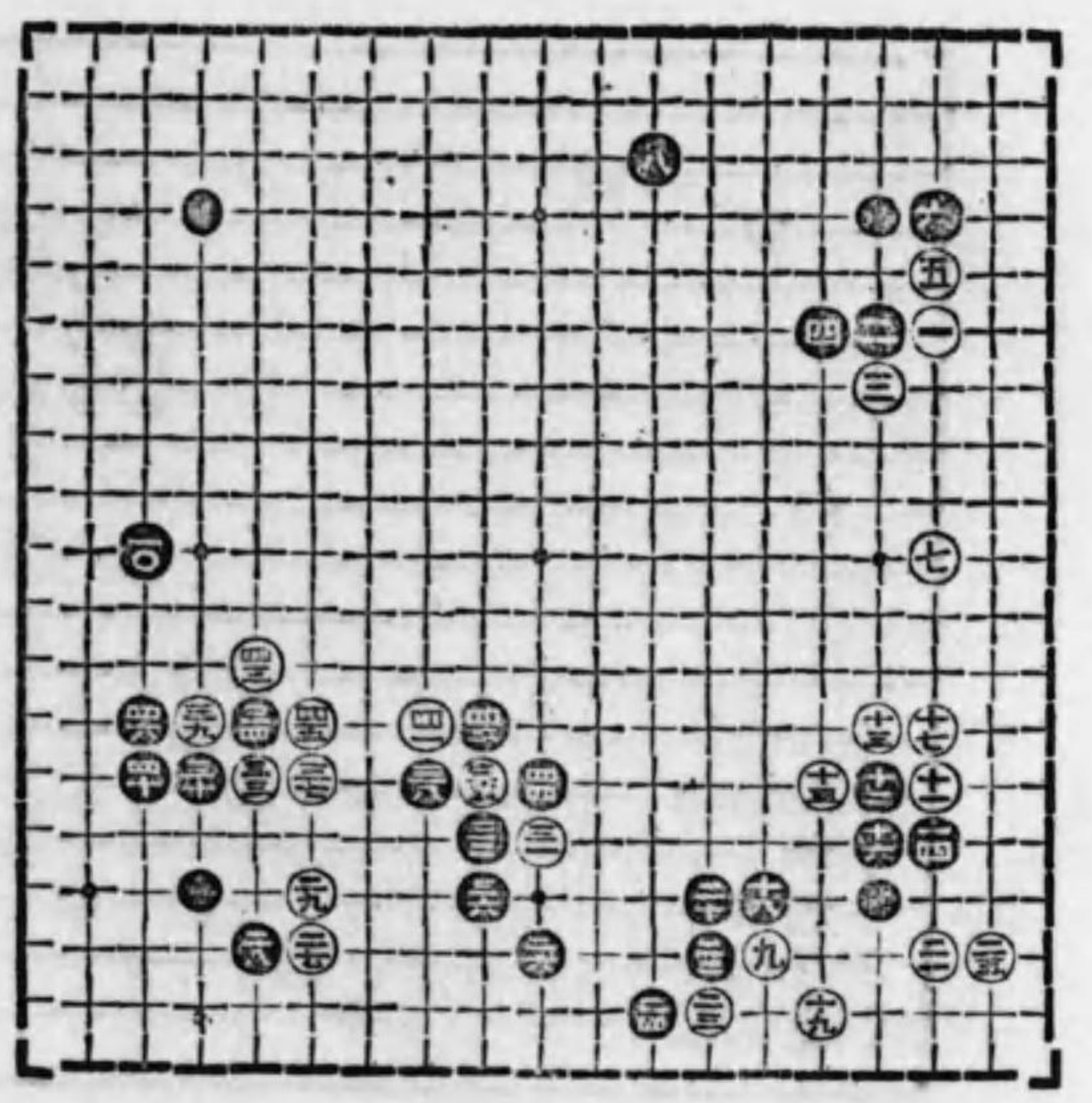
黒(二六)と打ち(二七)と打せ(二八)大  
に吉白悪き形なり。





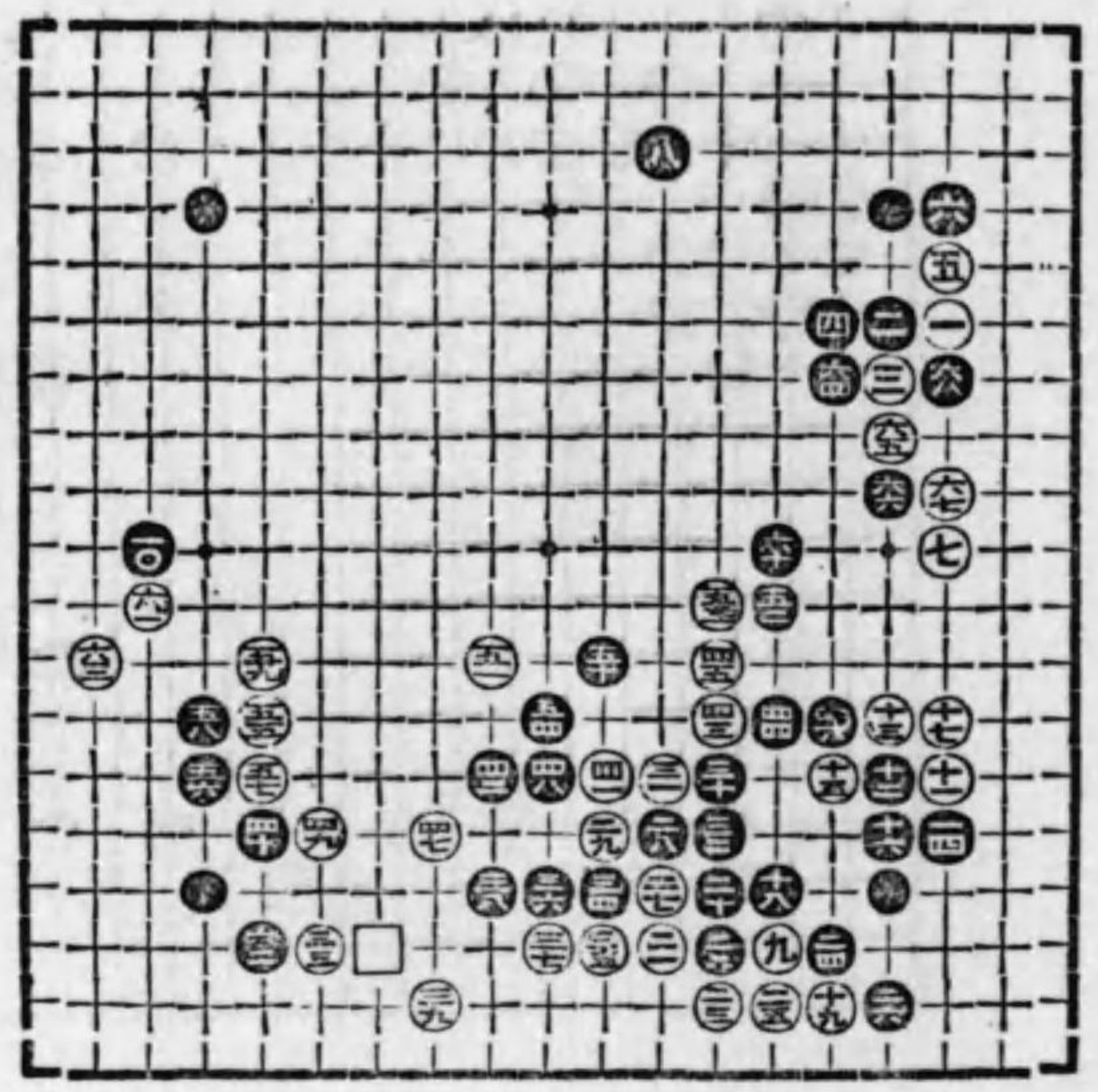
●四目

黒(三二)とつけて振替り打は黒堅きゆ  
る如此なりてよし。



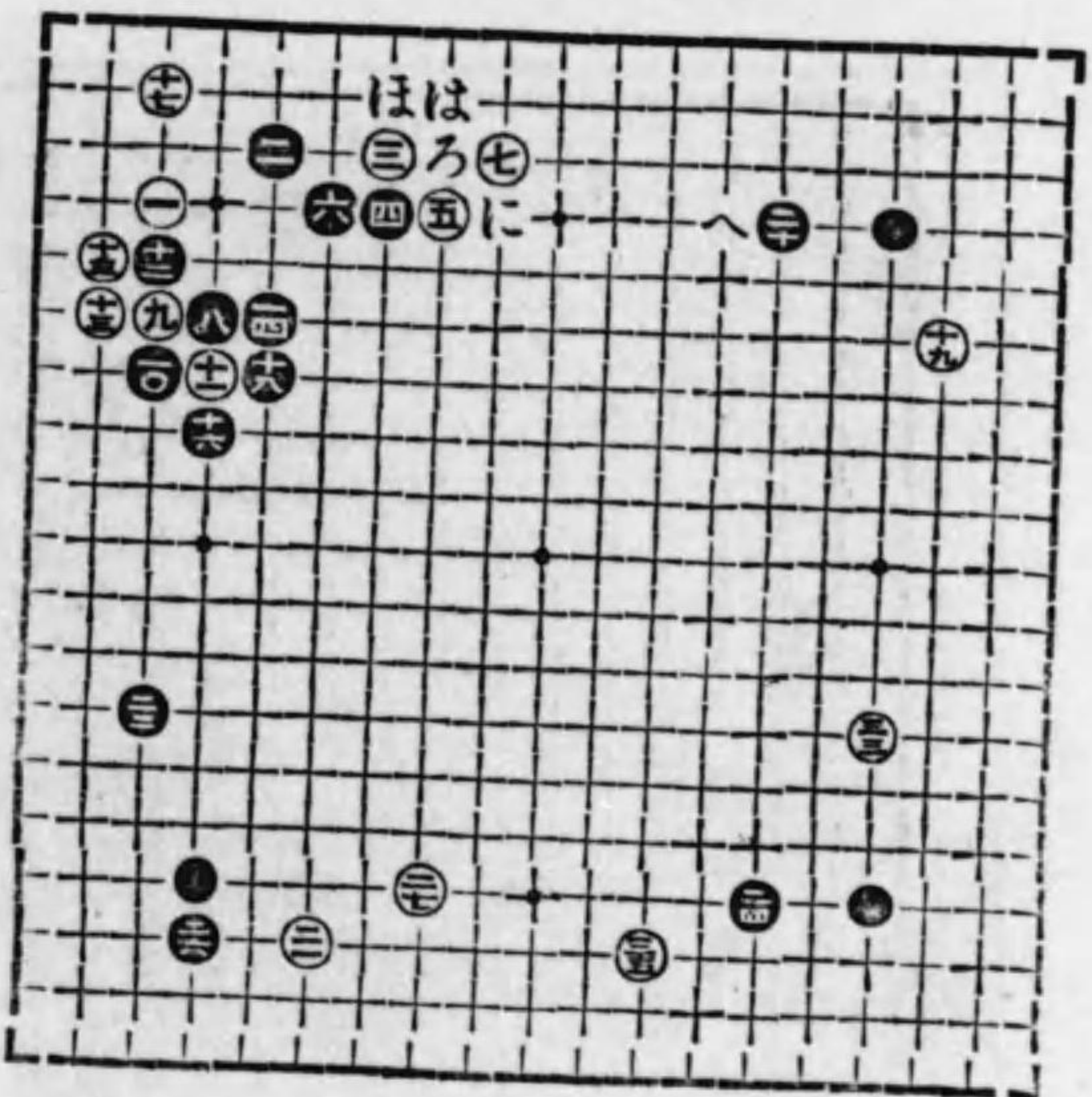
●四目

黒中の白取れては大によし(六八)の切  
白のあしらひを見る手なり此切心持先  
へ打こと間々宜きこと有り心得て吉白  
(三五)の手にて(三六)の所へ押へて打  
は一目のびて後□印へつけ切ゆへ黒大  
によし。



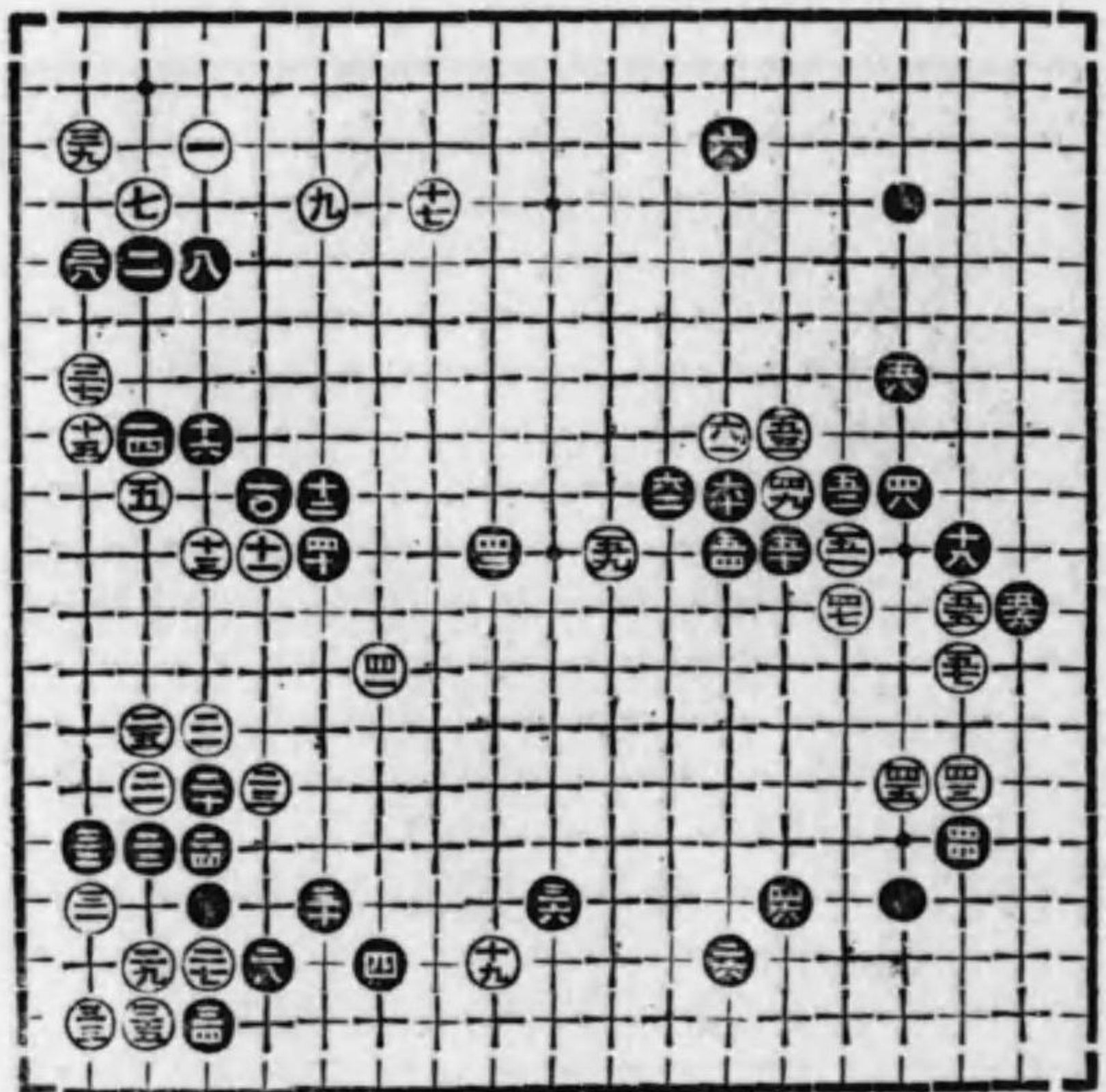
### 三目の布石

白七の手普通は八又は十に打ち黒ろに截り白七黒は白に黒は白一九に掛かるか或はへに二間高掛りに打つもよい黒十二は手順よし黒十八は肝要である白十一の如きは征の當り出來ざる内に打ち援ぬ置くは本手である以下此手順を記憶せねばならぬ。



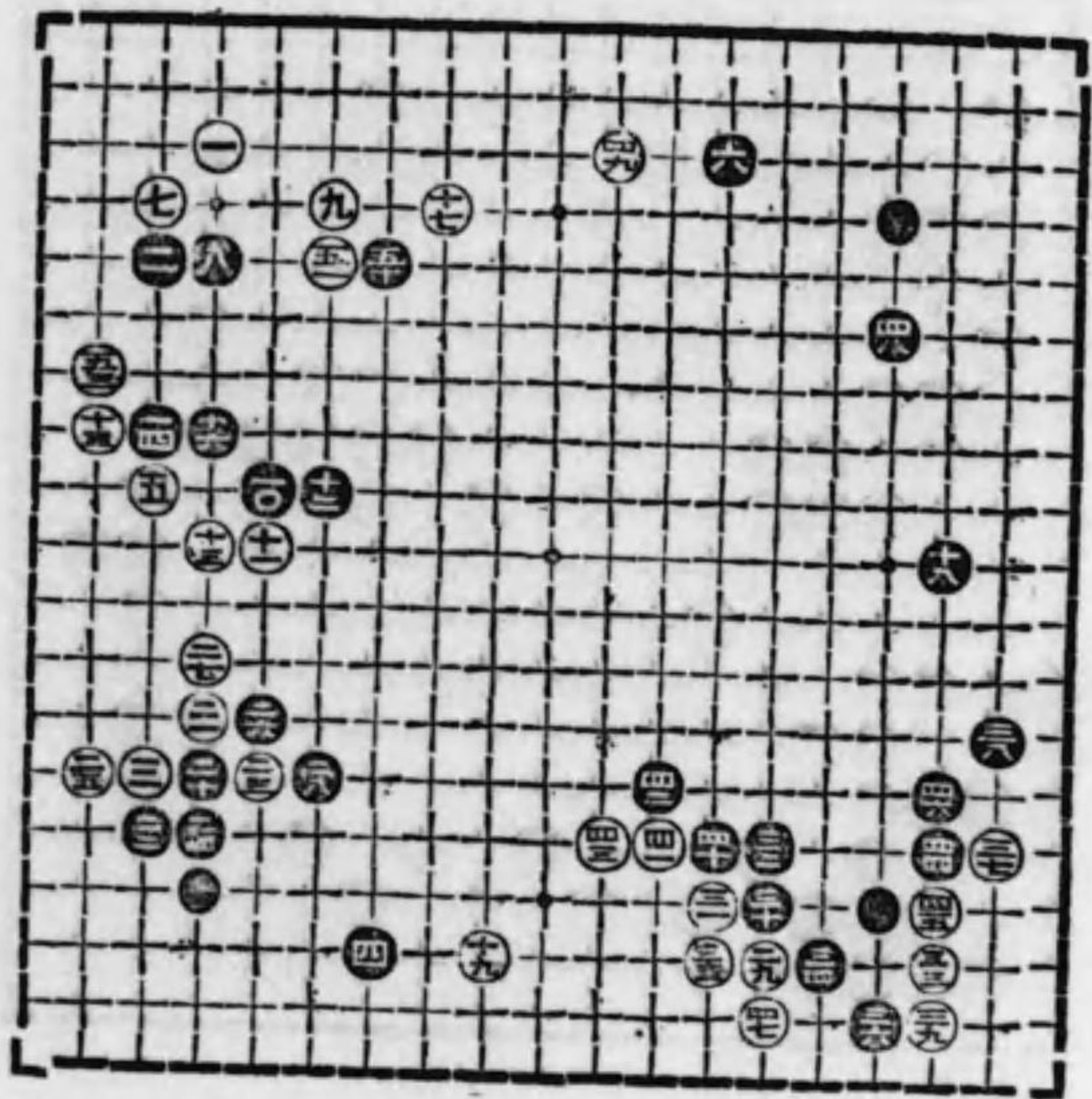
### ●三目

黒(二十)付て此の如く打吉白(二七)大に悪し故此の如くなる稽古のタメに之を記す(六二)と打つ手筋悪き手なれども此所にては紛れなく大によし(十八)吉(三十六)吉し。



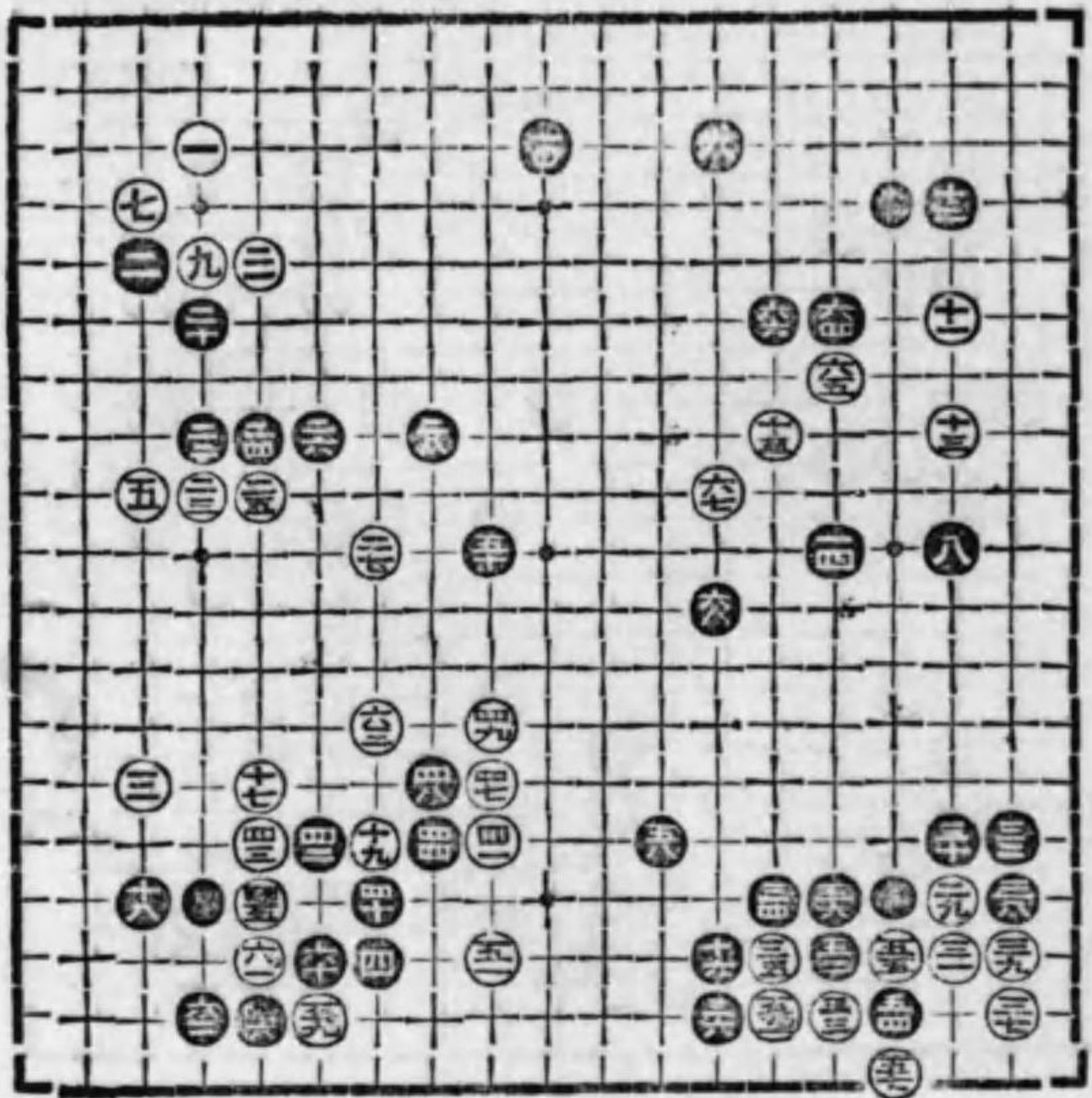
●三目

白(二五)と此の如く打は一目取て打なり此の如くなりては黒大位にして紛れなき形なり(五十)と打ち(五二)と打趣向大に吉。



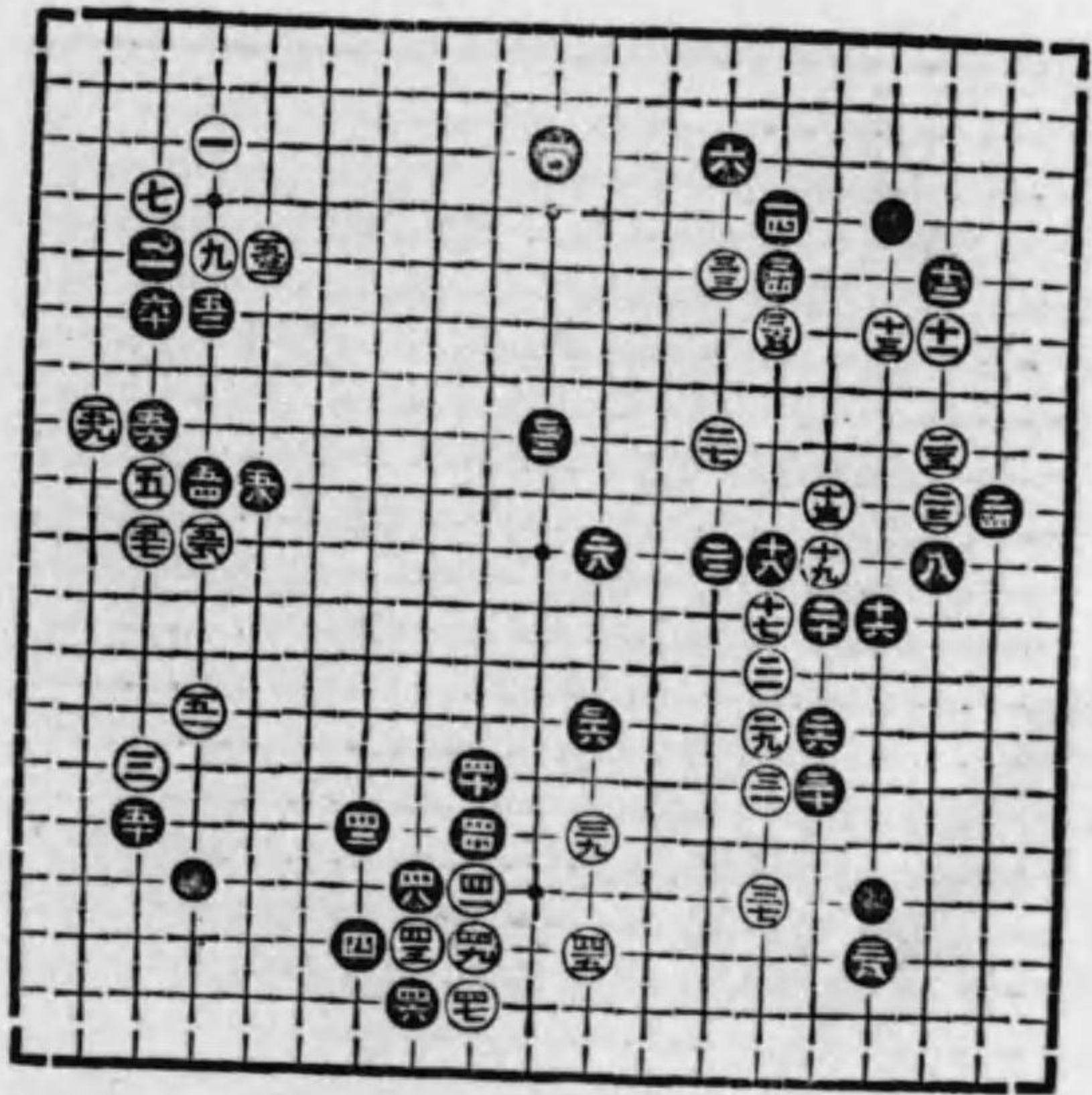
●三目

黒(八)の手(十)の手大場ゆるす可からず白(十九)の時是の如く(二十)と打ち(二二)と打つ趣向常に打つ手筋なり心得有て然るべし。



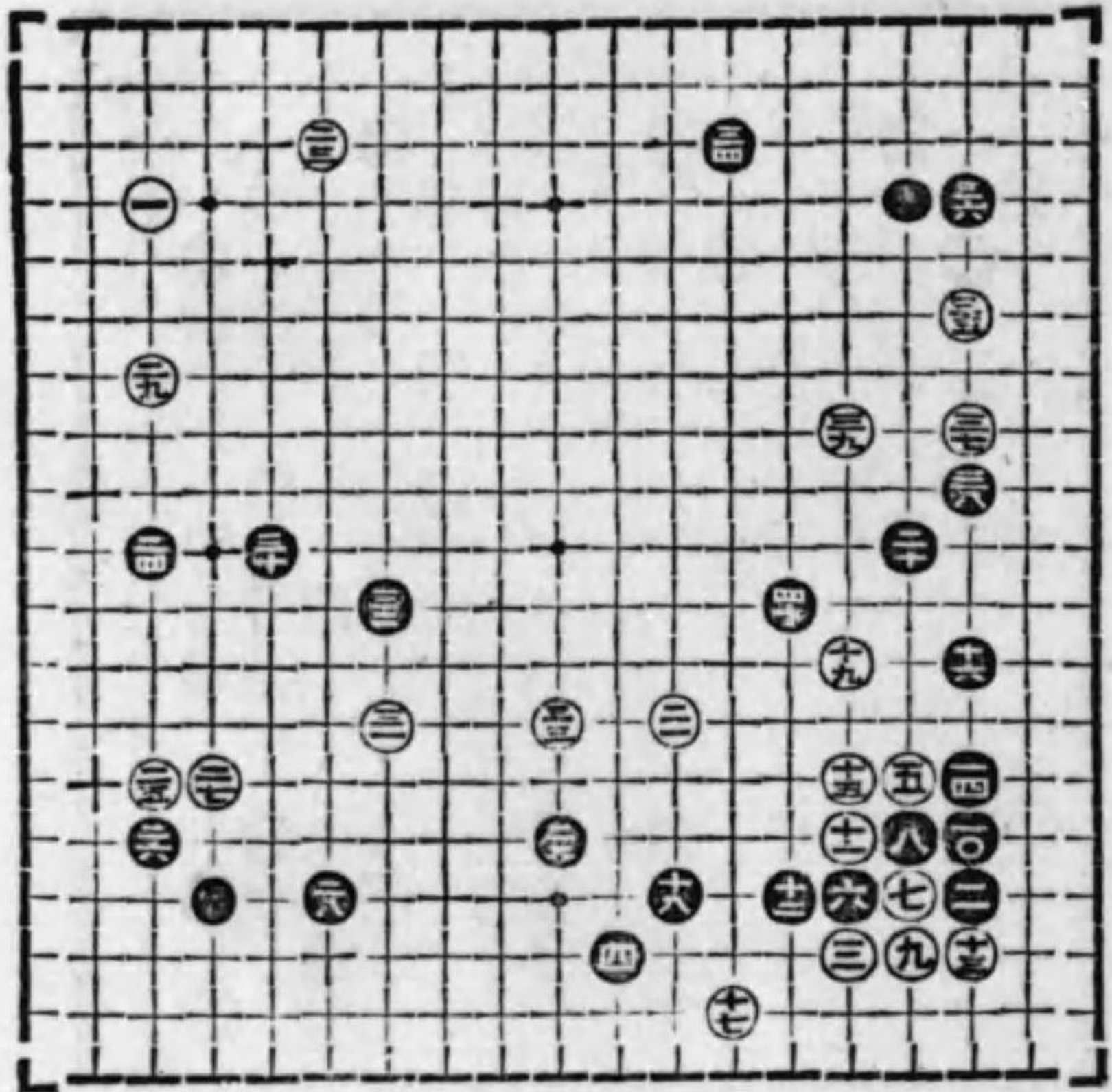
◎三目

黒(十八)越よし(三三)(三六)と打つ手  
段吉考へ見へし此の如く上より打しま  
りて(五二)とはねて打趣向よし心得見  
へし(三八)吉。



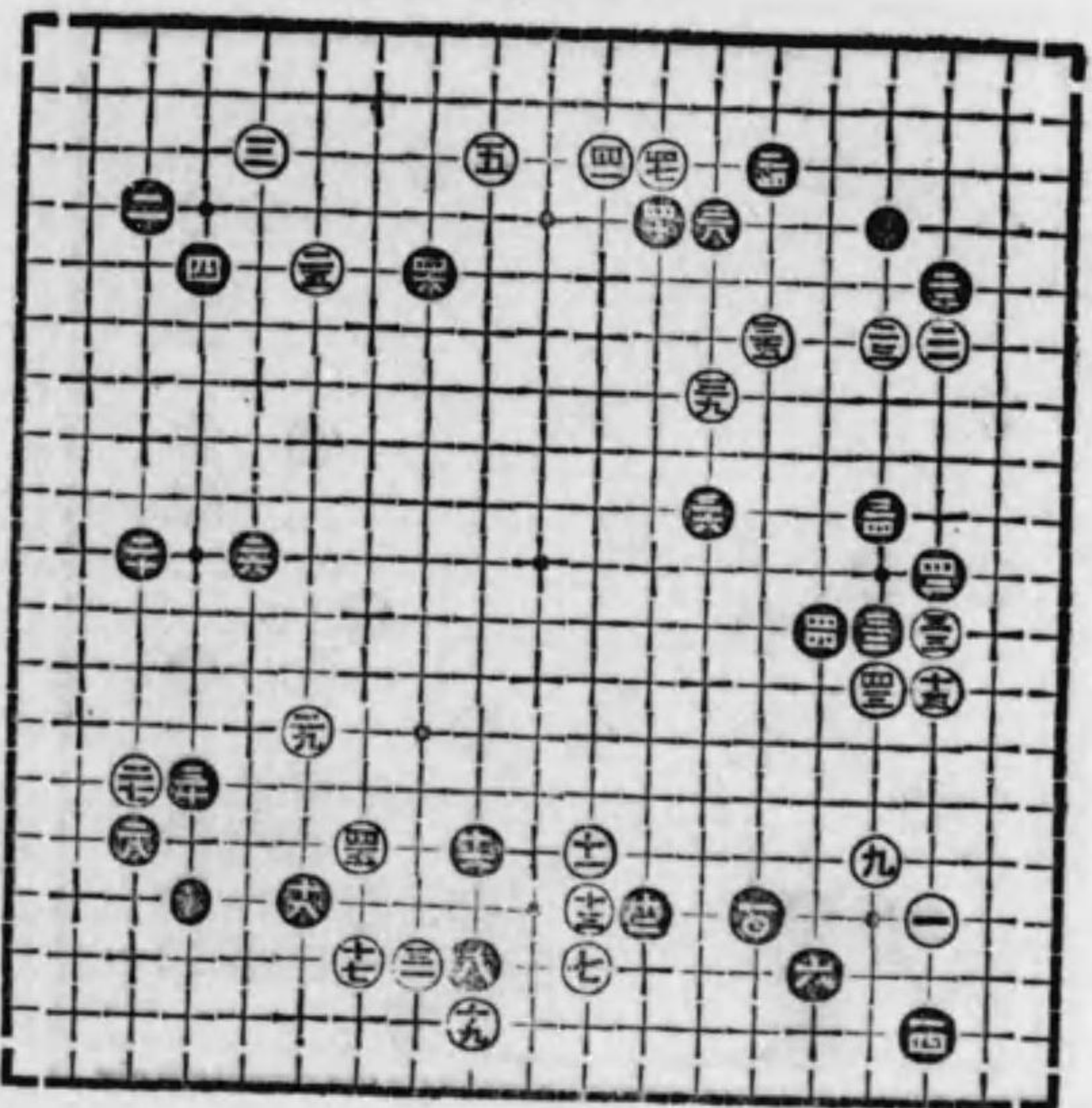
二目の布石

黒五より二二迄は定石である白二三は大  
場黒二四も大場と云ふのである白二五は  
二九に打つも宜し黒二六、二八は手順で  
ある其時白二九と詰め黒三十白三一黒三  
二などは尤も肝要である白三三は上下の  
連絡を保つたのである黒三四より四十迄  
は申分なき打ち方で此の形勢は黒の方が  
大いに宜しいのである。



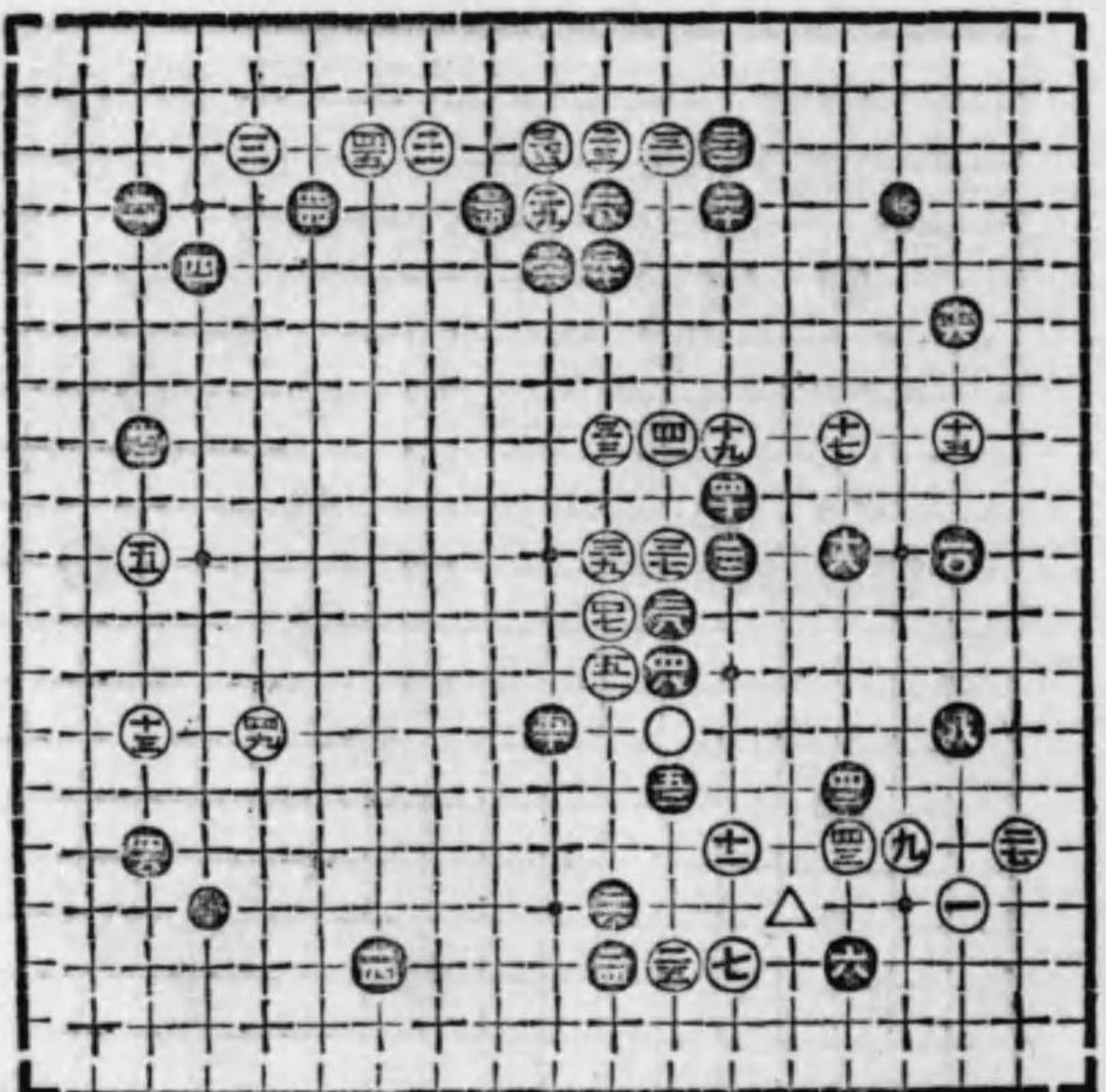
◎二目

このはんじやう  
 此盤上より故人村瀬秀甫先生之評  
 黒(十八)と打(二十)と大位に打し趣き  
 よし白(二九)の手面白し黒(三二)の手  
 よし(三八)の手常は好まず此所にては  
 よし黒(四六)の手大によし。



◎二目

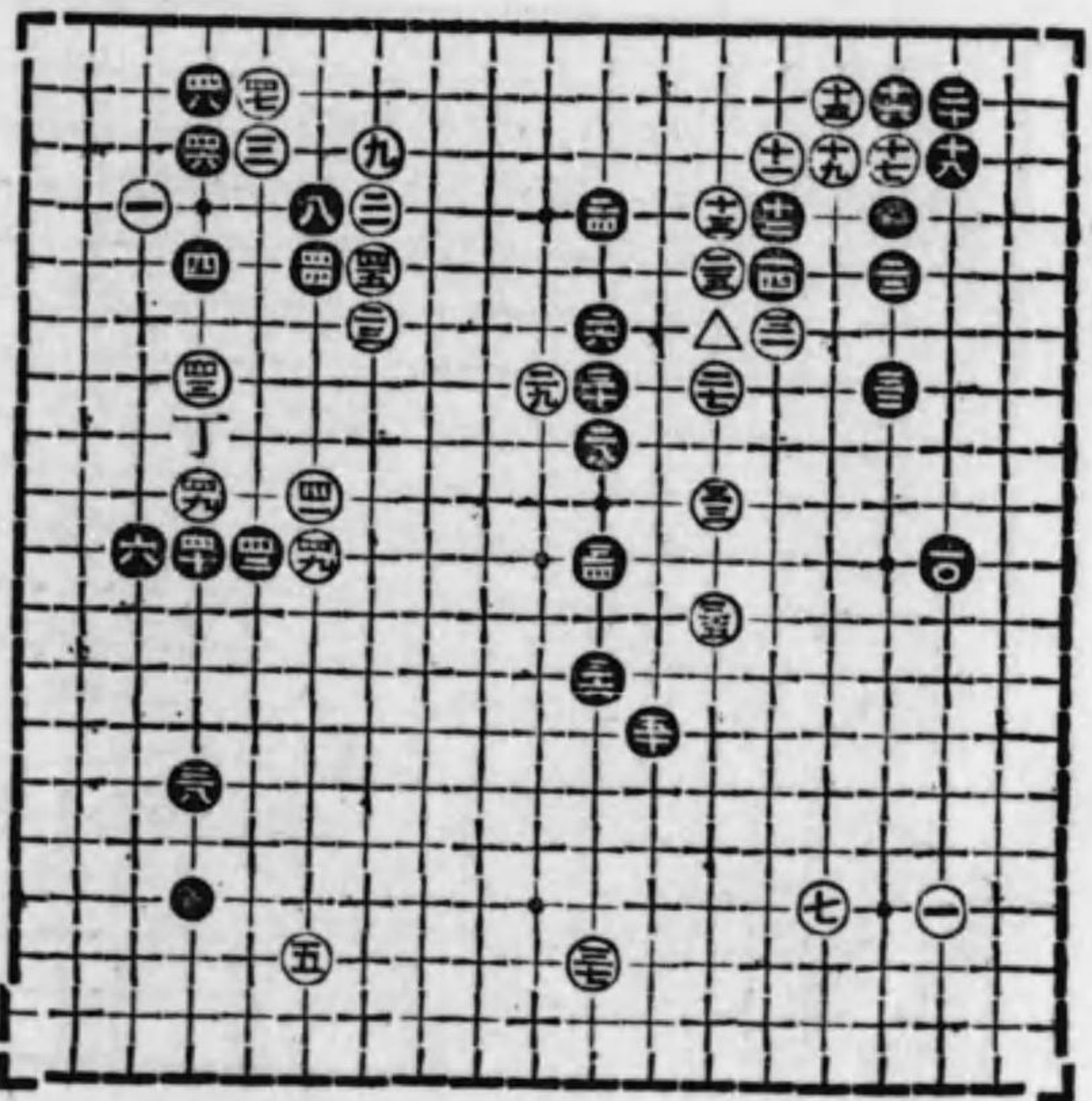
白(十二)の手互先にては△印へ打こと  
 定石なり二子も置せては此の如く打も  
 面白し黒(五十)と(五二)の手大に面白  
 し白○印へ打は二目捨つる心得にて打  
 べし。



●二目

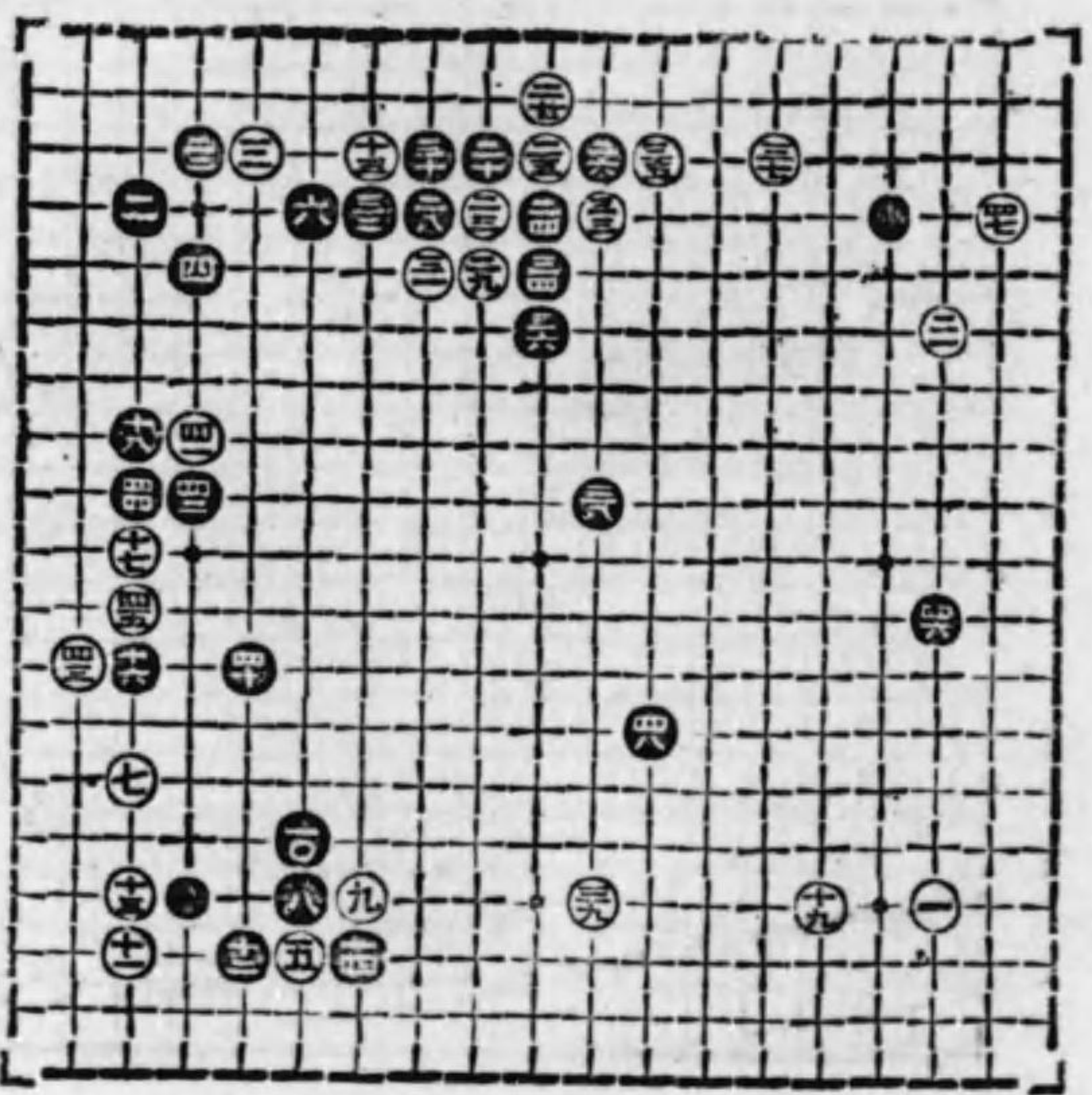
黒(六)の手よし(二四)大によし常は△印へ打べし此所にては是の如くに打方よし。

此石立黒健なり。



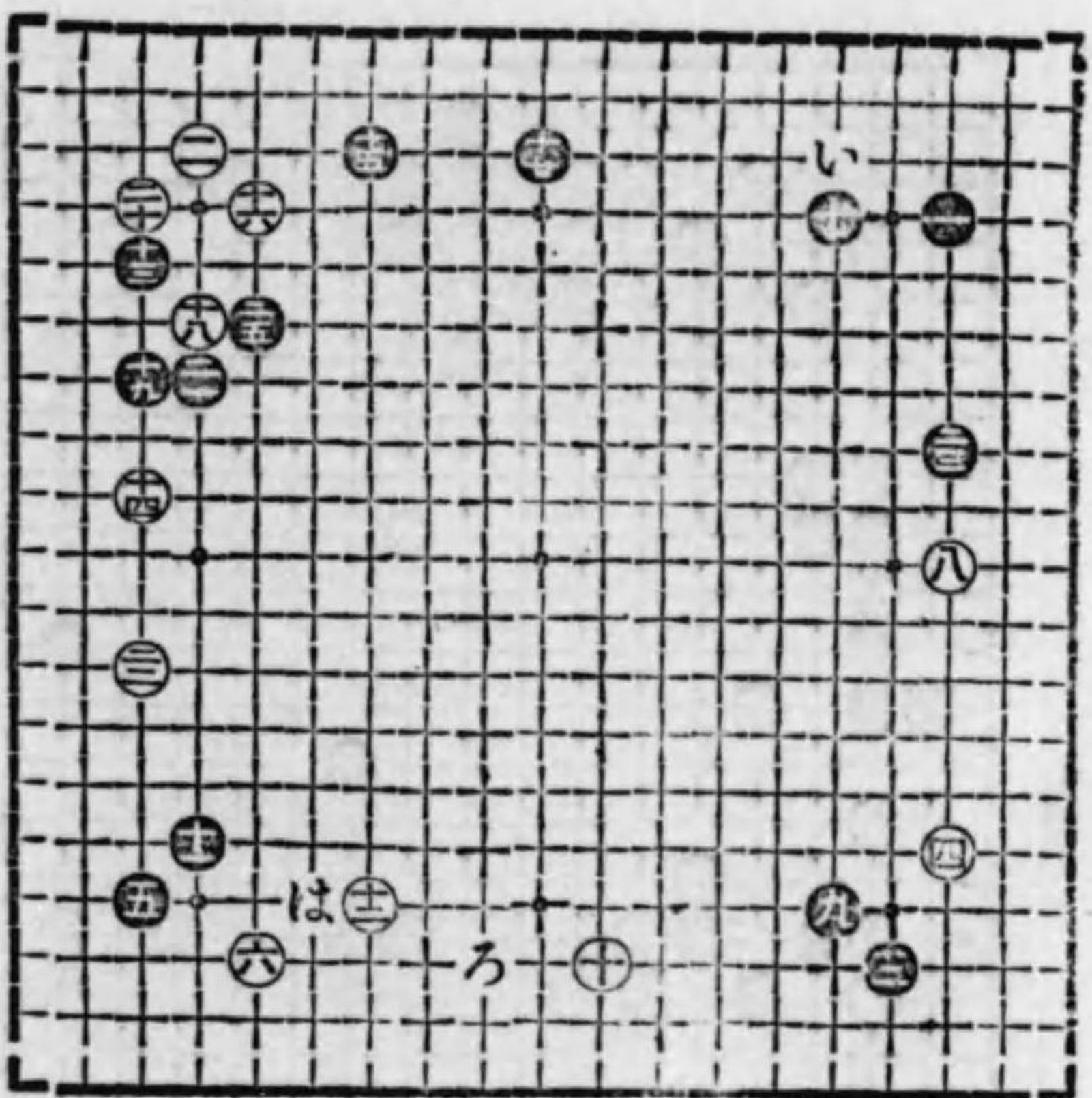
●二目

白(二三)の手相先にては好まず二子も置せては面白し黒(三八)の手よし白(四二)の手四四の所へ打は星へ打べし隅の白を取る心得にて打べし。



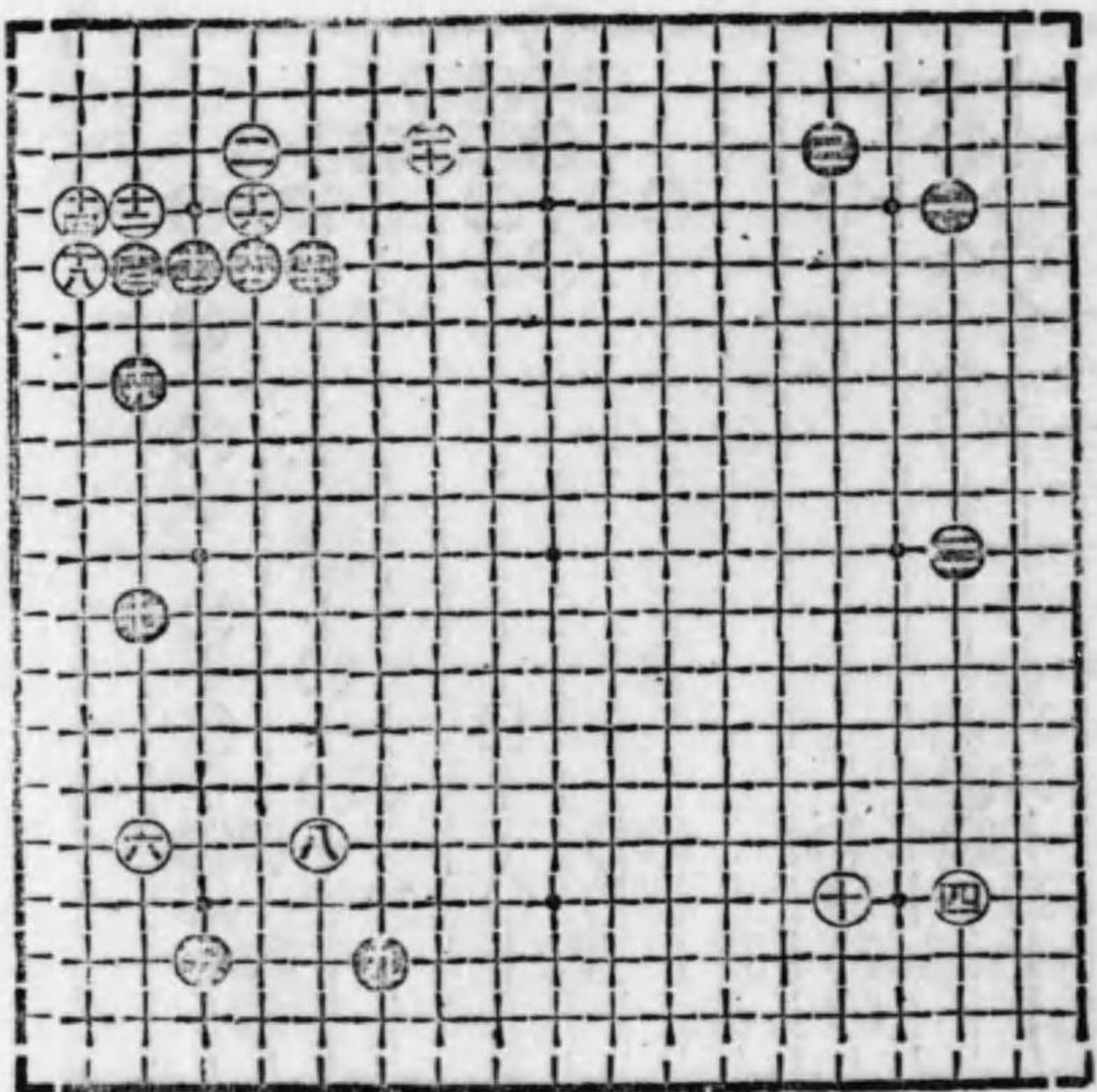
### 互先の布石

黒一より五迄を一、三、五の布石と云ひ所謂秀策流である白六はいに掛るもよい然し白六と打ちし時は黒は七と縮ればよいのである黒九は次にろに挟む趣向で白十は即ち之を避くる手である黒十一はろに打ち込むか又ははに掛けんとする手で白十二は之を防ぐより仕方がない黒十三と掛りし時白十四は三間挟み黒十五は二間挟み返しである白十六と尖みし時黒十七は肝要である以下は普通の石立である



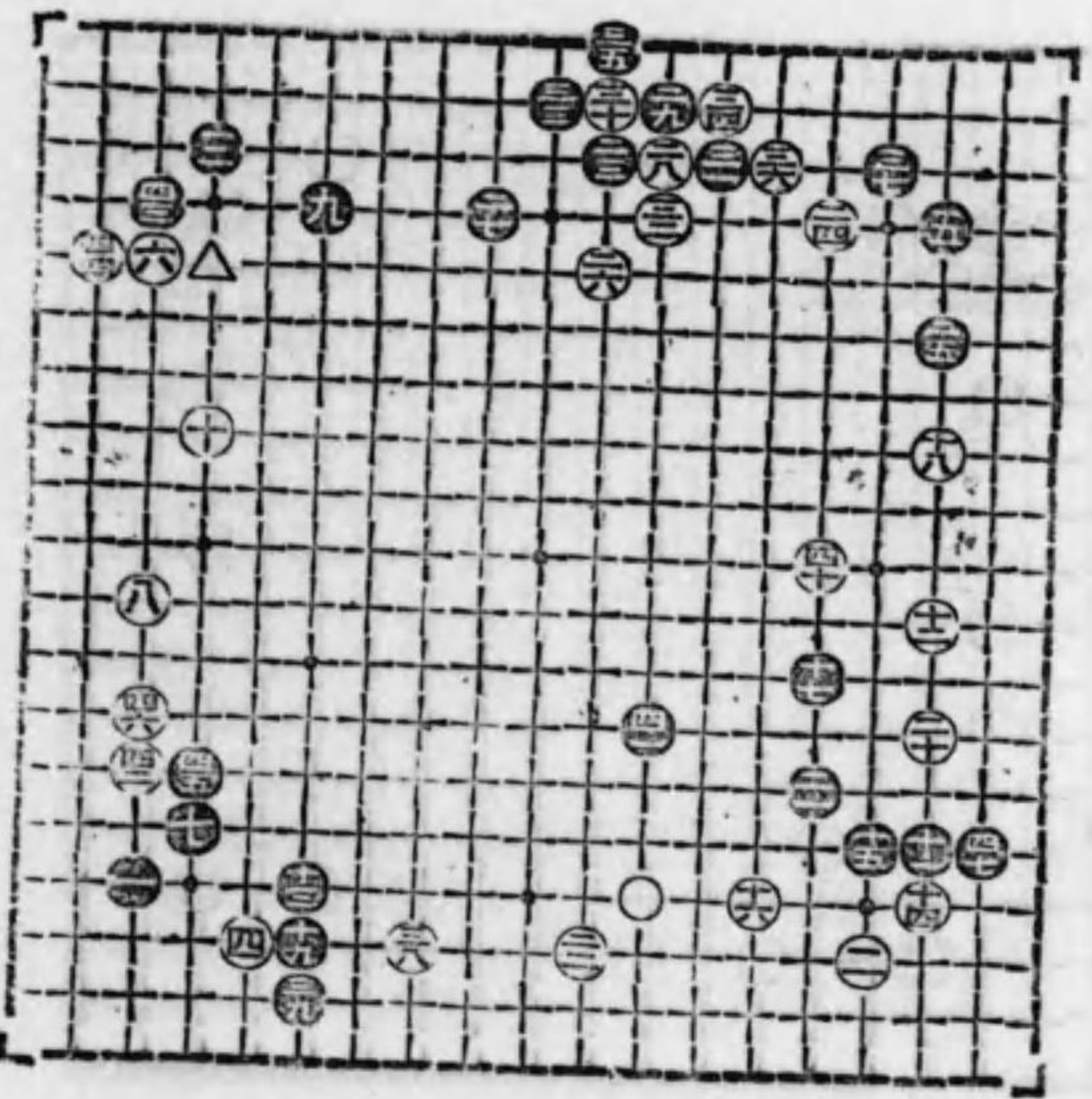
### 互先の布石

普通の石立で此の手順を記憶せよ。



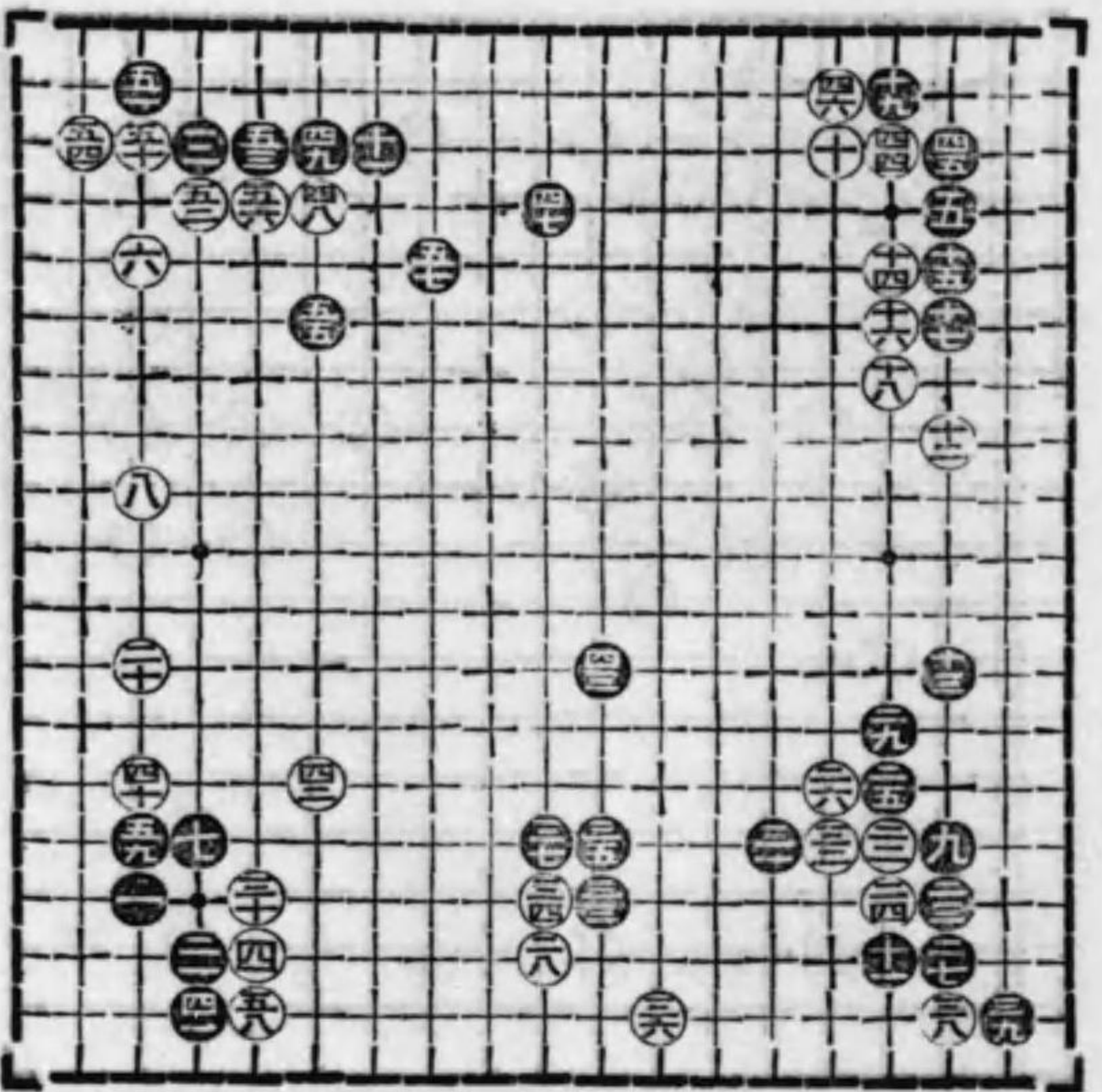
● 互先

黒(十四)の手大に趣あり(二二)の手常は○印へ打つべし此所にてはよし。  
 (四四)の手常は△印へ打べし。  
 此石立至つて細き棋とり。



● 互先

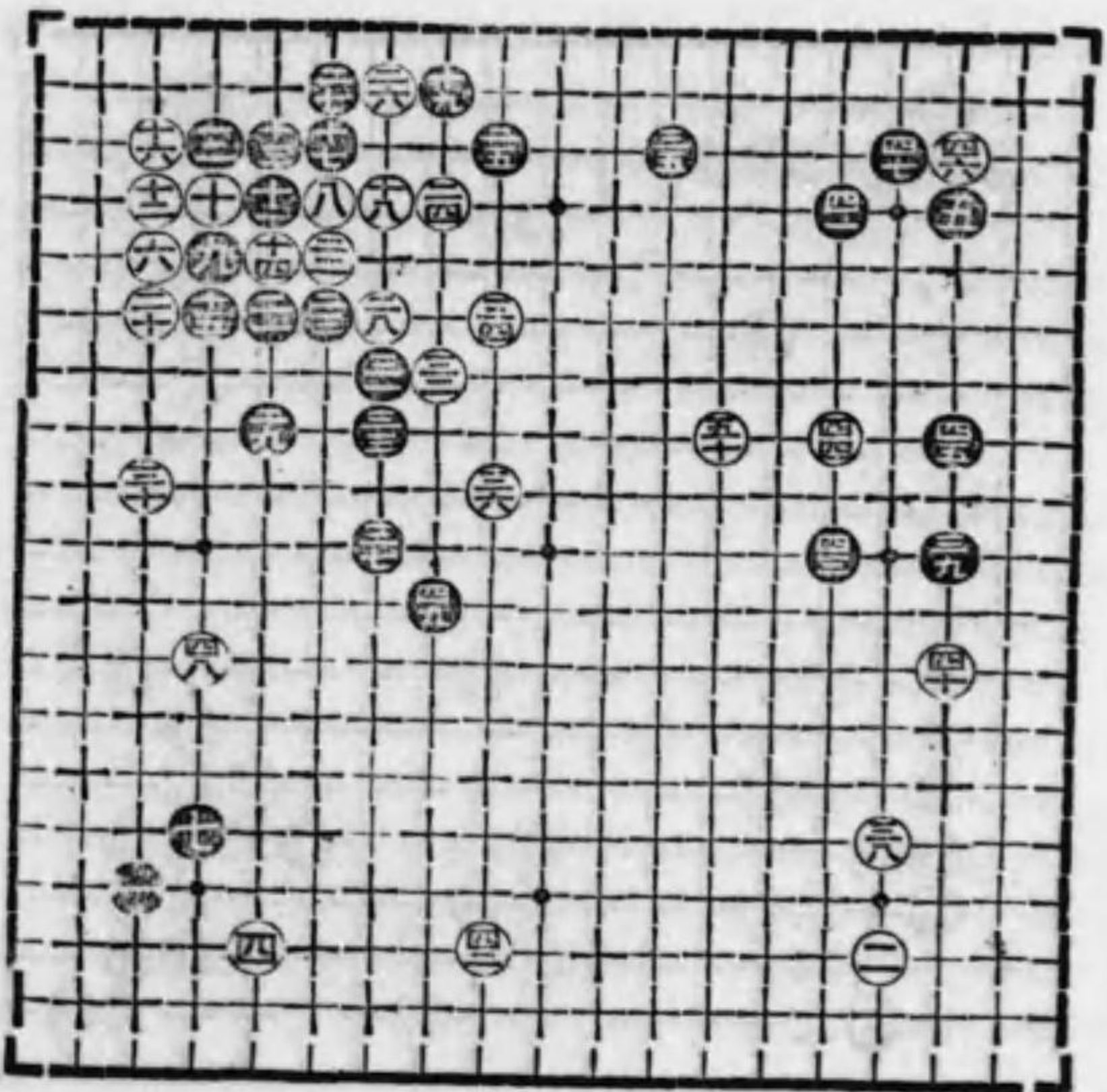
白(十二)の手古風なり、黒(十三)の手よし(二九)の手意味意し篤と考へ見るべし。  
 黒(五五)と(五七)の兩手軽くして吉、(五九)の手常は悪し此處にてはよし。





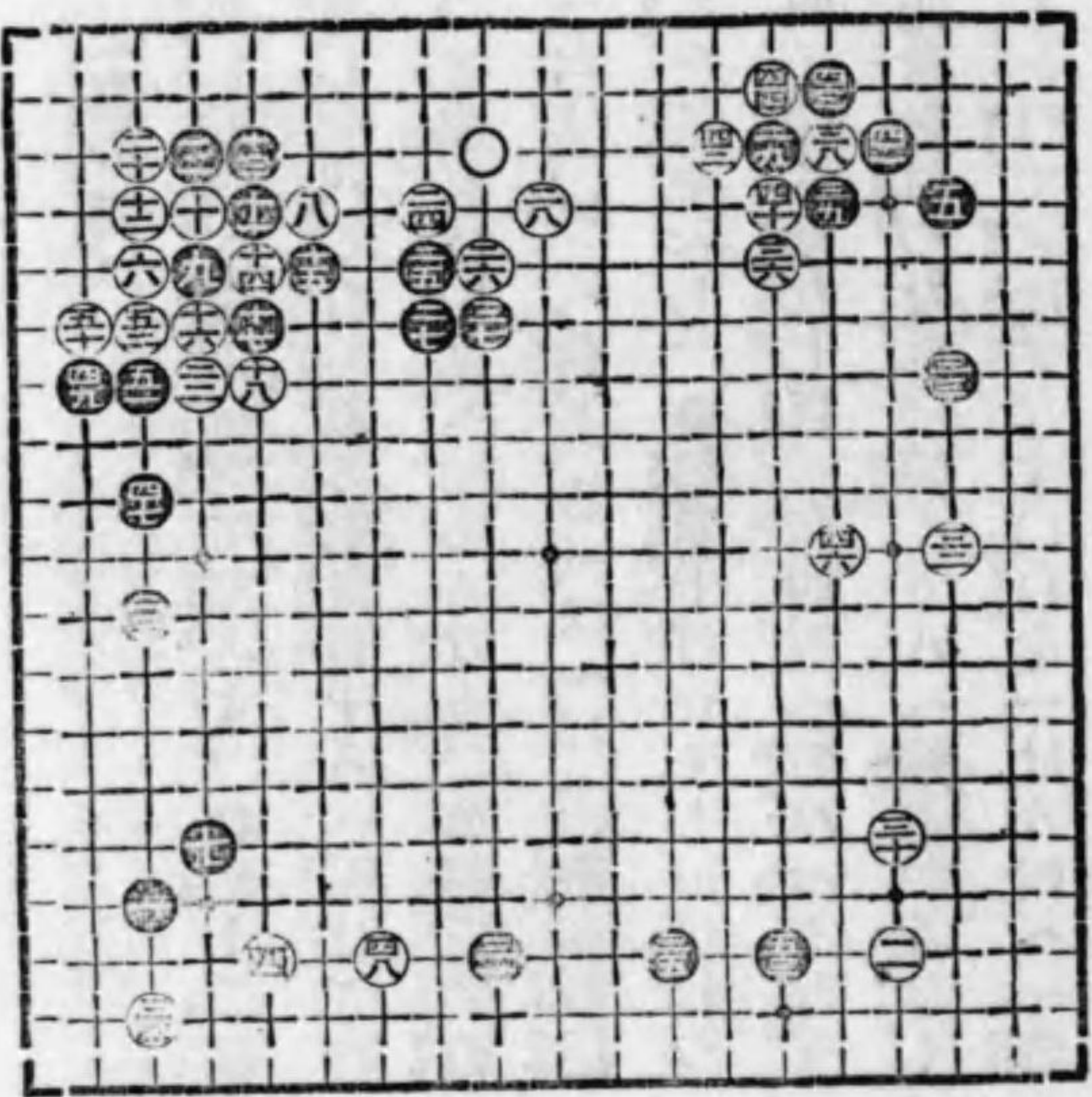
● 互先

白(十八)の手面白し此の形互角なり、  
(四六)の手趣あり總じて捨石に打つ手  
段まゝ有る手なり。



● 互先

(二三)の手常は○印へ打べし然れども  
此處にては面白し。  
(三七)の手よし。  
(四六)の手よし。  
劫どる。  
つぐ。  
つぐ。



### ● 實戦の研究

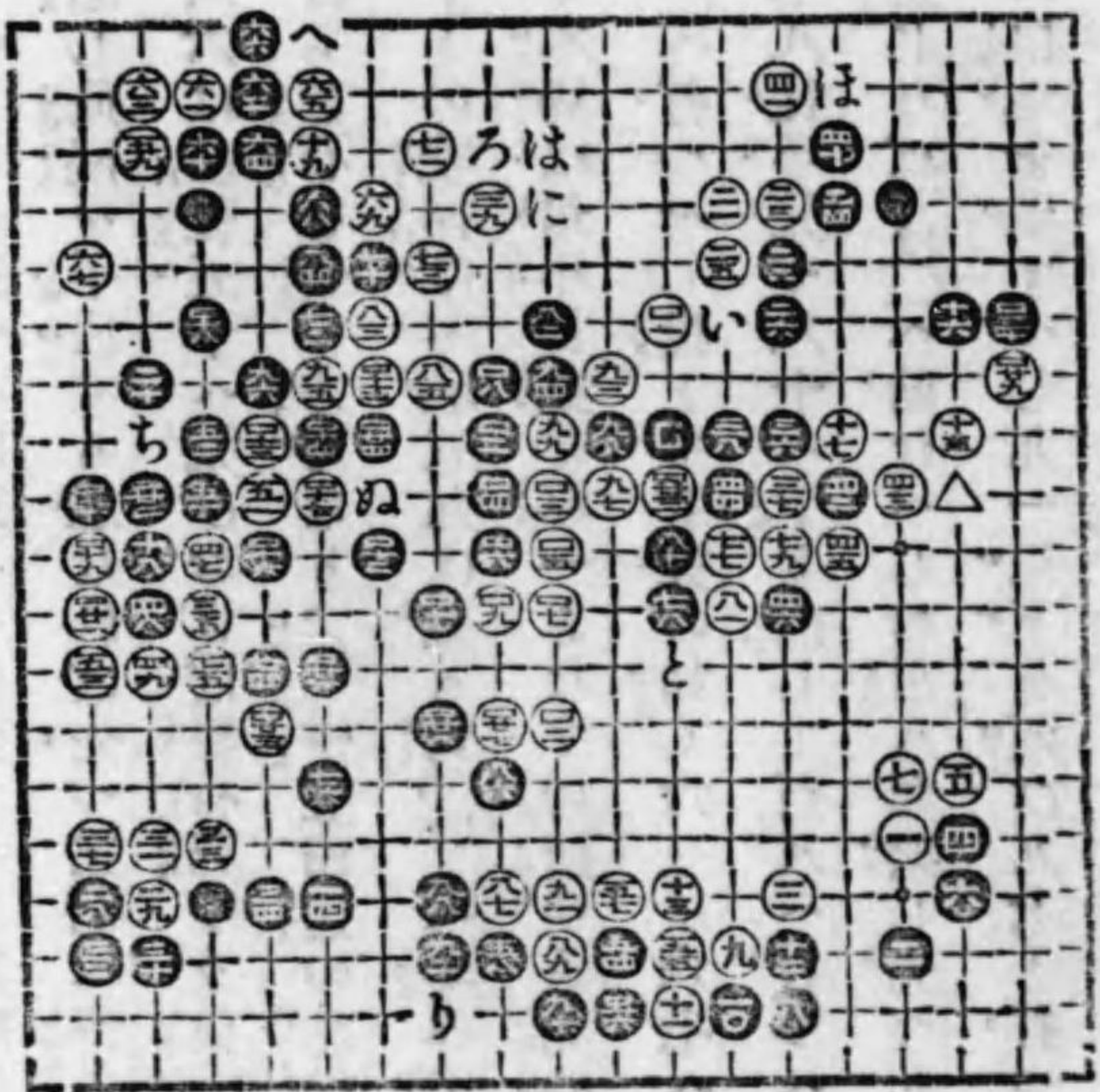
三目 白中押勝

(第壹圖)

○白九悪し「△印」へ打つべし又十一最も悪し五四へ飛ぶを以て型とす、●黒十二緩手も甚し五五へ切るべし、●黒二十場合悪し十八と打ちある處故百十八へ飛ばざれば型とならず○白三五面白からず此處を打つとすれば四九へ詰めるなり、●黒三六直ちに百八へ押すべし且三六三八面白からず三六は「い」へ曲り「ろ」は「に」の邊へ打込を狙ひ後四六の邊へ打ち白の模様を消す手段を講ずべし、●黒四十打たずもがな打つなれば「は」へ飛ぶべし、●黒四二と切り四四と曲る法なし兎に角四五へ行びべきなり○白四七は四八へ約すべし、●黒五六重し此處を打つなれば軽く五八へ飛ぶかさなくは六十へ守るべし、●黒六六悪し「へ」へ縛るを以て定法となす○白七一は八四へ一着切を入れおくべし、●黒七四面白からず「と」へ打つべしざれば白七五の粘は働きなし●黒七四と來りたるこそ幸ひ百二二へ切り黒百二十白百二九黒を「白百二一と搾るべし七六も「と」へ打つべし、●黒八二つまらず「と」へ行るか又は百二九へ尖み實益を占むべし、●黒八六悪し「と」の方優れり、●黒九二は「り」へカケツグべし、●黒百十二緩し百二三へ粘べし○白百十三悪し百二三へ切るべし○白百十九は百二三へ切るか「ぬ」へ打つべし、●黒百二十悪し百二二へ粘白百二一なれば黒先手にて百二三へ粘るなり○白百二七、百二九へ打つべし黒も百二八は百二九へ尖むべし。

百三百手迄。

第壹圖



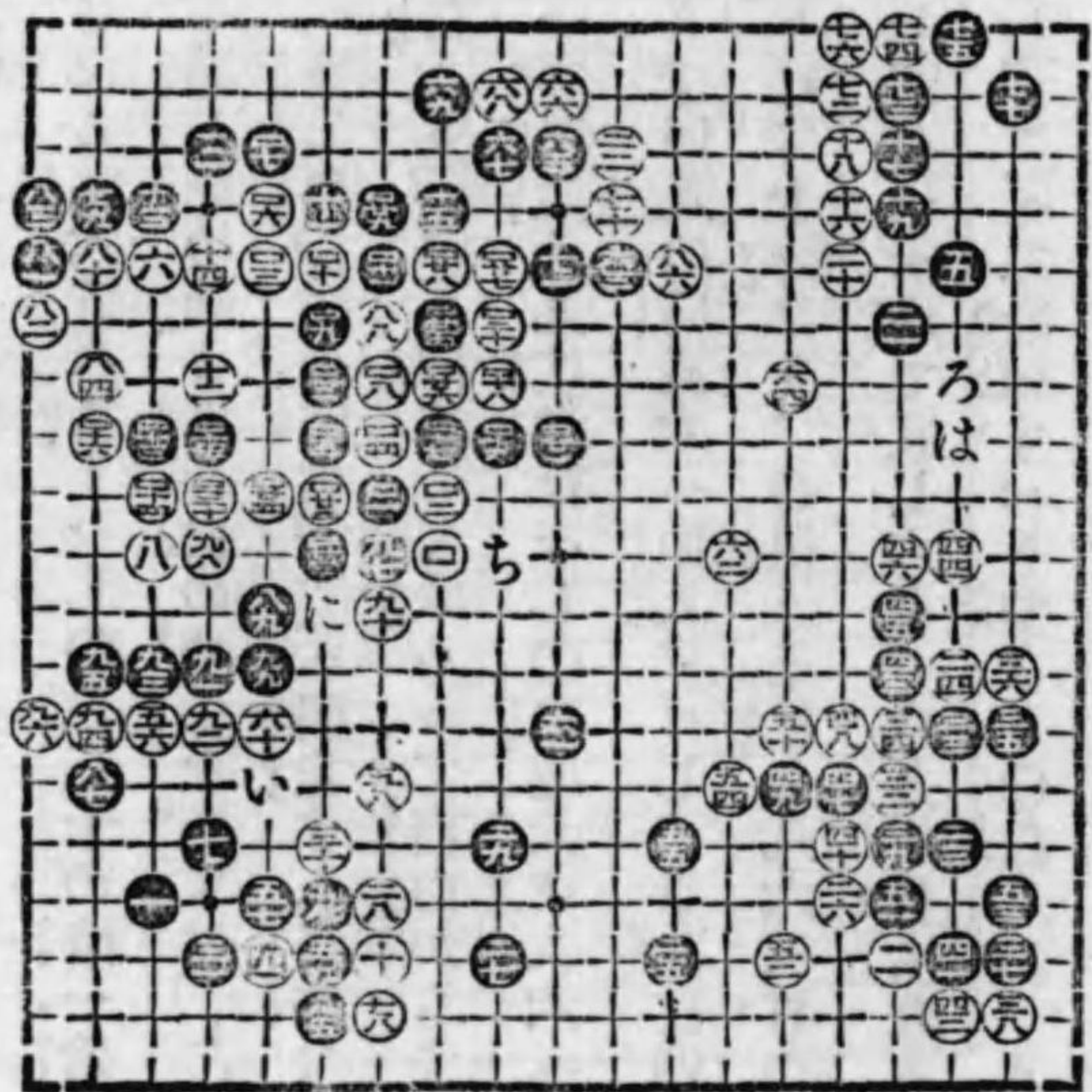
互先 白中押勝

(第貳圖)

●黒十三早し二三へ掛るか又は十七へ締るべし●黒三一の時三七へ斜走すべし其時白「い」なれば黒九三へ詰にて宜し●黒三三悪し此隅を手段する意なれば先づ三七へ斜走すべし四四込の結果黒大に悪し然るに白四六は緩慢五十へ飛びおけば黒石死ゆる白大いに善し然し斯く打ちても五十は五一へ打ち黒石を殺す方可なり乍併五四迄の結果となりても黒の方不利なり○白五九と六十との交換は不利五九は兎も角「い」へ尖み出し白石を隔ておくべし○白六二面白からず本局は最早實益を専一となす局面ゆゑ此時先づ六九へ打ち黒何とか應じたらば白「ろ」へ打つべし黒とても夫の如く六三は六七へ尖むべし○白六四は六九へ打つべし○白七八徒手先づ八十へ下り而して百八へ打つべし●黒八五事小なり八七へ打ち白九四へ應じなば「は」へ詰むべし●黒八九悪し先づ九四へ出で白九五なれば百二十へ尖み徐々に白地を消すべし九一以下を運び九七と打つ手如何にも的のなき事を好む手なり○白百八悪し百二三と縛出し黒「に」なれば「は」と打ちおきても黒石は無論取れるなり●黒九九は「に」へ突當り三子を捨つべきなり○白

百悪し百二三へ縛出し黒「に」百百二二黒「へ」なれば白「と」にて白の方善ろし、●黒百三は百四へ行にて宜し○白百八と打ち全部取らんは無理百八の時百二二へ切るべきなり、●黒百二一悪し先づ「ほ」へ切り白「に」なれば黒百二三白「ち」黒百二四へ打てば黒の方勝なり白に百二二と切られては黒敗なり元來黒敗局の原因は八九に始まり九九に成れり。

第貳圖



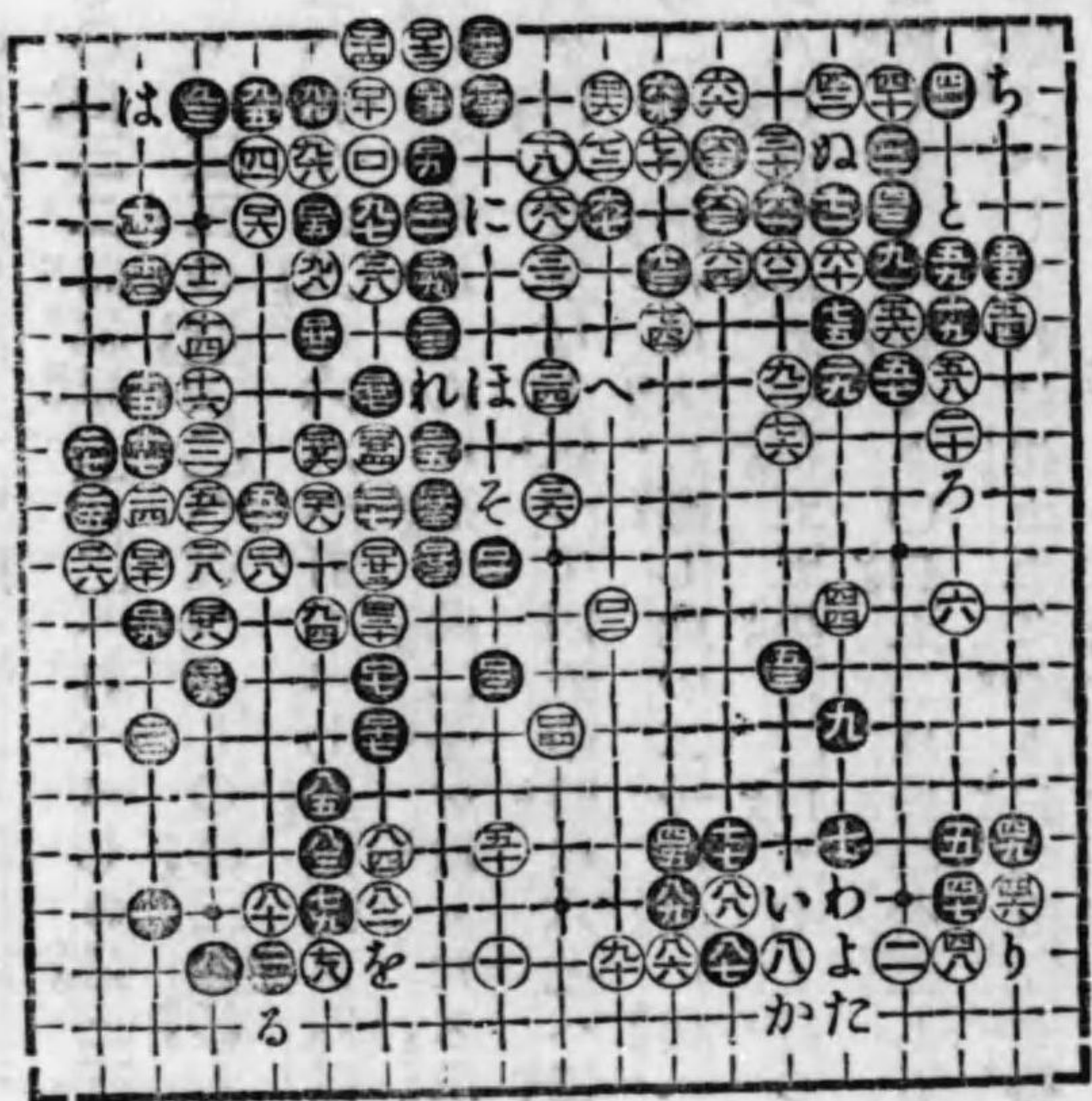
百三十手迄

五 先 (第參圖)

●黒七悪し「い」へ二間はあれ共斯く一間飛ぶはなき事と知るべし、●黒九悪し「ろ」へ詰めべし、●黒二三悪し五一へ縛べし白に二四、二六と打たしめては黒不利なり、●黒二九面白からず先九三へ打ち白九五へ應じたる時六五へ析くべし○白三十の時一着「は」へ下し黒の應手を試むべし●黒三一調子悪し此の如き場合白の模様を消すは「に」の角より打つべきものなり○白三四は三五へ冠し黒「は」の時白「へ」へ斜走する手筋なり、●黒四三「と」へ守るべし斯く打ちては白より「ち」へ附らるゝ味ありて面白からず●黒四五穩かならず「り」へ斜走するか又は一層嚴敷八九迄進むべし○白四六は八六へ守にて宜し、●黒四七、四九、最も面白からず四八の時八六へ進入すべし、されば四五の趣意立たず○白五十打ち過ぎ八六へ守りにて十分なり、●黒五三緩し八六へ打つべし○白六十悪し六二へ飛ぶ處なり●黒六七は七一へ粘で宜し六七、六九と打ちたる以上七一は緩し「ぬ」へ當るべし○白八十悪し「る」へ二段縛すべき型なり○白八二、八四又悪し八二は「を」へ行ふべし、●黒八七、八九と打ちたる以上直ちに「わ」へ出で白

「か」黒「よ」白「た」黒「り」へ切り先手はて此處に得をなし而して他へ着手すべし○白石二は先づ百二十七へ覗き黒「れ」白「そ」と打つ方黒石の眼型を取り味合善し○白百八は百十九へ打つべし○白百十一危険なり百十九へ打ち眼型をなすべし●黒百十七緩し百十九へ覗くべし白石眼型をなすに苦痛なるべし。

第參圖



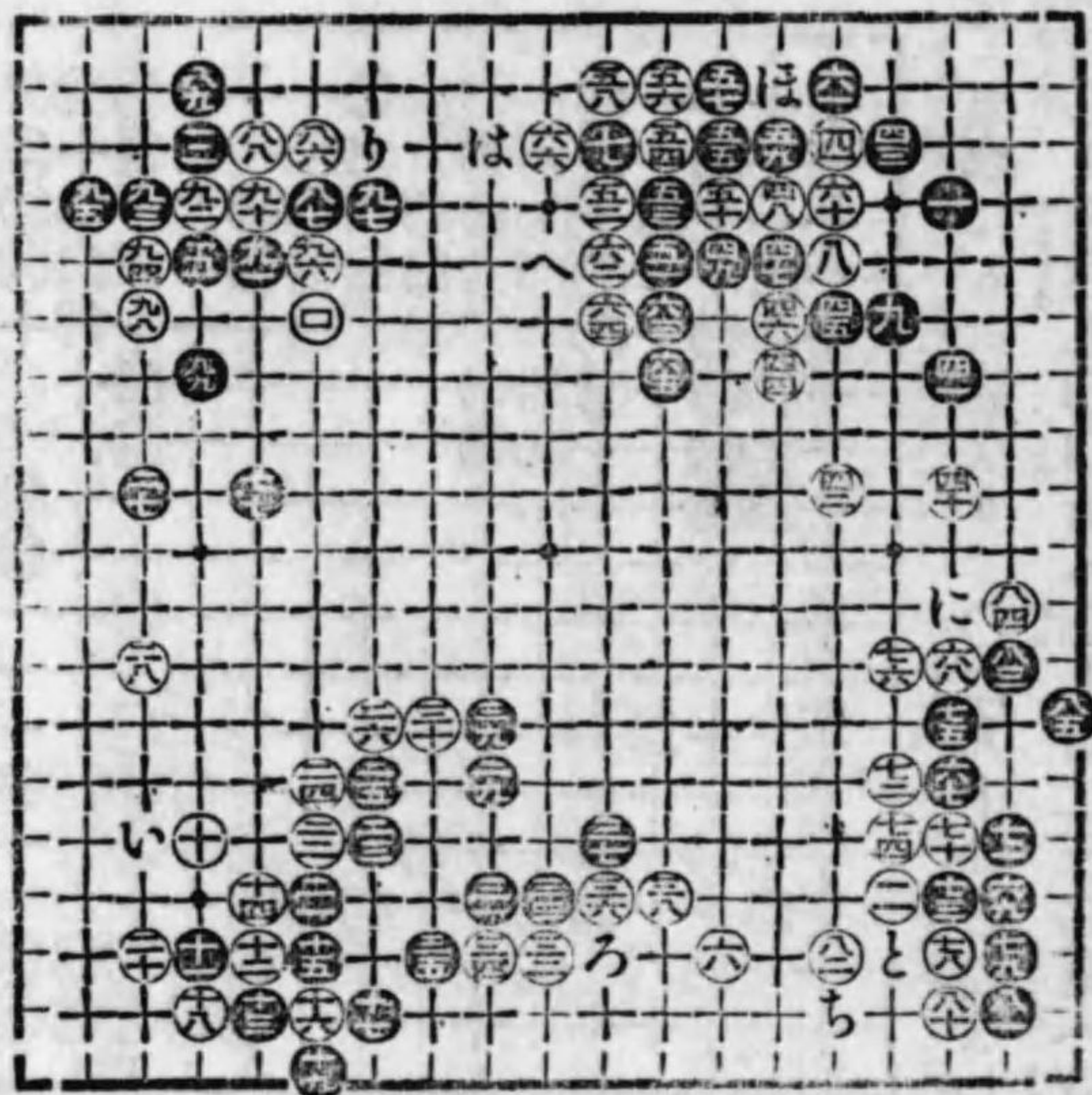
互先 (第四圖)

○白六面白からず六六又は「い」へ打つべし○白八面白からず此處を飛ぶなれば四五へ二間飛ぶべし●黒二九は「ろ」へ詰にて宜し○白三三時機早し「は」へ打つべし●黒三三より三七迄白に地形を興へる手にて面白からず三三の時「に」へ打つべし●黒三九緩し「に」へ打つべし●黒四一は堅きに過ぐ四五へ押すか又は六八へ打つべし又四三は四四へ斜走すべし●黒四五と出で四七と切り白の二子を取らんは悪し此二子を取りたる處にて何程の利益なく却つて夫れがため左側を薄くなすなり依つて四五の時は六七へ掛り白の模様を消すべしされば白四八と打ち二子を活んは大に悪し此の二子は黒に興へて差支へなし故に四八は四九より縛ね黒四八白五十黒五七白五五黒「ほ」白五七と打つ可しさもなくんば四八は五三へ打つなどは軽くして一策なり○白五二は此場合悪し五三へ出で黒五二白六二黒六三白「へ」へ行び戦ふべしされば黒五五と切り白の五子を得んは尤も拙なり五五は五六へ縛ね白五五黒六六へ行び全部を取る趣向に出づべし六六迄の結果黒の方不利○白六四は打たぬを可とす○白六八は七十へ尖み附け黒七二の時

六八へ詰む可し●黒六九面白からず七八へ打込み白七三黒六九と縛ね振替る手段を取るべし○白七十より七六迄悪し七十の時七八へ尖む可し●黒七七直ちに「と」へ縛ね白八二黒「ち」と二段縛すべし○白八二緩し八三へ下れば大に優れり●黒八三、八五事小なり「り」へ打可し●黒八九は穩かならず九十へ約るを以て本手とす○白九四手順悪し先づ九六へ切る可し其時黒九七なれば白「り」と連絡し後九四へ味を残す可し●黒九五悪し「り」へ二段縛すべし白窮すは觀易き型なり。

百手迄。

第四圖

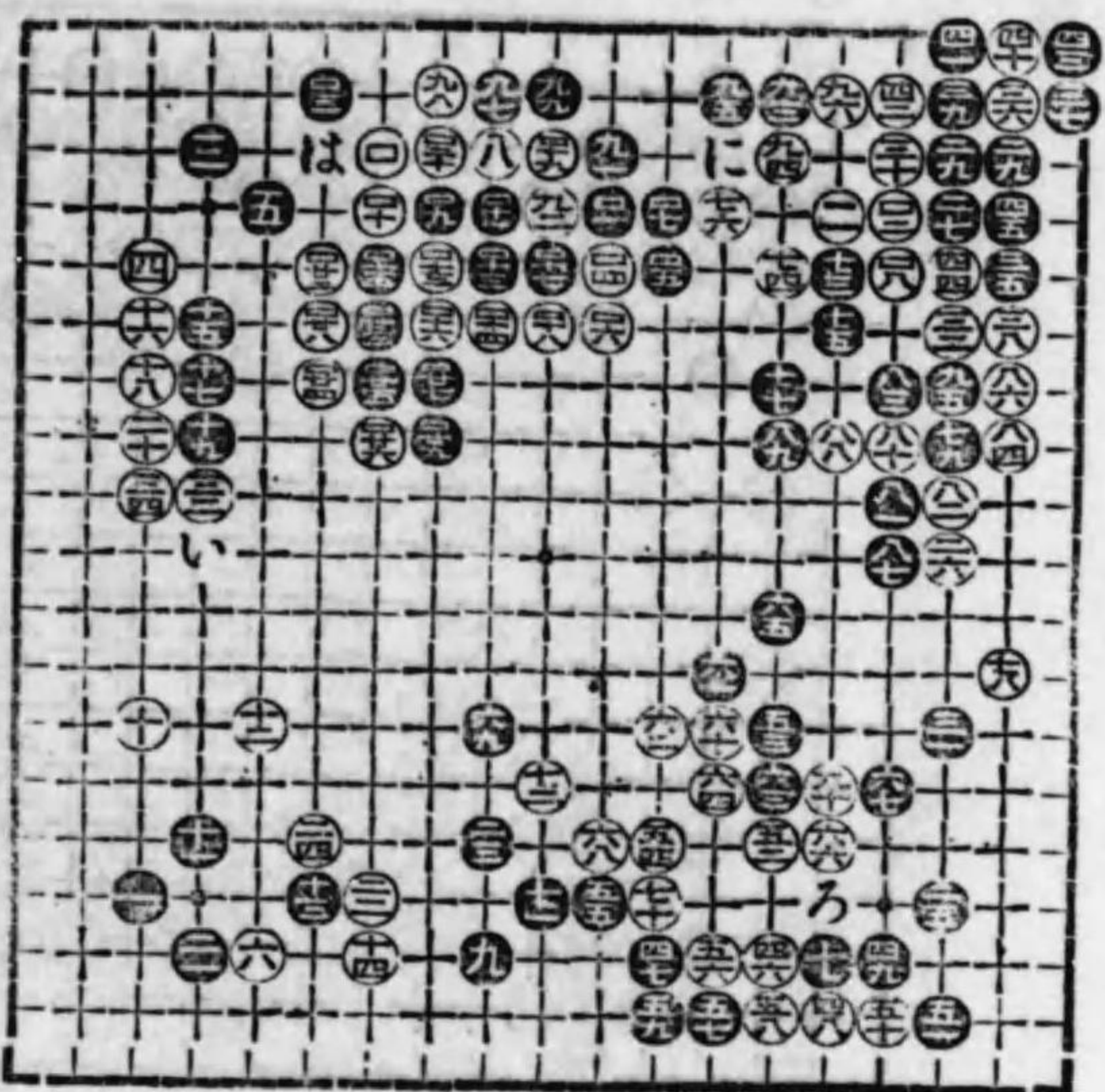


互先黒勝 (第五圖)

●ツグ

○白十二はいへ打つ可し●黒二五の時三三へ行び白三四なれば黒「い」へ行び白の位を飽く迄低くす可し●黒三一は普通の如く三五へカケツグ可し○白三八悪し三九へ粘可し●黒四七は「ろ」へ行ぶ可し○白四八は四九へ夾む方優れり七二迄の結果黒此處だけ不利なり●黒七三より八九迄の

第五圖



結果は白損害にて下邊の埋め合せは黒として出來たる次第なり、○白九十は必要なし「は」へ詰む可し●黒九一の打ち込みは強硬にして面白し○白百八悪し百二三の處へ守る可し黒より百八へ切りても白「に」へ打てば白は眼形あるなり恐らくは此手が白の敗因ならん○白百十は百廿へ續く外なし●黒百十一は強硬にして最も善し百二十九手迄

七子白中押勝

(第六圖)

●は劫トル

●は九二、九四、六八の三子をトル

●は一子トル

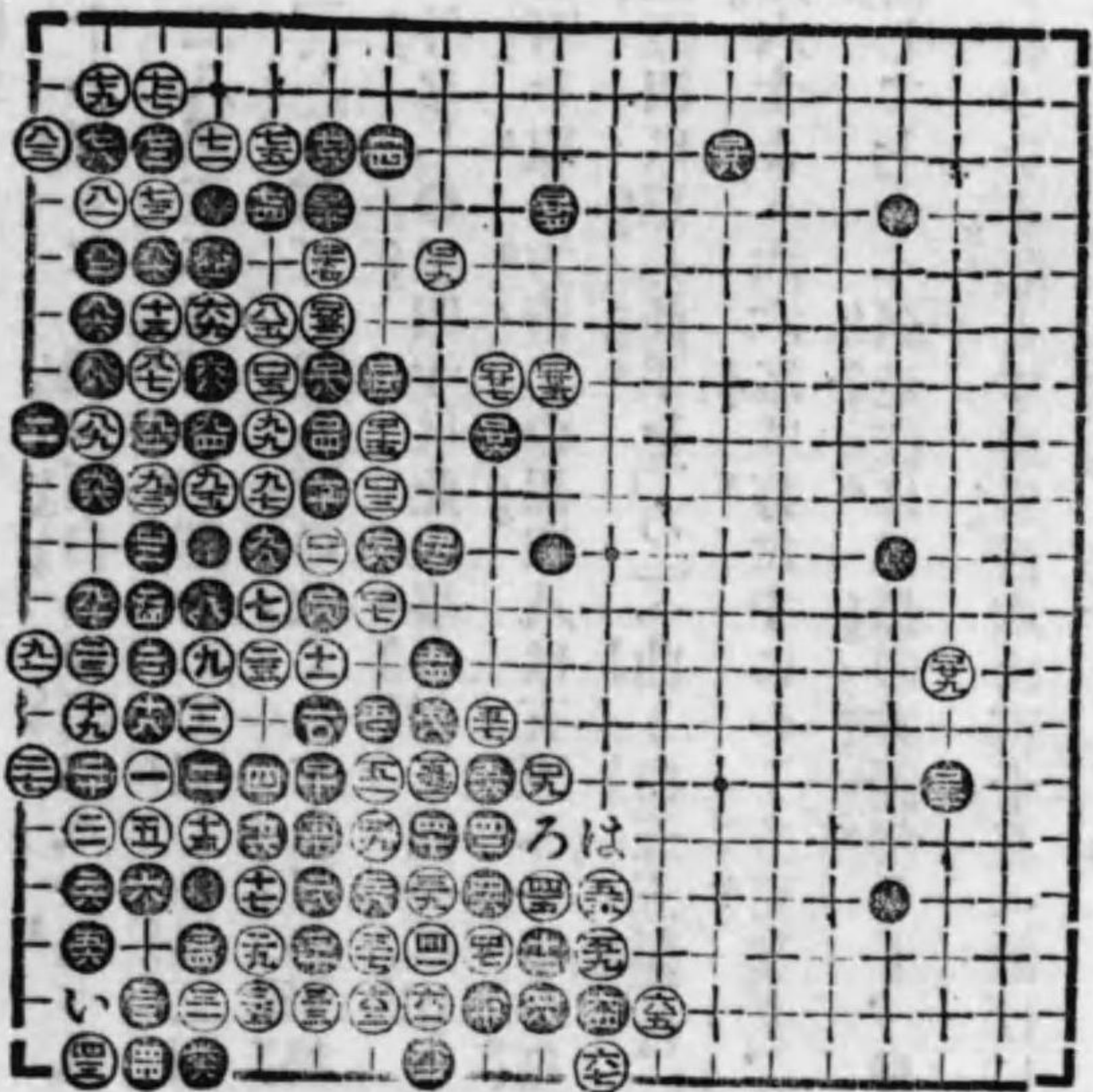
●劫トル

●同粘

●黒十は打たぬを可とす●黒十八と附け二十と切りたる趣向面白し●黒二八は先づ九十へ曲り白九一の時黒二九白二八黒三十白三八黒五二と打ち方穩かにて宜し●黒三四の時六三に約へ白石を取る方善し又三六は「い」へ打可し然し評の如くにて黒の形勢可なり○白三九は無理徐々に四一へ行びる外なし●黒四十は此の場合緩し四一へ切り白六三黒四十白四六黒四七と打ち下邊の白石を取る方善し●黒四八は五五へ一子を征取る方穩かなり斯く強硬に出でたる以上五四は悪し此手を「ろ」へ曲り白五五黒「は」と飽くまで強硬に出づれば黒の方善し●黒六十より六六迄は打たずにおく方可なり、●黒六八は先づ以て九十へ曲りを利かせ而して七十へ斜走位にて黒の方優勢なり、●黒七六の時八十へ割り込み白八一黒八六と打つを手順とす●黒百六は百十五へ曲げにて善し然し譜の如く劫争となりても白の劫立の場所なき故黒の方可なり●黒百二十は

後手百二一へ曲る可し譜にあらはし  
たるまで百ては黒の敗は發見せられ  
ず定めし此の後の失着に因るならん  
百三十手迄

圖六第

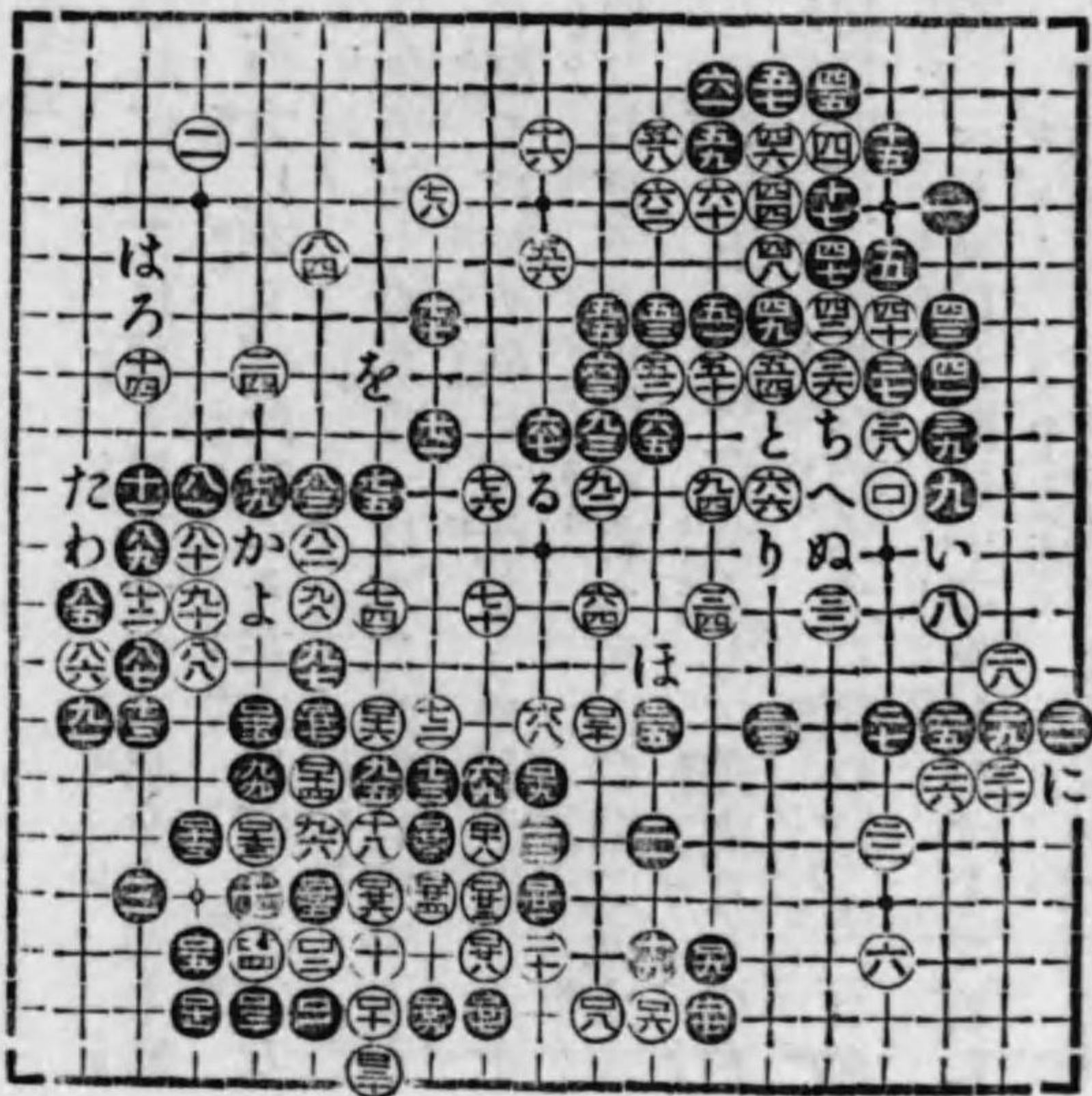


互先 黒勝 (第七圖)

○白八の手は趣向ならんも此の方面を打つなれば二二に締り黒二十の大場を占めし時  
「い」に柝かば宜し又二十の大場に打たず「い」の方に來らば此時こそ左方に打ちて可な  
り尤も八の手にて「ろ」に締るも適切の好點と知る可し●黒十一は二二の處に打つを最  
も善しとす白十二も亦然り●黒十三は「は」に懸らば配石極めて佳なり●黒十五、十七  
十九何れも二二の處を可とす又十七と打つ位なれば五八の處に打つ可し○白二八大々  
的悪手なり●黒三一は「に」に縛ねざれば緩し●黒三五は「は」に斜走して差支なし○白  
三六悪し「へ」に飛ぶ位のものなり●黒三七緩なり「へ」に飛び白六六に頂れば「と」に刻  
ね出し白「ち」黒「り」白九四黒「ぬ」と打ちて戦ふべし可白九四に一子を行びずして百に  
刻込まば黒九四の處に一子を抜きて悪しからず此處黒の打方軟弱なりしたため四四まで  
途に白をして彌縫せしめたり●黒四五復た緩し四六に切りて宜し●黒五三は五四の處  
に突出せば白の形勢破壊せん○白五六危くして本手にあらず五七の處に約へるか六二  
に打つ位のものなり●黒五七以下六一まで白を堅めて不可五八の邊に罅隙あれば打た

すして時機を待つべし○白六四調子悪し九三の處に緯ね黒六七白九二と姿勢を整ふべし●黒六七は「る」に斜走する形なり○白六八は此際九二に覗きおくを可とす○白八四  
は良手なれど先づ「を」に覗くべし●黒八五は九十の處にアテ打たば黒は邊側を盤り得  
るなり○白九十大悪「わ」に勿出さは  
黒は如何に應ずる成算ありや假令ば  
黒九十に打たば白八九に粘で黒「か」  
白「よ」黒八八の時白「た」に泳ぎて白  
の勝負なり○白九四は軽く百三の處  
に斜走して打たば白未だ有望なり然  
るに中原の大石に意を用ふるに過ぎ  
黒より百一と下邊を攻撃せられ延い  
て右隅の白に關係を及ぼし遂に大敗  
を見るに至りしは白の爲惜むべし。  
百三十手迄

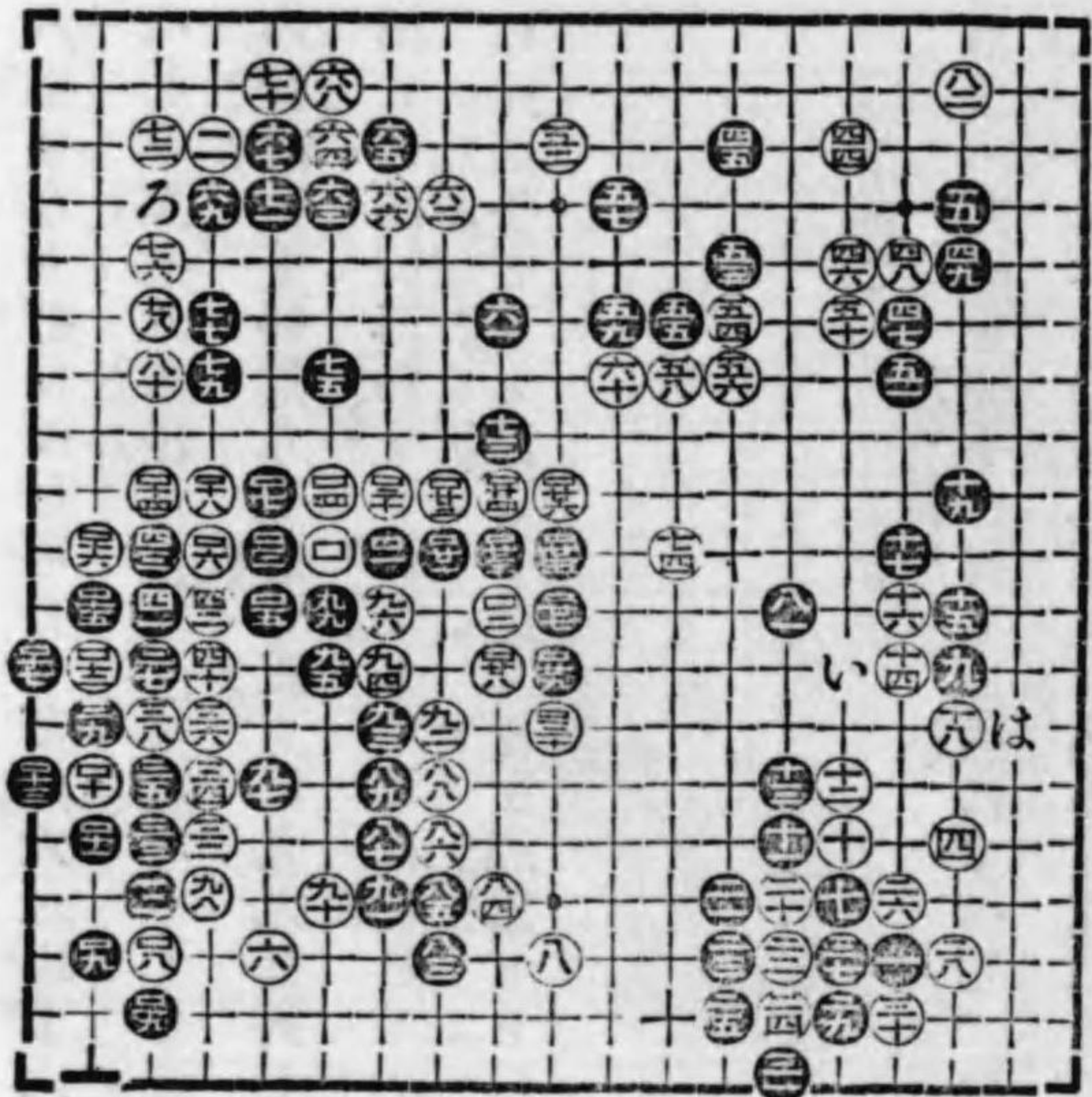
圖七第



互先 (第八圖)

○白十四、十六の趣向重し十四の手にて單に「い」に飛ぶ方宜し○白二四と下り折角切  
りたる二十以下の三子を捨石となし黒に與へたるは其意解する能はず二四の手にて二  
九の處に尖み打たば面白し○白三二  
と掛けを打ち八との間隔に模様を張  
らんとせし趣向不可なり何となれば  
右隅は三子を打抜かれたる黒の堅城  
なれば假令廣境を劃するも其保守に  
困難なればなりされば此手は三八の  
方面より夾み黒三二に尖みし時九一  
と圍ひ打つ方得策なり○白三八以下  
四二まで打たぬ方宜し直ちに右隅五  
の黒に懸るべし殊に三八の出は何時

圖八第





にても打てる手なれば急ぐべからず○白四八俗手なり打たぬを可とす●黒六三以下六九まで面白からず六三にて七四の處に懸るべし●黒七五散漫なり「ろ」に約すべし●黒八一は先づ「は」に捲るべし●黒八三の打込み強硬なり●黒九七悪し直ちに九九に押し出し●黒百十九小なり百二十の處に打ちて四と百四の二白子を捕捉しおけば己れ確かにして次に中原白の薄形を襲ふを得ん然るに此閑手を下し白より此二子を逃させられて局勢混沌となれり。  
百三十手迄○

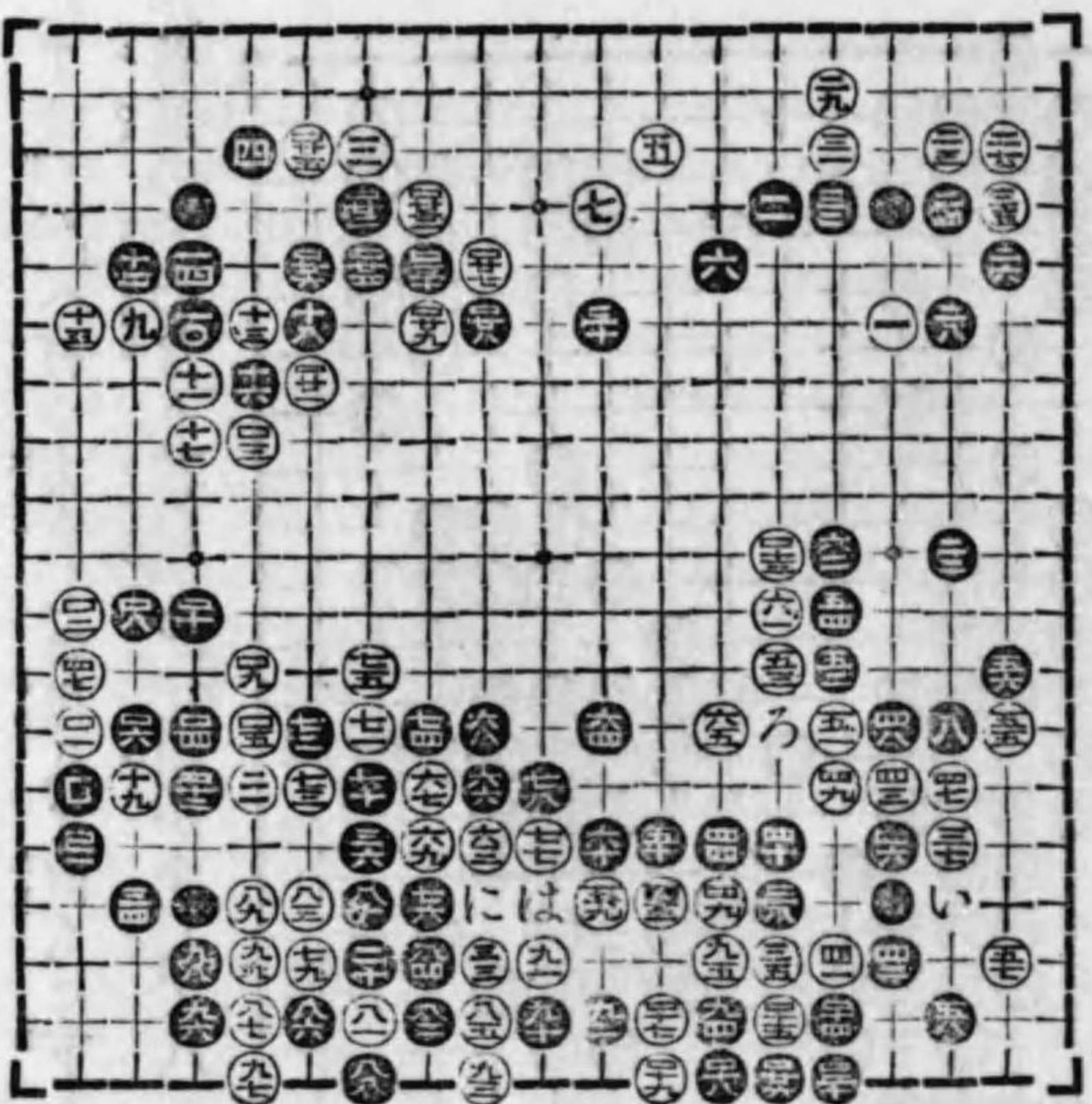
四目 白勝

(第九圖)

●黒十二は十三の處に伸ぶべし○白二一は百三の曲げを先手に打ちて後にすべし、●黒二二は白が此曲げを打たぬに乘じ百三の處に押すべし○白二三と打込みて九二までとなりし姿は此場合悪し他に工夫すべし○白三七の打込み無理なり四十の處に飛ぶ位のものなり●黒三八はいに約すべし●黒四四は九五の處に切を試むべし●黒五十は五一の處より押し打つべし○白五七は六五にカケツグを本手とす●黒五八緩なり、「ろ」

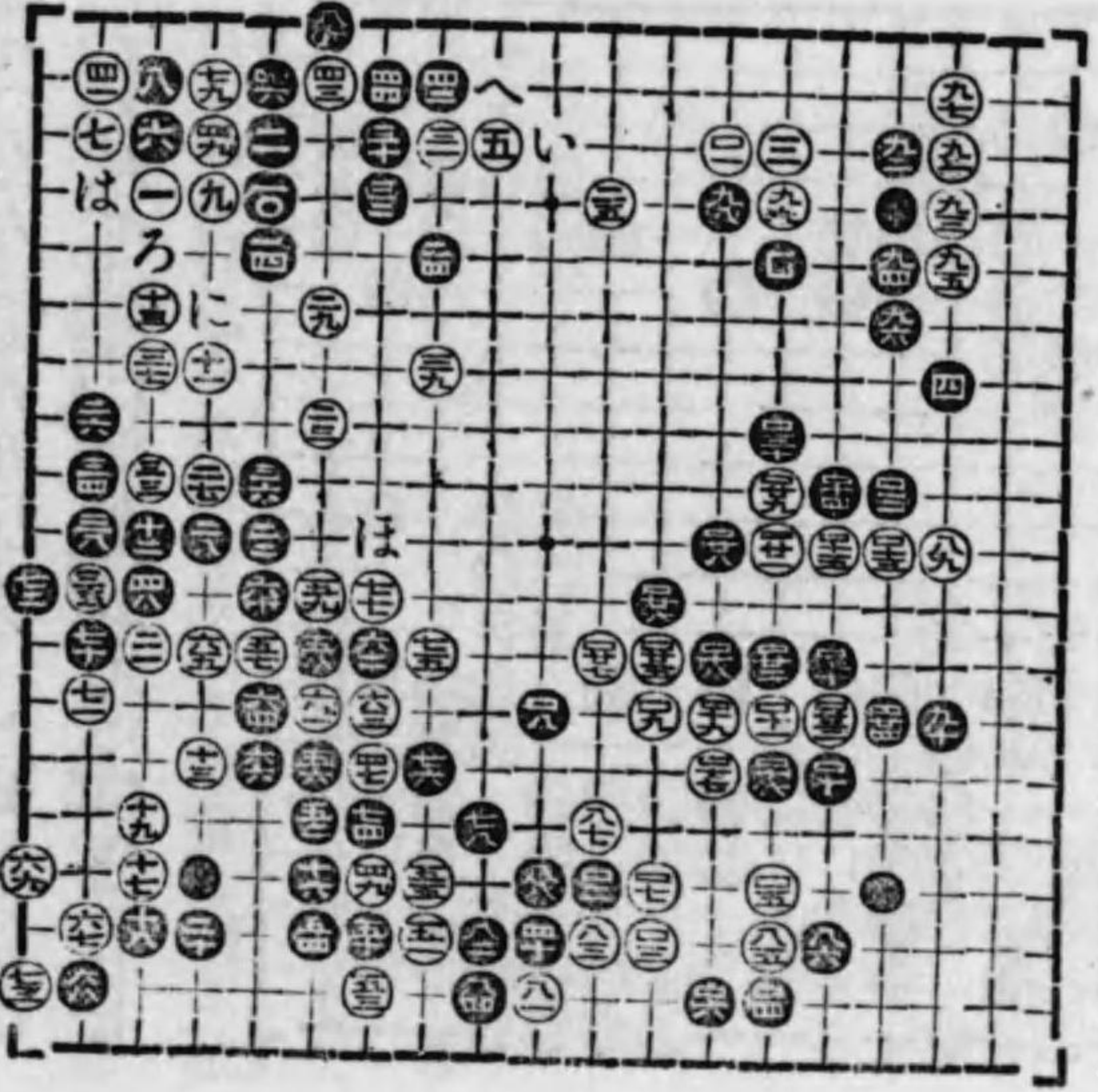
に切りて戦ふべし六十に至りても尙「ろ」に切れ○白六三も六五に守るべし●黒六四は尙「ろ」に切りて可なり●黒六八は何事を措きても六九の處に切り白七八に綽れば七七に切り六六の一子を捨て「は」に出で  
白九一に應ずる時「に」に連貫すべし  
●黒七十以下無用なり軽く八二に尖むべし●黒七六は八十に棒ツギにて宜し斯く綽ねては白より七九に頂ける手を生ぜり●黒八十は八三の處より約へる外なし○白八一は八九に尖みツクれば黒更に困らん●黒八四は八六に切るべし兎に角八九までとなりては黒の敗局なり○

圖九第



黒四と大桂に受けしは平凡なり三子の碁にては「い」へ打つ方宜し●黒八と直ちに下りしは悪し九の處に緯ね白「ろ」黒八白十一が普通の定石なり若白「ろ」に引かずして八へ捲り來らば黒「ろ」に緯ね返へし白四五黒「は」白六黒十四と打つべし○白十一は飛び過なり「に」にて可なり○白十七、十九時機早し五一へ打ち黒の應手に因りて趣向すべし●黒二十は六七の處に下るべし、●黒二六は「ほ」へ飛び方安全なり白○四三面白からす「へ」に約へ黒四四の時中央の黒を攻むる手段を講ずべしされば●黒四四のツギはゆるしへに泳ぎ出さ

第十圖



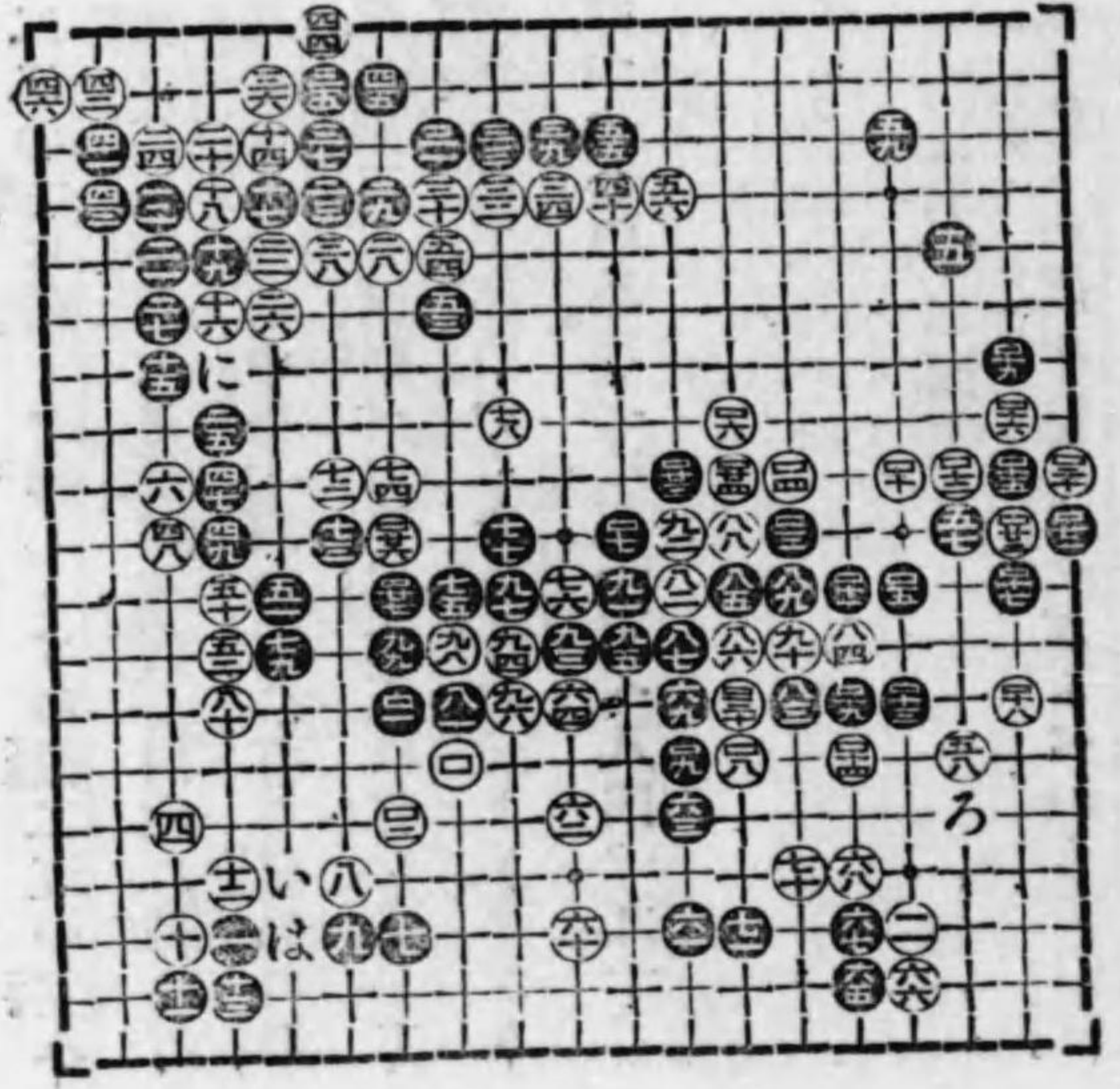
ば白困らん○白四九は七十へ續きて後の事なり●黒五六は六四へ斜走すべし七八までの結果白形勢悪し、●黒八十も「へ」に泳ぐべし本局は白敗勢ゆる最早評言を用ふるに由なし。百三十手迄。

互先 白勝 (第十一圖)

劫提 同

○白六の手面白からず十四の處に懸るかさなくば他の隅々に打つべし●黒七位低くして不可なり「い」に尖むか「ろ」に懸るべし●黒十三は「は」に續くべしこれ定石ならずや○白十六穩ならず他の大場を選ぶべし●黒十七は「に」に押して白十六の打過ぎを咎むべし○白十八は二三に緯ね黒

第十一圖



二二に行びし時二十に出づべし●黒二一は二二の方に續くを善しとす●黒二五の尖み大に緩し三七に曲げつけて打つべし二九に至りても亦然り●黒四五緩し四六に縛ね打たば此隅の白を獲べし●黒五七、五九は此場合平凡なり中央七四の處に打ち發展の策に出づべし○白六十も同斷七三の處に覗き黒の應手を試むべし●黒六五は打たずして單に六九に飛ぶべし○白七二は黒に七三と形作られて面白からず矢張七三よりせざるべからず○白八四は急に過ぐ百五の邊より打つべし●黒百七は百十三へ八四、九十、八六の三白子を掛くべし。

◎本局右邊の劫争となる手順にて●黒の敗なり。

互先

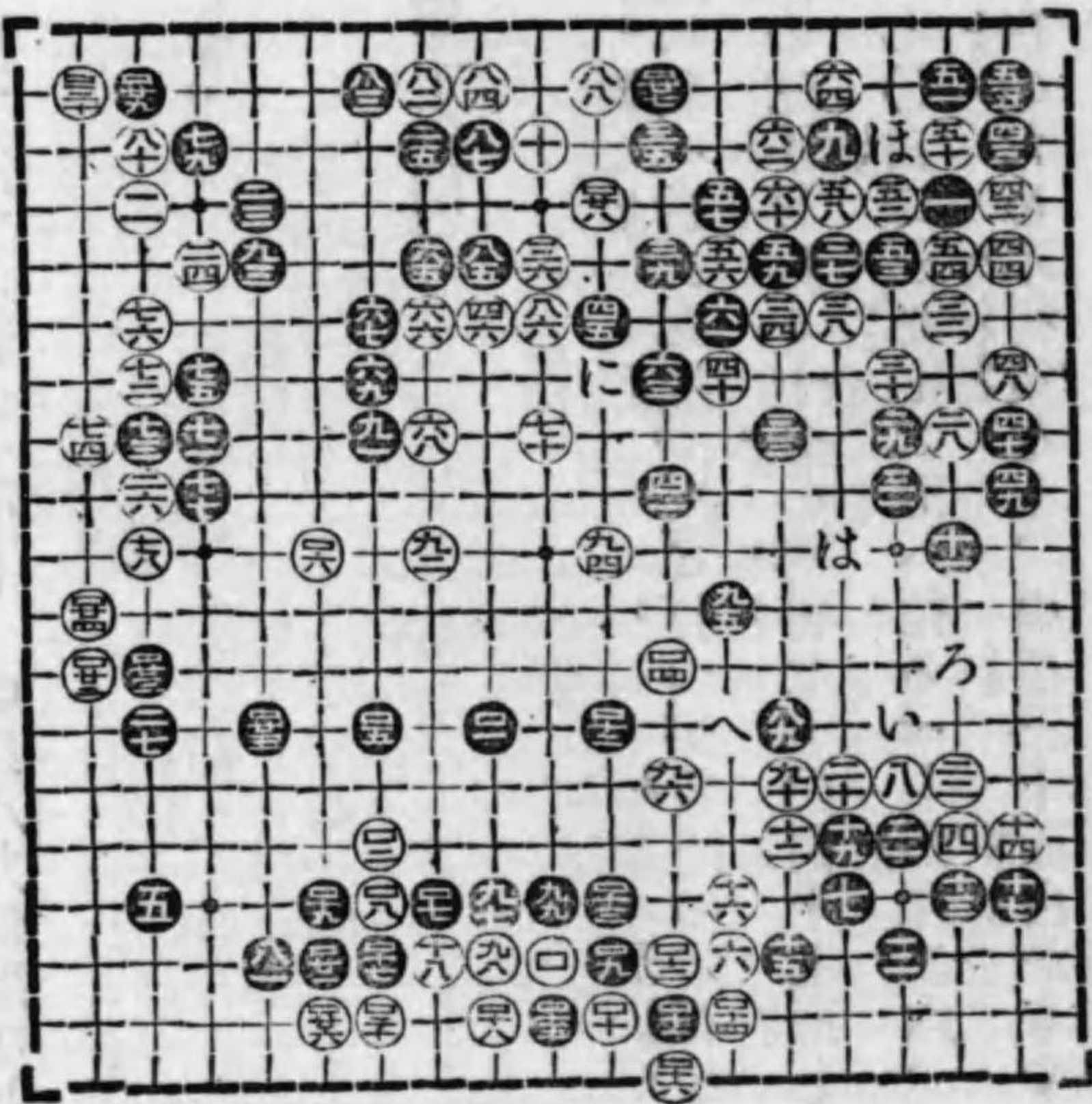
白勝

(第十二圖)

○白六は九、八一の何れに懸るか成は二の白を縮るか隅々に着手せざるべからず○白八は「い」に斜走すべきなり●黒九白十は双方共十二の處を要點とす黒十一に至りても亦然り○白十四は八一に懸らざるべからず●黒十五は打たずして單に十七に約すべし白を十六に立たすは敵を固むるを以てなり○白十八は八一の所に懸るべし●黒十九、

二一白二二は打たぬを可とす二二は打つなれば「ろ」なれども四、十四の二子は捨て、よければ手抜きして差支なし○白二四惡し二八に打べし二六にても亦同じ●黒二七は「は」に一間飛べし二九にても亦然り●黒三七は打たずして九三に押すべし○白四二は「に」に關すべし●黒四五も「に」に冠すべし○白四六は六五に曲飛すべし●黒四七は九三に押すべし○白五十は直ちに五二に頂べし●黒五三に至りては無謀も極れり「ほ」に提るべし此白の大石は取れるものにあらず○白五六は直ちに五八に突出すべしとはいへ六四までの結果黒大損なり●黒六五は九三に押すべし○白七二は味惡し七三を可とす●黒七九白八十共

第二十圖



に小なり中原に着目すべし○白八二黒八五以下双方打たぬ方宜し、●黒八九俗悪なり  
打つなれば「へ」に斜走すべし之れ筋なり。

◎本局は黒上隅の損害にて敗了せるものとす。  
百三十手迄。

三目 黒勝 (第十參圖)

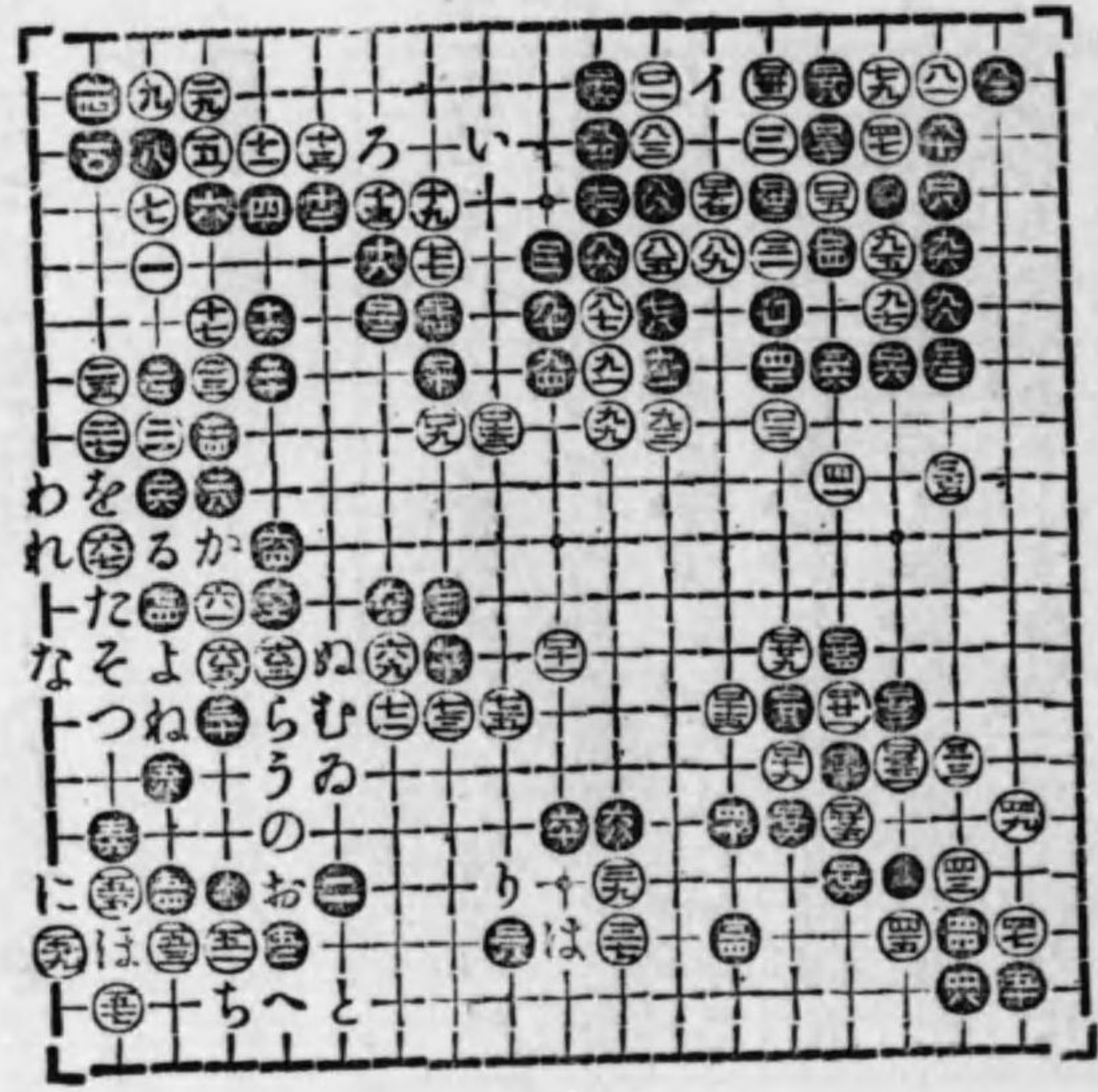
●ト

●黒六より十二まで甚だ悪し六は十一の處に約へ白二九黒「い」と打つが普通の定石なり○白十五は打ち過ぎなり二九へ續きて隅の三子を獲る十分の利得なり○白十七悪し二九へ續くべし●黒十八悪し「ろ」に切るべし○白二三悪し二五へ捲るべし黒に二六、二八と止められては黒の形勢廣大となりて白のため不得策なり、●黒三十面白からず「は」の星下に打つべし○白三九悪し六八へ飛ぶべきは論を待たず●黒四一は百七へ守るべし○白五一悪し此處に着手するには五三へ打つべきなり斯く頂くる意なれば五四の方にすべしされば●黒五二は面白からず五三に約へ白五二なれば五四に續くべし、

白活路に窮せん●黒五八緩慢に「に」に縛ね白五九黒「ほ」へ提り劫を争ふべし○白五九損なり「へ」に縛ね黒「と」白「ち」と打つべしさなくば手を抜き「り」に頂げ三七、三九の子を治まるべし●黒六四悪し六五へ切るべし●黒六八緩し七一へ飛ぶべし○白七一は

「ぬ」に續くべし○白七五は危険「る」に出づべし黒も七四と打ちたる以上「を」へ出づべく其時白「わ」黒「か」白「よ」黒「た」白「れ」黒「そ」白「つ」黒「ね」白「な」黒「ぬ」白「ら」黒「む」白「う」黒「あ」白「の」黒「お」となり白三目は捨つべし●黒七六は方向をあやまる「を」へ出で白「わ」黒「た」と打ち白を取る手段を講ずべし○白八五、八七は無理八五は八八へ打ち治るべ

第十參圖



し●黒百二最も緩し百十七へ出づべし●黒百二八は劫の立て方悪しイへ立つべし。百三十二手迄。

互先 黒中押勝

(第十四圖)

㊦ハ七七ノ處粘

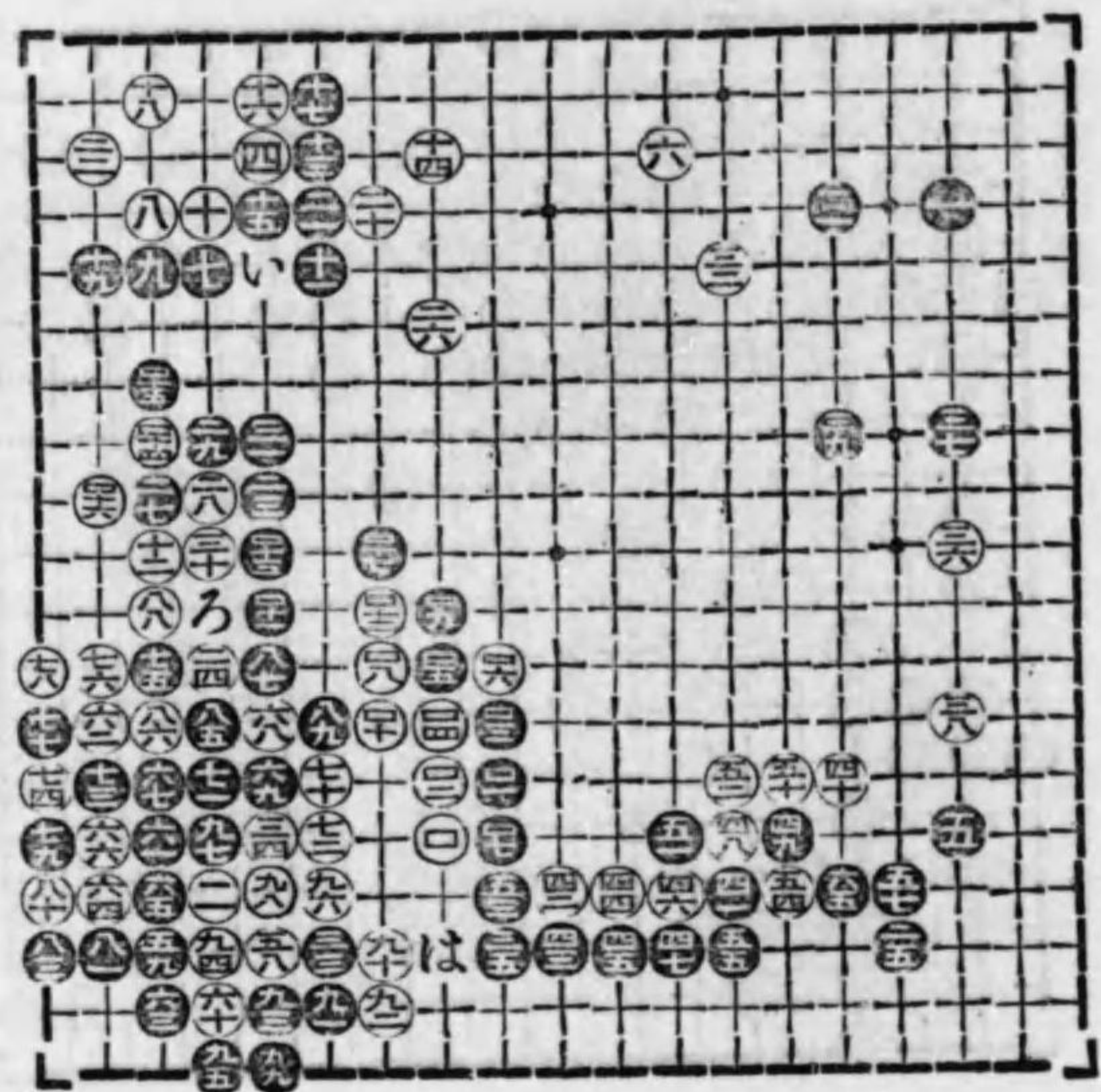
㊦ハ七九ノ處粘

○白六面白からず二五の所に懸るべし○白十二は二十に受けて打つ外なく十四は「い」か二一へ刎込む趣向に出づべし●黒二三不可なり七五に打つべし○白二四は「ろ」に尖むべし○白二八無謀なりされば●黒二九は三十に切り白二九に行びる時八八に刎出さば白瓦解せん●黒三一は百十四に續くべし○白三二は四三に大場を占むべし三四は五八か九六に着手すべく何れも風變りの手たるを免れず●黒三五は時場合一路廣く四三に析くべし白「は」に打込み來らば五九に轉じて振替るを働ありとす●黒二九は四十に斜走すべく白四十は四五に着すべし○白四六以下黒を固めて宜しからず●黒四九は五四に行ぶべく白五十は五四に切を入れて後にすべし○白五八は九三に斜走する方面白し●黒六三は七三に尖ミツクべし○白六四の覗キ無理なり六六に頂くる位のものなり

此失着の爲に此所を蹂躪せられたるのみならず尙強ひて黒を獲んと八五とアテコマレて局勢を破壊するに至れり。

互先 白中押勝 (第十五圖)

圖 四 十 第

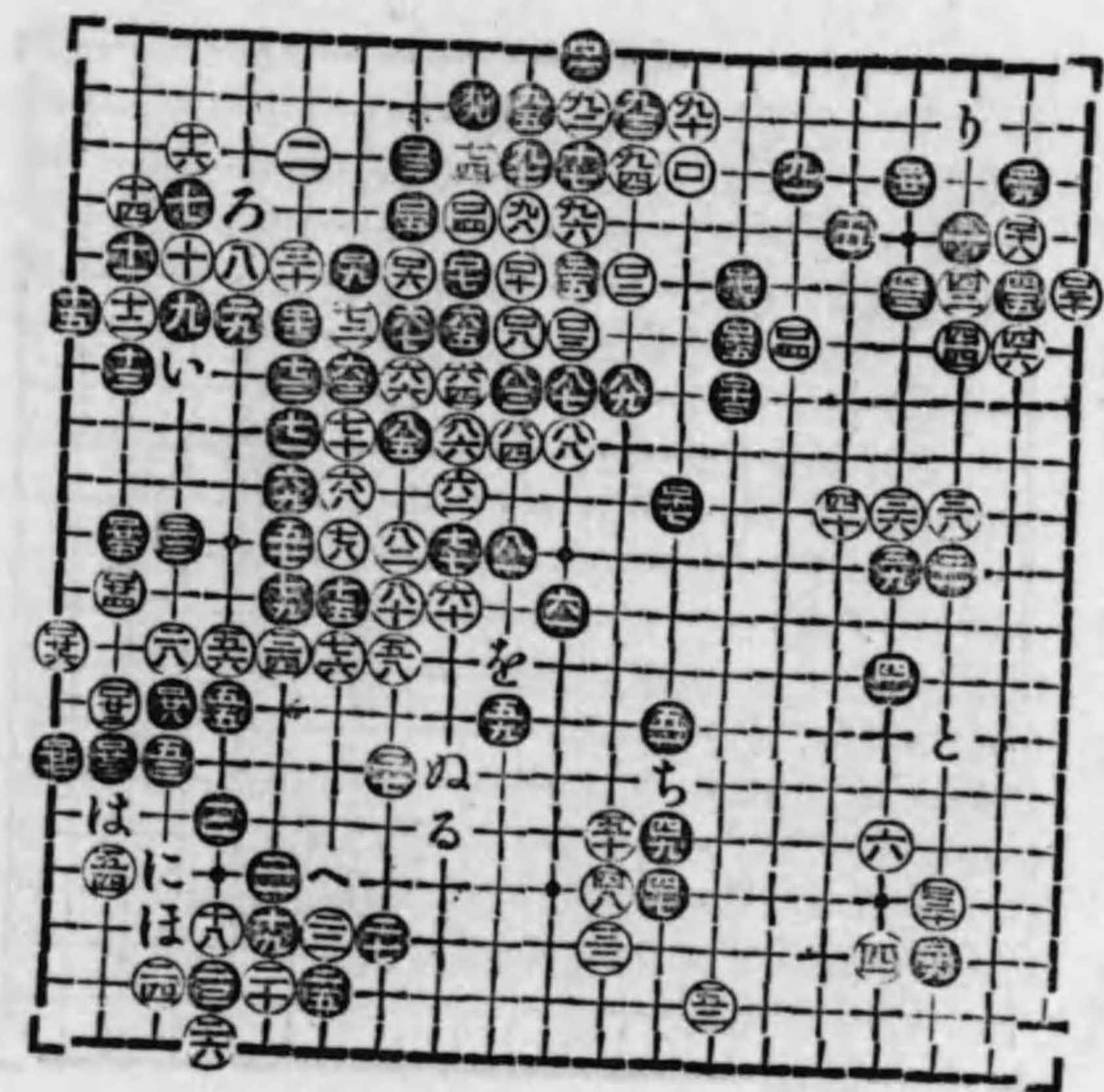


●黒九の飛び悪し十へ押し白二九の時「い」へ飛ぶが定石なり○白十二と切り七の一子を取りしは面白からず十二は「ろ」へ曲るが宜しきなり●黒十七は直ちに二九へ押し白三十に應せし時他へ轉ずべし●黒二三と内より切る手は一種の趣向として打つ事もあれと餘り好ましからず矢張普通の如く二五より切るべし○白二八面白からず此所へ打つ意なれば「は」へ打つべし○黒三五は「に」へ尖み白「ほ」黒「へ」と一子を提るべし此儘に棄てお

きては白に征の當りを自由に打たれて黒悪し●黒四一は「と」へ打つべし○白四二は四四へ開くべし●黒四五は百十入へ下るべし斯く打ち先手を持ちても差したる處なし、●黒五一は「ち」へ伸ぶべし●黒七五、七七面白からず七五は七八へ曲る方味ひ善し、○白九十の打込み宜し●黒九九は善悪を問はず百四へ切らざれば問題にならず●黒百二一は「り」へ「ケカツグ」方利得なり○白百二六は「ぬ」に「コス」ミツケ黒「る」に約する時「を」に緯ねて眼形を具へ打つ方働きあり。

百三十手迄。

圖五十第

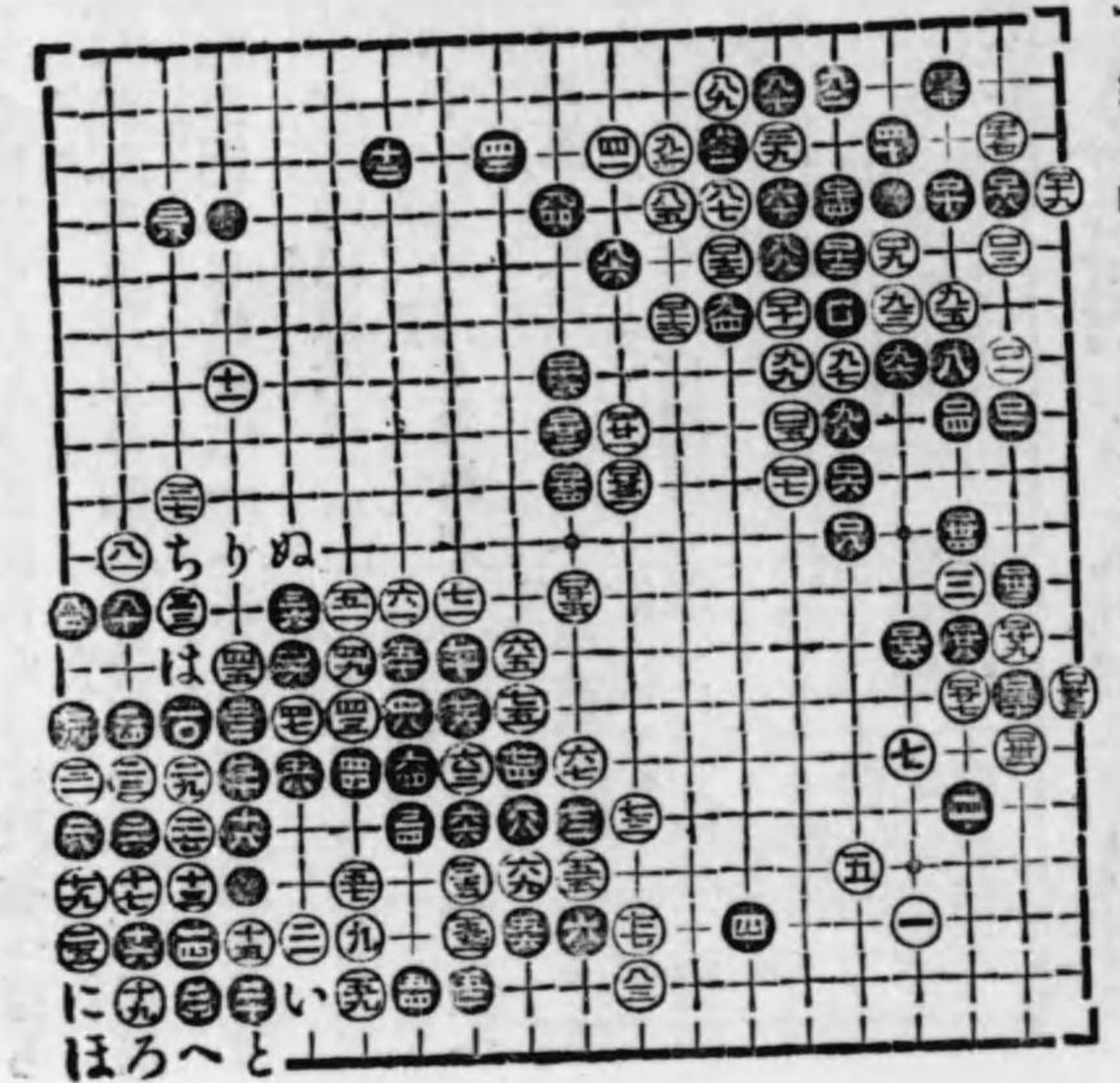


二七六

三子 白中押勝

●黒八は五七の所に守る方優れりさなくば直ちに百二七へ飛ぶが宜し●十六は十八へ伸ぶべし、●黒二十は二二へ割り込み白二十黒「い」百二三黒五七と打つ方黒としては安全なり然し元來白十九が少しく無理ゆる黒の方かなるなりされば黒二四は悪し「ろ」へ打ち先づ自石を活くべし然かせば白は二四へ這はねばならぬゆる黒「は」へ伸びて黒の方善くなる行くなり●黒二六以下三三二まで悪し二六を「に」白「は」黒「ろ」白「へ」黒「と」と打てば劫なり○白三三は前評の如く黒に劫にされる手あるゆる「い」に約へ取りおくべし若此方面へ

圖六十第



(第十六圖)

二七七

打つなれば「ち」位の所黒の堅き所へ石をよせるは悪し●黒三四面白からず三七へ打ち時機を見て劫争をなすべし○白四五、四七は無理なり四五は四八へ伸可しされば黒四八は「り」へ覗くべし其時白「ち」なれば黒四八白四九なれば七一へ斜走す可し然る時は白に手段なし○白五五は無謀なり「い」へ打つべし●黒五六は「い」へ連絡する手なり、○白五九又悪し「い」へ打つ可きなり、●黒六十は征の當りなれども面白からず「ぬ」へ伸ふ可し○白六七悪し六九へ粘く可きなり、●黒六八悪し六九へ出で白六八なれば黒「に」へ打込み此處に劫争をなして七一へ勿出す事になれば黒善し然るに黒活きて圖の如く白に七七、八三と打たれては敗形備り茲に評は盡きたり。

百三十四手迄。

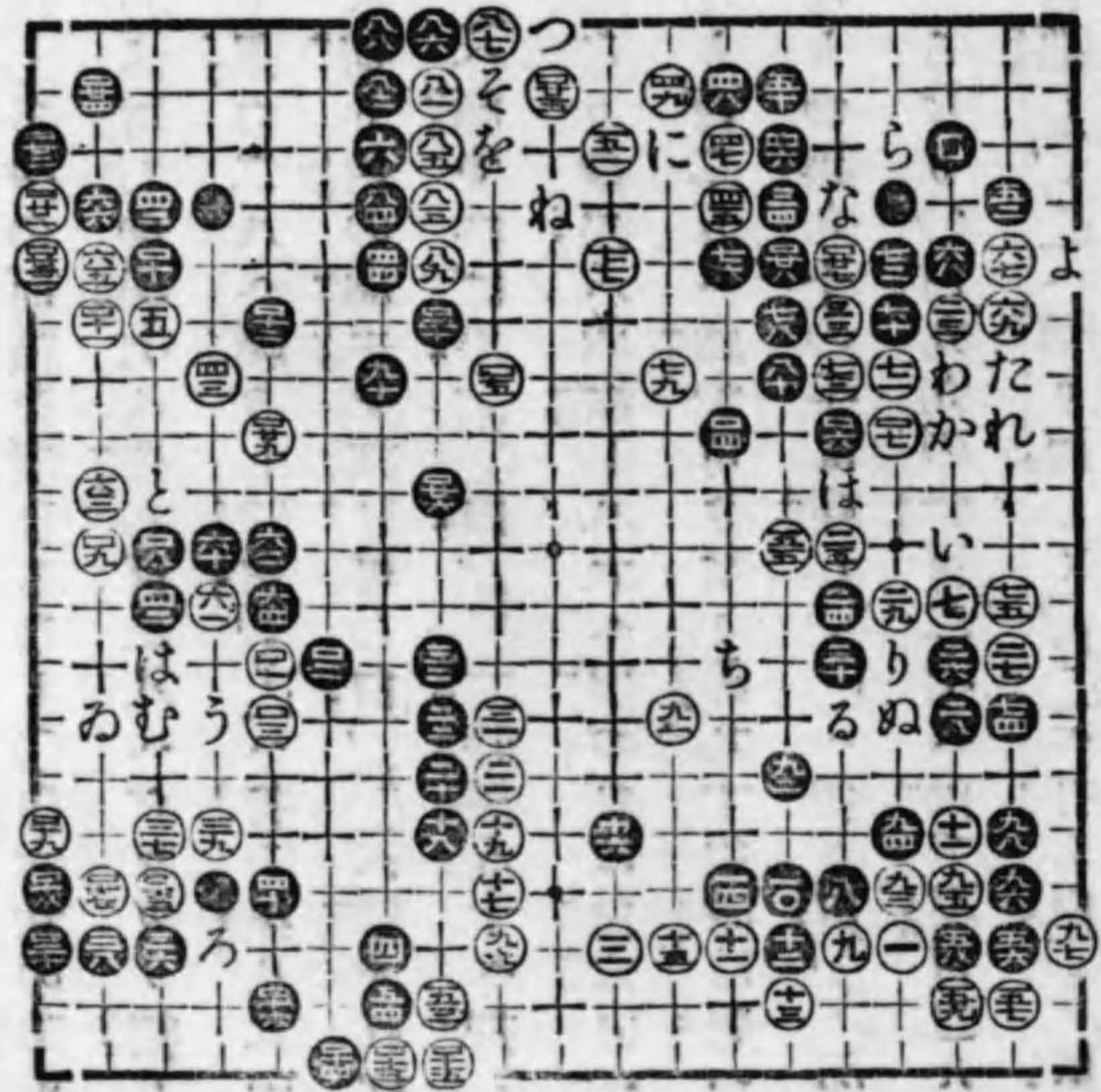
三子 白勝

(第十七圖)

○白三悪し二八、二六、七の三點を選ぶ可し●黒四定石なれども面白からず直ちに八へかげ白譜の如く應じなば黒「い」の星下へ打つ可し○白五は二六若しくは七の處に打つ可し●黒六前述の如く八に掛く可し○白十一悪し十二へ連行し黒十四白十一と打つ

べし●黒三六緩し三七より緯べし●黒二八此局面にては「ろ」へ續き白「は」其時黒百八へ詰め五の石を攻る手段を探るべし白に四一と三間に開かれては夫等の意味を失ひて黒面白からず○白四五面白からず「に」に打つ可し●黒四六は百二八へ行ぶ可し○白四七は七六へ行ぶ可し●黒四八は百三八へ行ぶべし○白五三は五五へ行ぶ可し●黒五四緩し五五へ緯ね白「ほ」の時六五へ尖むべし●黒六十の時は先づ六五へ尖み白百十一へ應じたる時六十へ打つべし○白六一危険百八へ應ずべし●黒六二緩し「と」へ尖み込むべし●黒六四緩し「ち」へ守るべし白より「り」へ出られ黒「ぬ」へ應じ白に七四へ押され「る」の切る手出來

圖七十第

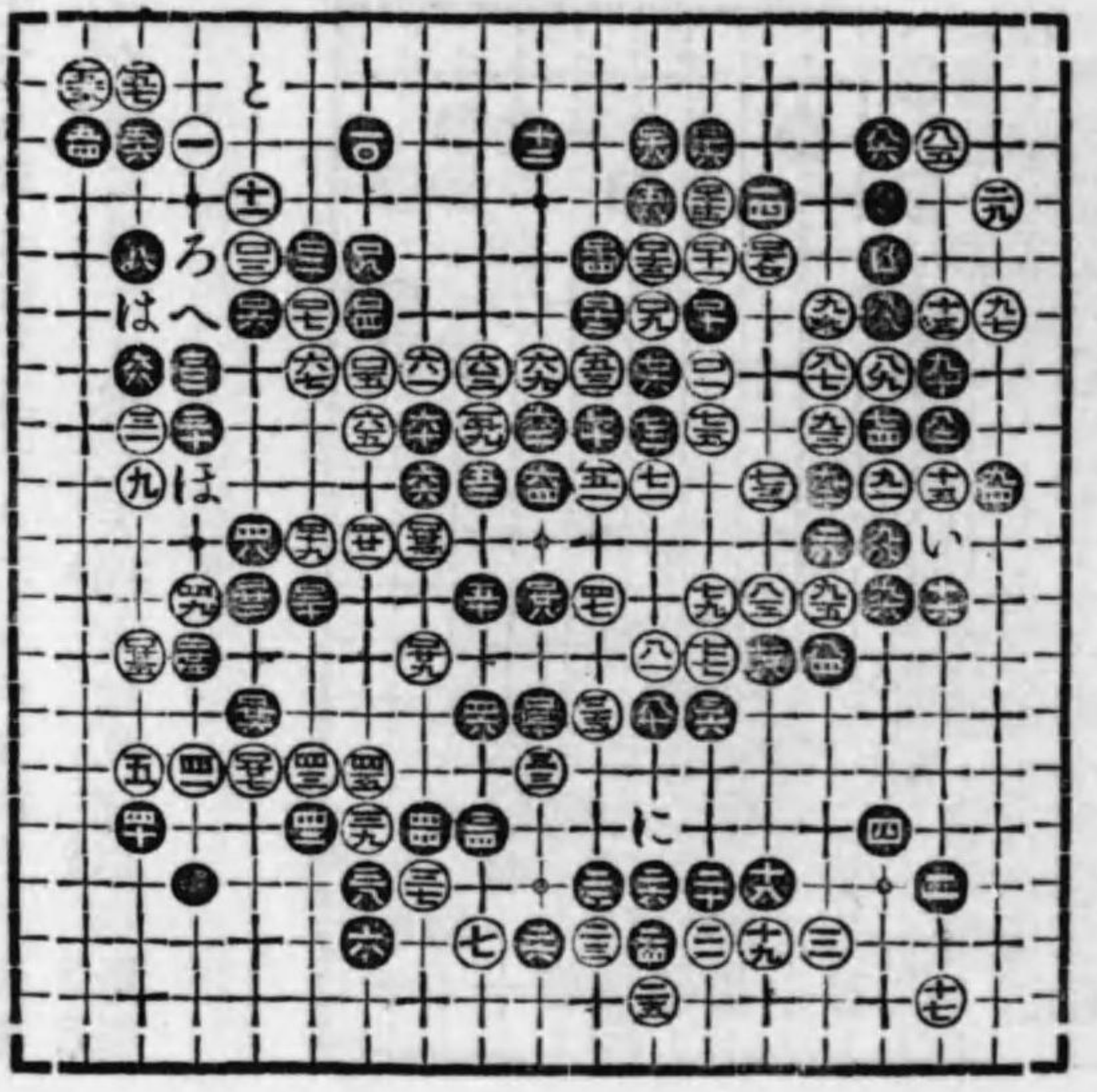


黒味ひ悪し故に「ち」へ守るは夫等の味を消し多少の面積を廣むるなり○白六六の時前掲の味を打つべし●黒七十悪し百二八へ行ふ可し●黒七八悪し百二八へシツカリ續く可きなり、○白七九悪し先づ百二八へ出で黒百二八へ續きし時白「り」へ打ち黒八二の時「を」へ尖む可し●黒八十の時先づ「わ」へ切り白の應手を試む可し白「か」へ應すれば黒より「よ」の緯先手に利く白又「か」を「た」へ應すれば黒「か」白「れ」其時黒八十へ押し先手になるなり○白八三悪し「を」へ尖む型なり●黒八四緩し八五へ出づれば白大いに窮せん、○白八九は味悪しくしてソソ手なり百二五へ應ず可きなり黒九十の時先づ「わ」へ切る可し「よ」の緯を先手に利かすなり●黒九十の手は緩し「そ」へ切り白「つ」の時百三十へ緯べし黒より「ね」へ覗く手筋あるなり○白九九の時百二七へ出で黒百二八白「な」黒「ら」の時百一へ打つべし、●黒百悪し「わ」へ切り而して「む」へ打ち白「う」黒「ろ」へ双ぶべしこれ勝敗の分けめなり白に百一、百三と守られては多少の敗は免れざるべし。百三十手迄。

二子 黒勝 (第十八圖)

○白七面白からず「い」か又は「ろ」は「の」内を選び打つべし●黒八は十八へ掛け白二一の時「へ」懸りて宜し●黒十四は「い」の星下に打ちても可なり○白十五は廣く十六の處に拵くべし●黒十六の時十八を先とすべし、○白十七不可二十へ守るべし斯く打ち黒より十八とカケられては此處位低くなり白の局勢非なり●黒二二は二六へ行ふべし○白二三悪し二六へ割込み黒に「百二四と打つべし●黒三十は六八か又は五四へ斜走すべし○白三一は「は」へ押すべし●黒三二は「へ」に尖む型なり○白二五面白からず三六迄進むべし●黒三八面白からず四二へ斜走する型なり●黒五八緩し「と」へ覗き白石を攻め立つべし、

圖 八 十 第



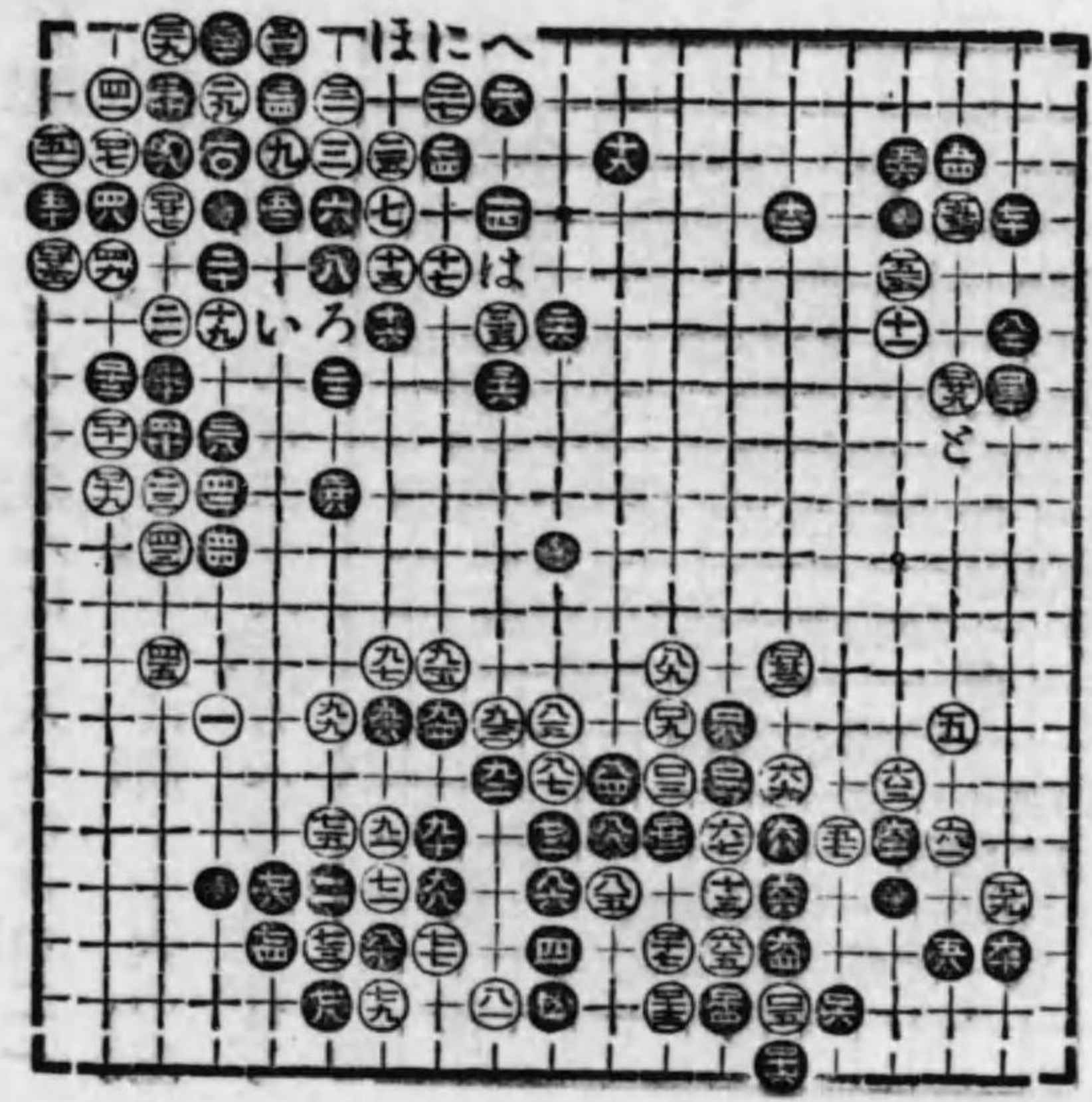


○白六一無理六三へ行る外なし黒に七二と出でられ七四、七六と打たれては白の碁勢亂れたり假令凌ぎても局運の挽回困難なるべく後に黒より百二と切りたれば白の敗勢全く成れり。百三十手迄。

五子 黒勝 (第十九圖)

●劫トル ③同 ④同 ⑤同 ⑥同 ⑦同  
●同 ⑧同 ⑨同 ⑩同 ⑪ツグ

○白五趣向ならんも兎も角二一へ掛るが急務なり●黒十四善し十八は十九の處に守るが本手なり○白十九は二一より掛るを善とす○白二三は先づ「い」に出で黒を「ろ」に應せしむべし黒に二六と掛けられしは白悪し●黒三二と綽ね劫争する必要なし三三



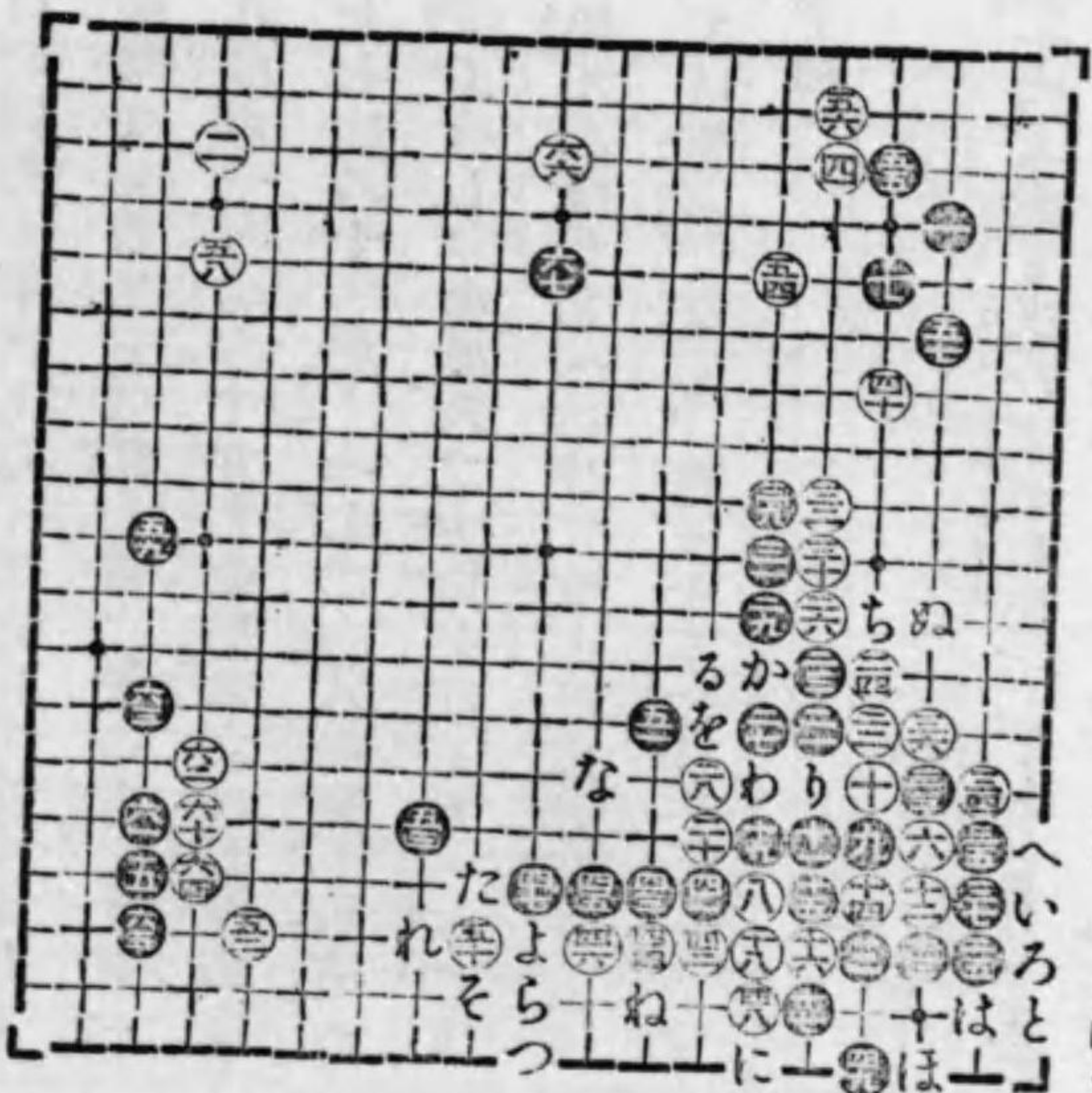
の處にオキ白三二黒に「白」は「黒」へにて白の何たる手段もなく事之にて決するなり併し三八、四十と打つ事になりても黒の方優勢なり●黒五二悪し百二七の處にツグべし○白五三、五五は打たぬを可とす●黒五八は六一へ尖みて宜し●黒六六は打たぬを可とす●黒七十は緩し「と」へ打つべし○白七七は八十へ續くべし○白八一悪し百五へ綽ね黒百六の時白劫を提り此劫を飽くまで争ふべし、●黒八二方向を誤る九一へ切り白九八黒九十と四七二の二子を治るべし●黒九八は九九へ行びて宜し此處劫争となり白に劫立の模様なき故黒百二六と劫をツギては勝算全し。百三十手迄。

互 先 (第二十圖)

○三三ノ處ツグ  
○白十と打つ定石もあれ共這は損なり矢張十四へ割り込む定石に出づべし、●黒十三悪し十六へ双び白十三黒四六へ打つべし夫にて黒の方割合善きなり●黒二三は型違ひなり二七へ双ぶべし其時白四八黒二五白三五黒「い」白三四黒四九白「ろ」黒「は」白「し」黒「は」白「へ」黒「と」白「ち」位のものなり何にしても黒の方悪し○白二四の時四八に

約へ前評の如く運び黒」との時白二八黒二七かりの時白ぬ位にて白十分なり●黒二五此場合如斯き緩手を下し居る時機にあらす先づ四八へ出で白二八なれば黒り百二六黒る「白四四黒ち」へ切るべし、●黒二七悪し「を」へ飛ぶべし○白二八緩し「わ」へ割り込むべし黒り「へツガば白」る」にて征(シチョウ)になり白直ちに勝局となるべし此四目を提られては黒に打つ手なし●黒二九は「を」へ押す外なし○白三十は「を」へ押し黒かの時三十へ行び黒三一の時白四八へ約すべし●黒三九の時免も角四一へ切るべし○白四十の時四八へ約すべし黒に四一と切られては黒に回復せられたる型なり、○白四九の時

第二十四圖



免も角「を」へ押すべし○白五十は今一步「よ」へ連行し黒た「白れ」と飛ぶべし●黒五一は直ちに「よ」へ出で白「わ」黒「そ」白「つ」黒「れ」白「ね」黒「を」へ押すべし、●黒五二穩かならず「を」へ押すが本手なり○白五二面白からず「た」へ押し黒「な」の時五二へ懸るべし●黒五三は「よ」へ出で前評の如く運べば大に善し○白五四は方向を誤る「れ」へ双び「よ」の出切りを防ぐべし双方其此處を打たずおきしは論外なり。六十七手迄。

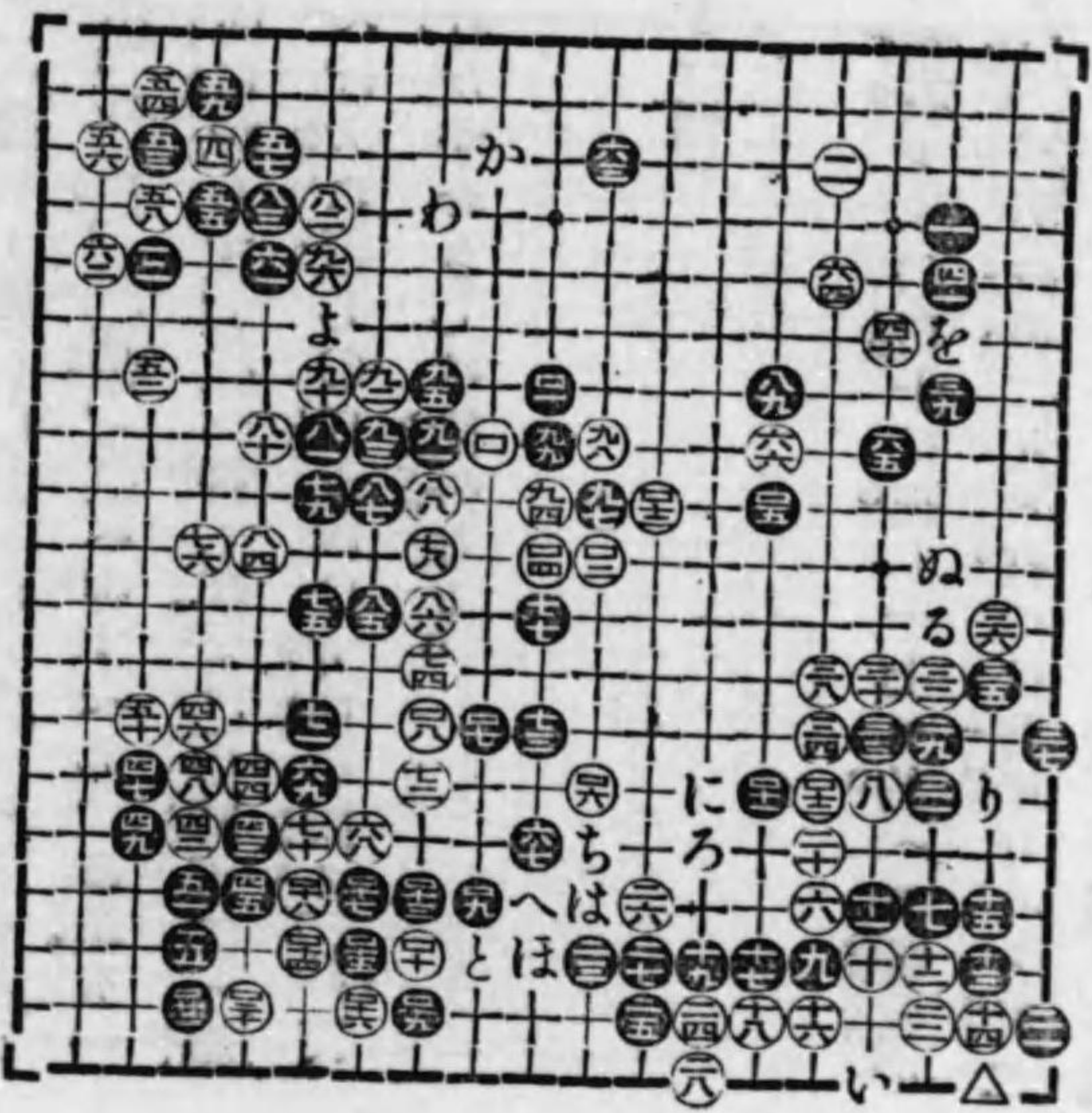
互先 (第二十一圖)

ツグ

●黒三は五七へ目外か六三へ尖むを普通の布石とす○白十は悪し十七へ約へる穩當の定石に出づべし●黒二三は早し二四へ曲り白「い」の時黒二九と打つは普通なれど又二四へ曲らずして黒二九へ打ち白二七黒二四白二五黒「ろ」白二八黒二六白「は」黒「に」白「は」黒三二へ双ぶ此「に」へ双ぶ手と三二へ双ぶ手とは共に玩味すべし白又「は」の手にて「は」へ飛べ黒三二白「に」黒「ち」と打ちて善し○白二八の時「り」へ飛び黒「い」白△印

へ下り白の十六、十八、二四と黒石と振替る手あり●黒三九は普通の手なれども先づ「ぬ」へ覗き白「る」の時三九へ打つ方働きあり●黒四一は「を」へ打べし●黒六七は「わ」へ守るべし下邊は堅き處にて上邊は薄き處ゆる薄き時を守るべきなり、○白六八の時先づ「か」へ打ち黒の薄き處より戦端を開くべし●黒六九は打ち過ぎなり百十五へ守るべし以下八八迄双方の運び此位のものなり●黒八九は方向を誤る「よ」へ連絡を計るべし白に九六と打たれ黒九七、九九と切る事になりては局勢大いに混亂して見當附かず恐らく黒の善き事はなかるべし百二十一手迄。

圖 一 十 二 第

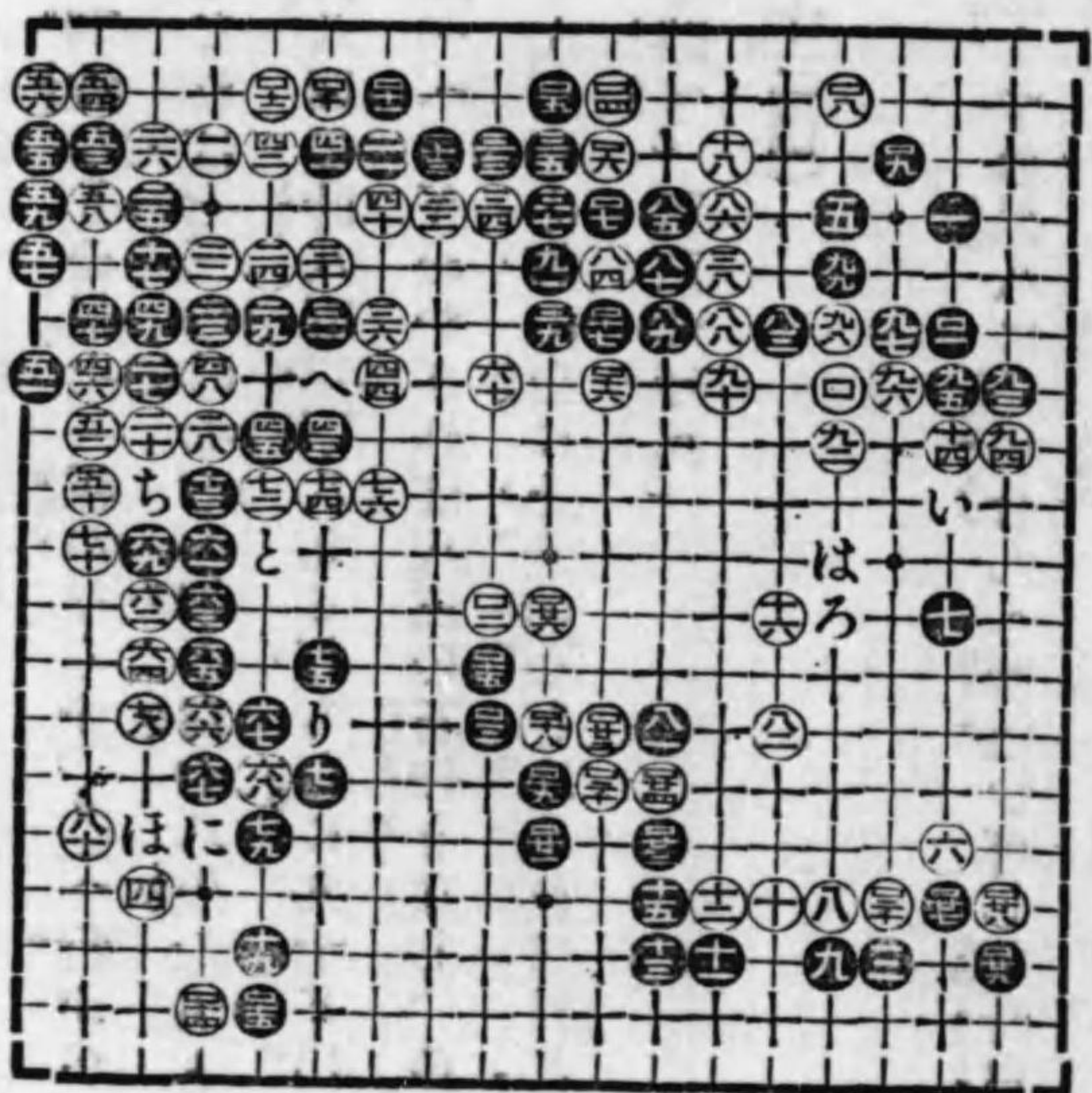


互先

(第二十二圖)

○白十四は善悪は兎に角「い」へ詰る處なり●黒十五惡手にはあらざれども「ろ」と飛ぶ方優れり●黒十七は餘りに七の一子を放擲せり「は」へ出動すべし、○白十八は九二へ飛ぶべし○白二十面白からず矢張九二へ飛ぶべし、●黒二一面白からず「に」へカケ白「ほ」黒七七白七八黒百二四へ飛ぶべし●黒二三は先づ以て三五へ析くべし黒二七は打たずして二九へ押すべし●黒三七惡し四三へ飛ぶべし○白三八惡し「へ」に捲り此黒を閉塞すべし●黒五三より五九迄惡し五三の時六三へ打つ手筋なり其時白七二へ綽出さば黒七三白六一黒

圖 二 十 二 第



「と」白「ち」黒七四と打つべし●黒五五は五八へ續くべし後五六の緯が黒より先手に打てるにより白の眼型に影響するのみならず利益なり●黒七一穩かならず「り」へ行ふべし●黒七三、七五と打ち上邊の石を捨る意なれば七三の時七七へ切り白七八黒七九と打つべし七五の時も同断●黒八三と打ち白八四の時八五以下八九と打ち白に九十と出でられては八三の石が徒事となる八五を九一へツギおかざれば八三の石働きなし、●黒九一最る緩し九二へ斜走す可し如何にせん七一と打ち白に上邊の石を取られては黒の敗局となりしは當然なり因て以下の評を略す。百三十手迄。

二子

(第二十三圖)

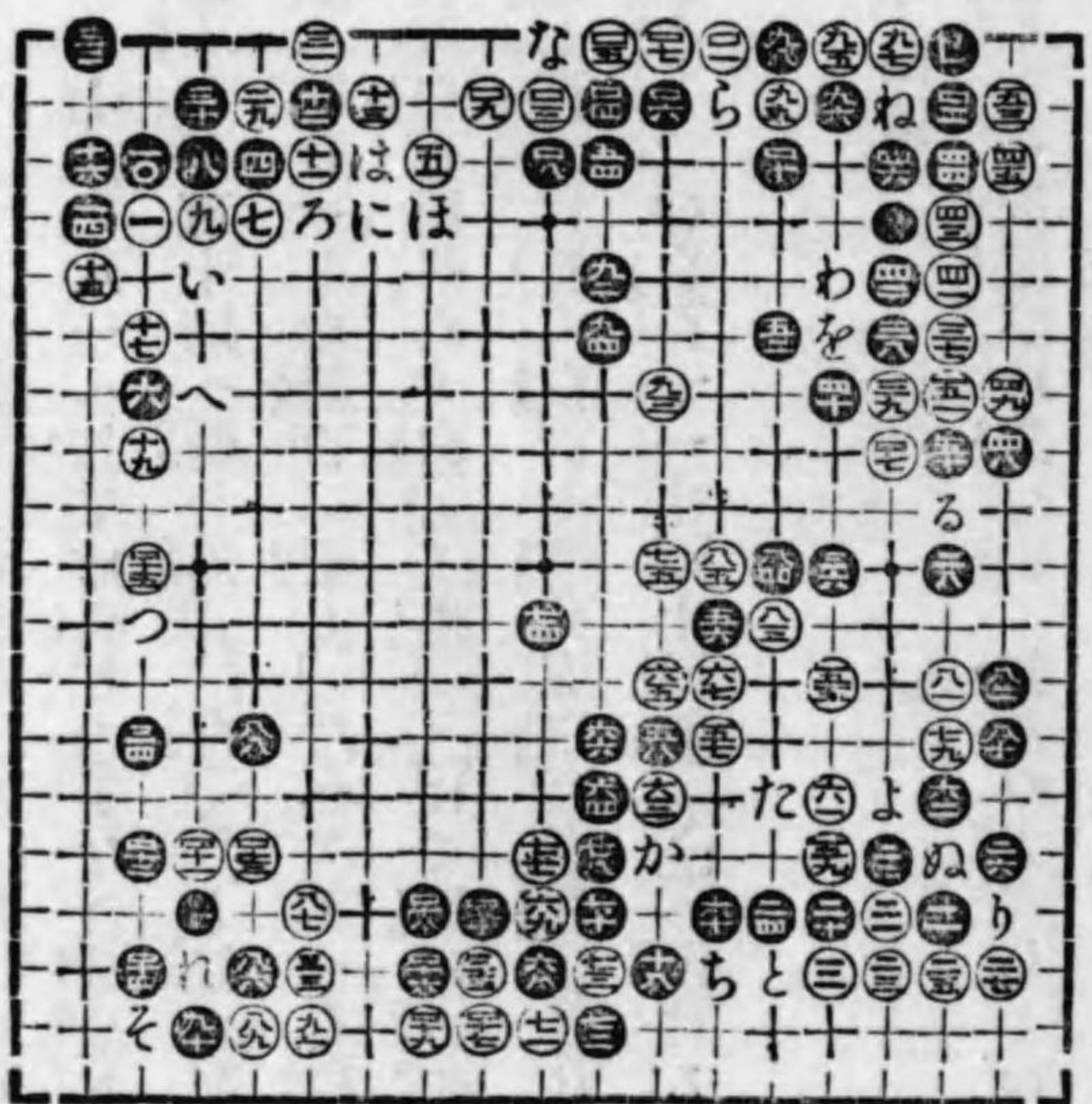
劫トル

⑤劫トル

○白七は少しく無理なり「い」へ尖むを定法とす●黒八は此場合九へ割込む可し其時白八なれば黒「い」白十黒「ろ」にて七の石を征に取るを以て黒善し●黒十は「は」へ附け白「に」黒十一白「ほ」黒十白十四黒十六が定法なり、●黒十四の時先づ「ろ」へ切り白「は」の時十四、十六と運ぶ可し十八の時も「ろ」の切りを打つ可し而して「へ」に行ふべ

し○白十九の時は二九の切り提りを先にす可し黒「ろ」の切を打損じあるだけ白大いに善し○白二七の時は「と」に打つべし其時黒「ち」なれば白二七へ下り五九の切りを狙ふべし黒又「ち」を六十なれば白「り」黒「ぬ」の時二九の切り提を先手に打ち「る」へ着手すべし●黒四十面白からず普通の如く「を」へ行ぶ可し○白四一は四二へ割り込み黒「を」白四一黒「わ」白四三と打つべし●黒五八悪し「か」へ飛ぶか六一へ打つ位のものなり白に五九と切られては黒打つ手に窮するなり●黒六十悪し兎も角「と」へ曲る外なし○白六一緩し「よ」へ緯ね黒「ぬ」白は「た」と打つ可し黒は八一へ應ずる外なからん其時白六三へ緯可し●黒六

圖三十二第



二は善悪を問はず七九へ打つべきなり何れにしても白に六三と打たる、事となりては黒不利の形勢なり○白七九、八一面白からず七九を八一へ打てば黒打つ手なき處なり

●黒八八は九一へハネツグべし○白九三事小なり百十四へ覗き黒れ「白」そと打つか又は「つ」へ詰べし●黒九四も小なり百十五へ詰むべし●黒百二緩し「ね」へアテべし白二目粘がば黒百二白百三黒百六白百七黒百五白百四黒百十白「な」黒「ら」にて黒の方先手になるなり譜の如くにて百四は手順悪し百六に打ち白百七黒百五白百四黒「ら」なれば先手なり此際先手後手は勝敗に大關係あり、○白百十一は百十四か「そ」へ附ける方得なり。百二十一手迄。

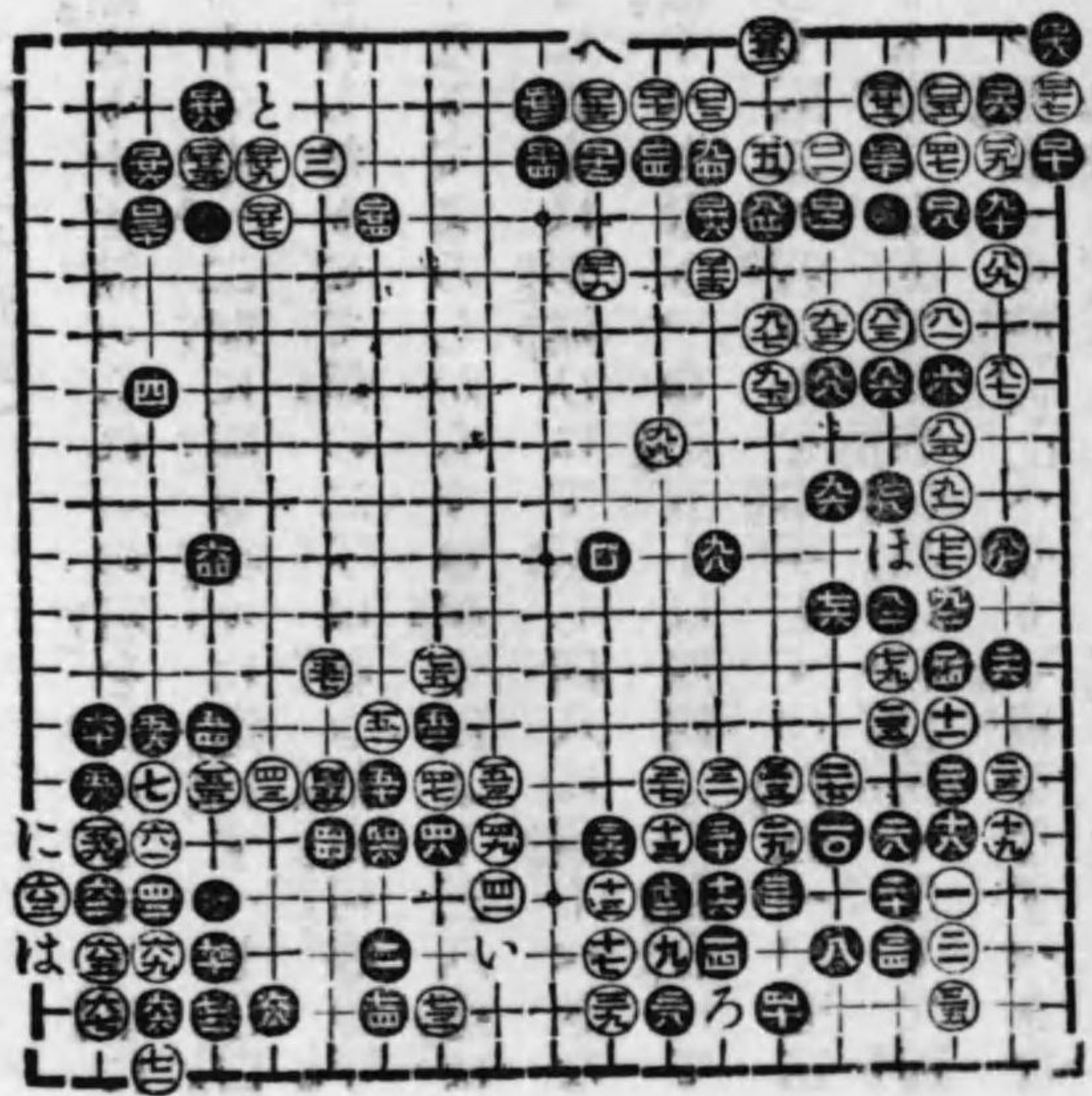
三子

(第二十四圖)

●黒十の手は面白からず白九と夾みし時黒斯く一間飛びは先づ以て打たぬ方宜しと知るべし同じく飛ぶなれば二七の處へ二間飛びなれば定石なり●黒十二の頂面白からず十二と頂くる意なれば無論十の一間飛びを打たず直ちに十二へ頂るは定石としてあり○白十三は此場合十七へ行黒十四なれば白「い」へ詰め「ろ」の緯なぞを狙ひ打つ方軽く

して善し●黒十八より二六迄悪し十八の時今や此處を打つ必要なし四二へ締めり位にて善し○白二九悪し三三へ行ぶべし黒活るに困難ならん●黒四二方向を誤る七八へ守るべし○白四三は同斷九一へ打ち込むべし●黒四四白四五、四七共同斷とす●黒六四の時「は」に約へ白「に」の時六四へ打つべし●黒六八は六九へ續く方得なり●黒七六穩ならず「は」へ守るべし●黒八一は八二へ打ち白九二の時九一の處へ出で二子を捨つべし●黒八二は何事をおきても八三へ約すべきなり○白百十七打たずもかな○白百二十三「へ」に下るべし○白百二十九と粘ぎしは如何にも重し「と」に約へ劫争すべきものなり。百三十手迄。

第二十四圖



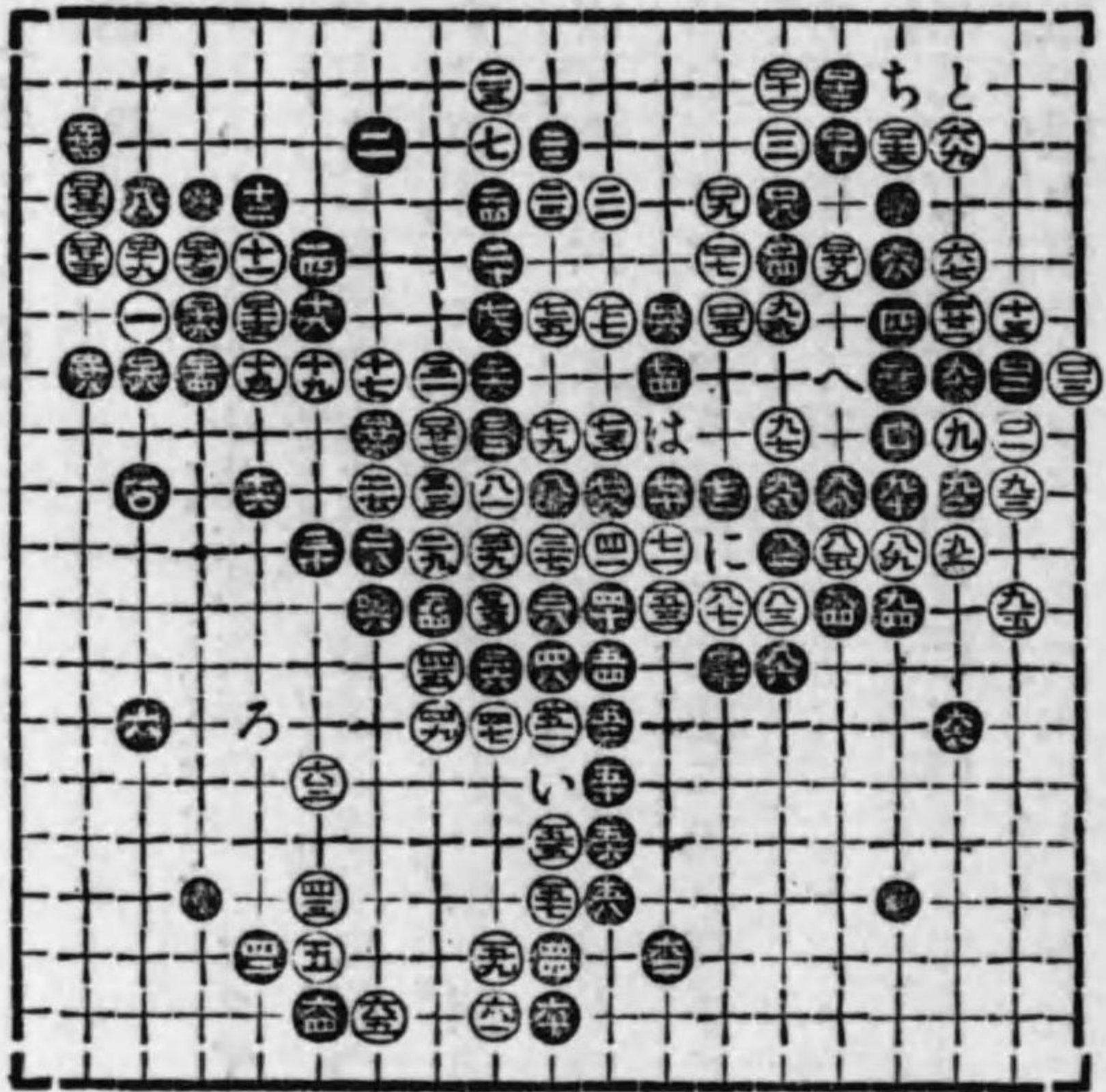
四子白 中押勝

(第二十五圖)

○白九は白として止むを得ざる手なれど黒より十と詰められ一の石を攻めらるゝ事になりては局勢急になりて白面白からず先づ十の處へ二間に開き徐々に進行すべし○白十三の手も十五へ飛び打つべし九、十三と打ちたりとて黒の二子は輕き故白何等の手段なく却て黒より十四と勿ねられ白石重くなりてよろしからず●黒十四より三八迄は充分の打廻しにて白窮したる局面なり然るに四十は形違ひにて悪し四八に續くべきなり●黒四四は打過ぎの姿なり四五の處に續くべきなり、●黒五十は四四との釣合にて白石を壓迫する手なれども型としてはとらず五二へ行びるを本手とす○白五一、五三は黒の型を悪しくなす手故仔細なきが如きも斯くなりては右側黒の模様堅くなりて面白からず善悪を問はず五一は五二へツケコシ黒五一の時「い」へ切り手段をなすべきなり○白六三緩し「ろ」へ打ち此所に先手を持ち手段を講すべきなり●黒七十悪し「は」に飛び白を攻め上邊の黒を治まるべしすべて切りの意味ある處を覗くといふことは十中の八九までなきものと知るべし●黒七二穩かならず七三へ守るべし然し譜の如くにし

て黒悪しきことなし●黒八六悪し此手にて八七に割込み白八六黒百二十白「に」黒九八と粘がば白の二子と上邊の黒と攻合ひとなれども黒の方有利なるは論なし●黒百悪し百一へ切らば白は「ほ」へ打つ外なし依て黒百二白百三黒「へ」に打ち置けば黒は活形なり●黒百二悪し斯く攻合ひの場合一手たりとも自己を詰める法なし●黒百六悪し先づ百十一へ打ち白「と」のとき黒百十四白百二五黒百十八白百十九黒「ち」に約へ攻合ひ黒の方勝なり然るに黒眼形をなさんとするが故白石の手数をツメ遂に大石を取られたるなり之といふも七二の時七三に尖み連絡し置かば安全の局面なりしに惜しむべし。百二十九手迄。

圖 五十二第



劫提 劫提 劫提 劫提 劫提 劫提 劫提 劫提 劫提 劫提

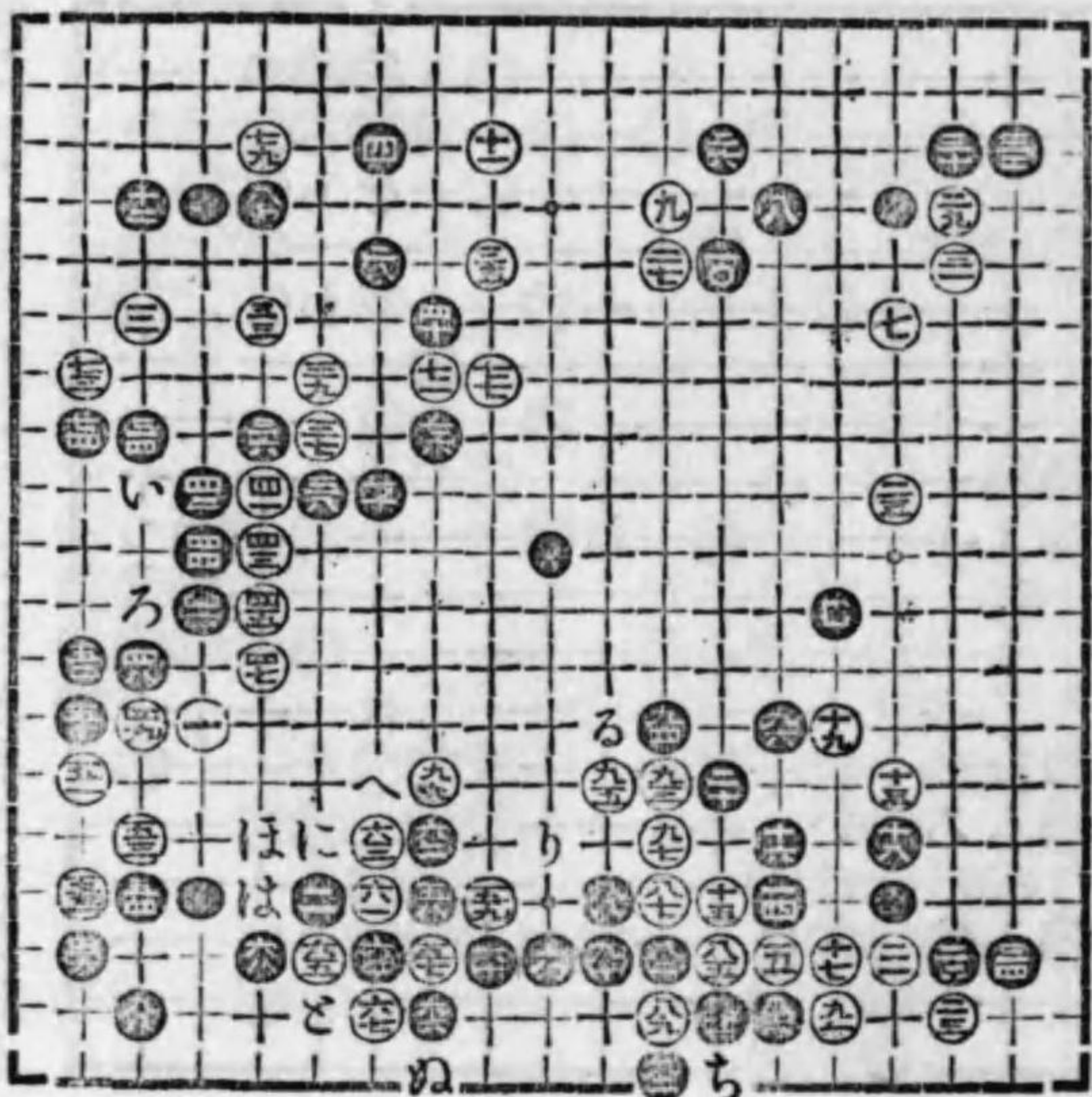
●黒六の手場合好し●雷八定石なれば悪しきといふ能はざれ共六の着手の意志をツギ十七にコスミ附け白十四の時十三の處へ打つ方よし●黒十大に緩し前述の手順に打つべし●黒二十何事ぞや二一に打たざる可らず、●黒二六懸し見よ八の一手の愚を圖の如く一間飛よりエスミ付は手順を替て云へば初め二六と大桂馬に打ち白九と付けし時は二七と打つならん、それを八と打ち白に三七と打たれたる譯にて碁法に無き悪手となるなり○白二九、三一時機早し打たざる方宜し圖の如く打ちては黒に安心を與へ面白からず○白三三懸し「い」印に析くべし●黒三六打ち過ぎなり「ろ」に二間析きて充分なり●黒五四事少なり八九に斜走し此の白軍の眼を奪ひ攻むべし●黒六八大悪五七に粘の外なし斯の如き劫は勝つ時の外打つべからず此の劫の負くる時は又碁も敗と知るべし又六八と粘ぎ白「は」黒「に」白「は」黒「へ」となり六一、六三の二子を打ぬきて右邊の白を攻れば白大に苦戦ならん●黒八十」と「印」に打ち抜くべし●黒八二懸し八四に打

つべし●黒八四は八五に切るの外なし其時白八四黒八九白「ち」印となすの外ならん黒は時機を見て九一に付け劫に打つべし●黒百の手暴なり「り」にコスミ白の應手を見るべし白に「ぬ」印に縛らるれば黒死なり然し「り」のコスミ有れば白に「る」印に打たれし時に打たば宜し。

黒百手迄。

互先 (第二十七圖)

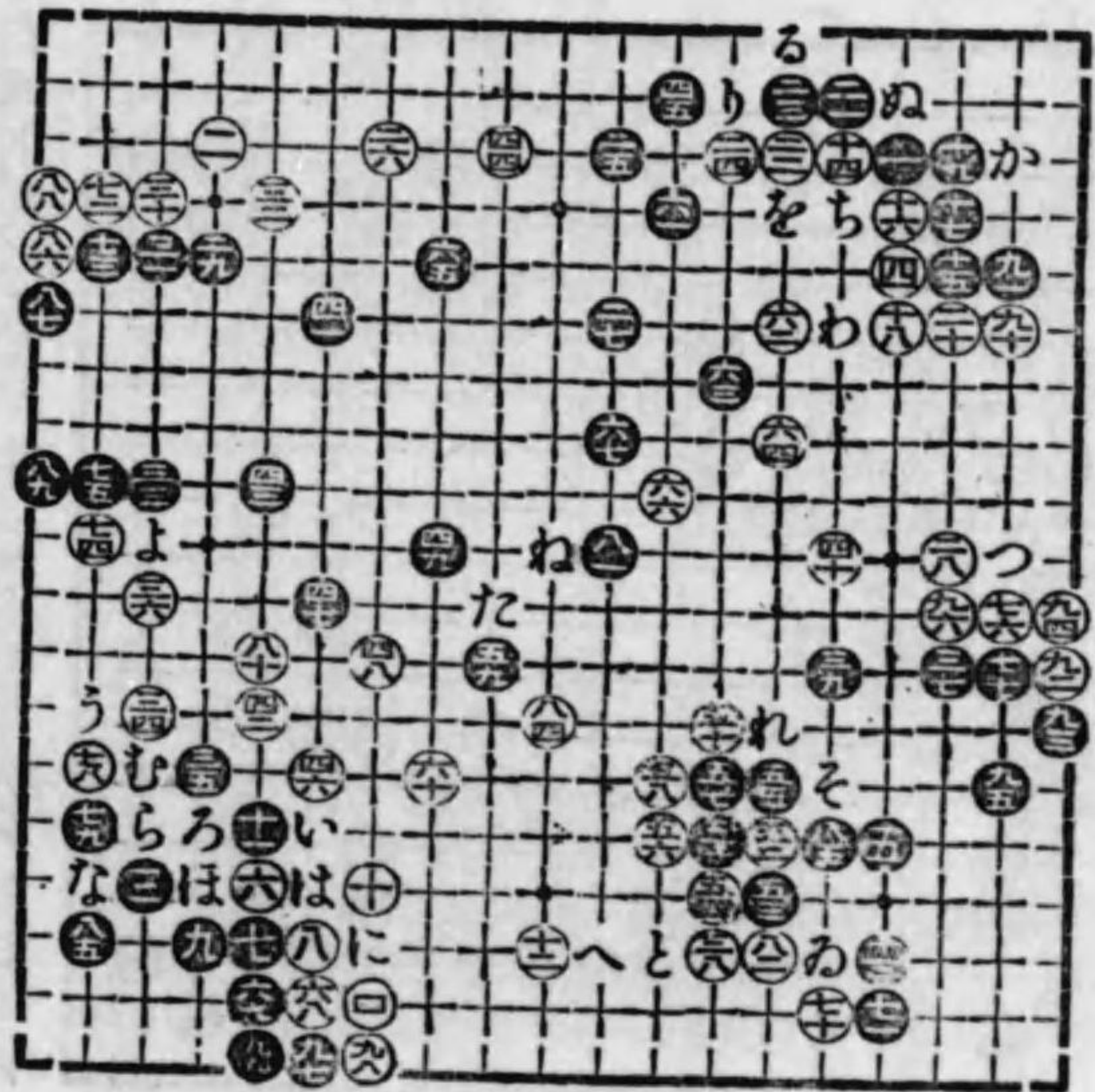
圖六十二第



●黒十一定石になき手なりかく十一と付けるは七、九の付を打たす七の時十一と打つ手はあり其時白「い」黒「ろ」百十黒八白「は」黒七白「に」黒「ほ」となるは定石なり十一は「い」に覗き白「は」黒「ろ」と打つが定石なり、○白十二せまじ「へ」「と」の

中任意に打べし●黒十五悪し二一へ剣白「ち」黒二二白二三黒「り」白「ぬ」黒「る」白十九  
 黒「を」白「わ」となるを定石とす、○白十八大に緩し十九へ切り黒「ぬ」なれば白「か」と  
 下る黒二十なれば白二一と二子を得黒二十を二一なれば白二十と二子を得る何れにし  
 ても白の方大に善し圖の如くなりて  
 は白何の得る處もなし●黒二五悪し  
 三一へ掛るべし○白二六面白からず  
 二九か三一に締るべし●白三二趣向  
 にとほし三三か「か」「よ」に打つべし  
 ●黒三五緩し三七か「と」へ詰むべし  
 ●黒四五徒手なり四七に斜走すべし  
 ○白四六悪し「ら」へ剣ぬべし○白五  
 十打ち過ぎなり一路控へて五七位の  
 者らり●黒五九深入なり「た」にコス

圖七十二第



ムべし○白六十緩漫甚だし今や勝敗分れの時にて如此緩手を容さず「れ」へ押し黒  
 「そ」の時八二へ曲るべし●黒六一面白からず七六へ尖む白「つ」に受たる時八二に約ゆ  
 べし○白六二は六三に打つべし○白六六打たずして「ね」に打ち黒の地型を消す手段に  
 出づべし○白七八損なり七九へ斜走し黒「な」白「ら」黒「る」の時白轉じて「ね」に打つべ  
 し○白八十打たずともよし「ね」に打つべし●黒八一穩かならず「ね」に打つべし●黒八  
 五徒手も甚だし此如隅白より手段のあるものにあらず宜敷「む」に當白「う」の時九七  
 へ剣而して他に着手しべしこれ勝敗に關する手なり○白九六事小なり「わ」印の方は  
 かに得なり。白百手迄。

互先 黒中押勝

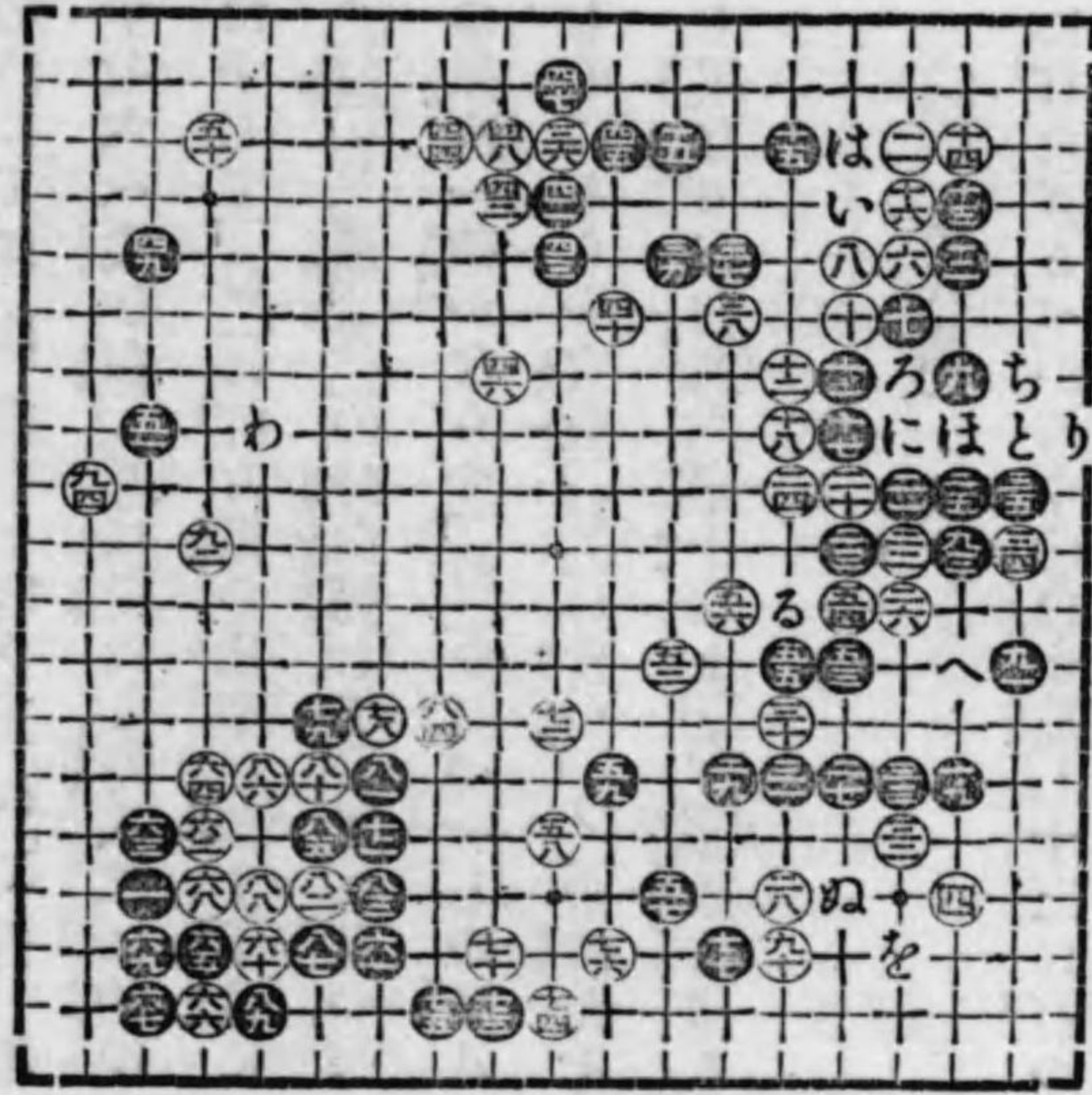
(第二十八圖)

○白六は「い」印に尖むべし●黒九悪し十三に打たざるべからず○白十悪し十三に打つ  
 べし黒十一にても白十二にても双方十三の處急場なり○白十四は十七に縛ね黒粘ぎし  
 時十四に打べし●黒十五早し十七に打べし斯くの如き處を敵より縛ねられては型悪し  
 くなりて大悪と知るべし○白十六悪し十七に打ち黒「ろ」に粘し時「は」に打つべし●黒



十九悪し二十に行びて打つべし○白二六緩し九三に約へる處なれ共此の局にありては  
 黒に五四に行びらるゝ手あるがゆるに先づ「に」に切り黒の應手を試むべし其時黒「ろ」  
 に粘げば九三に約へ黒五四白三五黒「ほ」白「へ」となりて宜し又黒「ろ」に打たず二六に  
 打たば白「ほ」黒「ろ」白「と」黒「ち」白  
 九三黒三五白三四黒「り」白五四と打  
 つべし何れにしても白の方優勢なり  
 ○白二八は「ぬ」に打つ位のものなり  
 ○白三四打ち過ぎなり直ちに三六に  
 詰むべし●黒三五緩し四八に析くべ  
 し○白四十無理なり四三に飛び徐々  
 に進行すべし○白四六悪し四七に下  
 るの外なし黒に四七と剋られては白  
 の形くずれて悪し○白五二は五七に

圖 八 十 二 第



飛び釣合を保つ外なし○白五八は餘りに空手なり九十に下り隅を守るべし○白の六十  
 同断●黒六一は「を」に打ち白の隅地をやぶるべし白おそらくは窮せん●黒七三悪し七  
 八に飛ぶべし○白七八以下無理なり七八の時八二へ覗き黒八三へ粘たる時九十八打ち  
 隅を守り打つ外なし●黒九三事小なり「わ」に飛ぶ方はるかに優れり。  
 白九十四手迄。

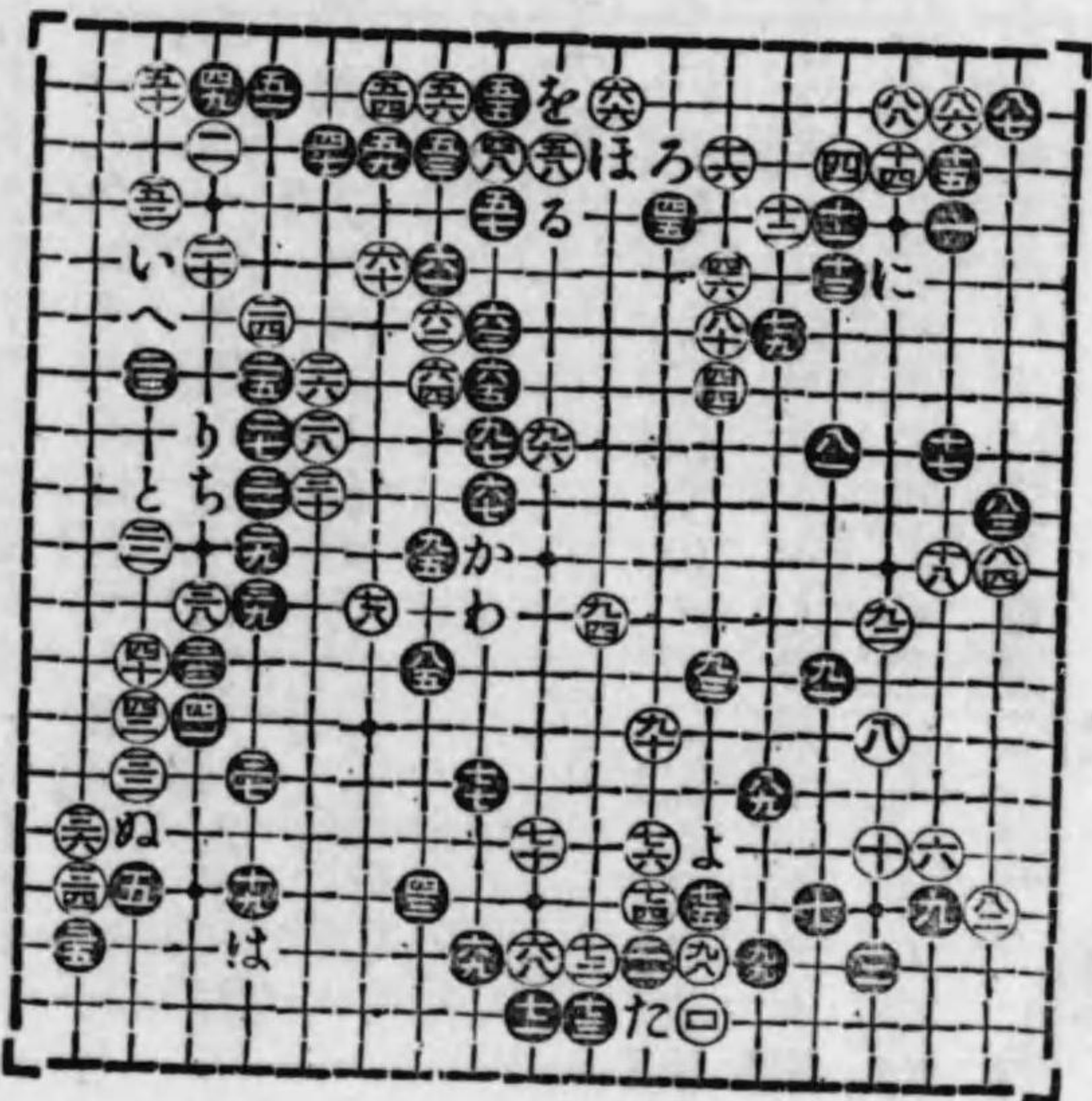
互 先

(第二十九圖)

●黒九のコスミックケ早し「い」にカ、ルか「ろ」に夾むべし○白十のノビは黒の九と交換  
 して悪しくはあらねど此處は輕き處なれば手を抜きてはカ、ルべし●黒十一のツケ損  
 なりツクル位なれば「に」にコスムべし○白十六は「ほ」に析くべし●黒十七は十八の處  
 に打つべし○白二十は「へ」に大桂馬締りする方此場合にては宜し●黒二一は「と」に打  
 つべし●黒二三の打込み 穩ならず此處を打つとすれば「ち」と二二の肩を衝く位のも  
 のならん○白二四は「り」にカクべし○白二八の押しは二二の白にモタレて悪し打たず  
 して四二に析もべし○白三二悪し「ぬ」にツケ打つべし●黒三三甚だ面白からず四十に

打込むべし○白三四、三六不可なり三四の手にて四十に打つべし●黒三七は四十に下るべし○白三八は打たずして單に四十にツクべし●黒三九は四十に下り打たば面白し●黒四七は「ろ」に約へ打つべし●黒四九、五一面面白からず、○白五二は五四に斜走し黒の眼を奪ふべし○白六十大悪「る」に曲らざるべからず●黒六一は白と同罪なり「を」に出で打たば五四、五六の白を得るを以て大に善し●黒八一は「わ」に飛びて中央の大石を逃出すべし○白八六、八八緩手なり「か」にツケ黒の大石を攻め機を見て五八の切を試むべし●黒八九は「よ」に押すを本手とす○白九六のノゾキ無味極れり九七にハネコミ切斷の意味を

圖九十二第



狙ふべし●黒九九は「た」に粘ぐべく白百も「た」に提るべし。  
白百手迄。

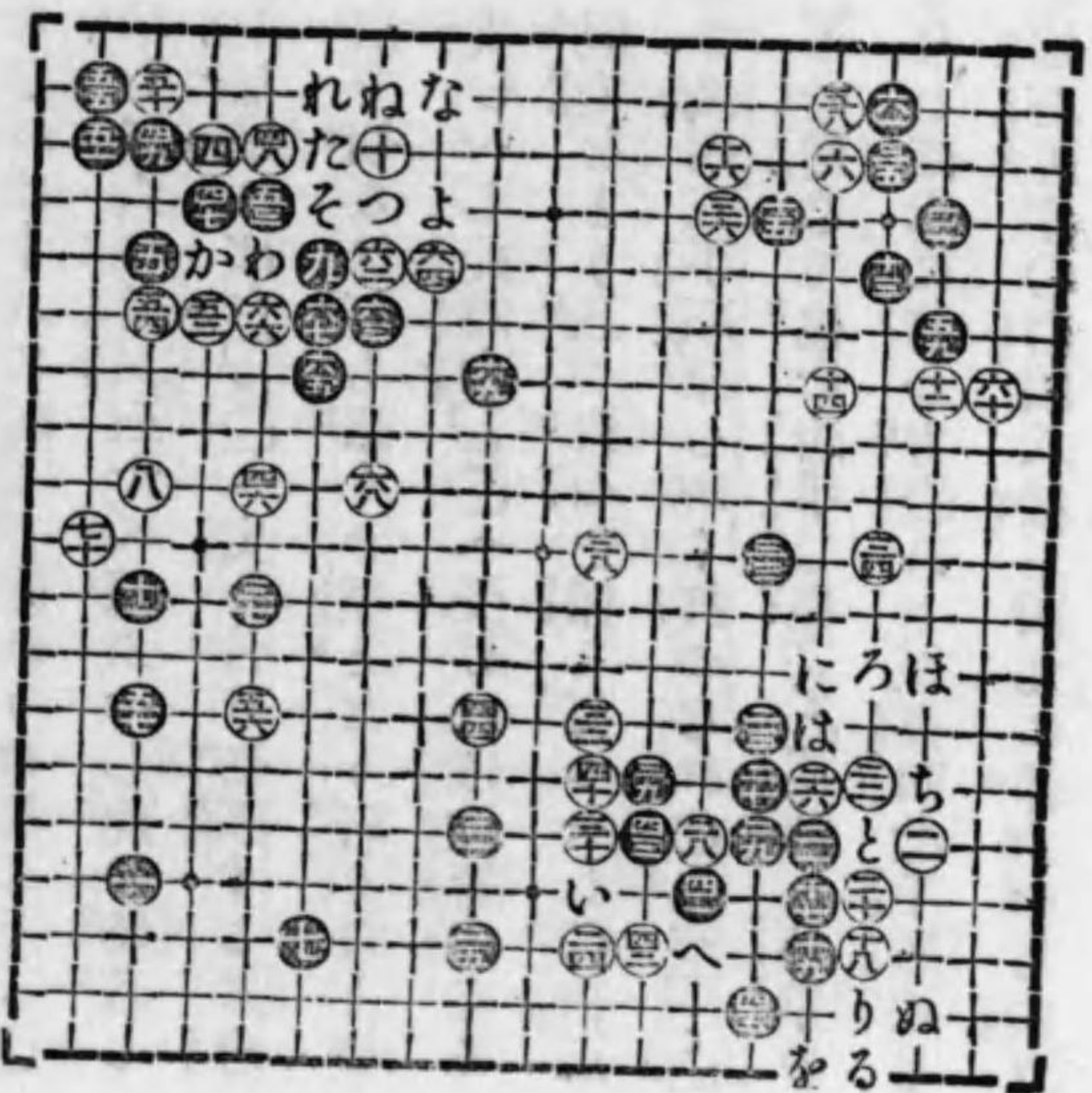
互先 白中押勝

(第三十圖)

○白十二は四六に飛ぶを普通とす若し轉するなれば十八に縮る方優れり●黒二三「と」印か三四に打つも宜し○白二六、二八時機早し二六の時只三十へ飛ぶべし此の時若し黒「ろ」へ斜走されると見る二六と二七の交換なければ白「は」へ尖み付け切斷するは容易なるに却つて二六と打ちたる爲め「は」に出で切るは打ち悪き型となり行くなり●黒三三白三四との交換面白からず「に」印へ尖むべし此時白「は」へ受ければ位低くなるだけ黒優れり○白三六緩し「へ」にツメ黒の眼型をとり且つ自石を保ち打つべし○白三八も同斷○白四二調子悪し四四に打つべし●黒四五手順悪しかく打つなれば先づ「と」へ當込み白「を」黒「り」白「ぬ」黒四五白「る」の時轉じて他に着手し後「を」に約へ劫争の味を狙ふべし●黒四五は今直に打つ必要もなし四六に打つ方優れり●黒四七手順悪し四九にツケ白五十の時四七と打つを普通の定石とす○白四八緩し四九に伸ぶべし白五

二此處は俗に五三へ曲り黒「わ」白五  
 三黒「か」白五四と打つべし●黒五九  
 打たぬ方よし、○白六二穩かならず  
 「よ」へ尖む位の處なり●黒六三の時  
 「た」へ割込白「れ」黒「そ」白「つ」なれ  
 ば「ね」に切り四、四八、五十の三子を  
 取りて宜し故に白「つ」を「な」にカケ  
 ツグ外なし其時黒六三と締るなり六  
 五に飛ぶなり任意に打つべし○白六  
 六手順悪し「そ」へ當黒「わ」に續ぎし  
 七十に打つべし●黒六九は「た」へ割り込み先手をとりて打つ方得なり。  
 百七十手迄。

第三十圖

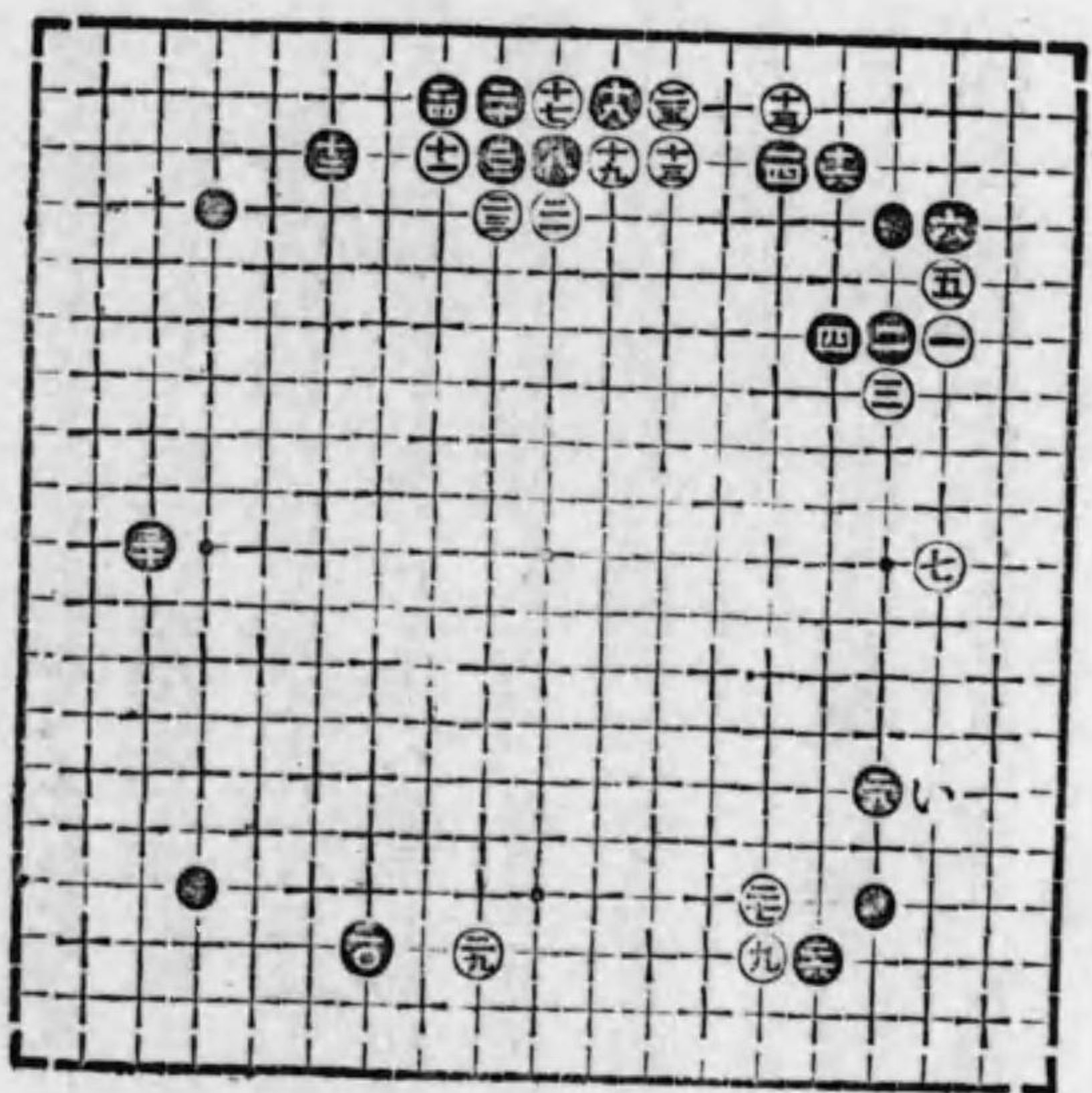


### ◎ 布石に就て

圍碁勝敗の大體は布石によりて定まると謂ふ位のものでありまして、之れを陸軍に例へて見ますると參謀本部の仕事の様なものであります、従つて布石の大切な事は云ふまでもない事であり、布石が拙ないと如何に定石を心得て居ても施すによし無きものとなります、而し五目以下も置く相手には白の打ち來りたる方へ應手し居れば先づよい事になります従つて隅の定石の心得を應用が澤山出來ますが、四目三目又はそれより少き置石の場合には必ずしも白の打ち込み方面のみに應手してゐる事は出來ません、従つて布石の方法を充分に研究する必要が有ります。  
 下に掲載いたしますは四子からの布石であります、會員諸氏が上達器を應用し研究し易く且つ記憶を増進する方法として大體を二譜面に分ちあります、ドーズ充分に御研究を希望いたします。

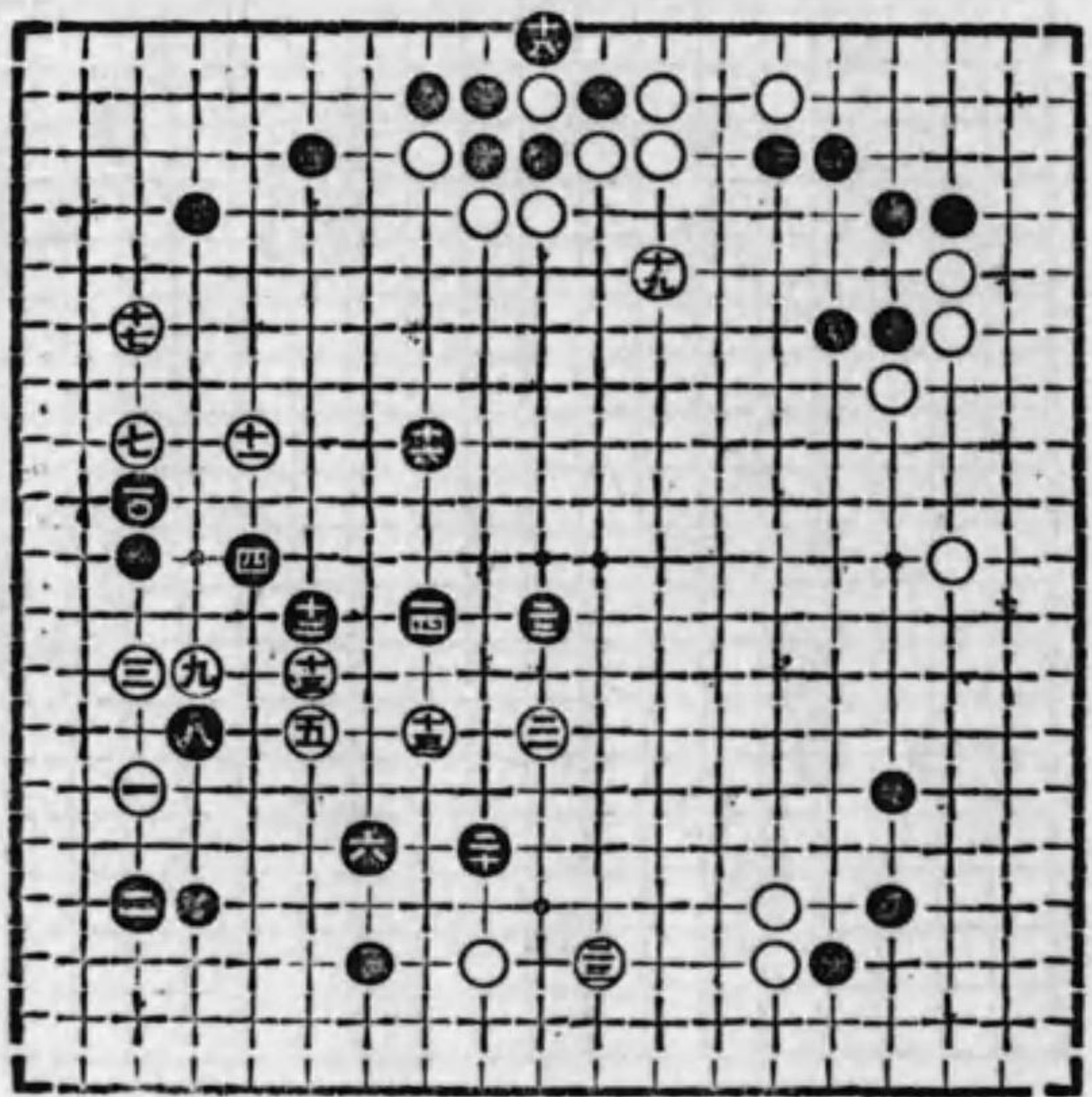
# 四子

黒八の手良し  
 白九と打ちしも黒手抜して十と打ちたるは白七の此場合には差支なし  
 白十七は左右堅固なる故に之れに對する手段なり  
 黒二八は「い」へ打つも良し



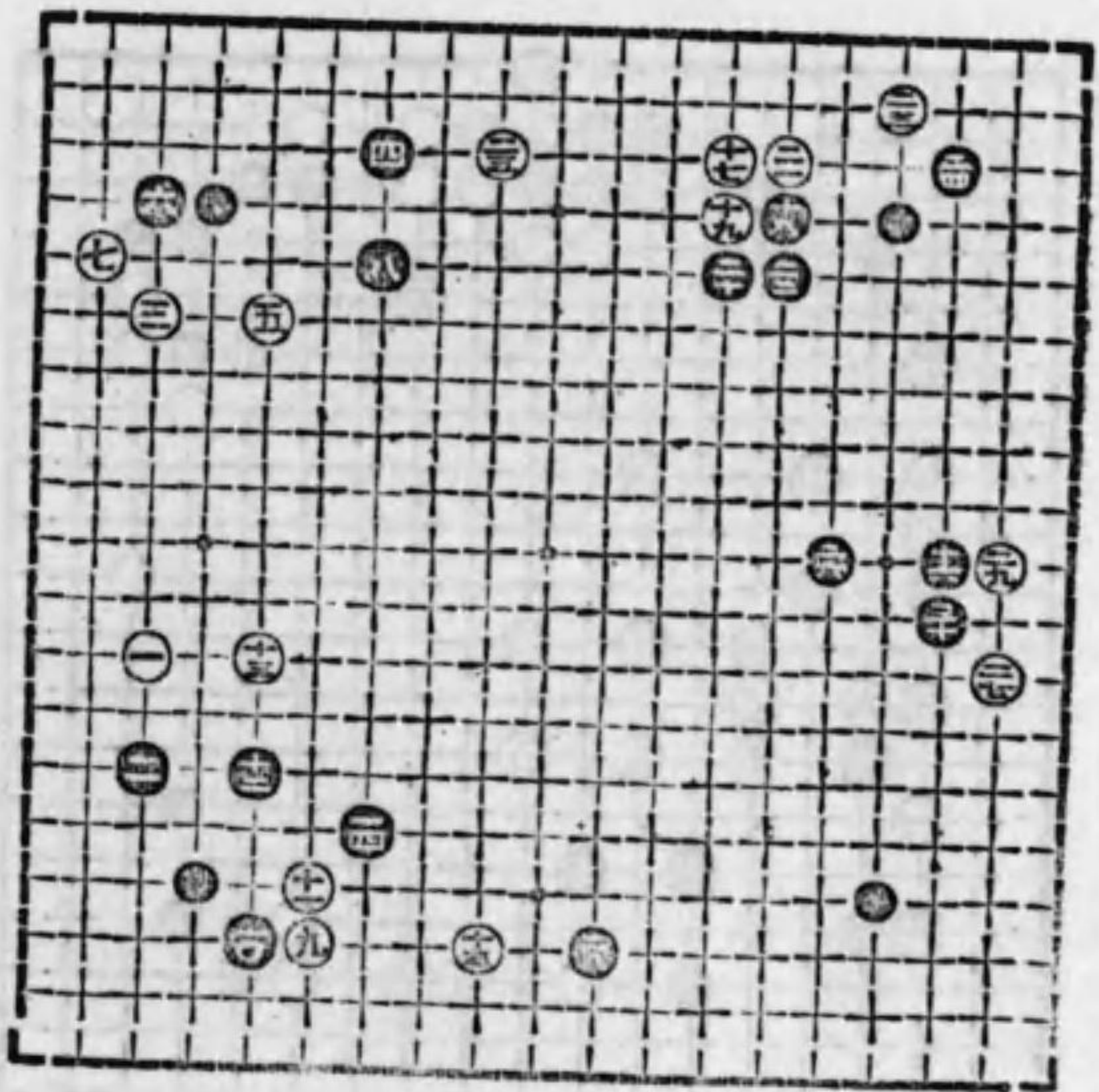
前頁の續き

黒八とのぞき十と打ちたる手良し  
 黒十六と打ちて十八と一目獲りたる手順よし



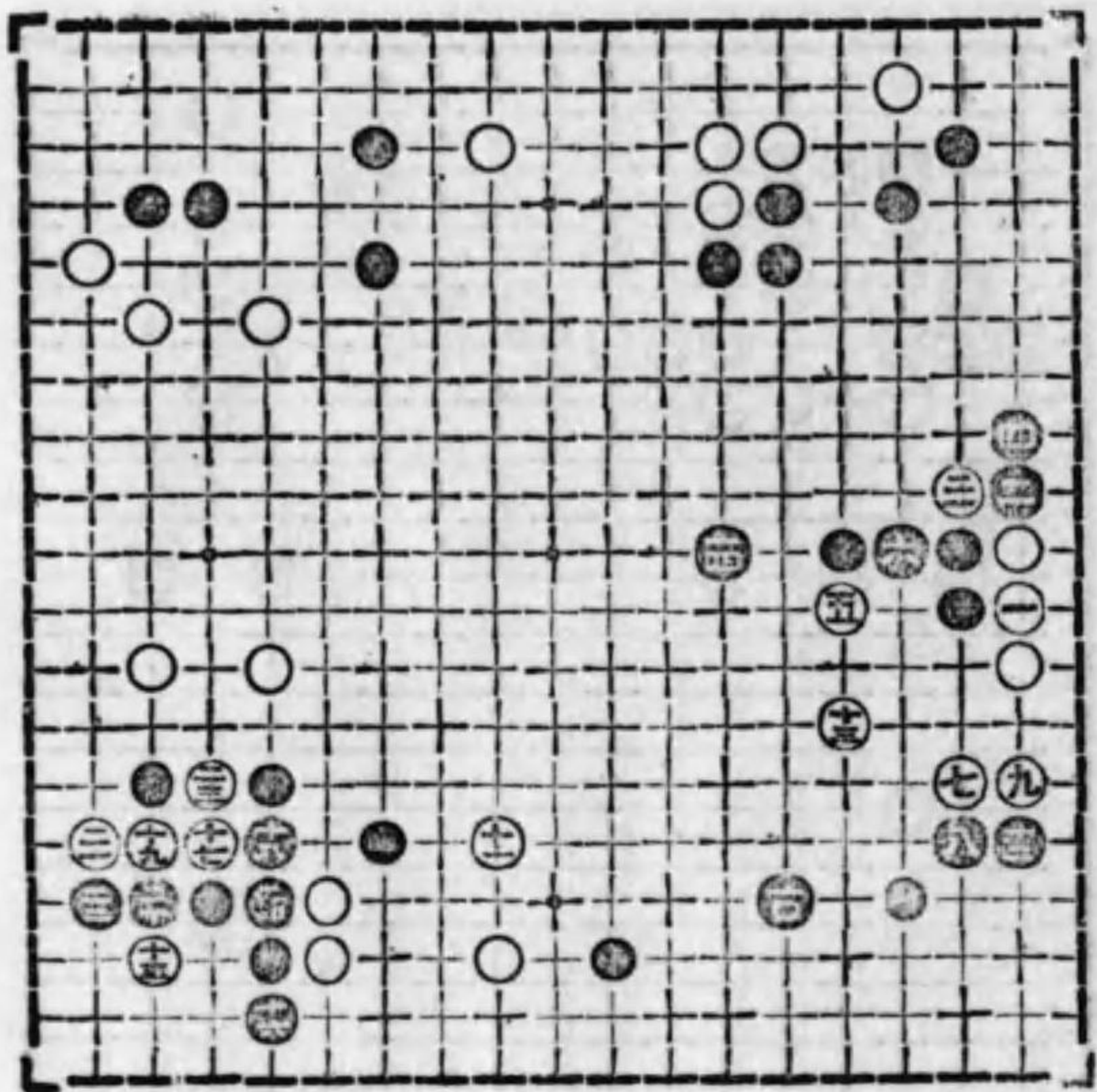
四子

黒一八及二〇の手此場合としては良  
 し二〇の手を二一の處に打つ手もあ  
 り  
 白二七は好ましからざれ共四子も置  
 かせては打つ事もあり



前頁の續き

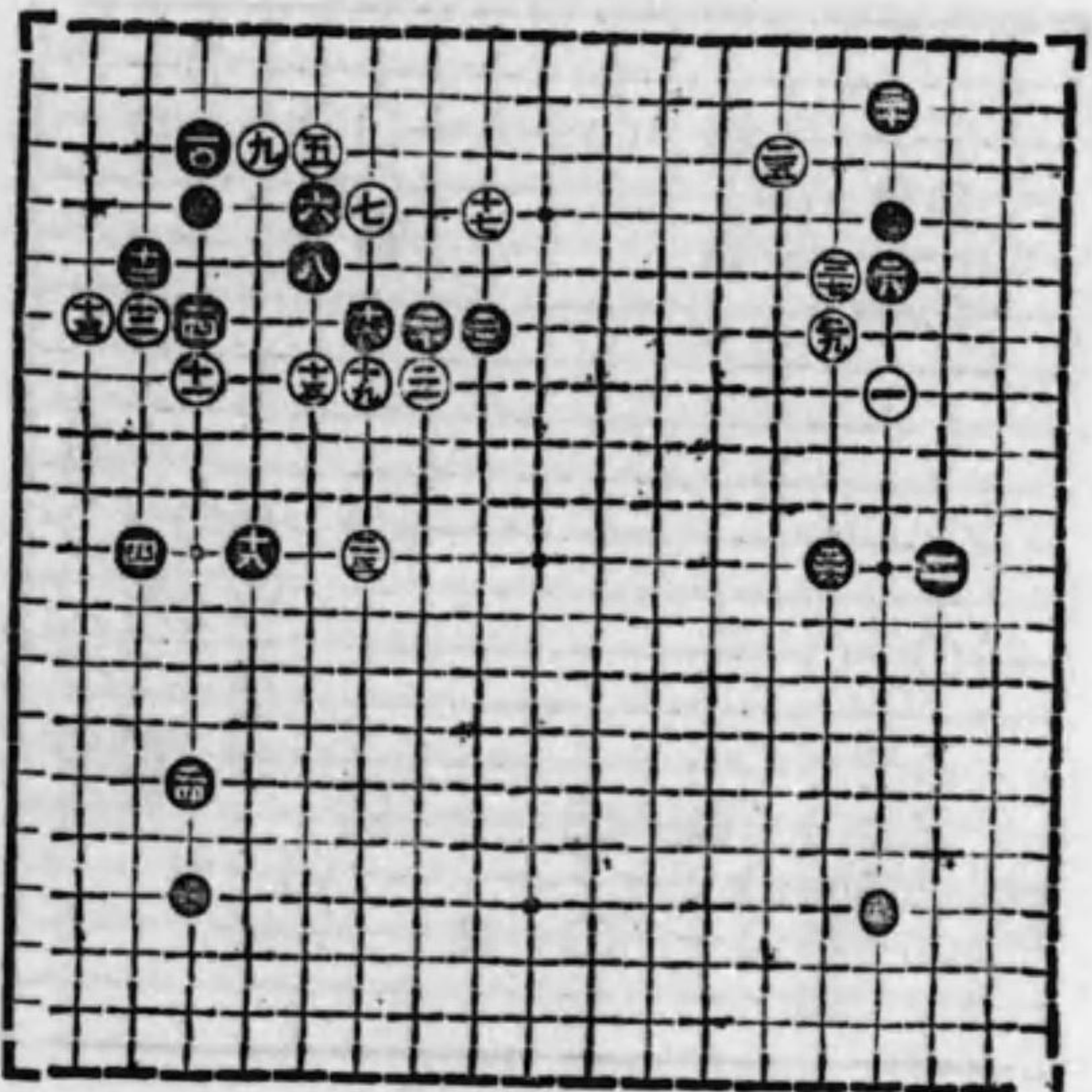
白一七は悪しき手なれ共黒の應手研  
 究の爲めに斯く打ちたるなり



# 四子

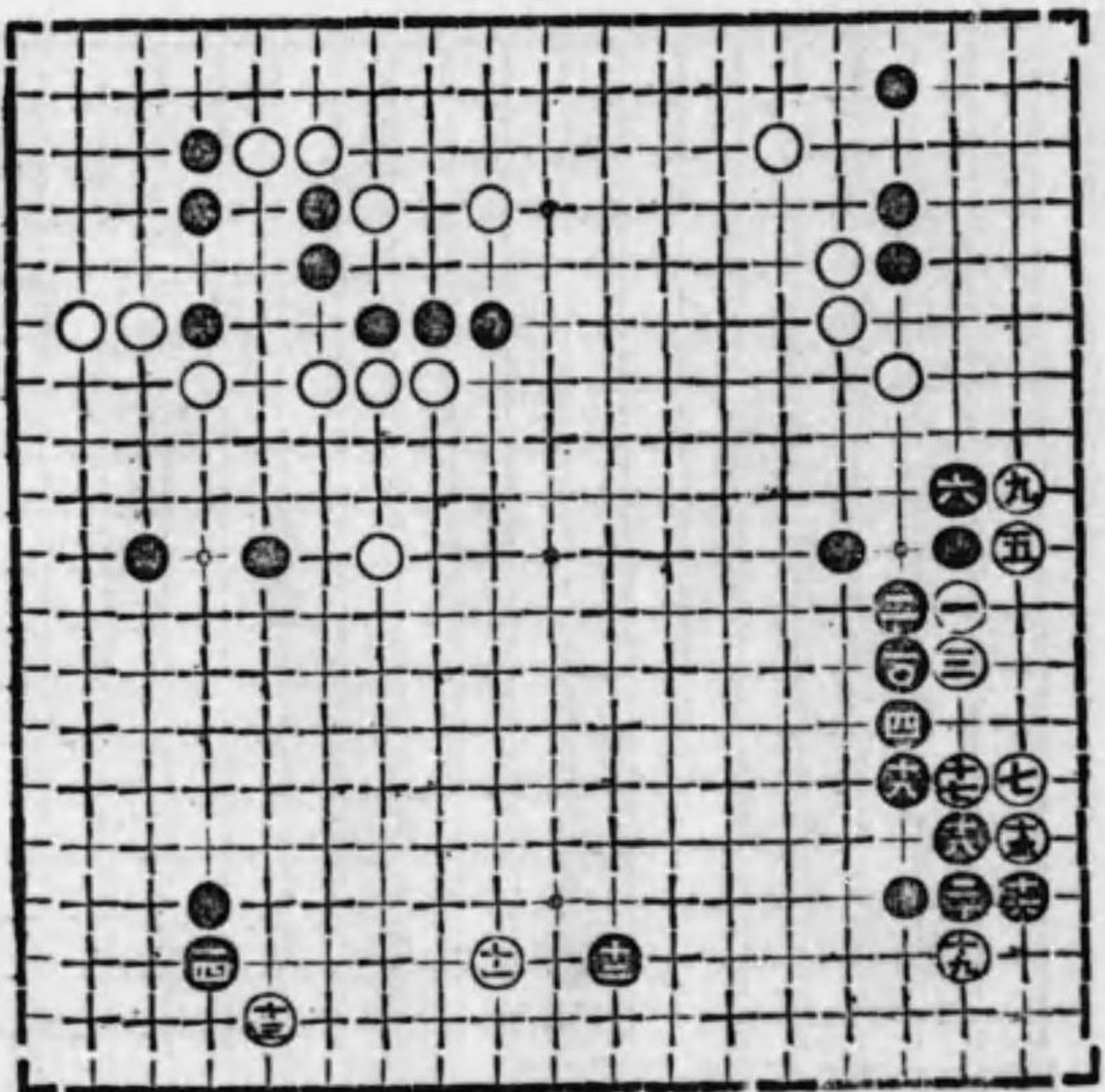
黒二及び四は大場を占領せんとする  
打方なり

黒二六の打方よし



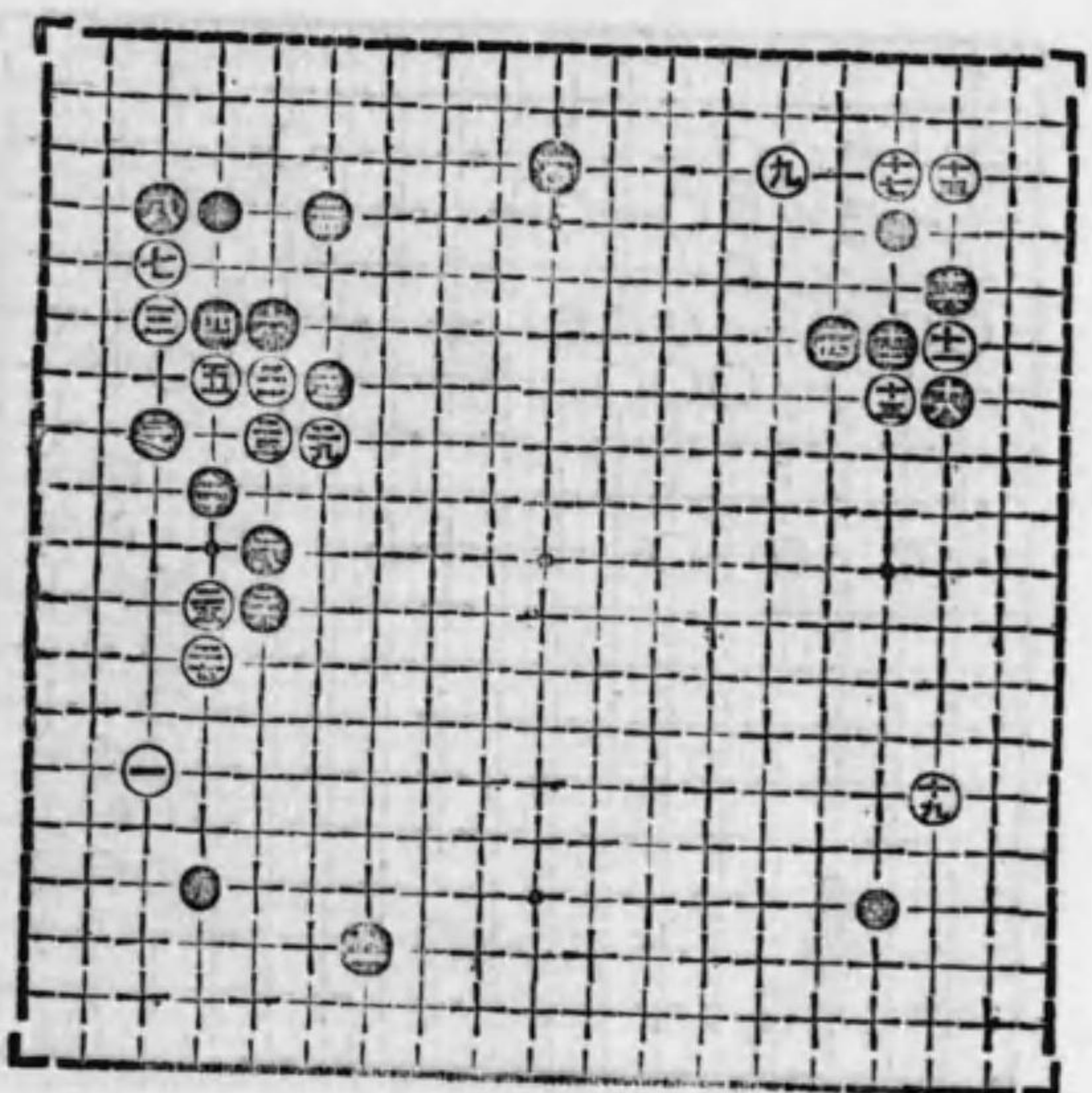
前頁の續き

黒四の手よし  
黒十の打方よし此の如き場合には堅く打つ事に心懸く可し



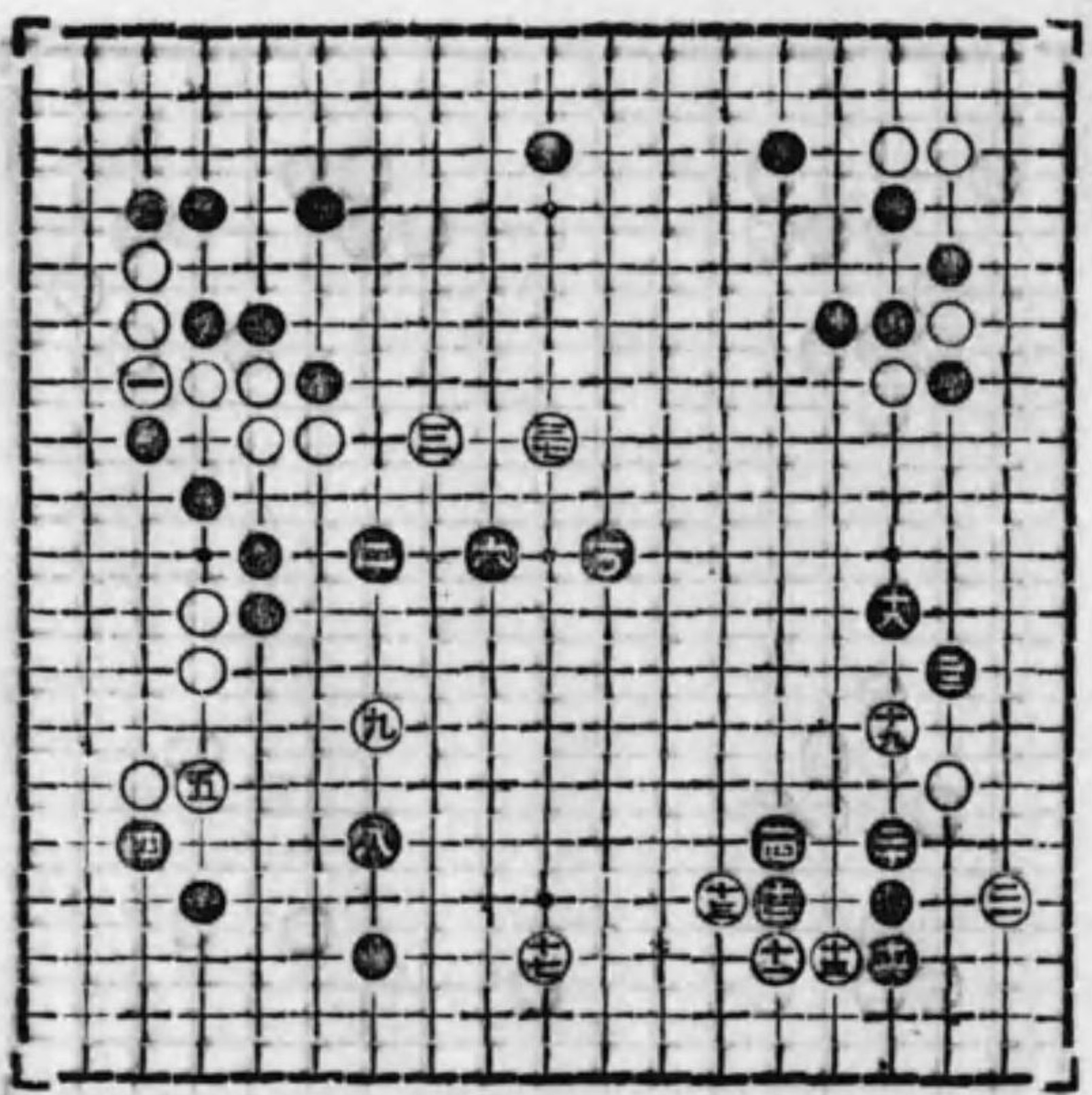
# 四子

黒十に對し白十一と振替りたるは黒の方有利なり  
 黒二〇の手良し  
 黒二六の手良し



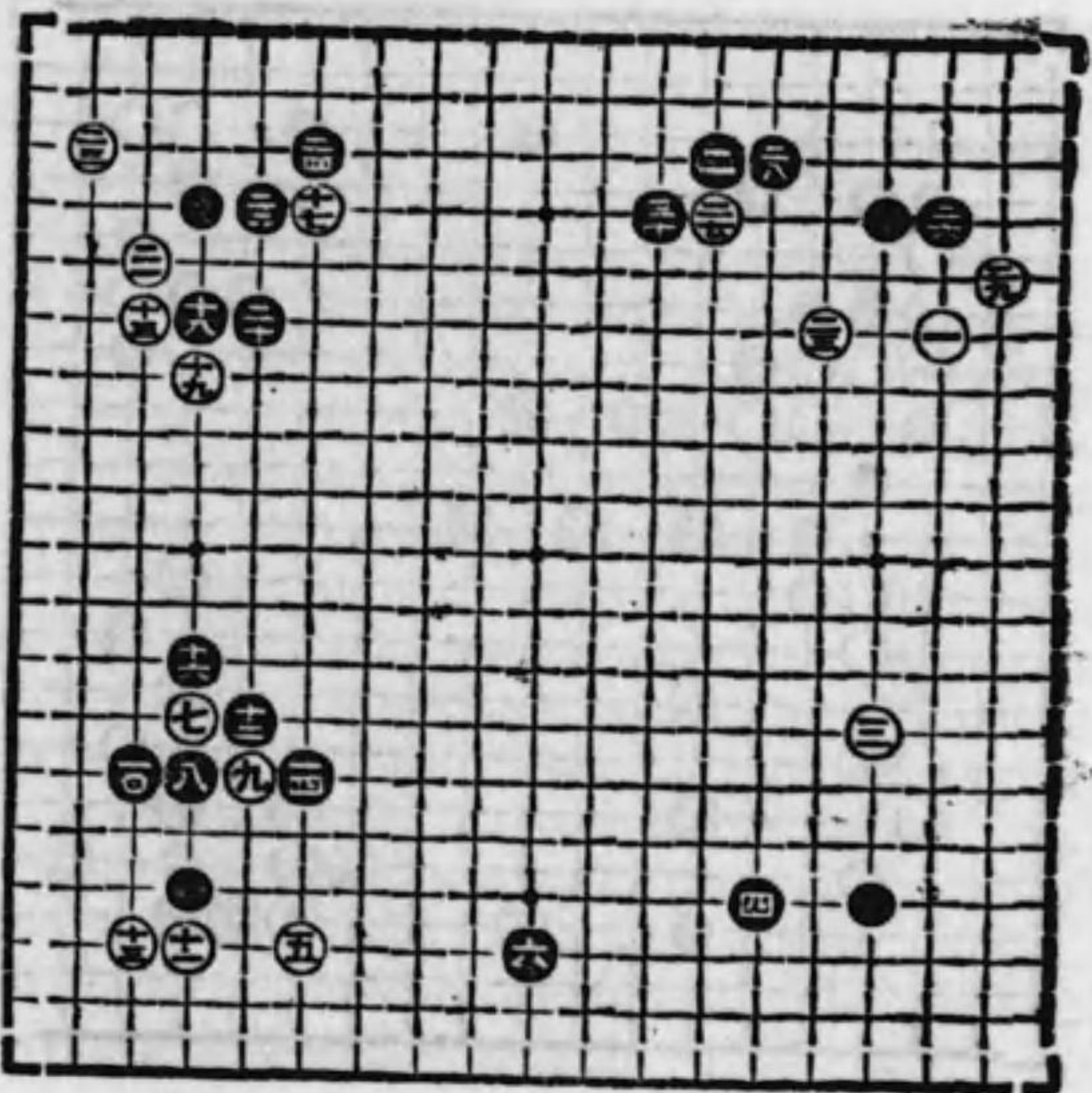
前頁の續き

黒十八及び二二の打方良し



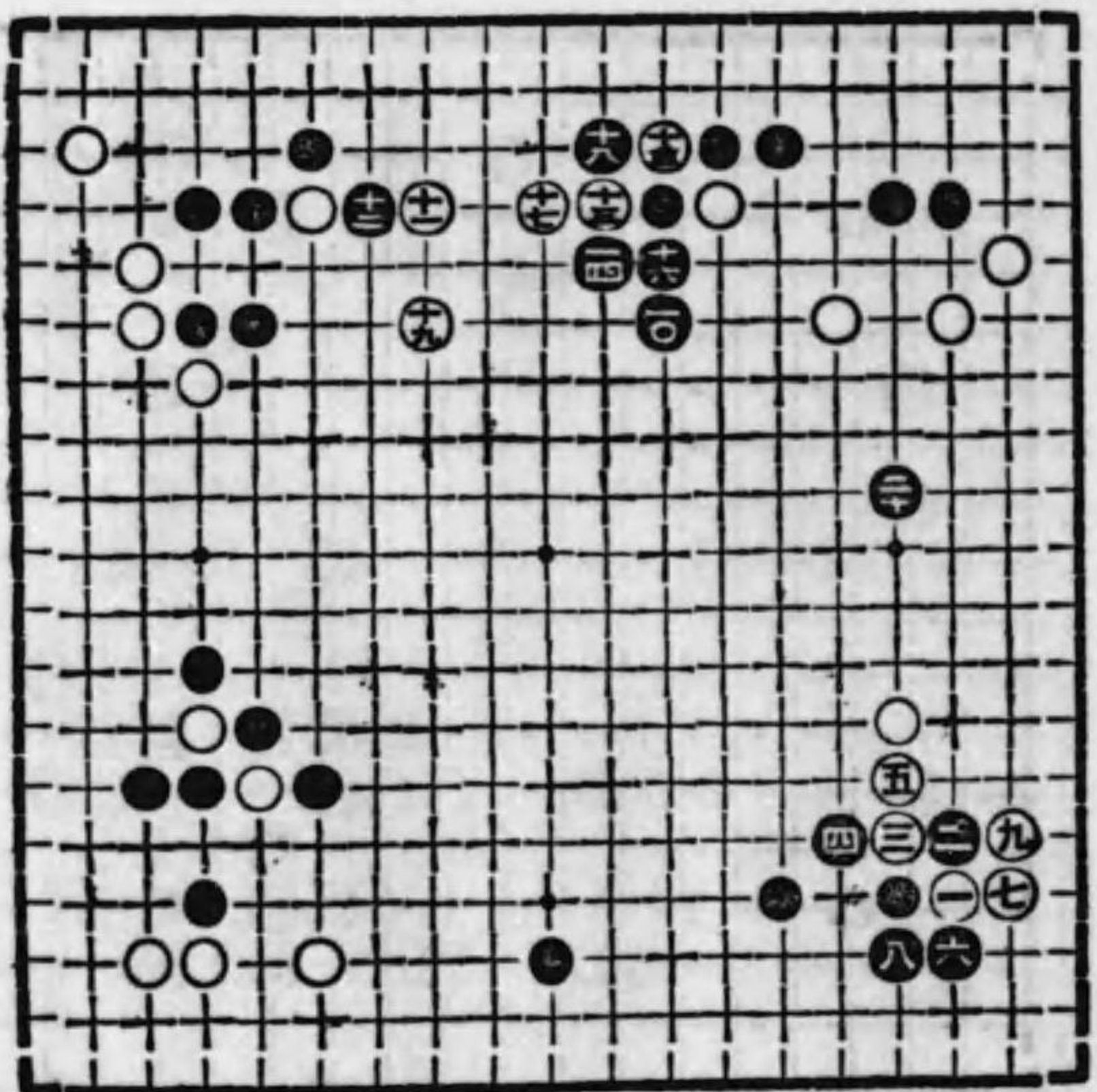
# 四子

黒八の手は此場合既に六へ打ちある故に差支なし  
 黒十六の手堅くしてよし總て四子も置く程相違ある者は可成堅く打つ事に心懸く可し



前頁の續

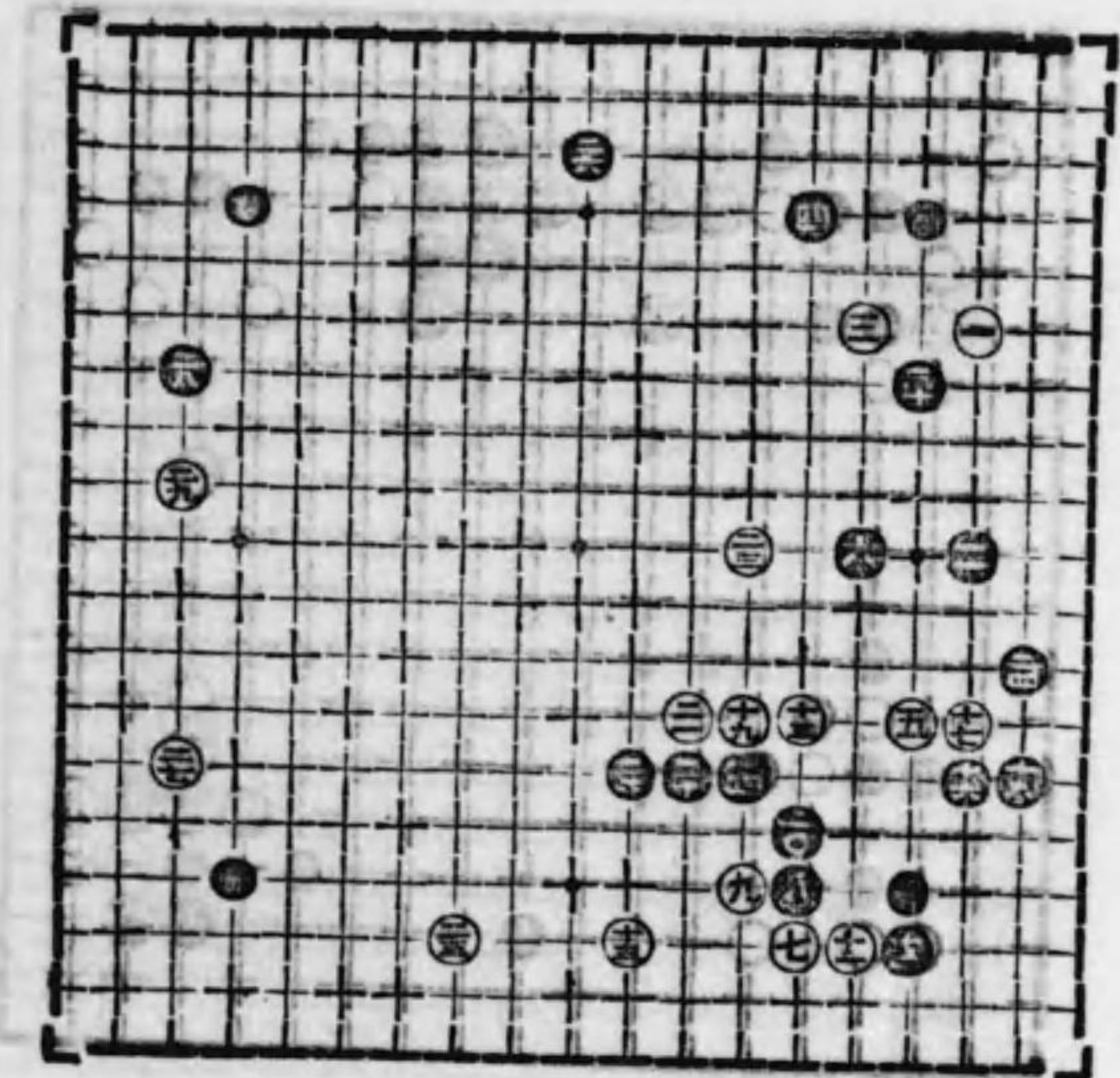
黒二と打ちて一目捨つる打方は常にある型にして斯くして有利に先手を保持する打方なり  
 黒二十の打込時機良し





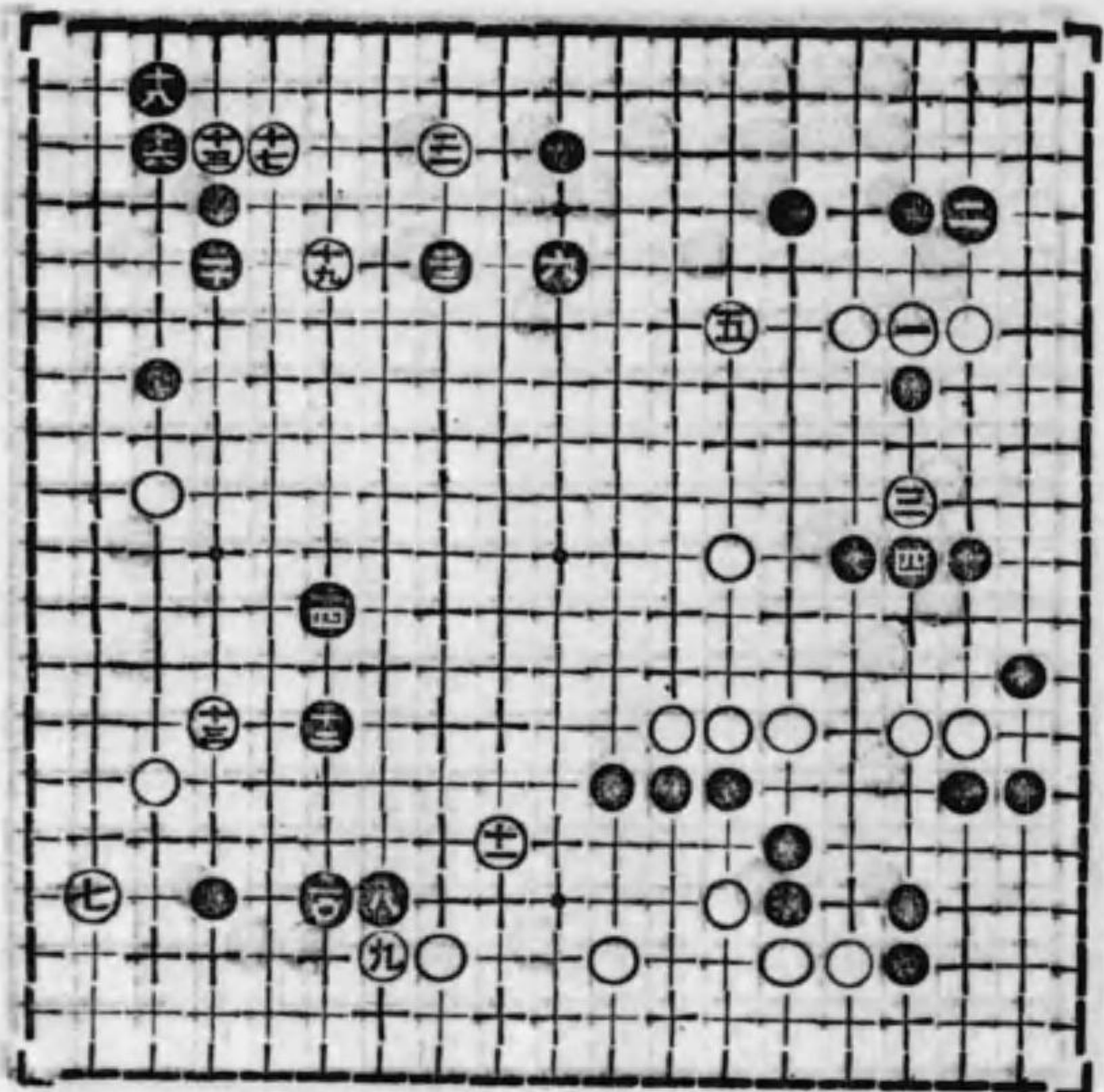
# 四子

黒二の手は白一に對し必ずしも大斜走に應ずるに及ばず此打方悪からず  
 黒六良し  
 黒二六の手大場にてよし  
 黒三〇のぞきよし



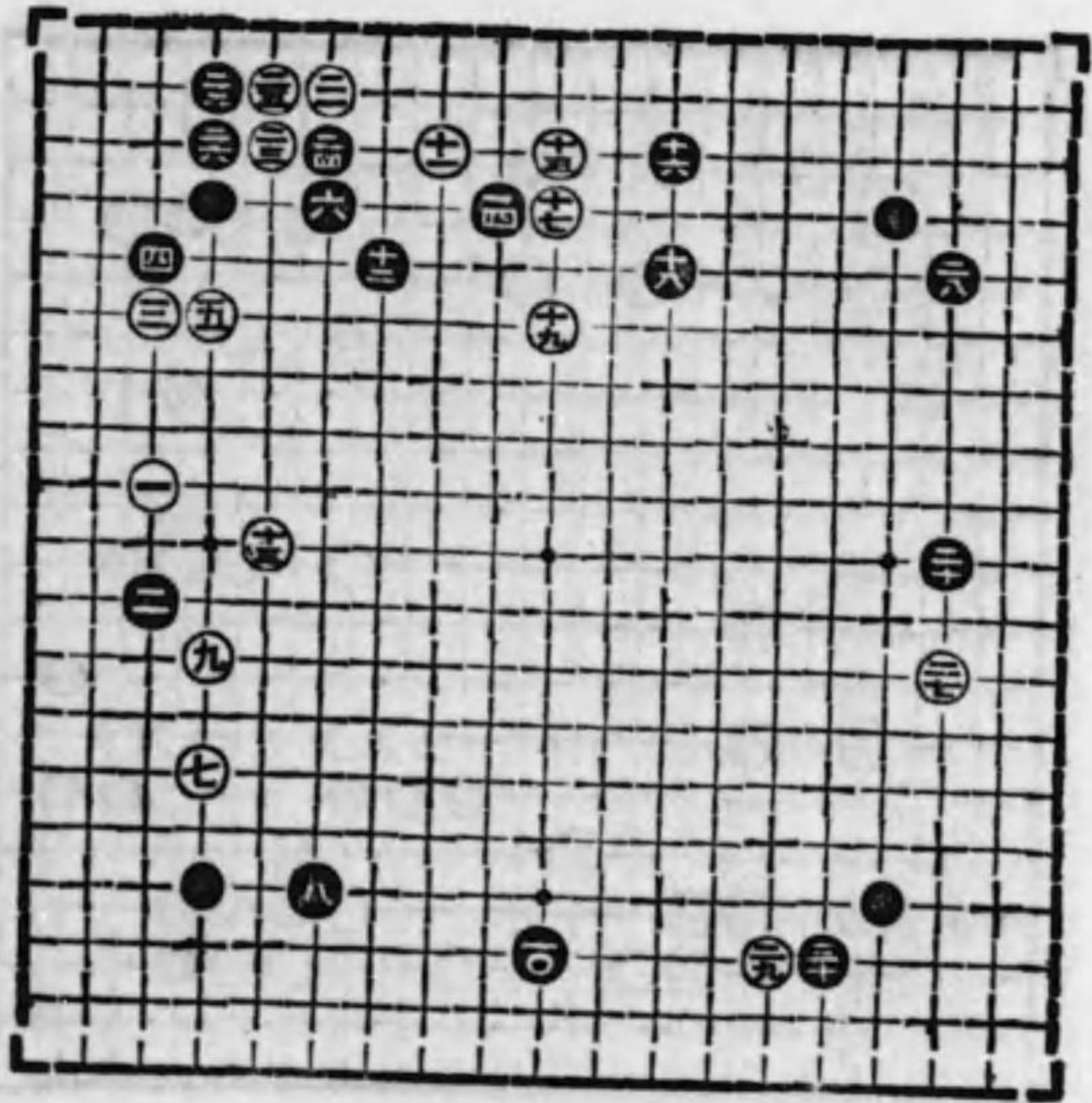
前頁の續き

黒前圖三十とのぞき本圖二と下る手  
 順よし  
 黒三八及び五二の手よし



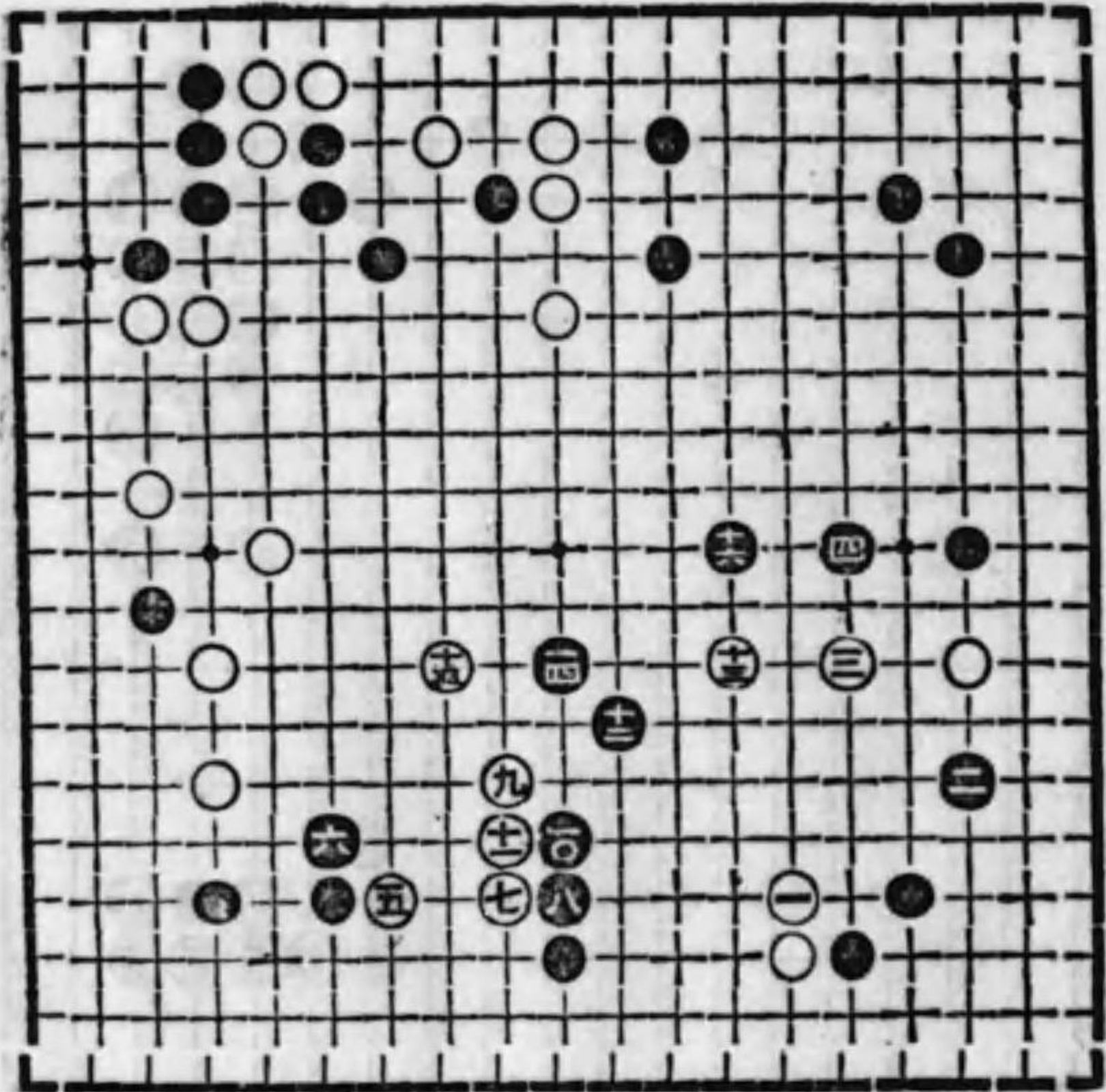
四子

黒十と左二目を放棄して打ちたる手  
段よし  
黒十六及び二十共によし



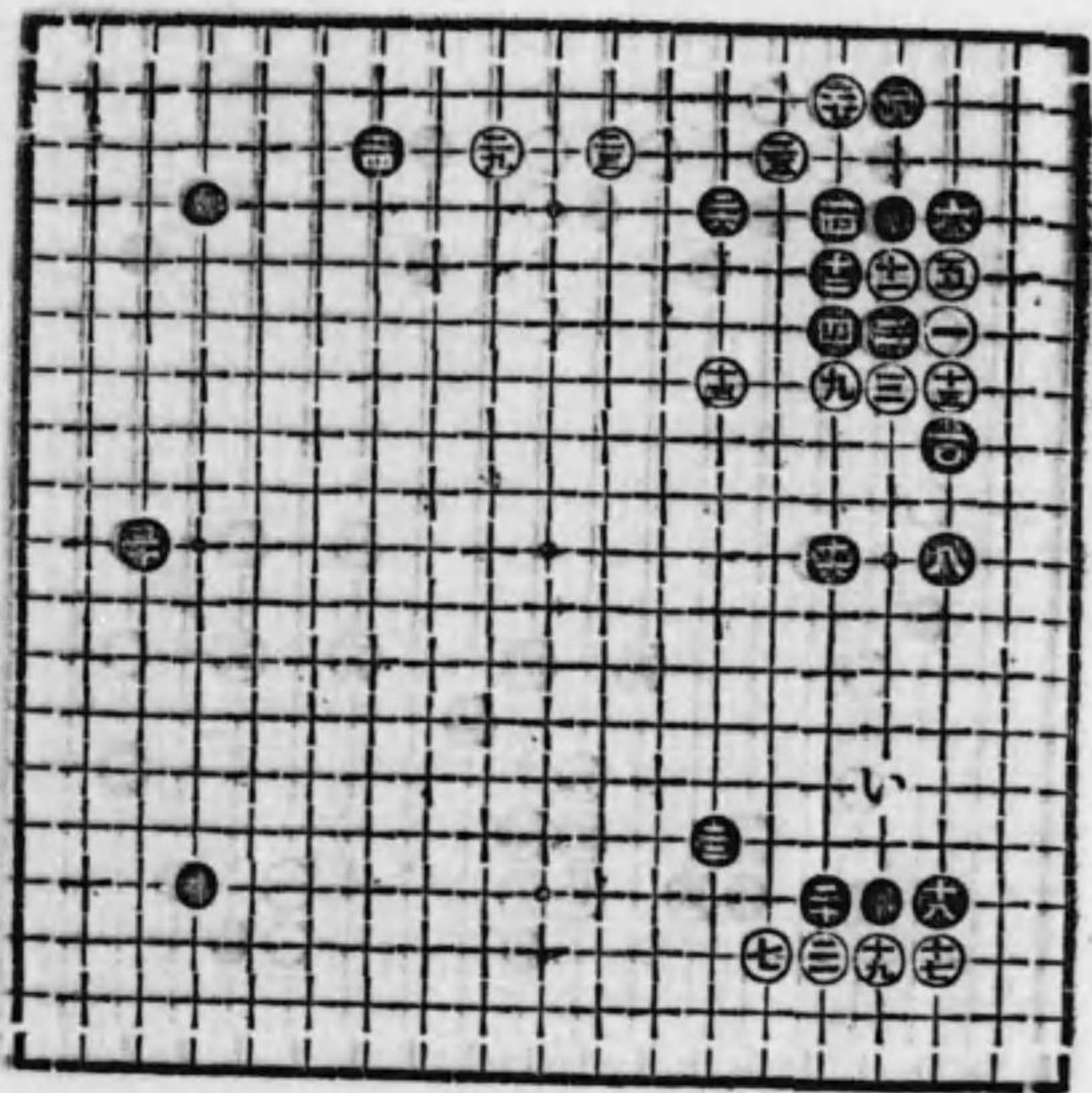
前頁の續

黒六の打方よし  
黒十六よし



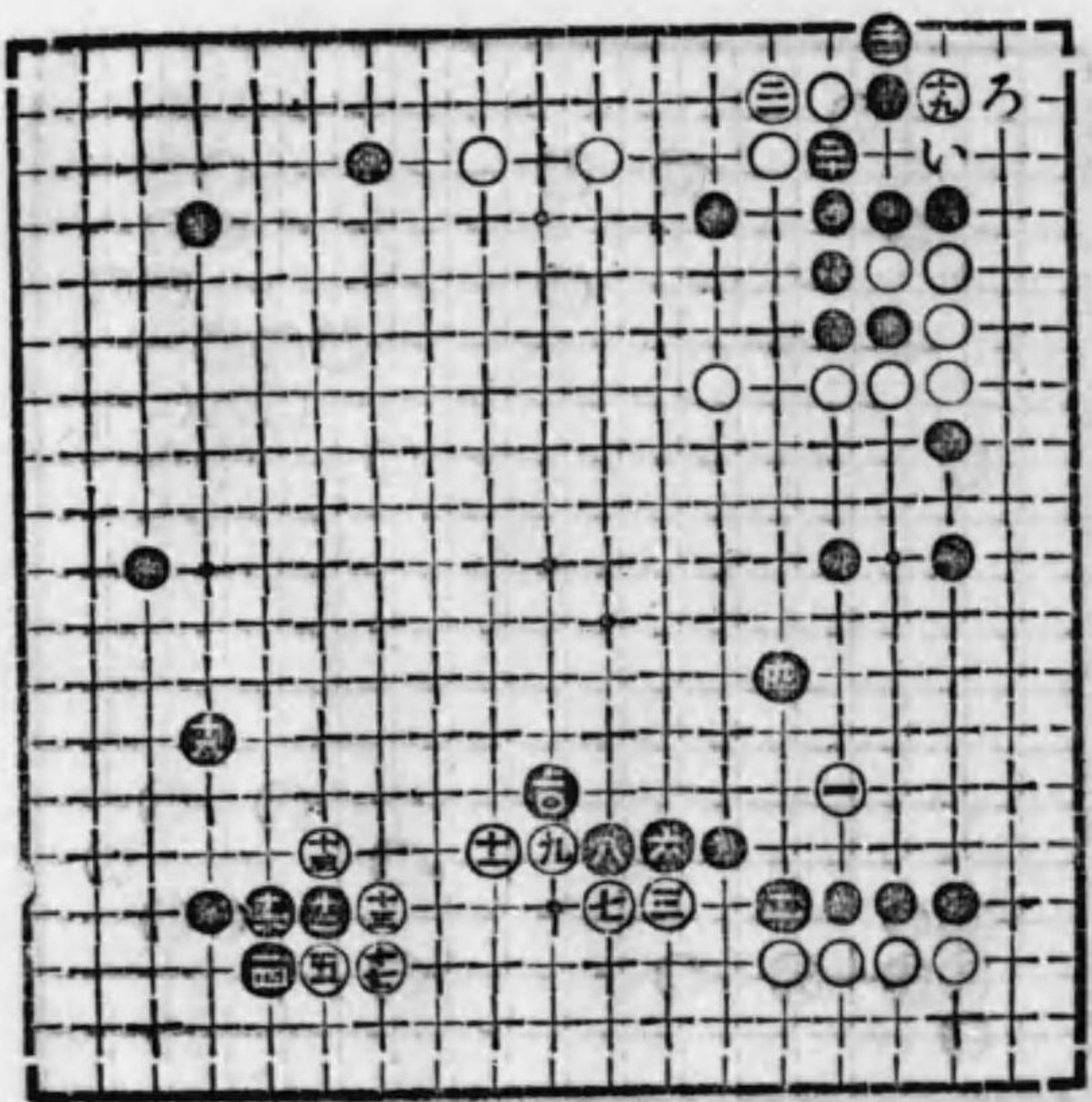
四子

黒十四此場合堅くしてよし  
黒十六はい印に打つもよし



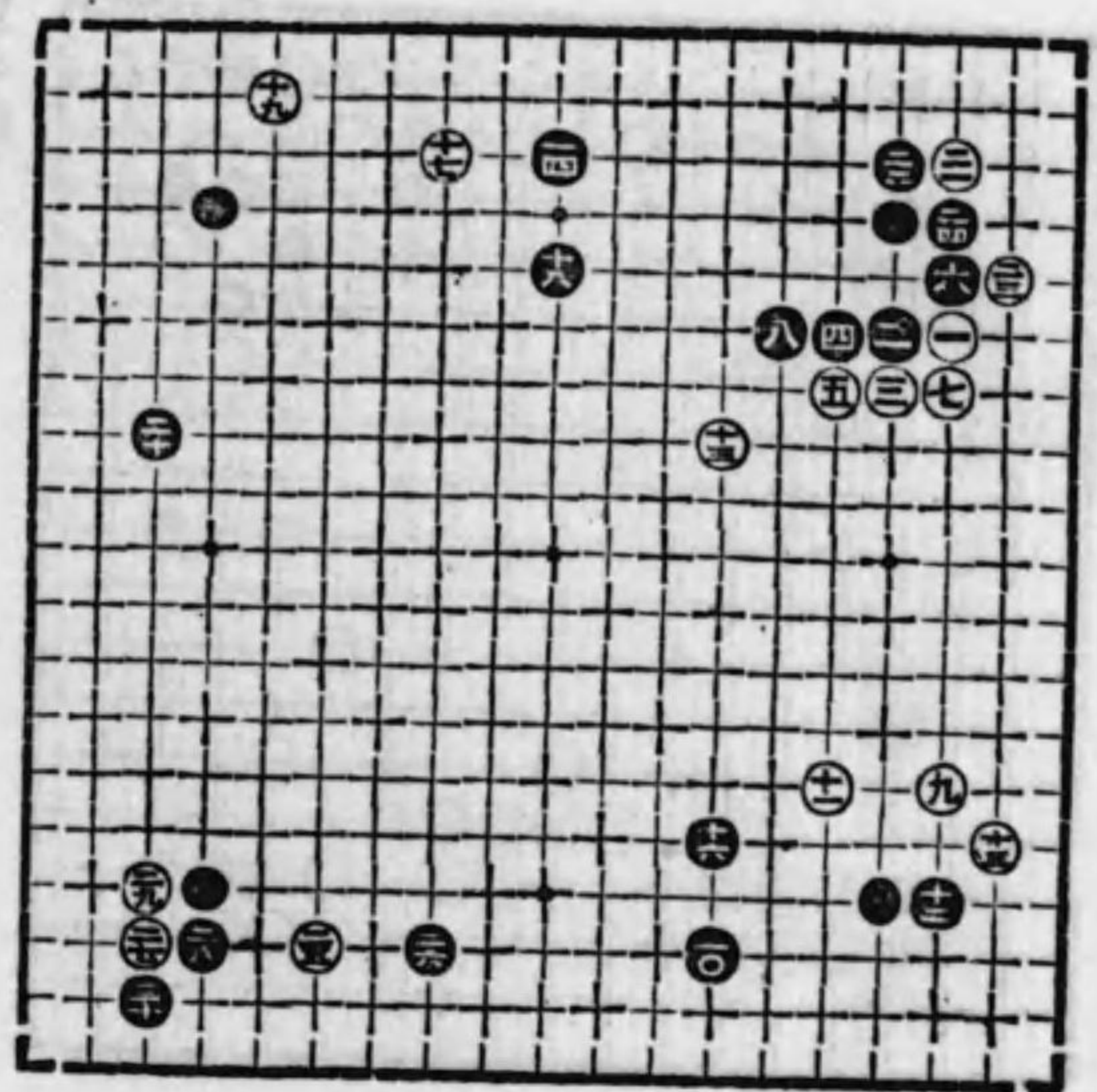
前頁の續き

黒六及び八と打ちて十二及び十四と  
打ちたる手段大によし  
黒二十二と打ちたる後白若しいに來  
らば黒はろに應ず可し



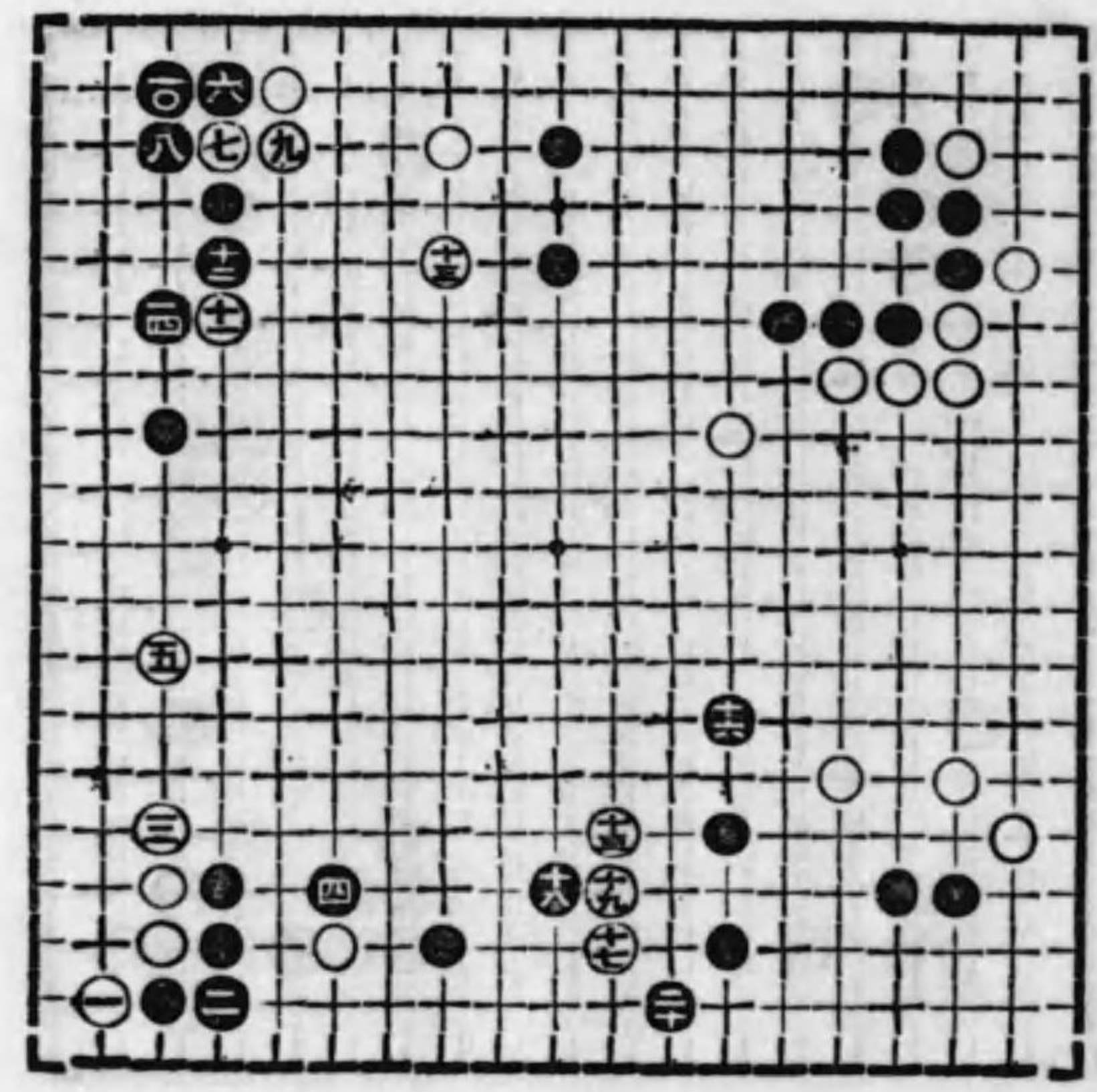
四子

黒二十二は二十三へ打つよし  
 黒三十の手よし



前頁の續き

黒十二は普通には悪しき型なれ共此  
 場合にはよし  
 黒十八と覗き二十と打ちたる手段よ  
 し

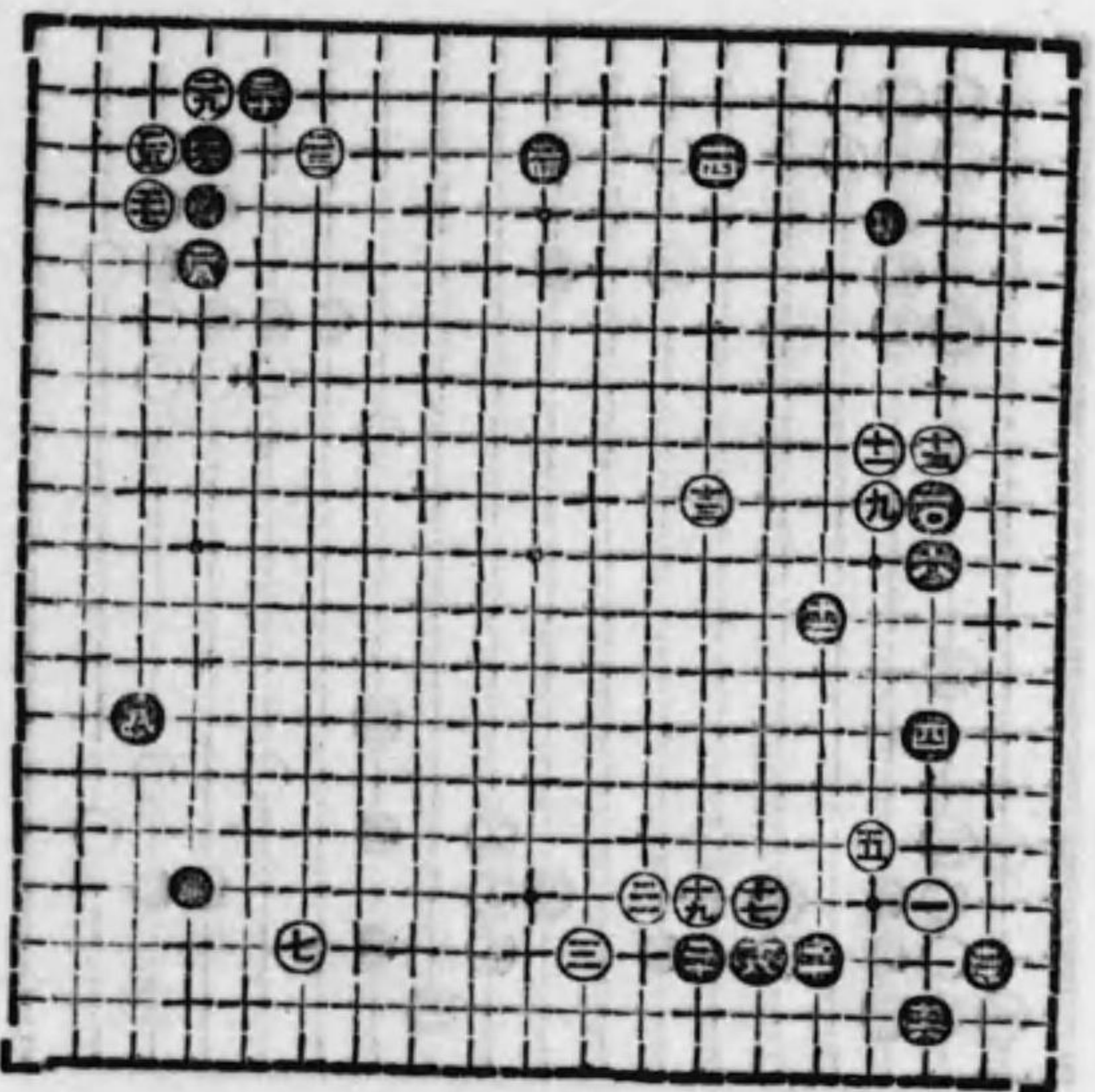


# 三子

黒十六の手良し

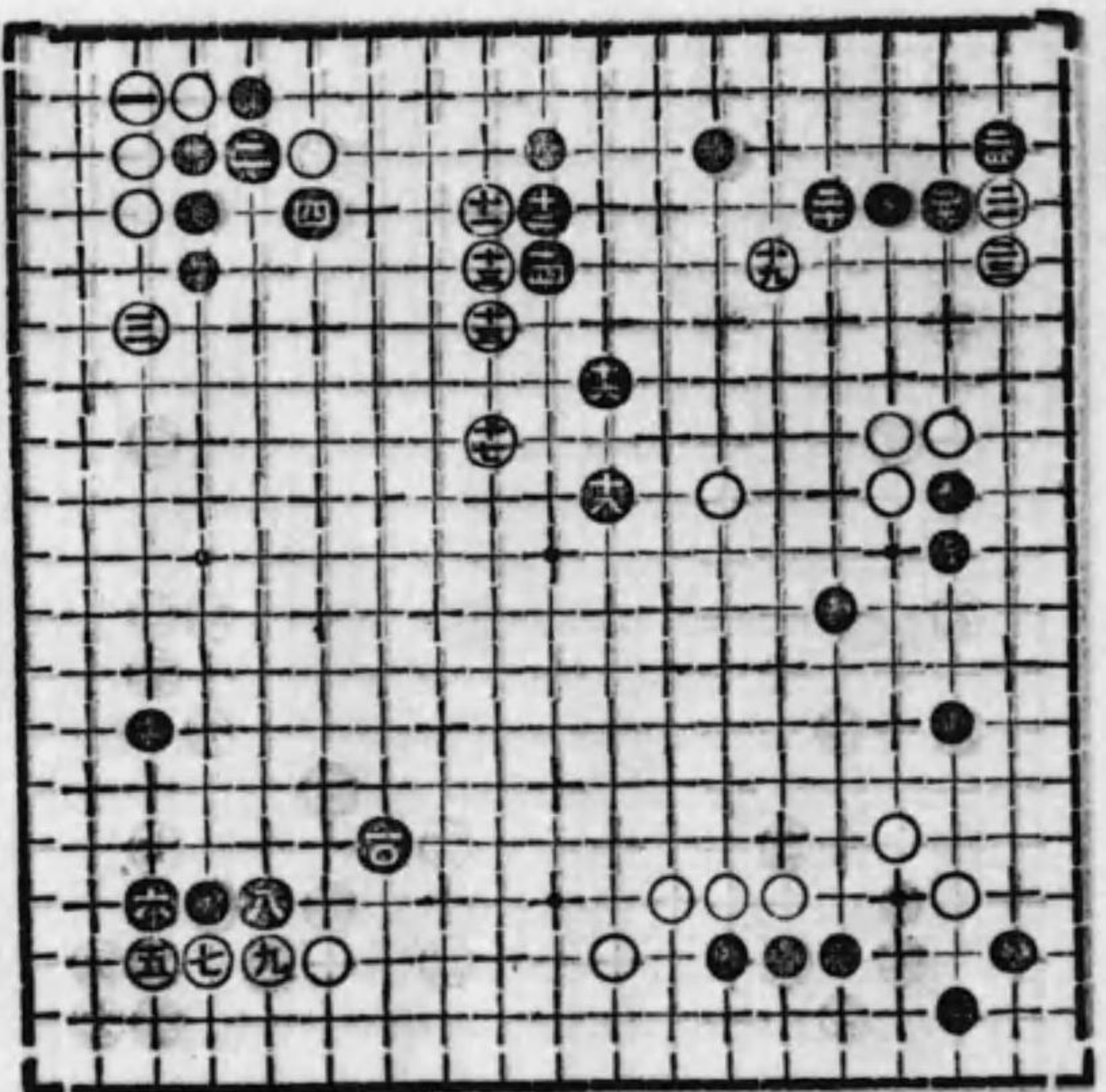
黒二十二の手手抜しても差支なければ  
 とも三子も置く強敵には斯くて堅く  
 してよし

黒二十四は普通には好まざる手なれ  
 共此場合にはよし



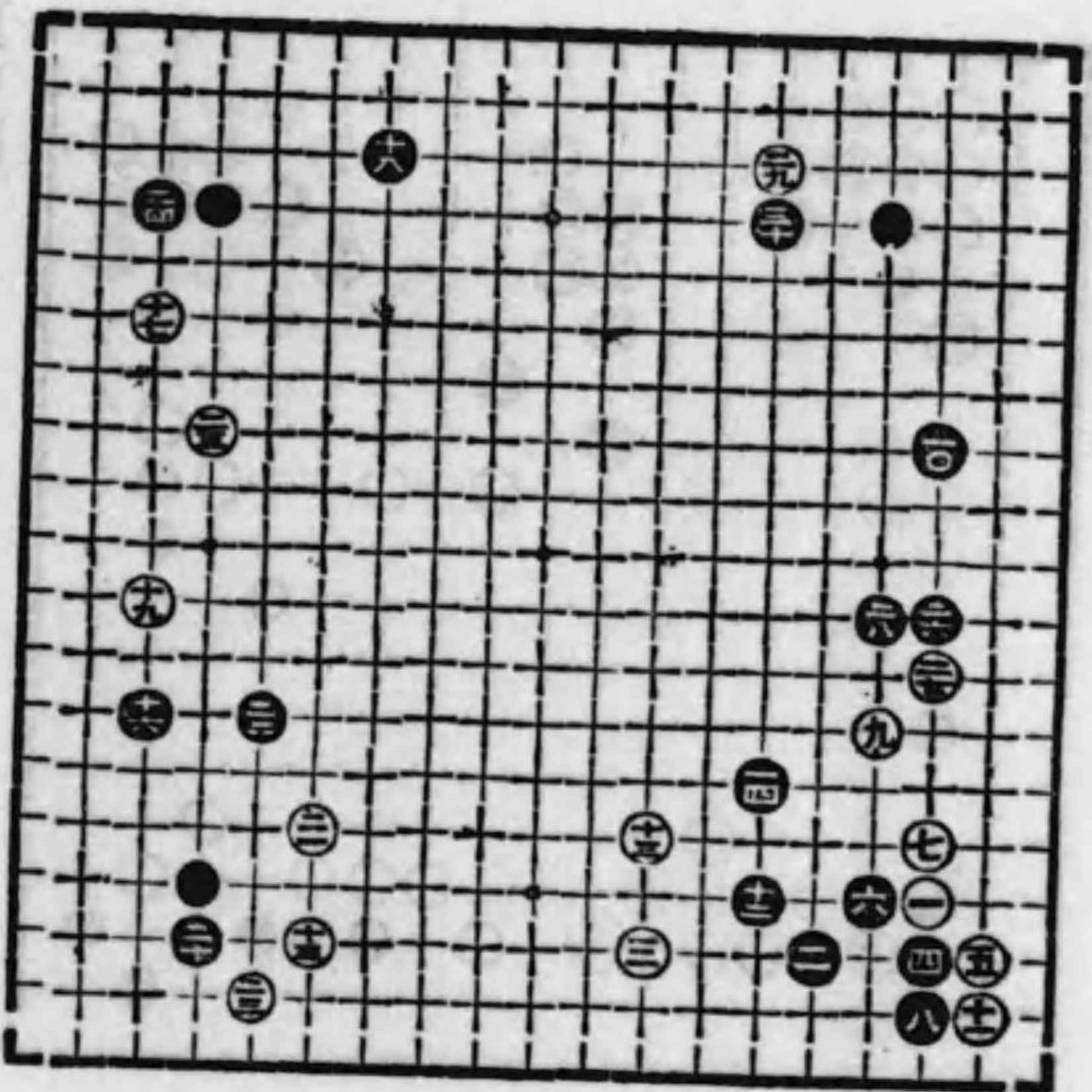
# 前頁の續

黒六普通には好まざる手なれ共此場  
 合差支へなし  
 黒十最もよし



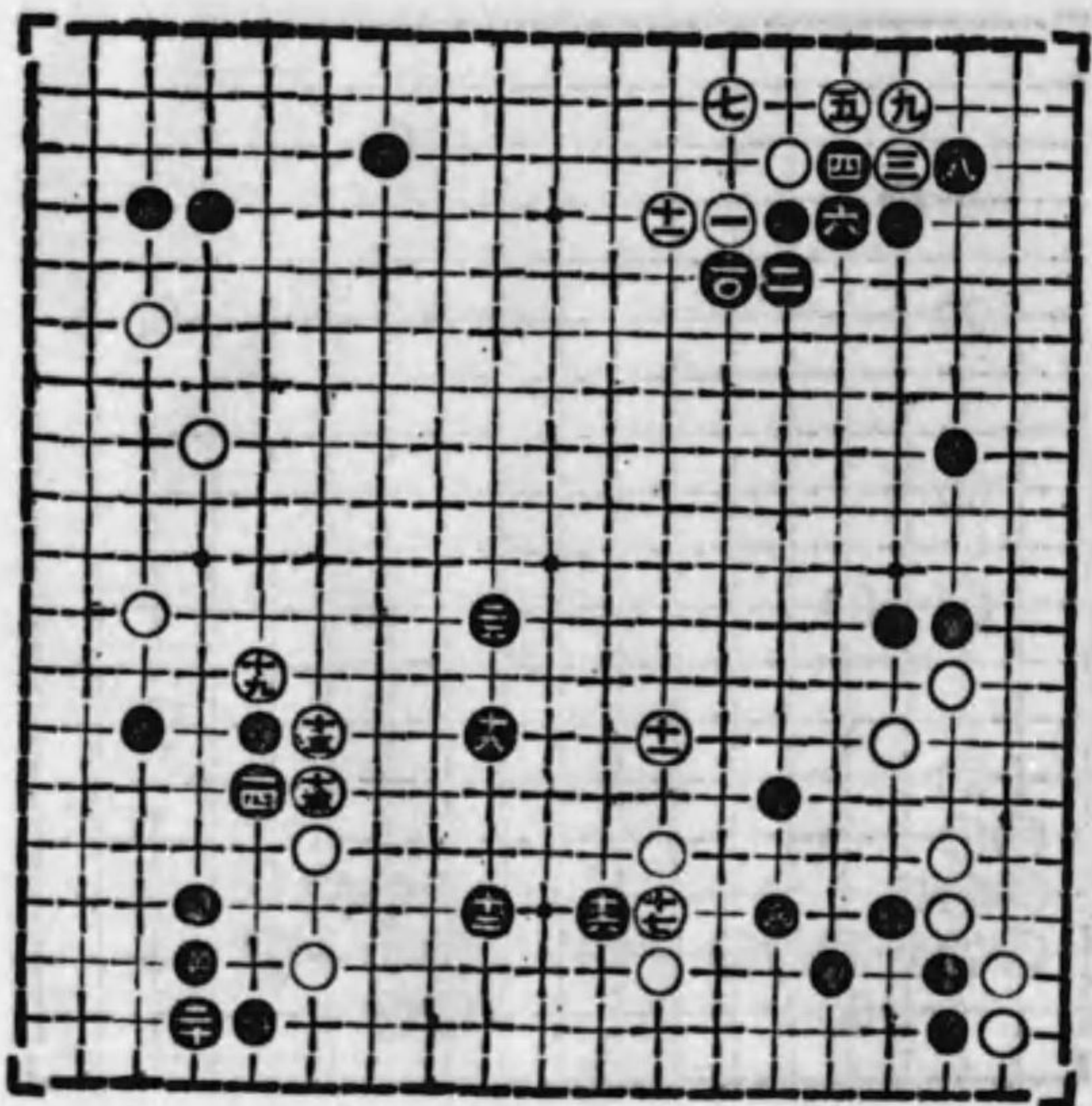
三子

黒十二の手よし



前頁の續き

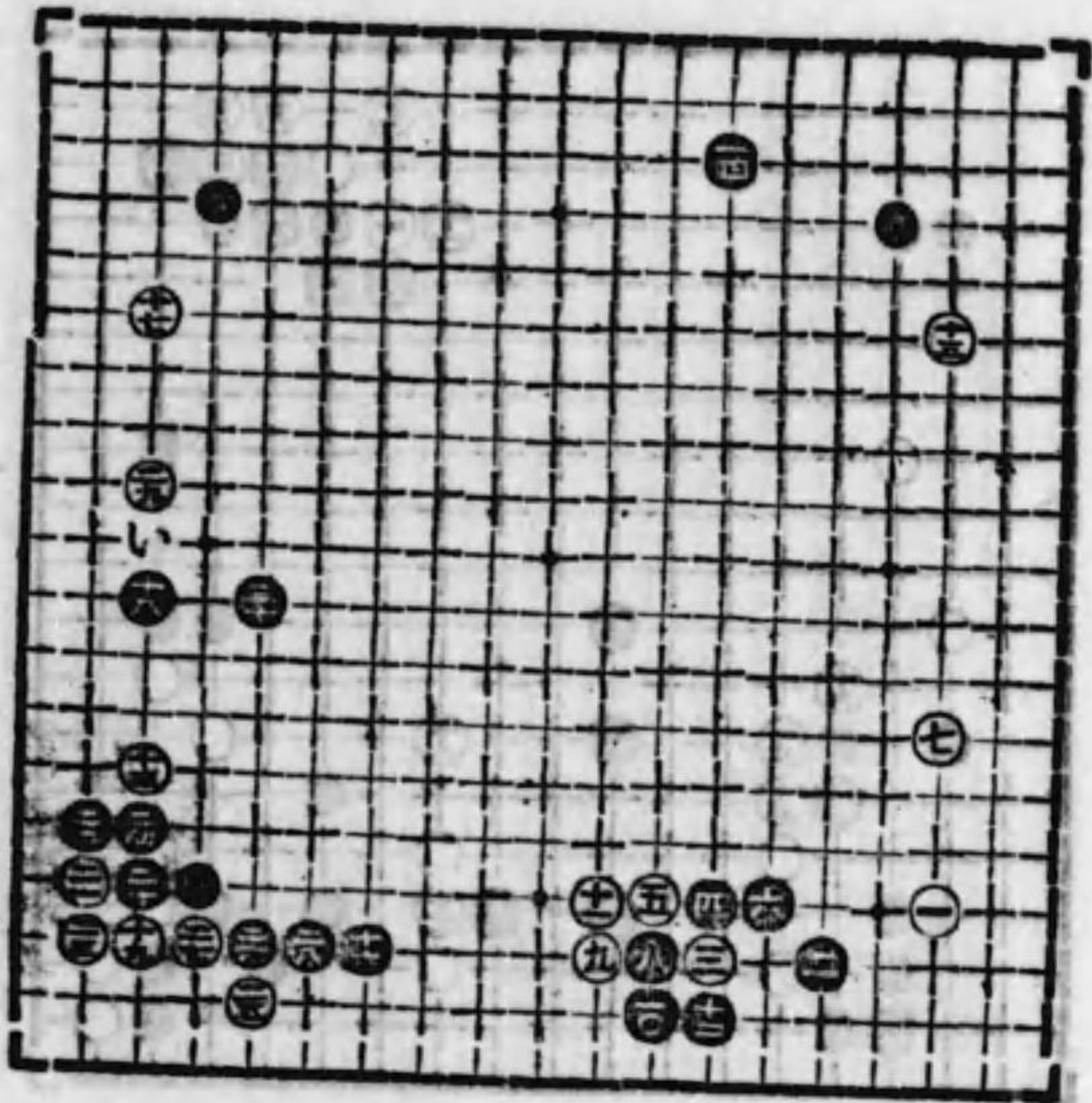
黒十二の打込場合大によし  
 このいしたてこより  
 此石立古風なれ共總て初め堅く打ち  
 て中頂より強く打つ手段最もよし



三子

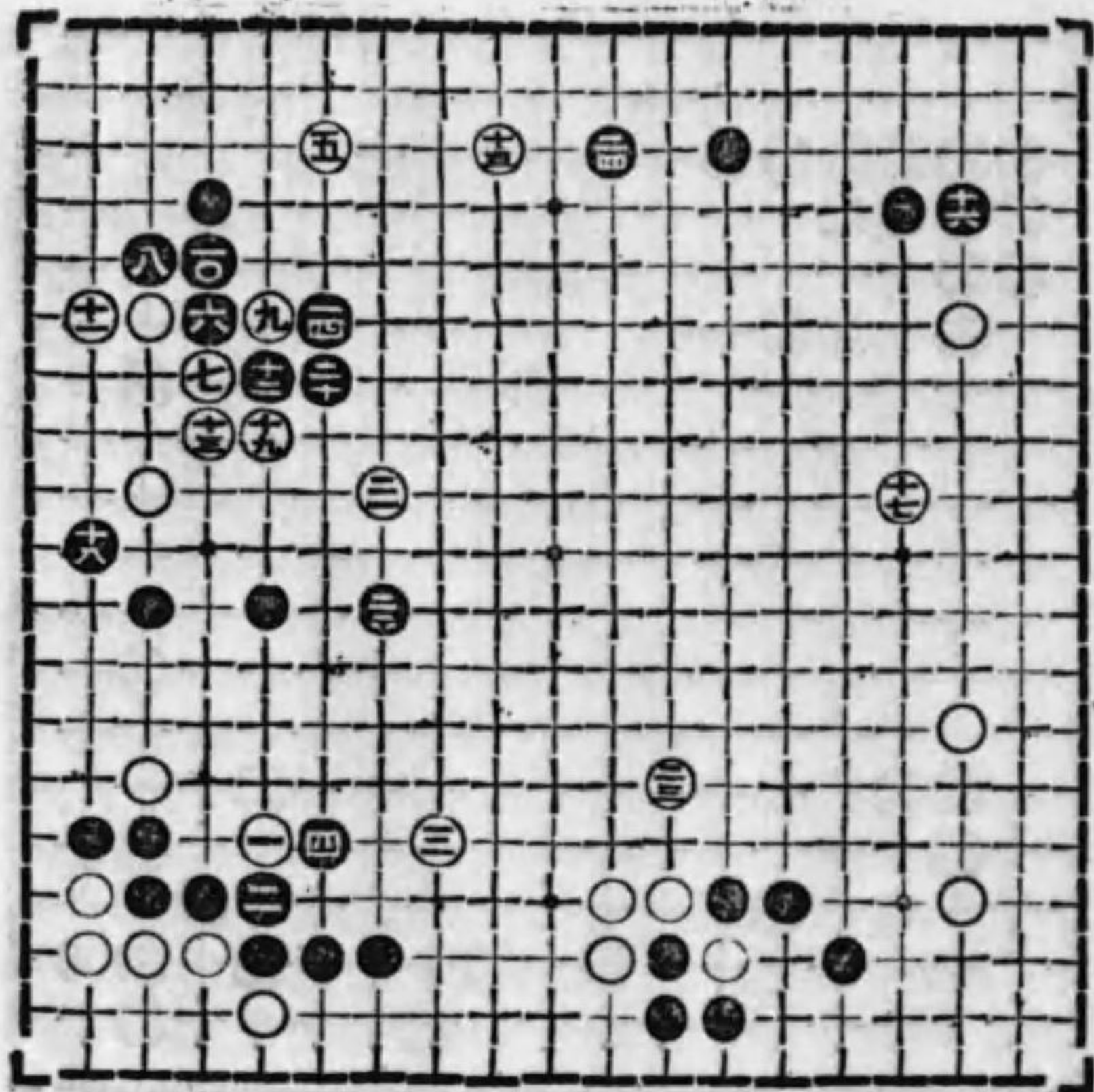
黒四と打ち六と引ひて堅く打つ手三子の強敵にはよし互先の時には見合すべし

黒十六はい印へ打つも面白し

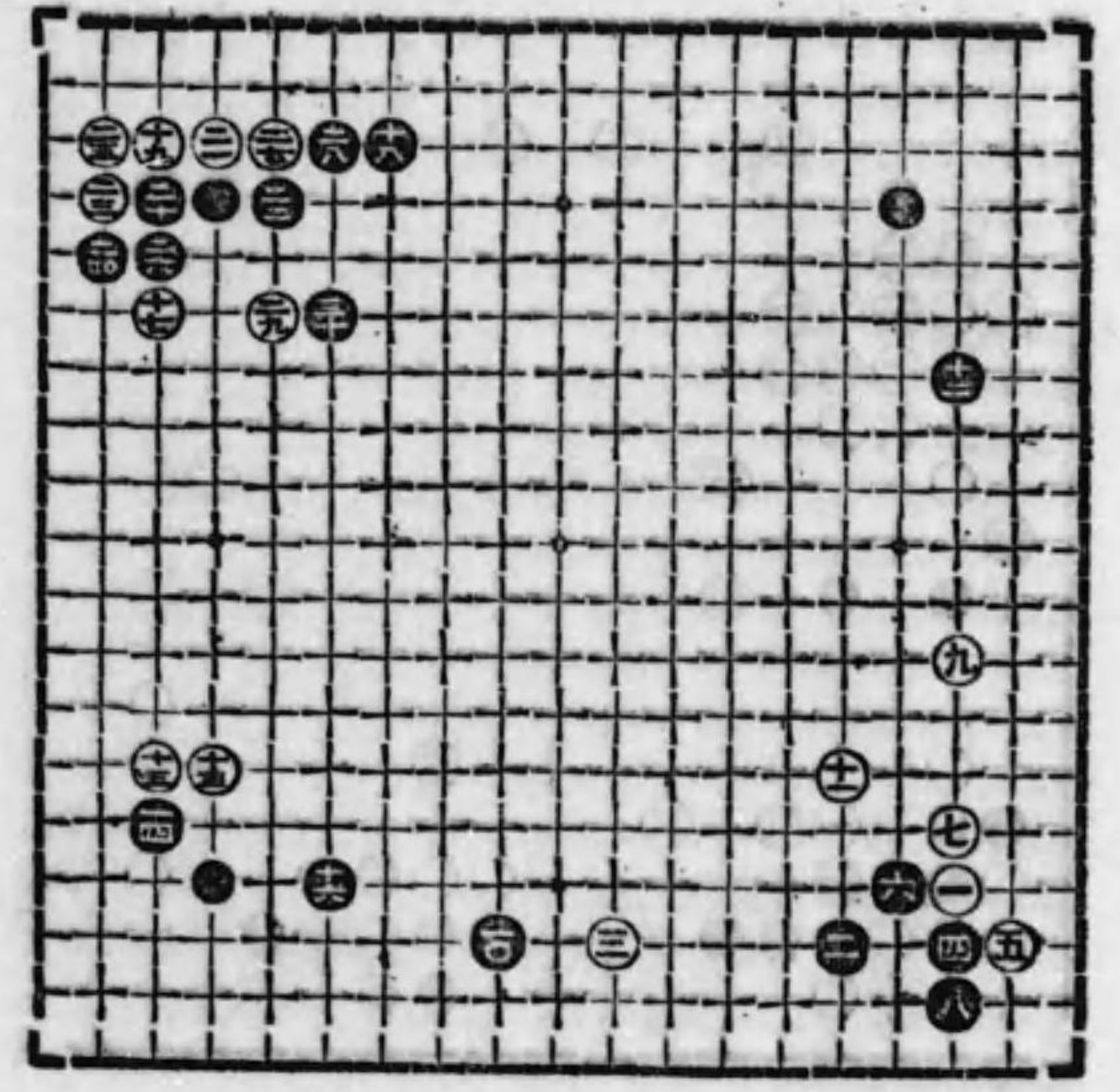


前頁の續き

黒十八の手よし  
黒二十四同

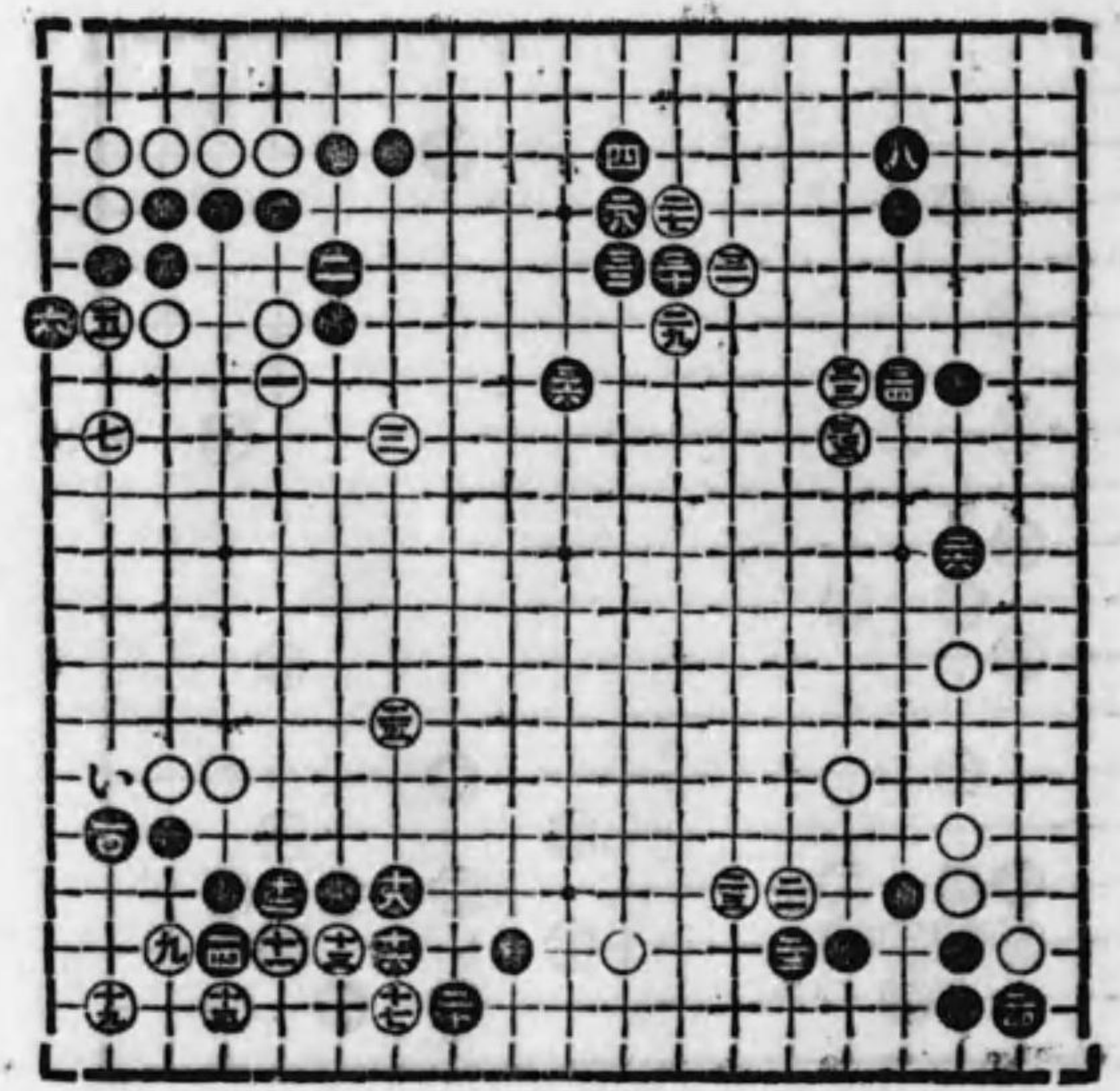


ほんづゐりした  
本圖黒石立ち乙圖まで通覽するに非  
常に堅固なり



前頁の續き

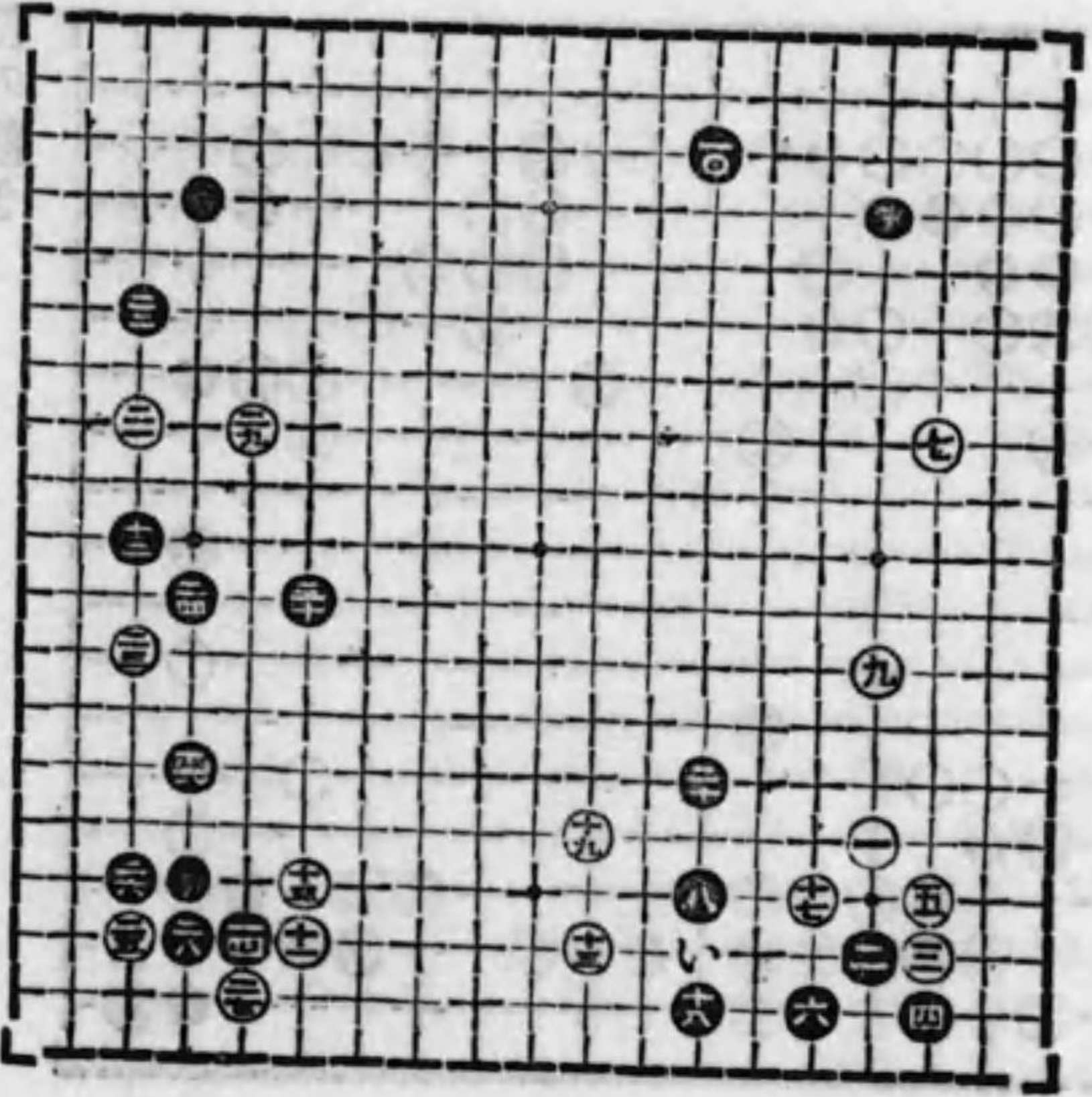
黒八はい印へ打つも差支なし  
黒三六よし





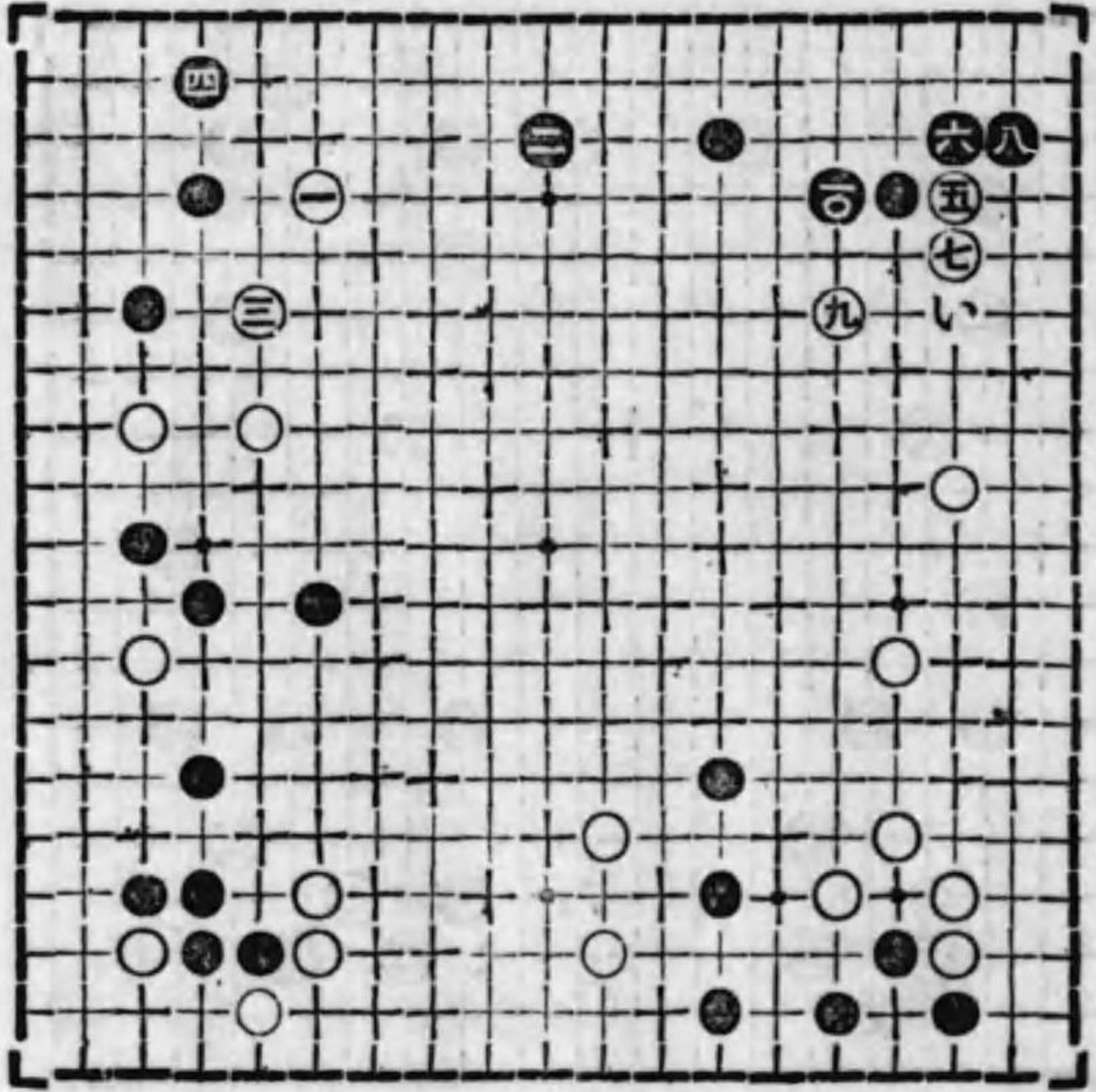
# 三子

黒十八は普通なればい印に打つ處なれども此處にては白より十三と打ちある故に斯く打ちたるなり  
 黒二十六は二十七の處へ打つ可きものなれど既に二十三の打込ある故によし



前頁の續き

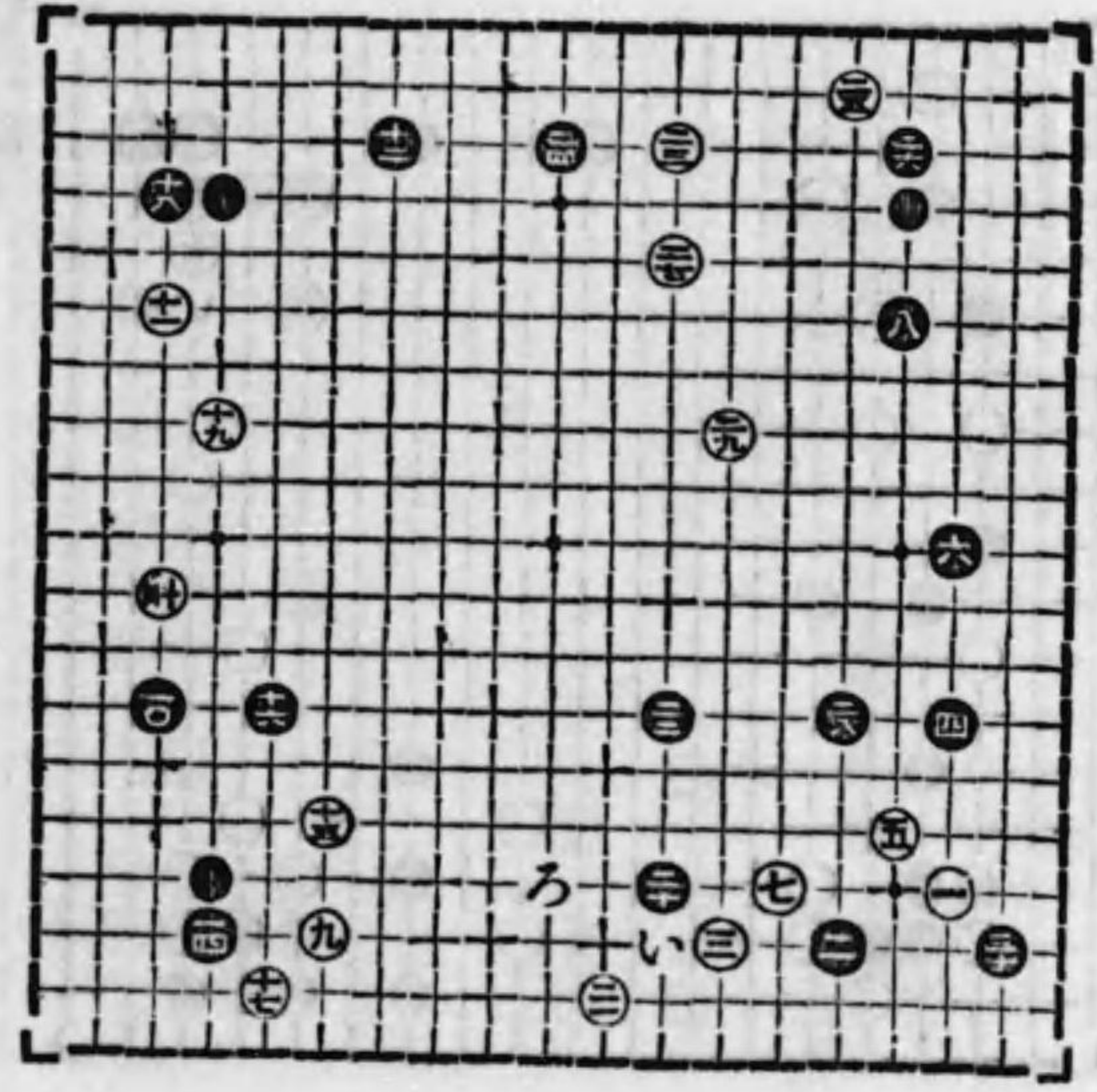
黒二はい印へ打つは最も堅固なる手段なり



# 三子

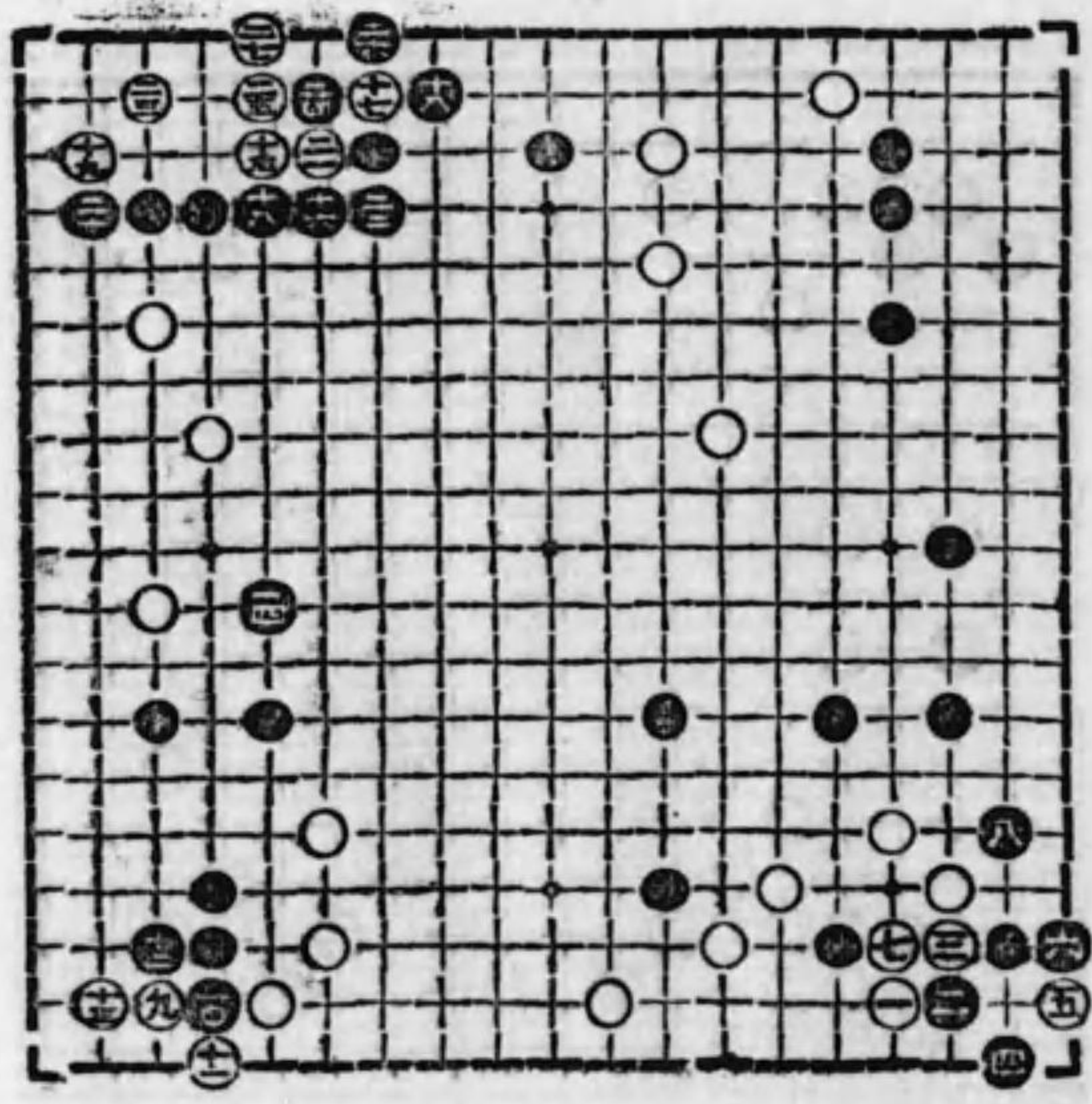
黒二十は輕し

白若しい印へ打たば黒ろ印へ打つ可し



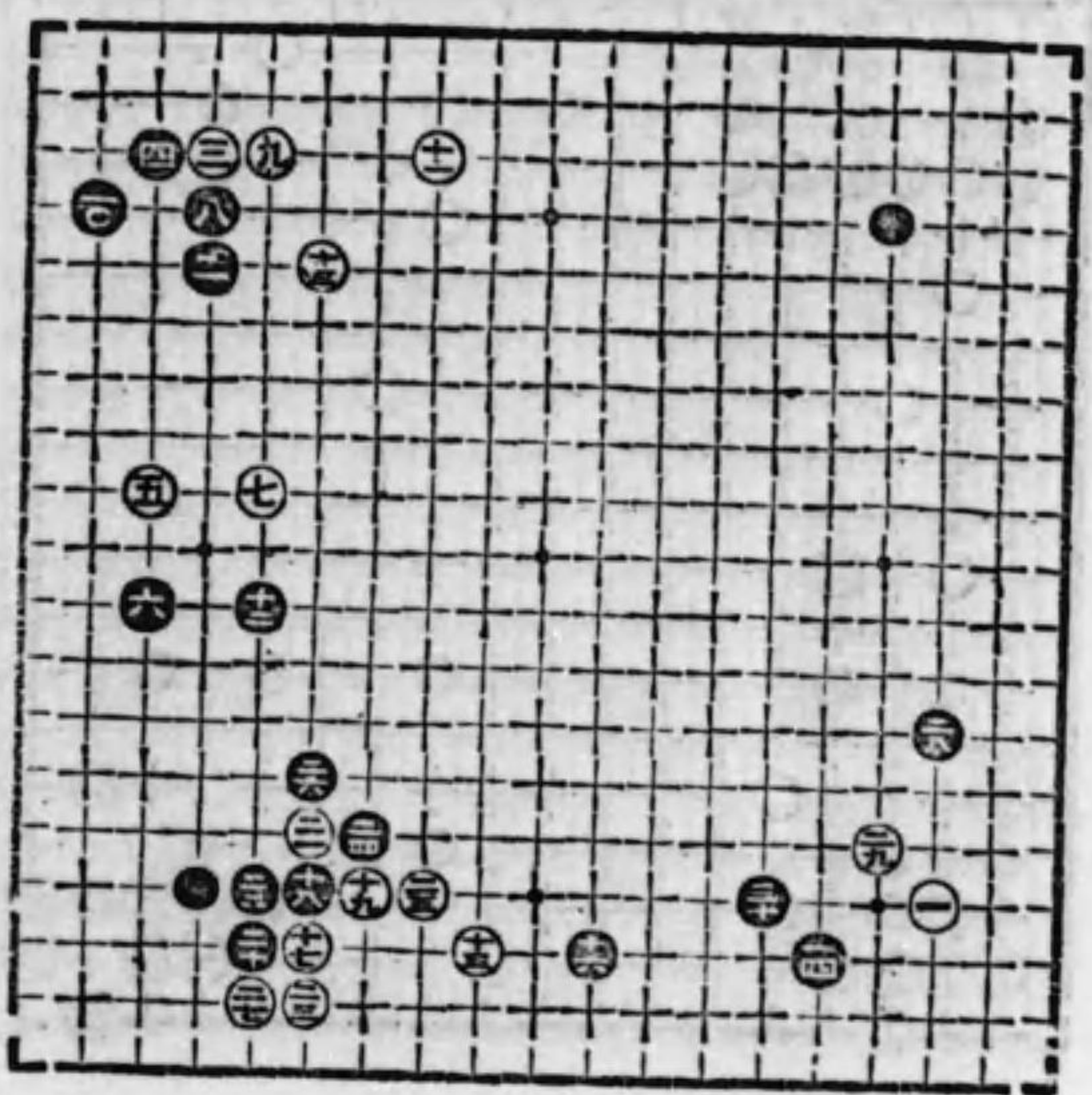
前頁の續き

白十五と打込みたるも黒に外壁を堅められたるは白の方不利なり



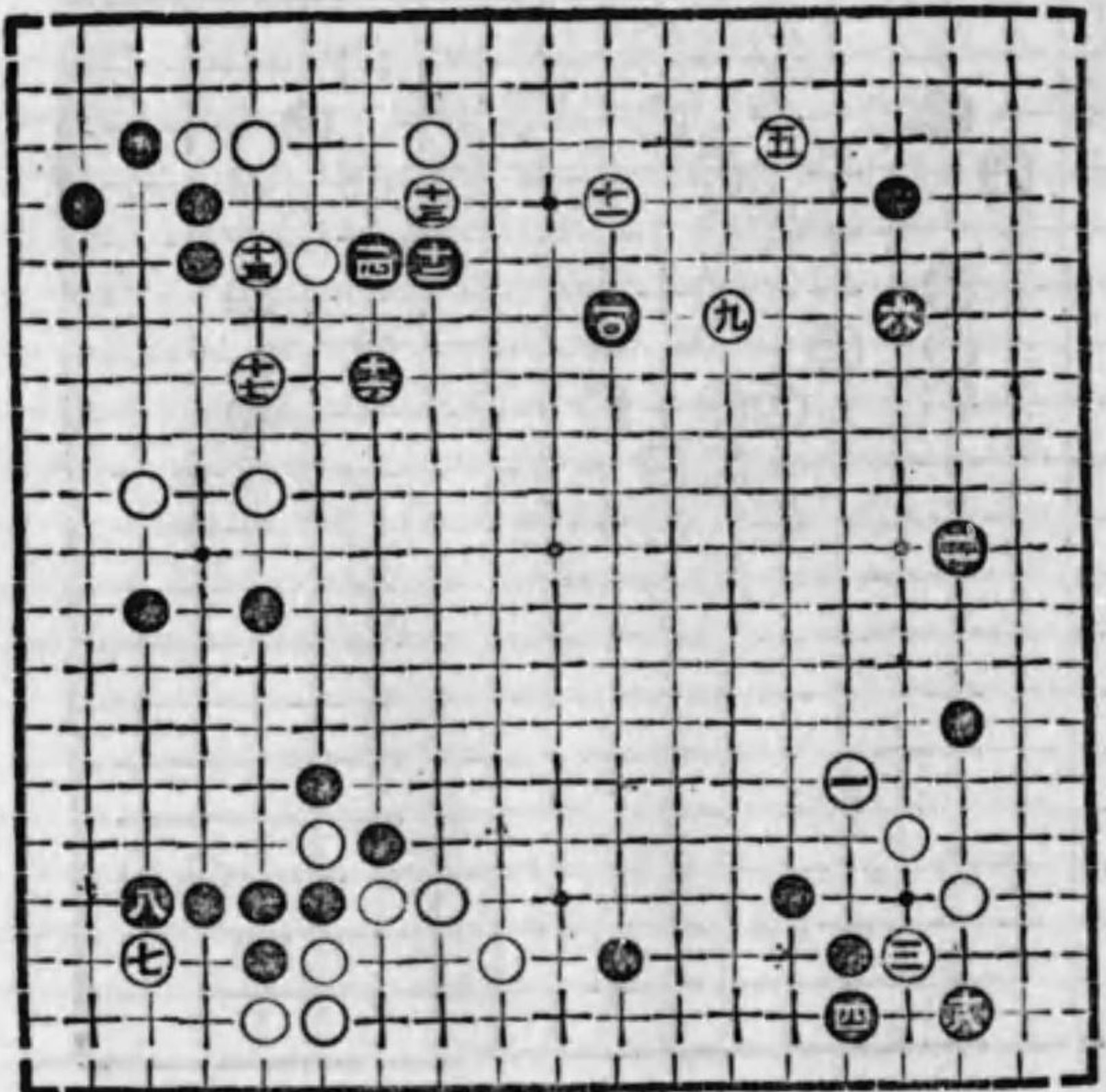
三子

黒十八及び二十と打ちし手段此場合なるが故によし



前頁の續き

黒十及び十二の趣向大によし  
黒十八よし

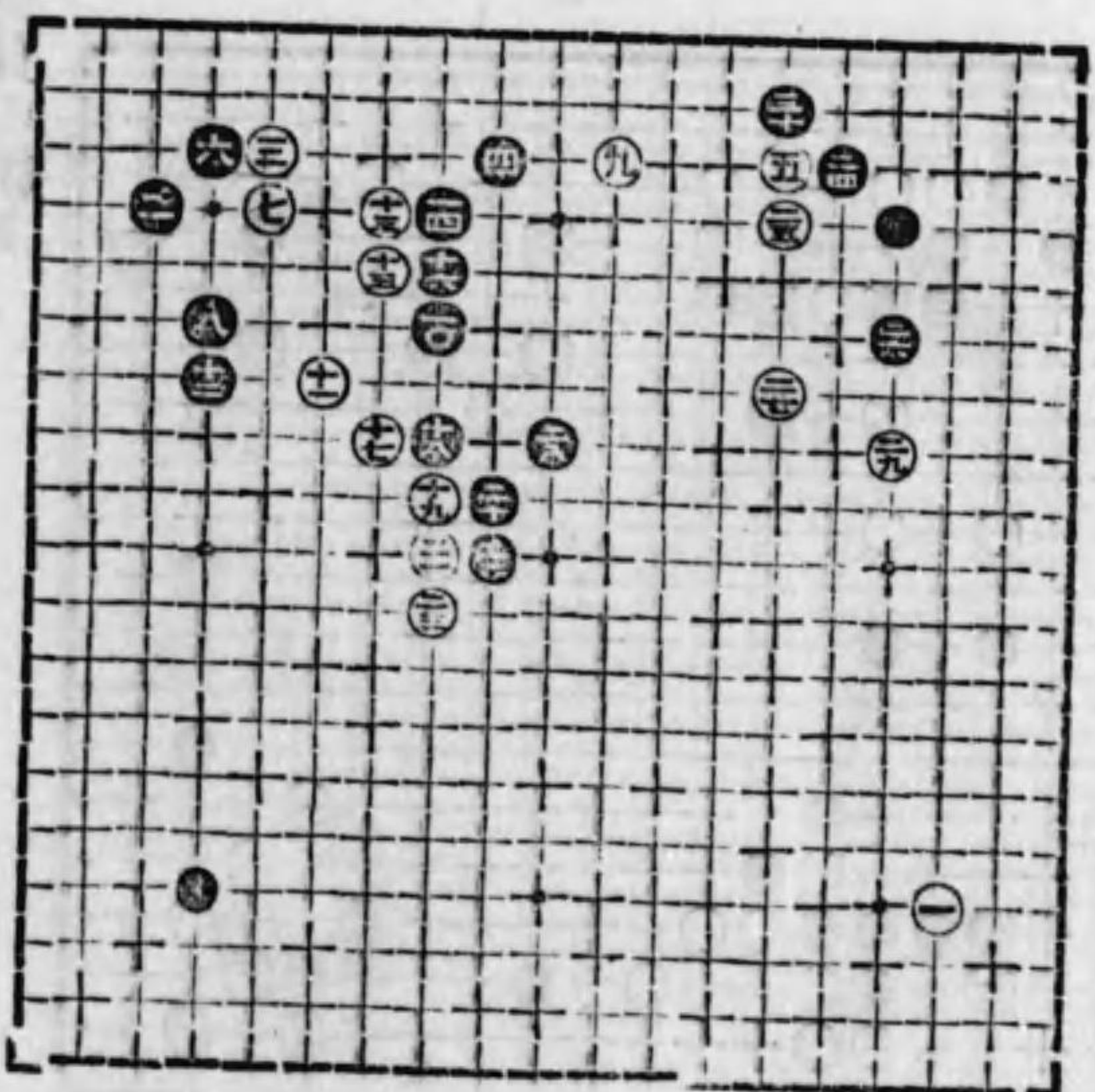


# 三子

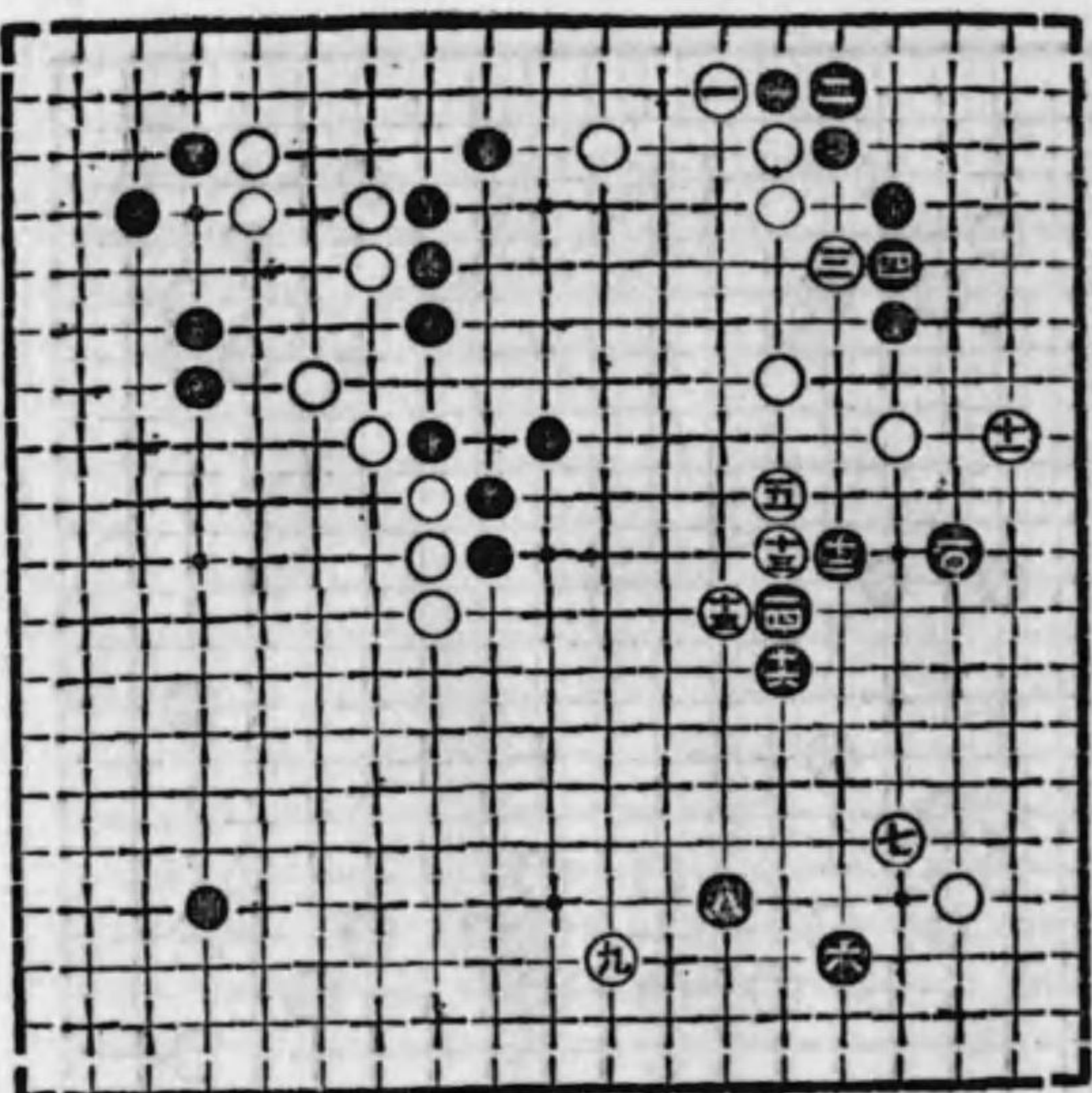
黒十面白し

黒十二平凡に見へれども良き手なり

黒十六もよし

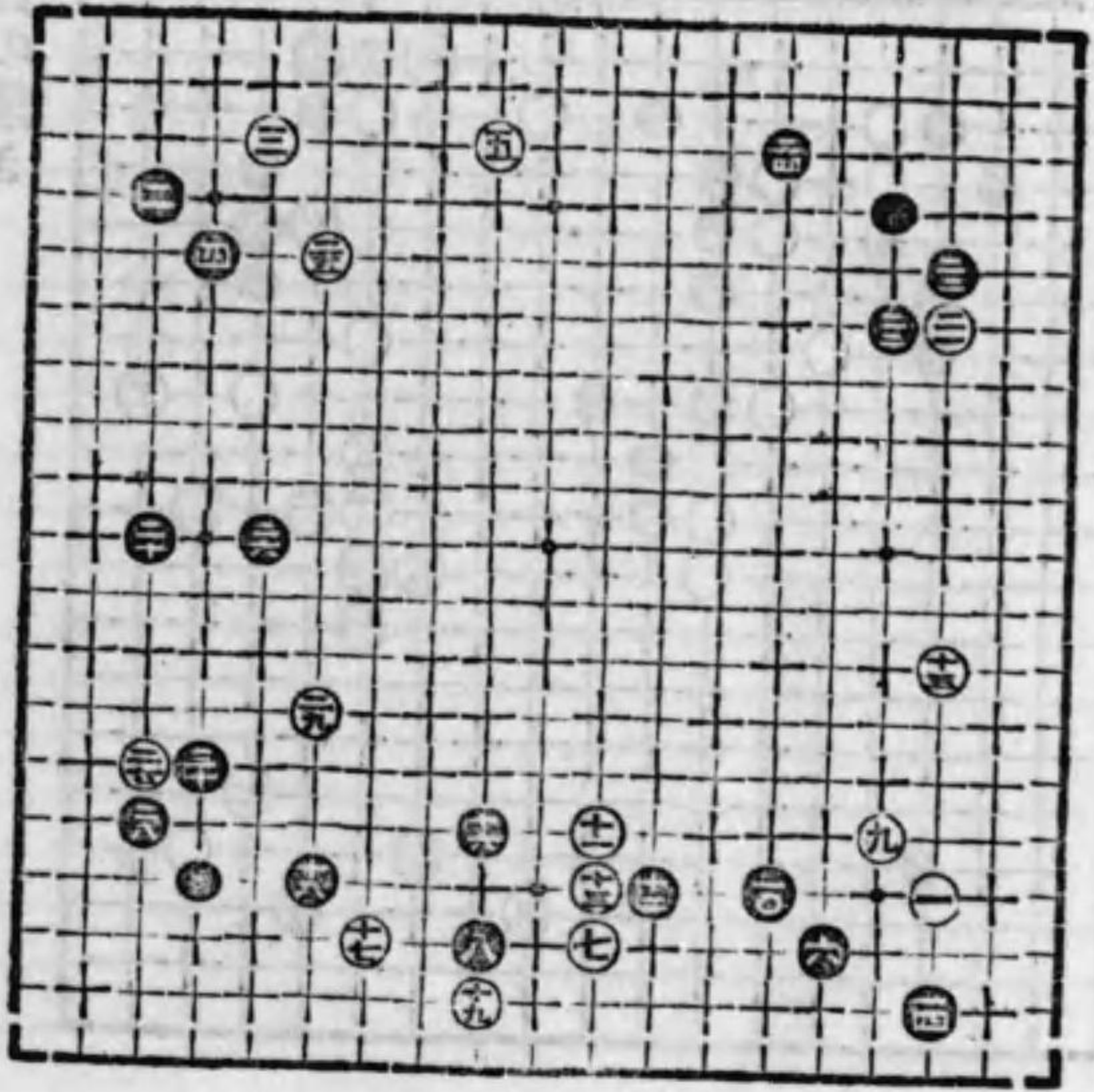


盤上の様子



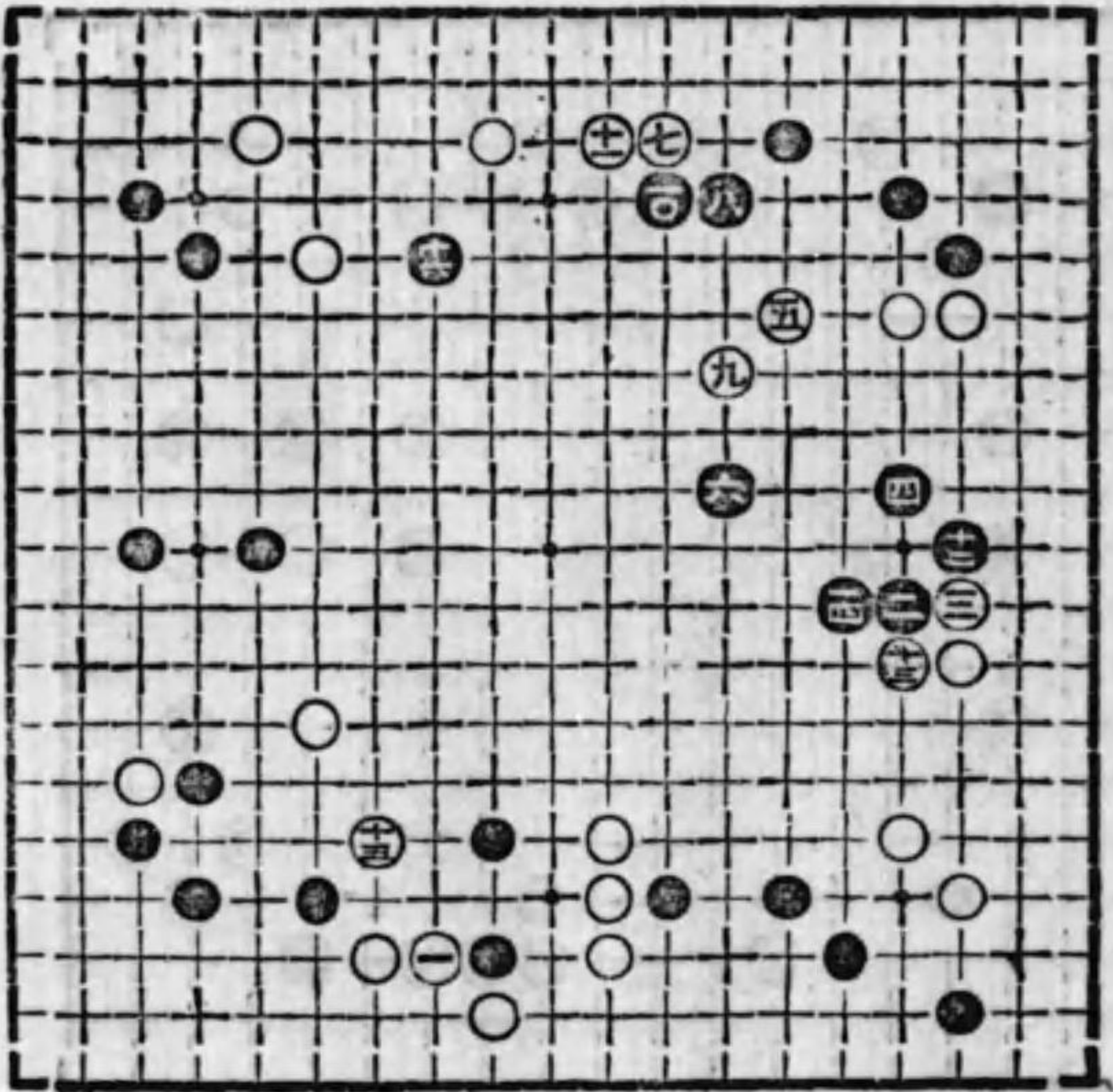
二子

黒十八と打ち二十と打ちたる趣向よし  
白二十九面白し



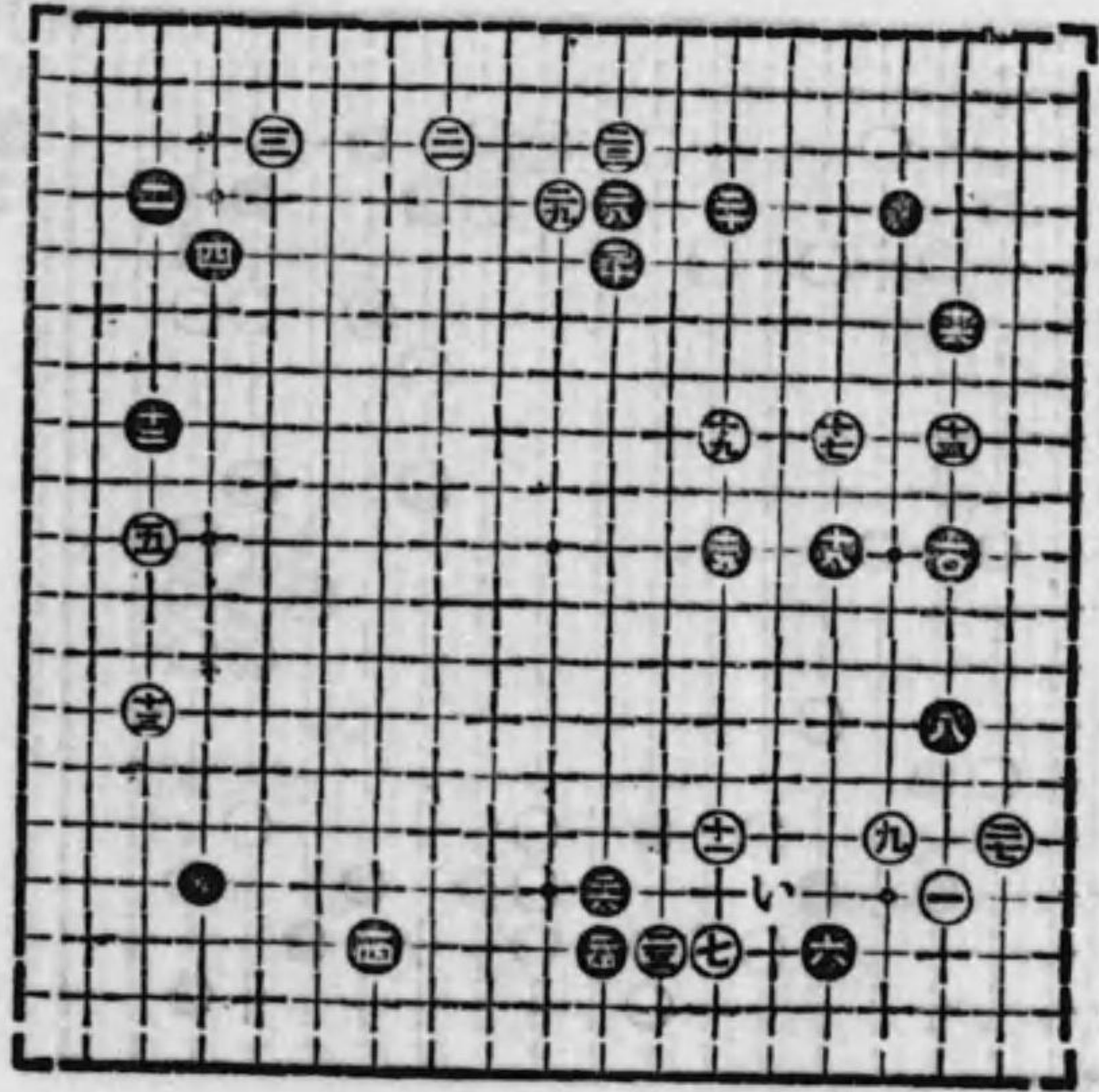
前頁の續き

黒八は普通には好まざる手なれども  
此場合より  
黒四六の手よし



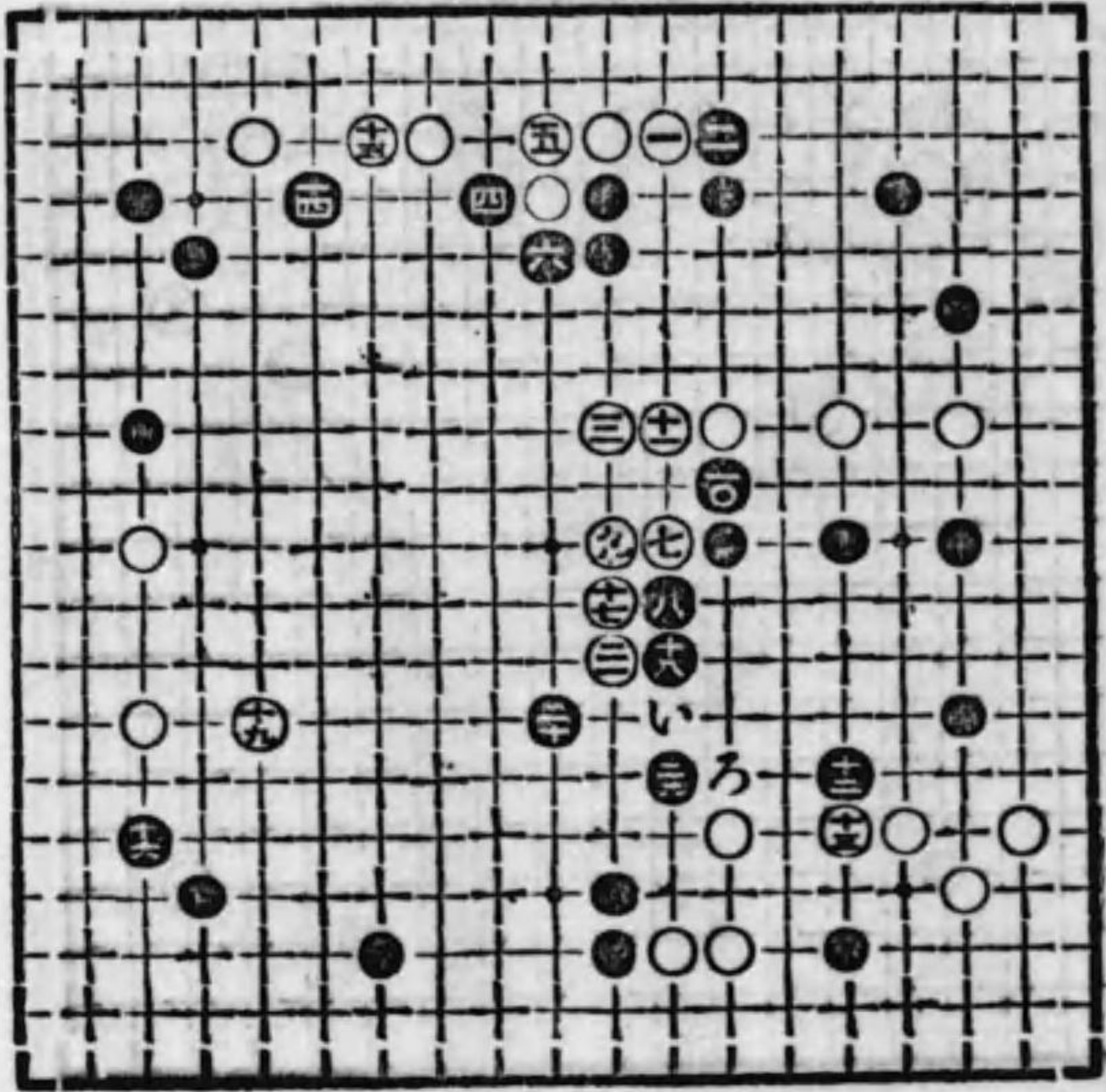
二子

白十一は普通にはい印へ打つ手なれ  
 と劣手に對しては面白し



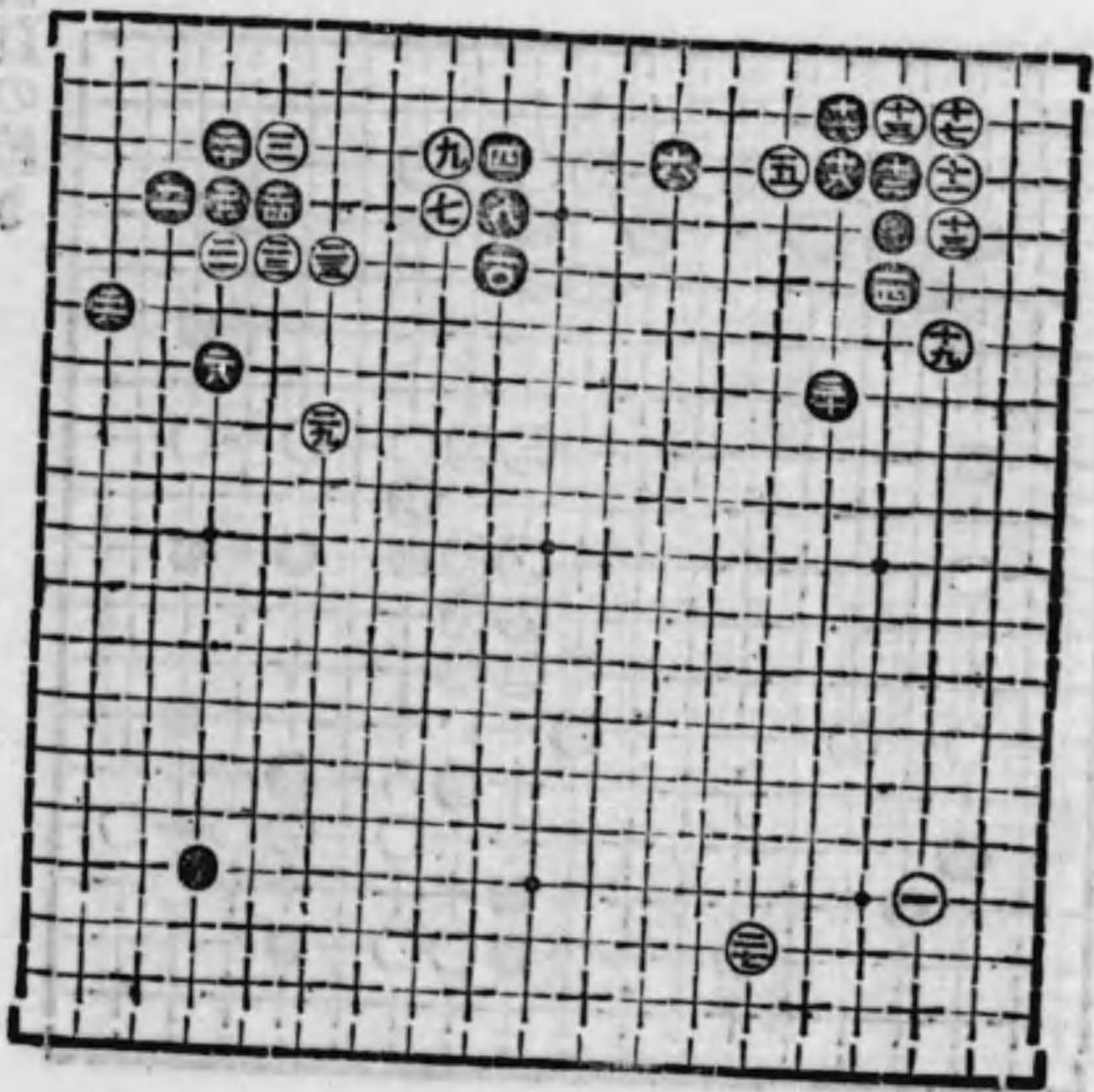
前頁の續き

黒二十と打ち二十二と打ちたる手段  
 面白し白若しい印へ打ち込み來らば  
 ろ印へ打ちて八及び十八の二子を捨  
 てると心得可し



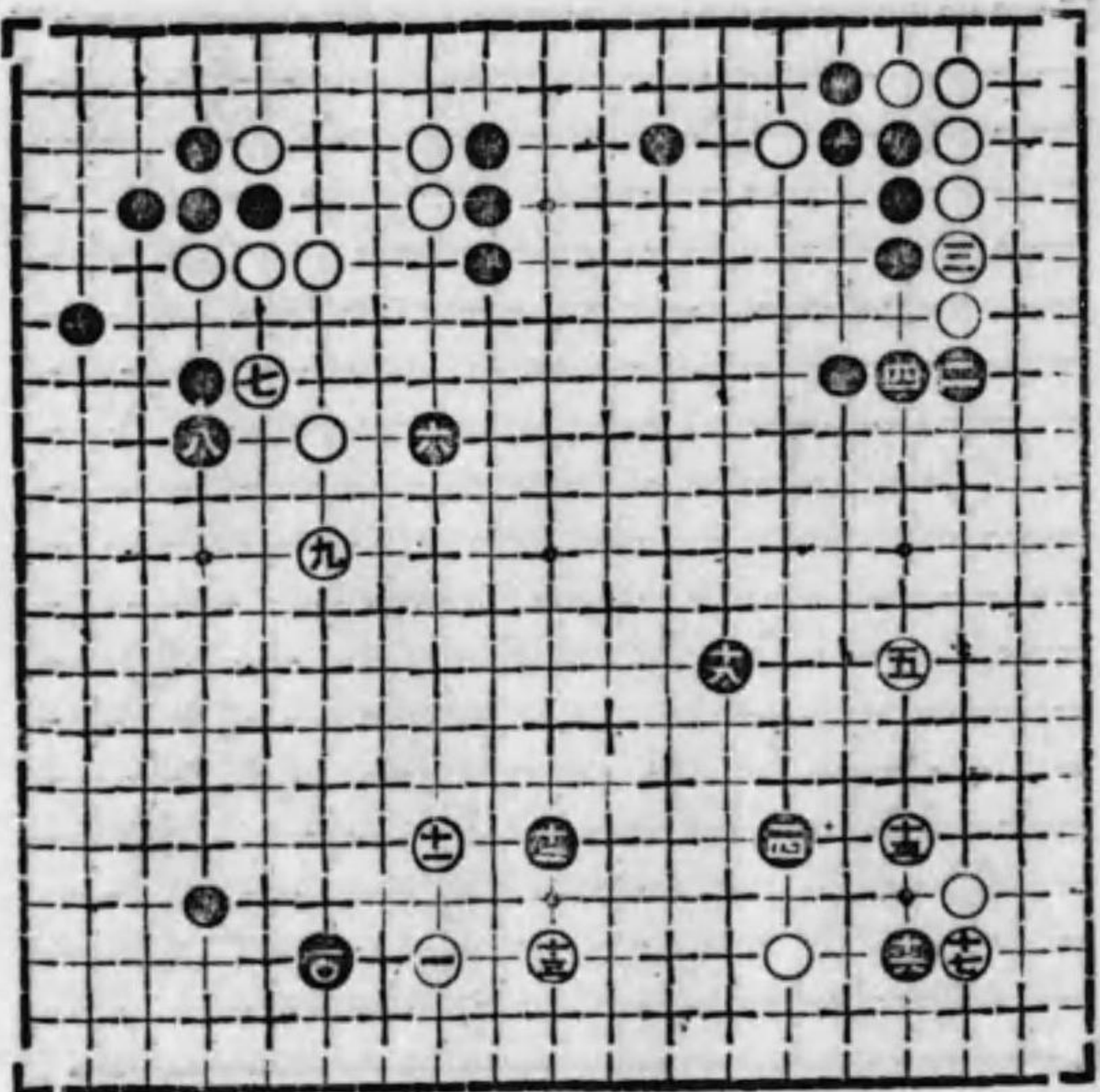
二子

黒二十二の手良し



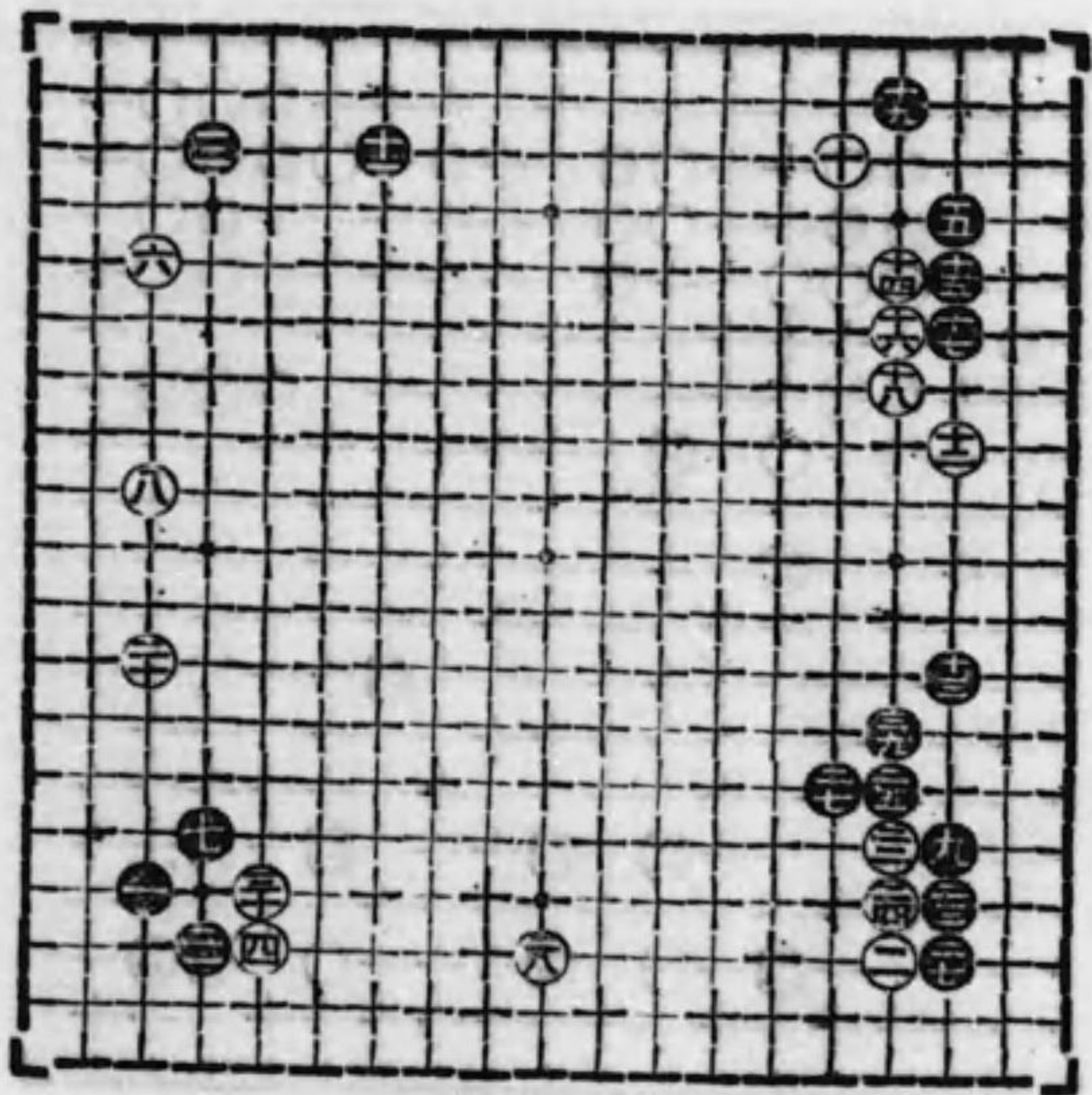
前頁の續き

黒六の手大場を占めつゝ白を壓迫してよし  
黒四十八の手大によし



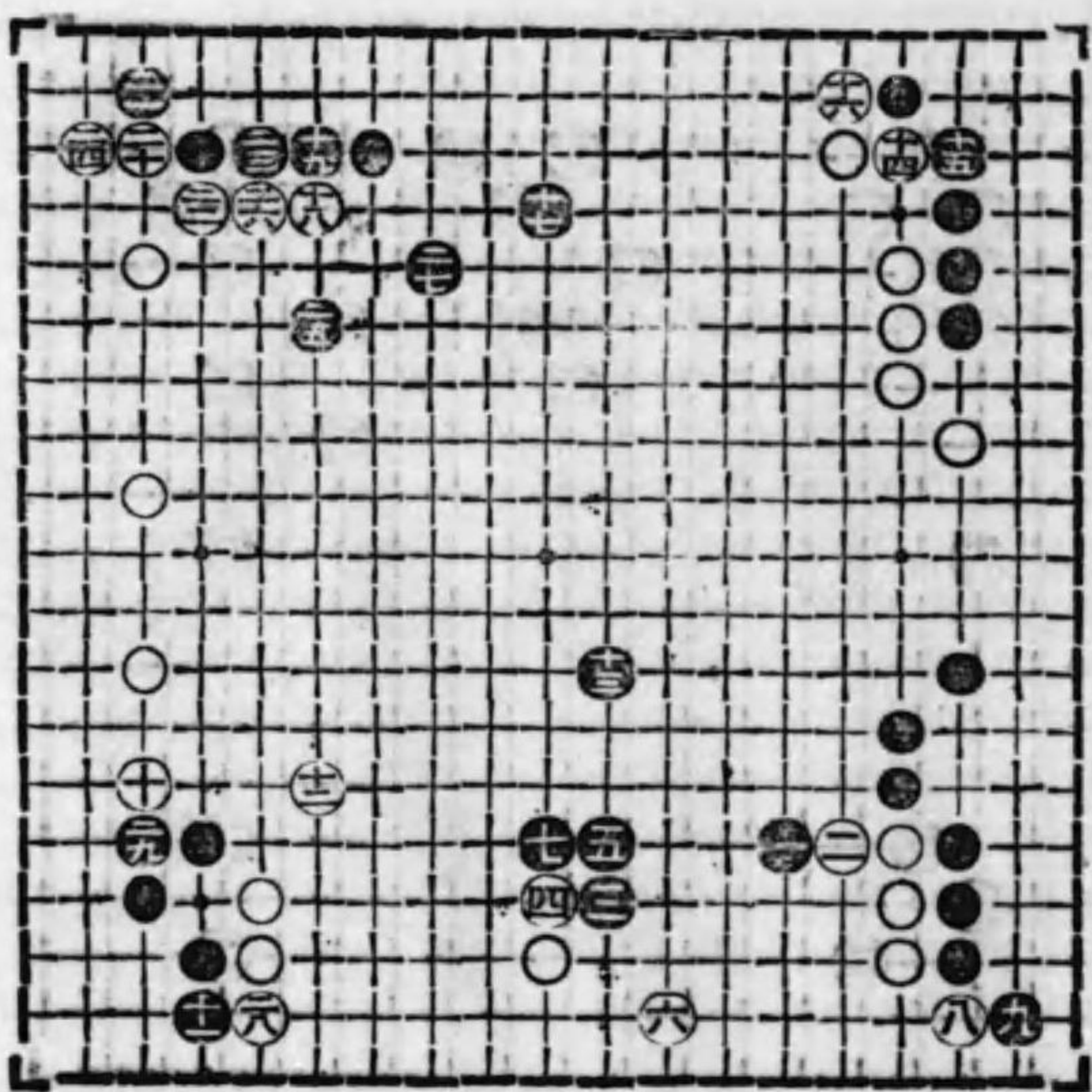
互先

黒十三は十四の處へ打ちてもよし  
 黒二九の手堅くして且發展上大いに  
 よき手なり



前頁の續き

黒二五及び二七の打方よし  
 黒二九の手普通には面白からざるも  
 此處にてはよし



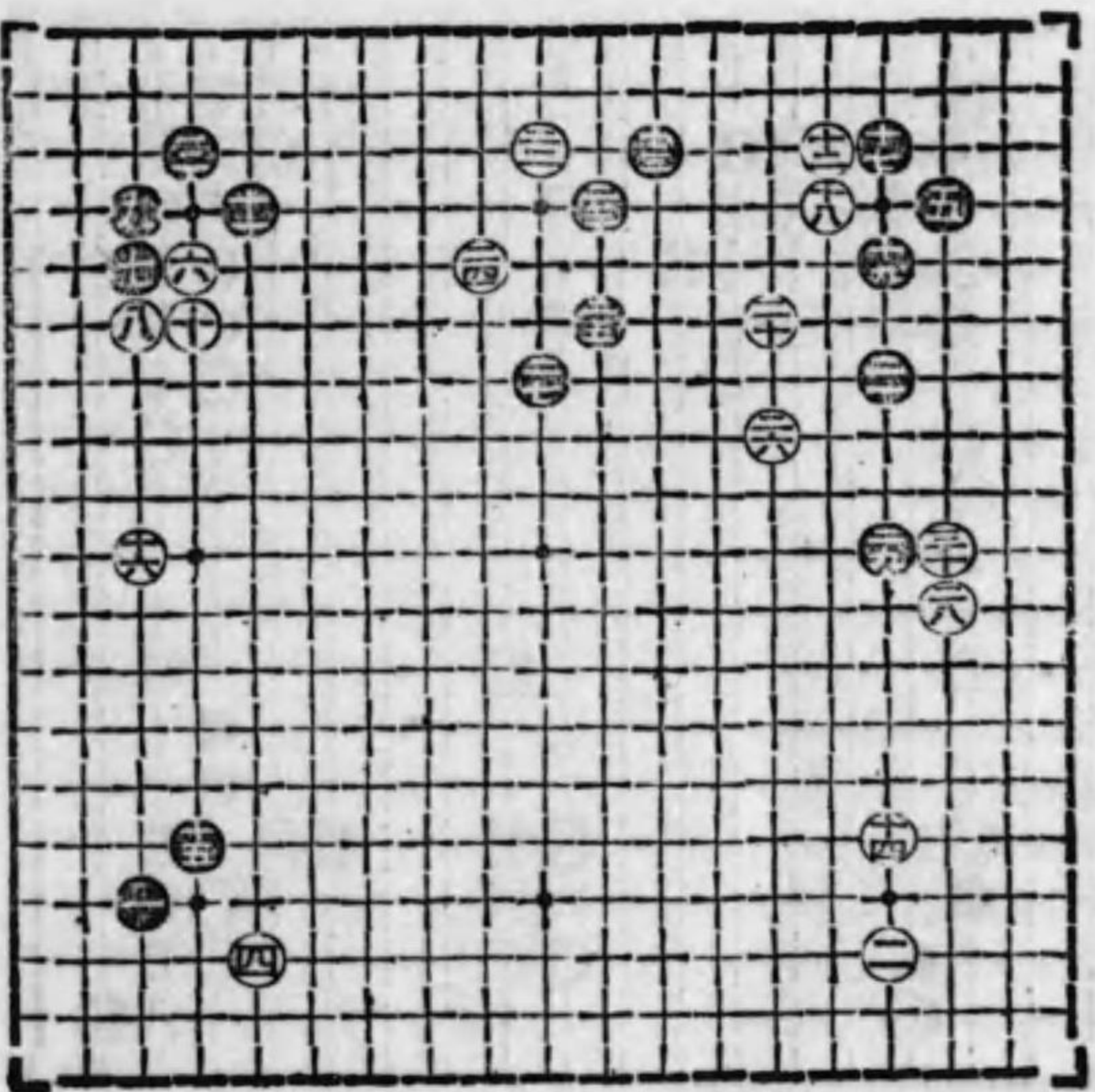


# 互先

此石立双方外面に發展策を講ずる手段非常に興味あり

白二十二打込良し

白二十八大場を獲る打方よし

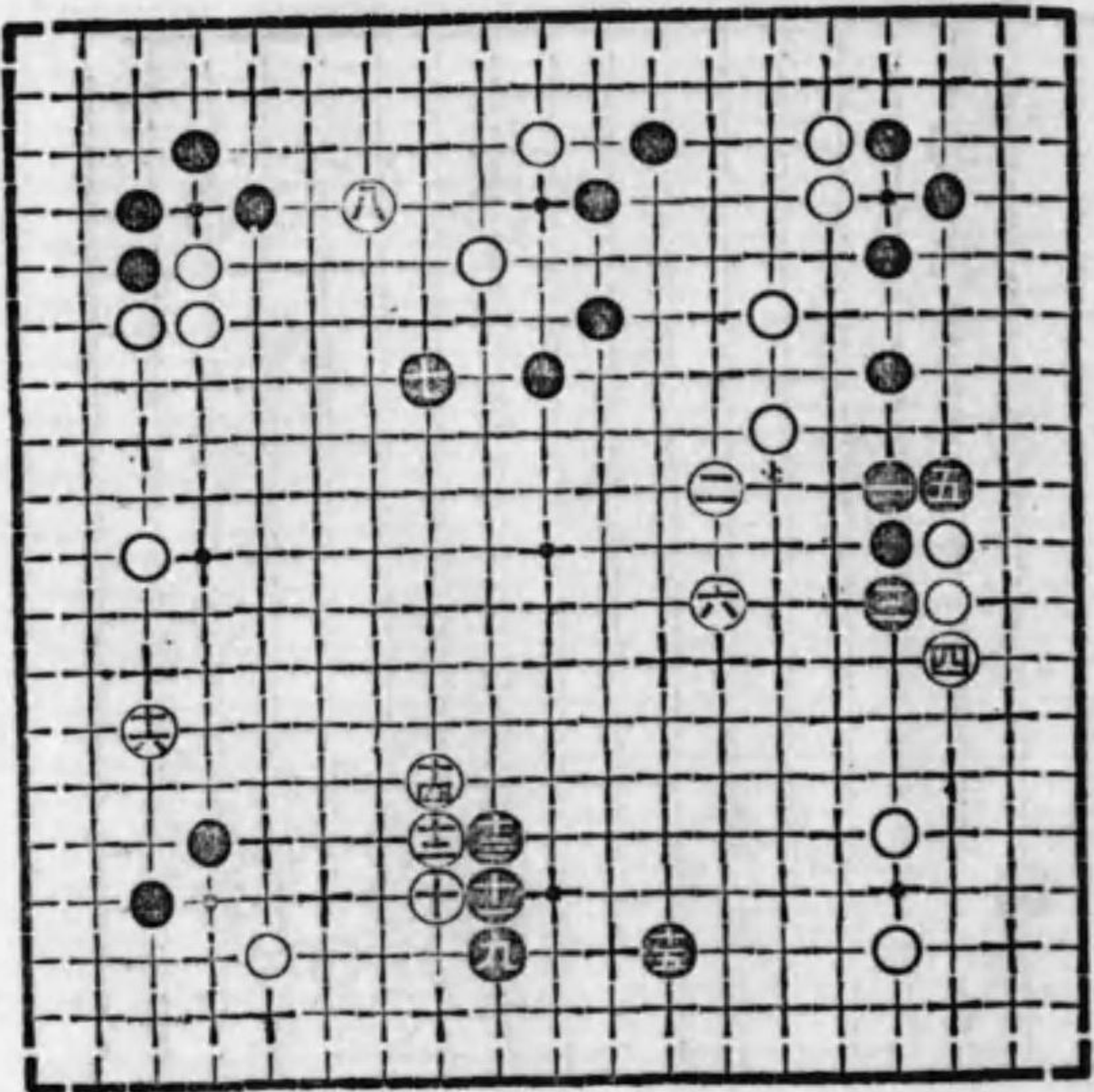


前頁の續き

白八の手良し

黒十五のひらき狹きは大に意味ある

打方なり



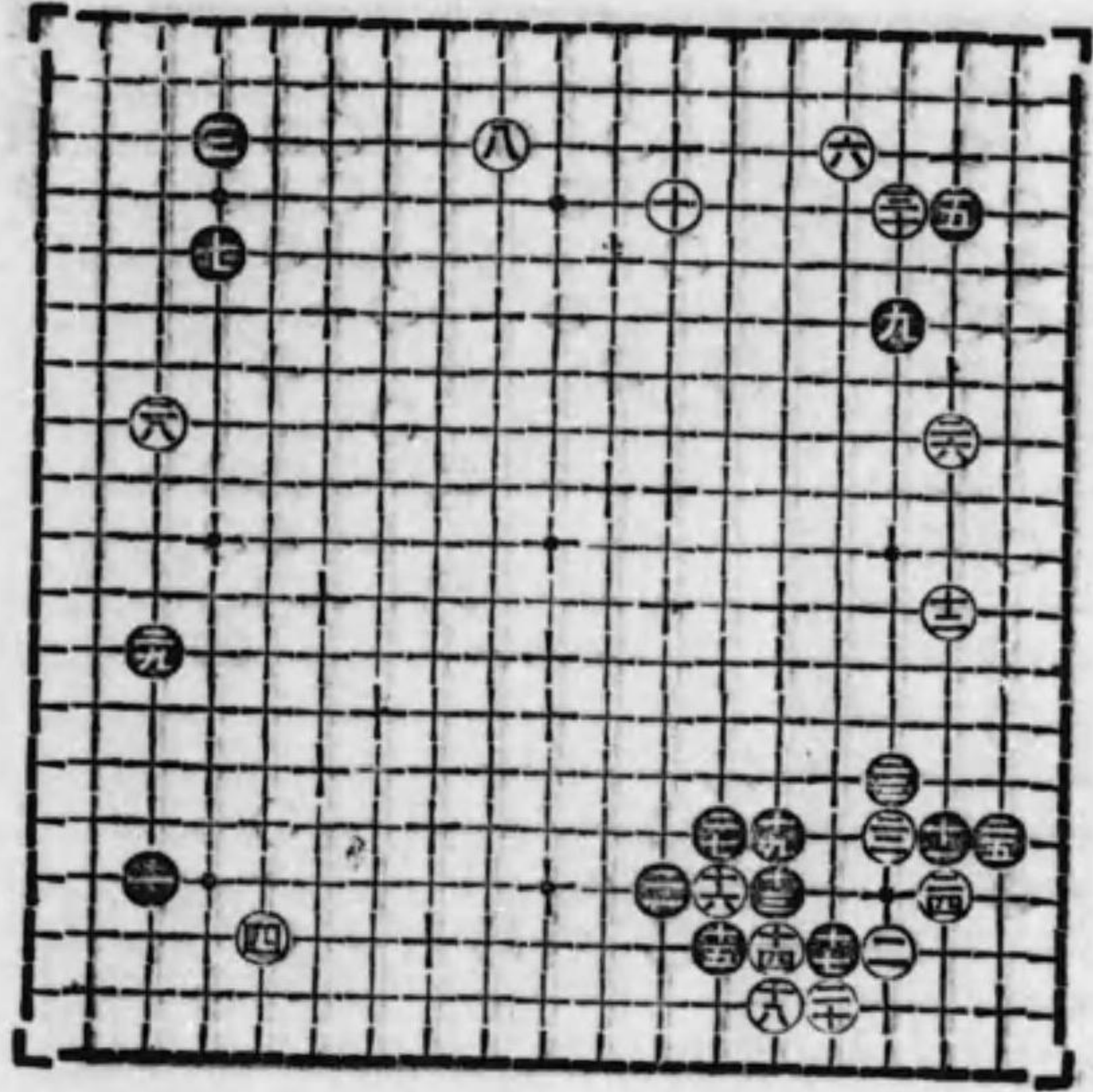
互先

白十四及び十六の打方は其場合に  
よりに打つ可し

白二十八の打方よし

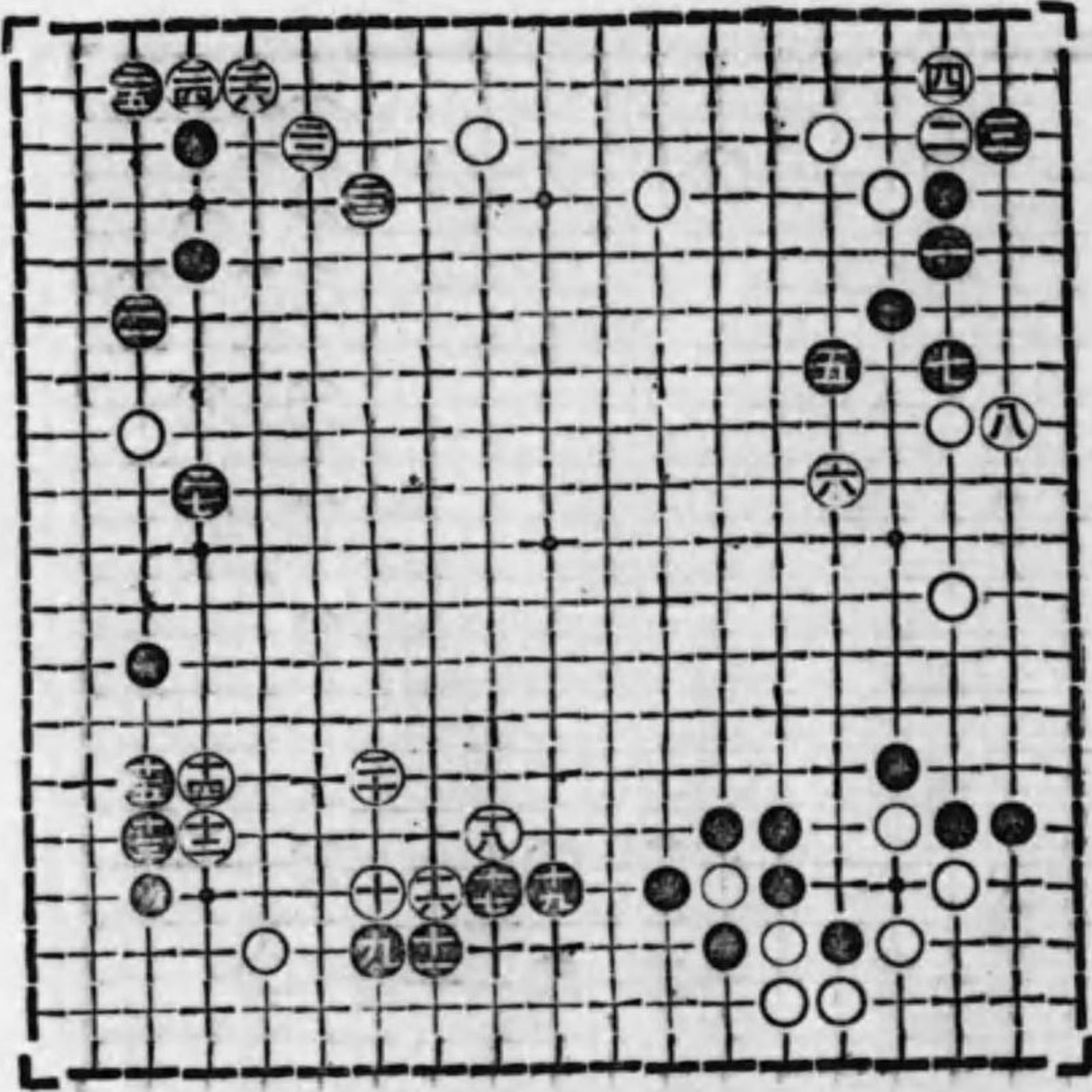
黒二十九の打方白の二八に對して大  
いによし

白三十此場合大によし



前頁の續き

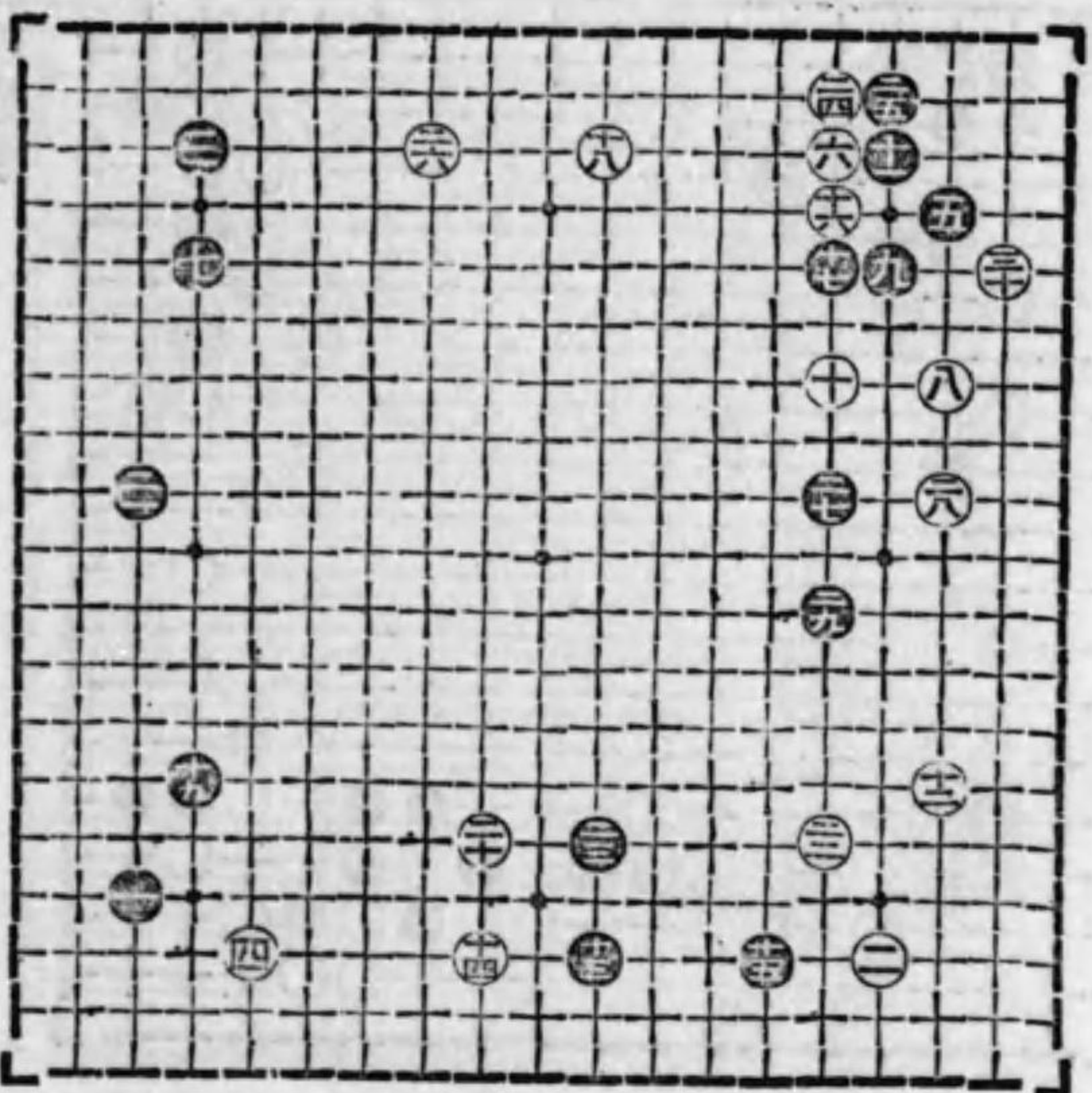
黒廿七の打方大によし



互先

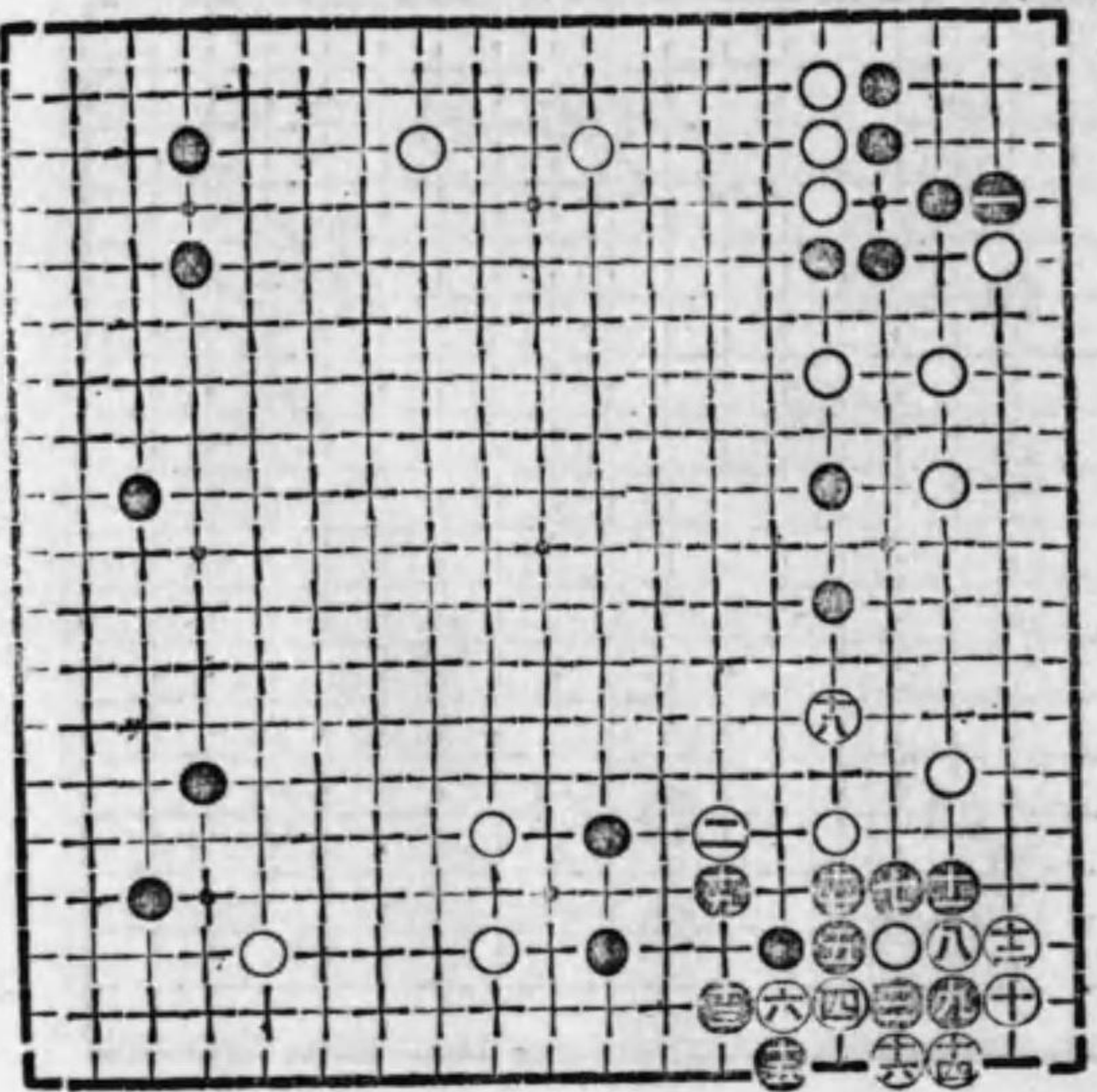
黒十三良し

黒二十七及び二十九軽くしてよし



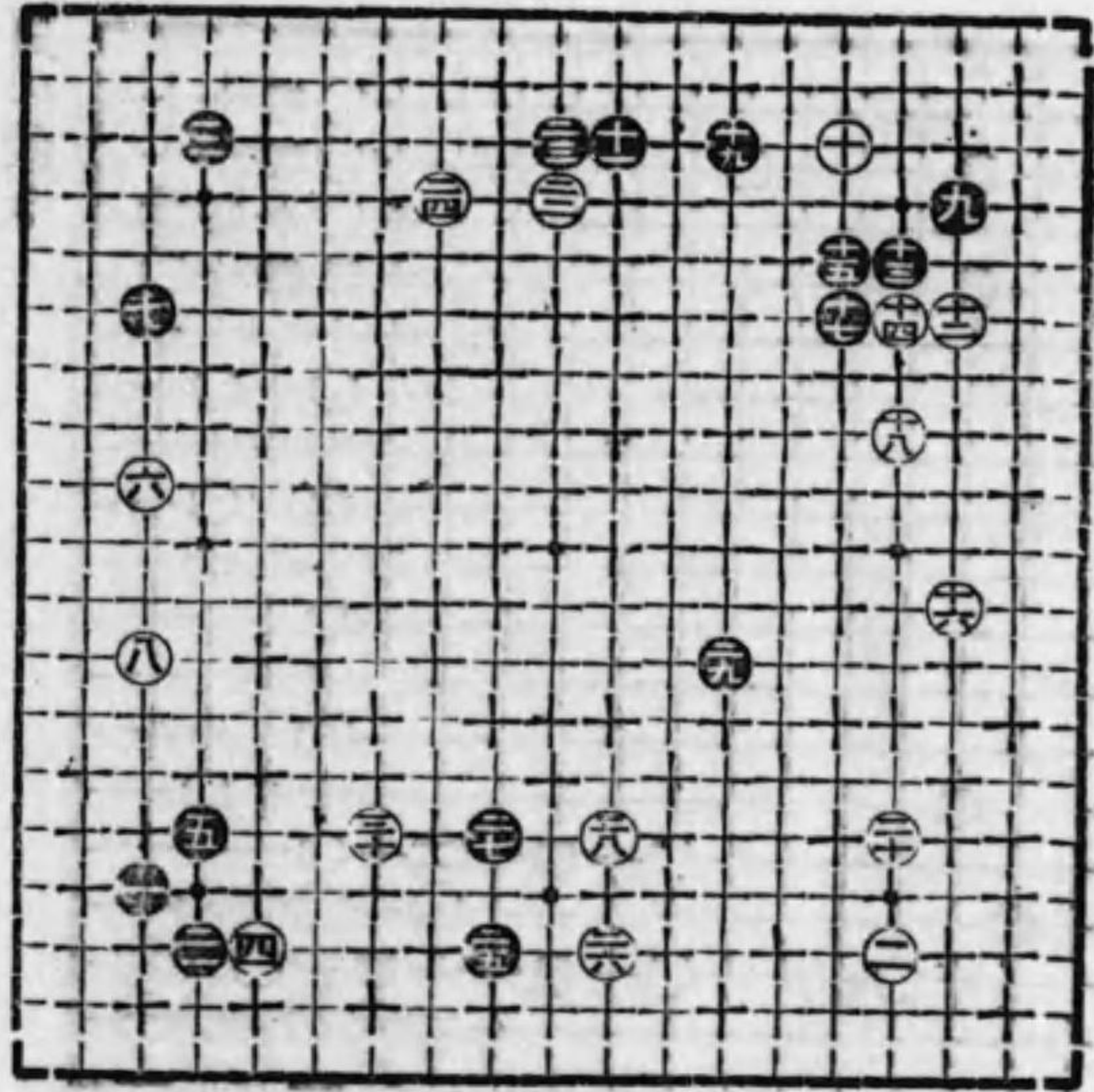
前頁の續

白四及び六の手は普通には用ゆ可からず技の拙なる對手には打つ事あり  
 白十は常によくある手なり記慮し置く可し



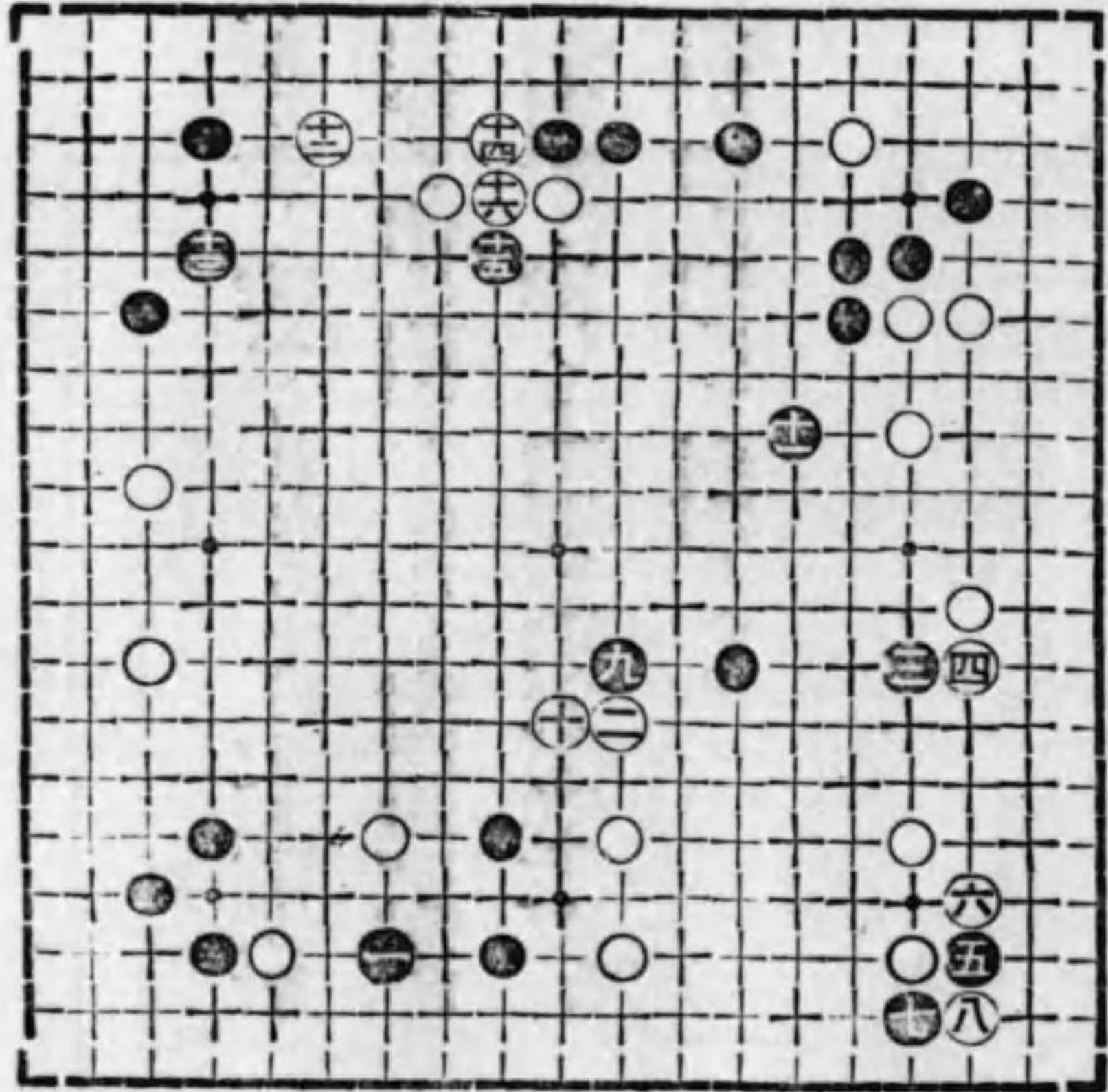
互先

黒十九良し  
黒二十九同



前頁の續き

黒三及び五の手常に打出す型なり



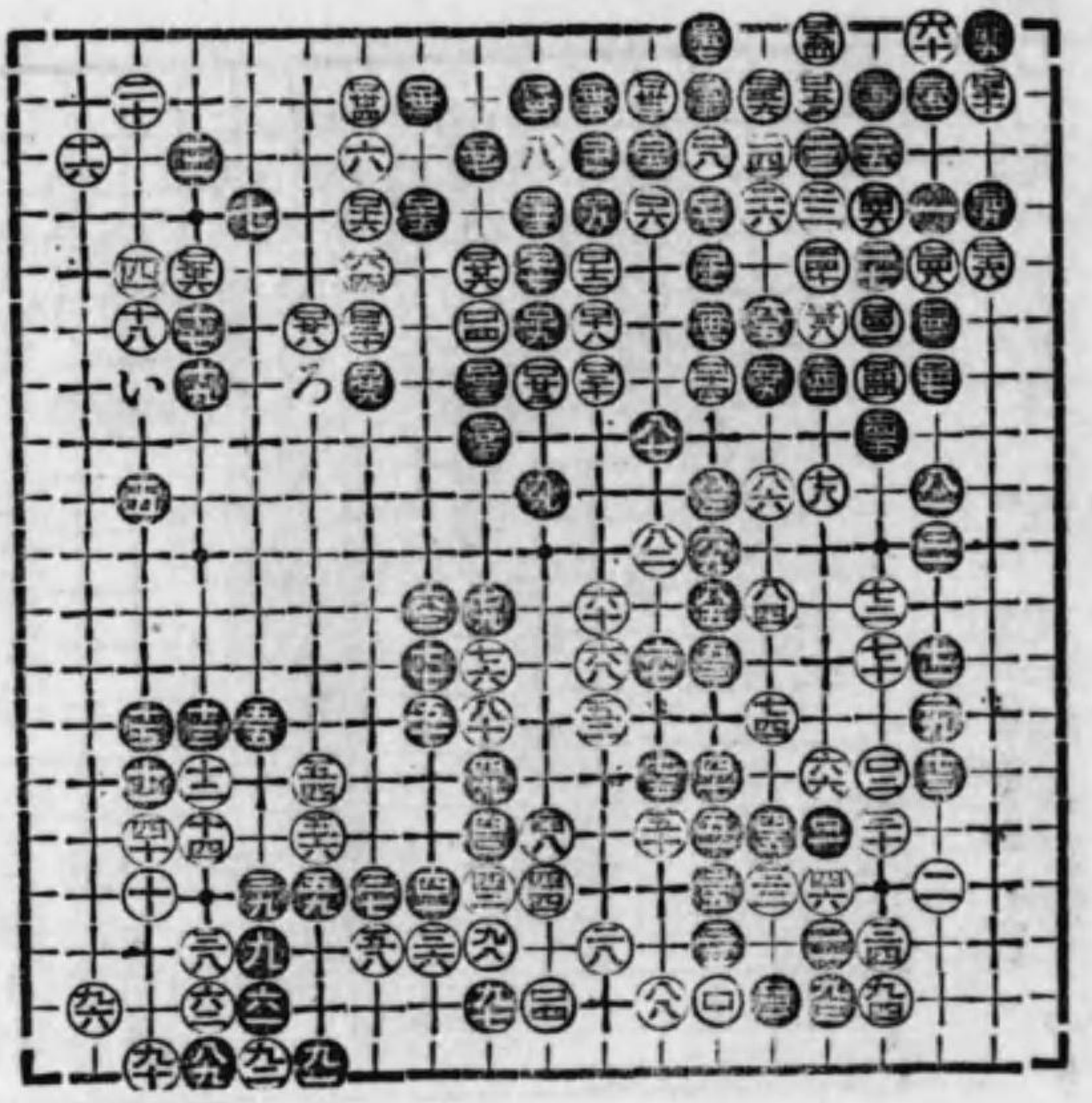
下に掲載する五局面は碁界中興の祖と稱へられたる十四世本因坊秀和及び其門下の傑出として師秀和と併び稱せられたる秀策並に秀甫三師の對局なり品位高絶殊に秀策師に於し一頭地を擧す現代斯技を弄する者の模範とするに足る事を思ひ掲げて参考とす。

中押勝 八段 本因坊秀和  
先 五段 村瀬 秀甫

評曰

黒一〇五の手狭き白の間に打込みて急に勝を求めんとせしは却つて負を取りし原因とすい印へ約へて除々と寄せ手を押せば勝を失はざる可し

黒一三九の手亦同じ白に活路を譲りて百四十の處へ打ち然る後ろ印に約へて無事に局を了せば猶幾分の勝ありしならん  
黒九五劫トル

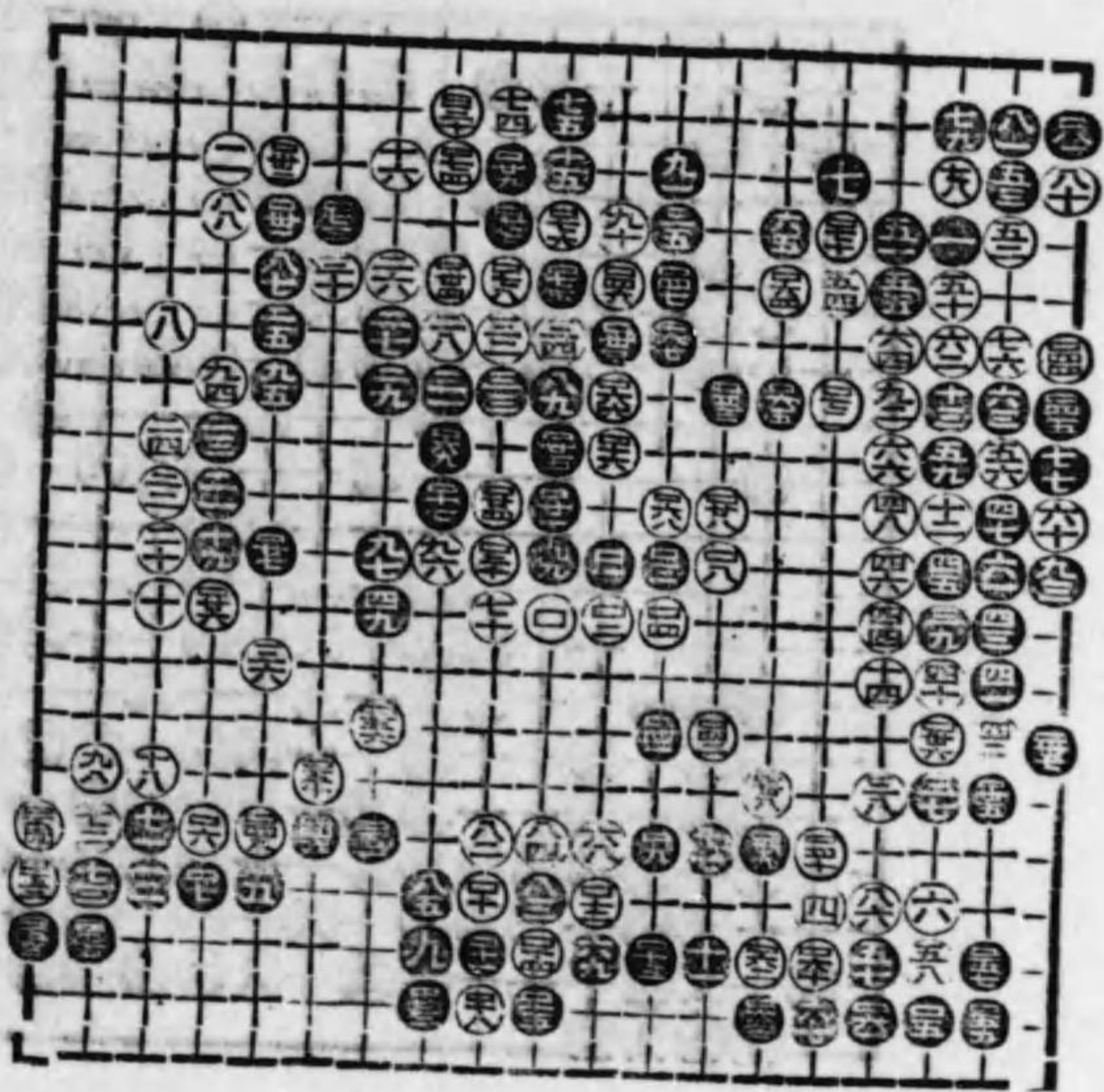


本因坊秀和  
村瀬 秀甫

先 五目勝

評曰  
黒九と狭く柝き置き其後にて十一と又廣く柝く打ちたる手段面白し  
白二十二及び二十四の手段は模範とす可からず但し是局面は既に同じ相手と數十次對局の後なりしを以て其布勢多く同形に出で易きを嫌ふて事更に斯く變化せしめたるなり

黒一九 劫トル  
白二二 同  
白八〇 ヲツ

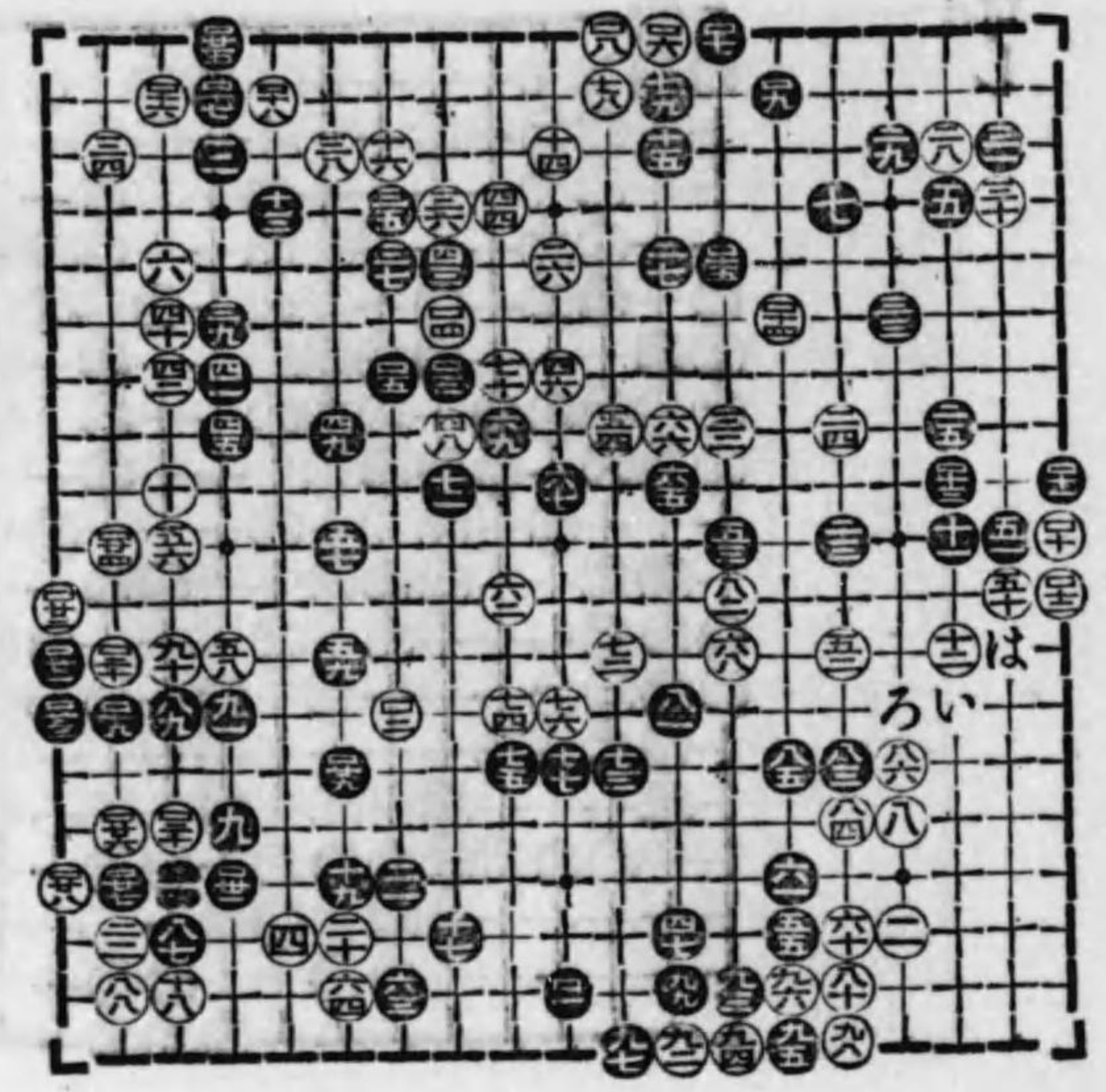


先番 六目勝

秀 和  
甫

評曰

白二十四の手二十六の手大に働きあり又二十八及び三十と打ち置き更に三十二と打ちたるは面白し  
黒三十三の手後秀和師曰く「いへ打ち黒ろ」に應じたる時「はへ打てば形勢甚だよし然れ共相手が秀甫なるを以て若し直に白より「はへ打たれては形勢料り知る可からざるものあるを以て斯く打ちたりと  
白三十四の手にて敗形を表したり「にへ打ちて黒の手段を觀望し徐に對策を施せば



白一〇〇 ヲツ

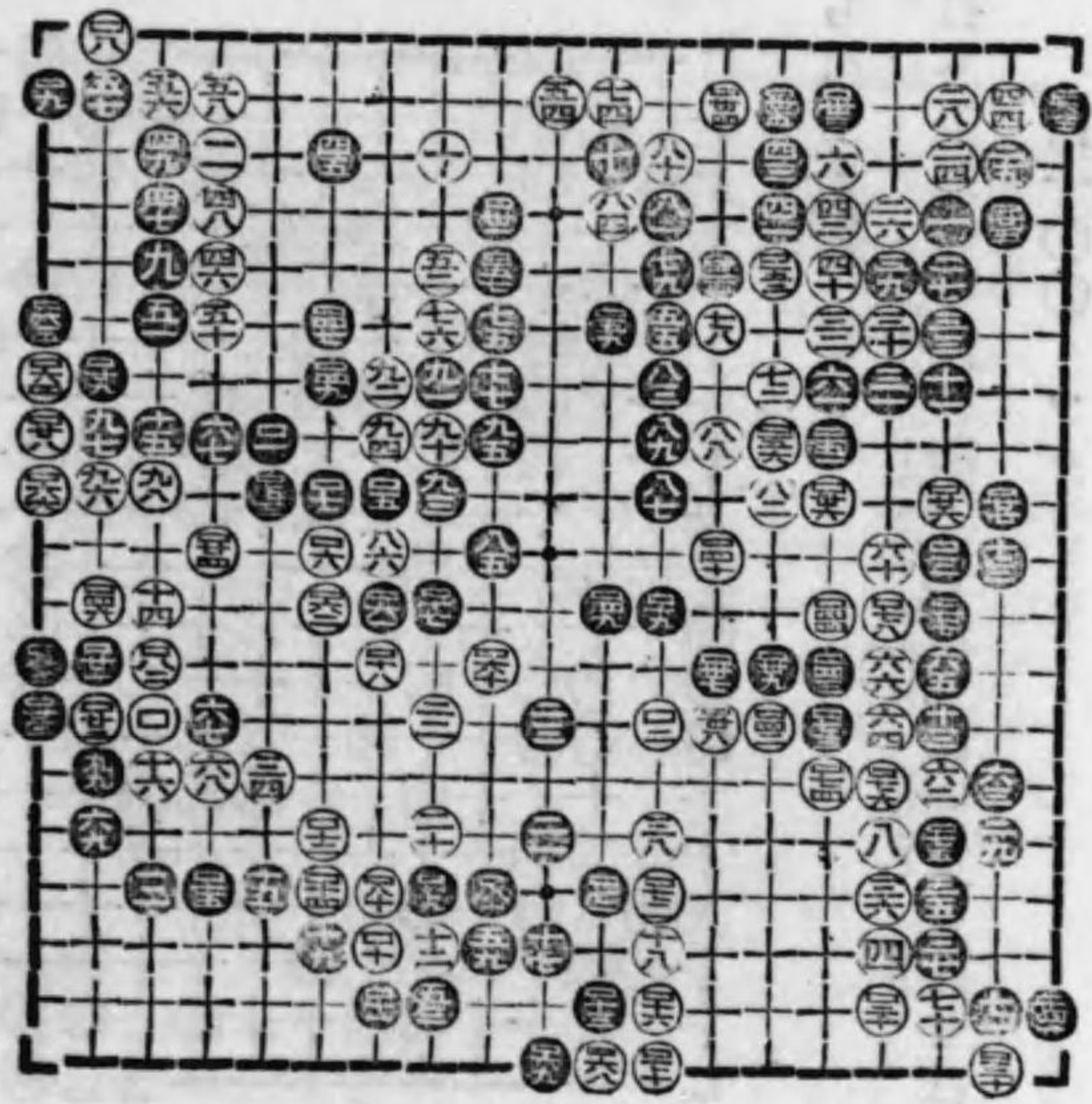
先 一目勝  
秀 策  
甫 策

評曰

白五十四の手を打つに當り沈思久しくす  
局後語つて曰く五十四の時一八一の處へのぞき黒を兩分するも一手段なれ共中腹の模様を主とする乎其得失の見解を定め難く苦心したりと

本局面白に一點の緩着なく黒も指摘すべき冗手なし常に先を保持したる處一子の勝となる

局面一見平凡に見へて實は至難の局と云ふ可し

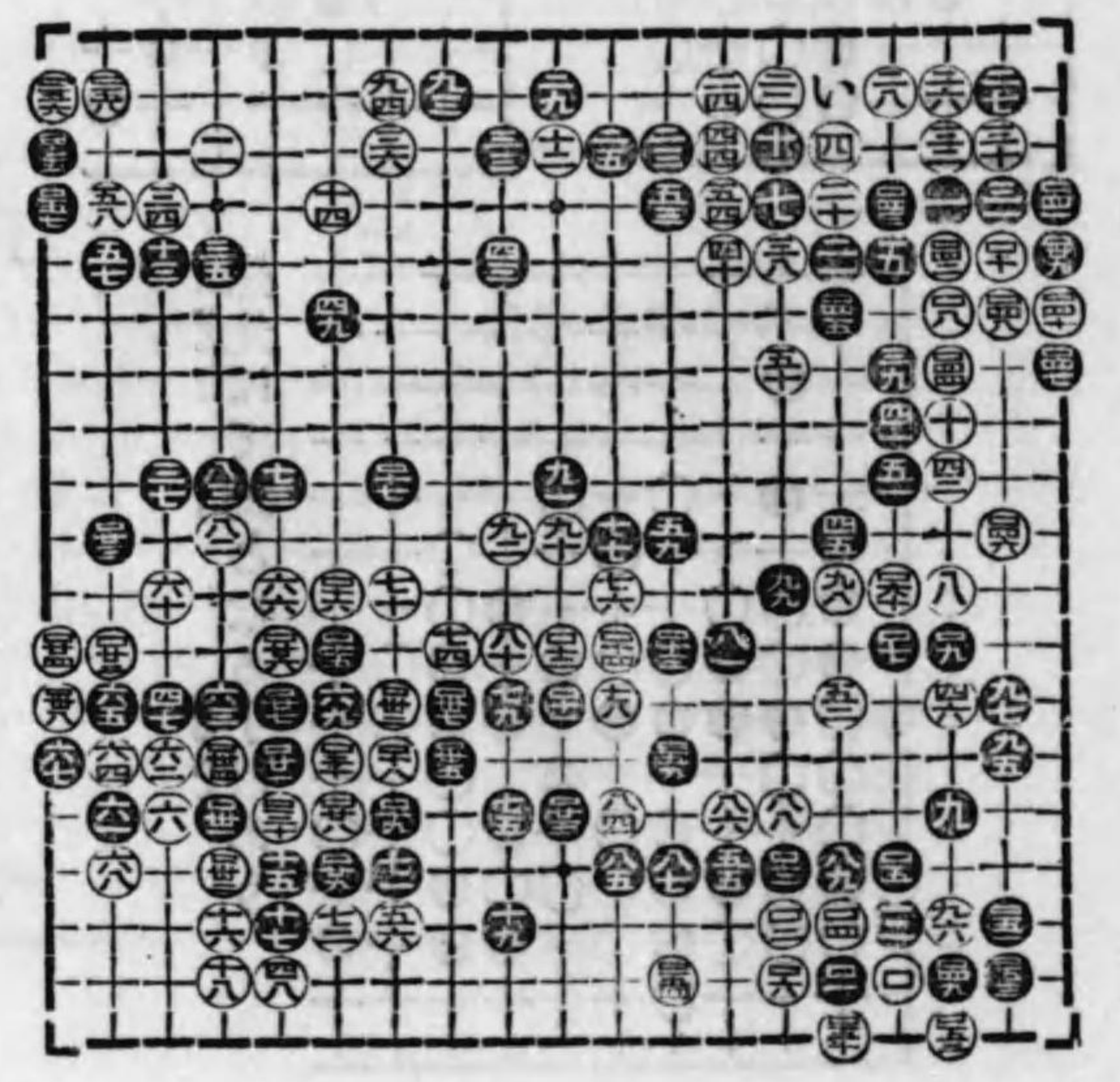


三目勝  
七段 秀 策  
先 秀 甫

評曰

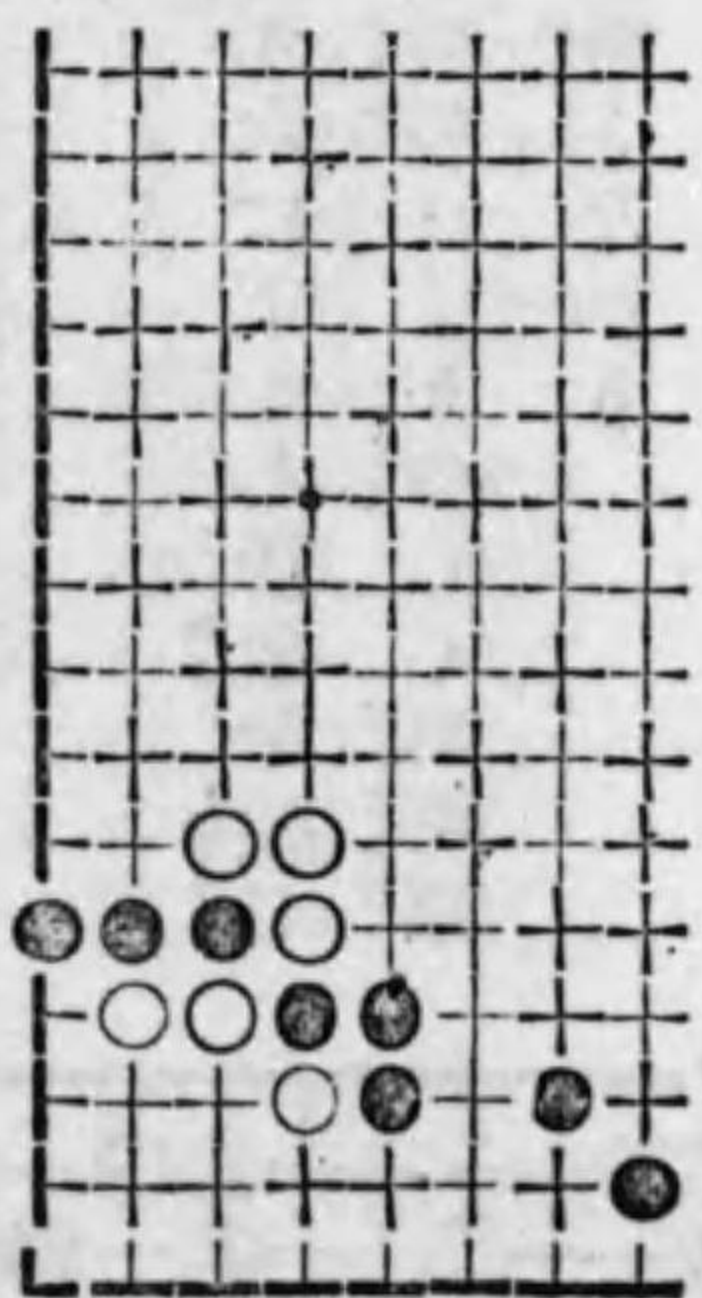
黒二十一は「い」へ打つを良しとす  
黒五九の手緩たるを免れず六十一の處へ打つをよしとす  
黒九五と打ち白九六によりし活氣を生じたるも九十七と振替により少しく形勢悪しく遂に三子の敗となれり

白 一三六ツグ

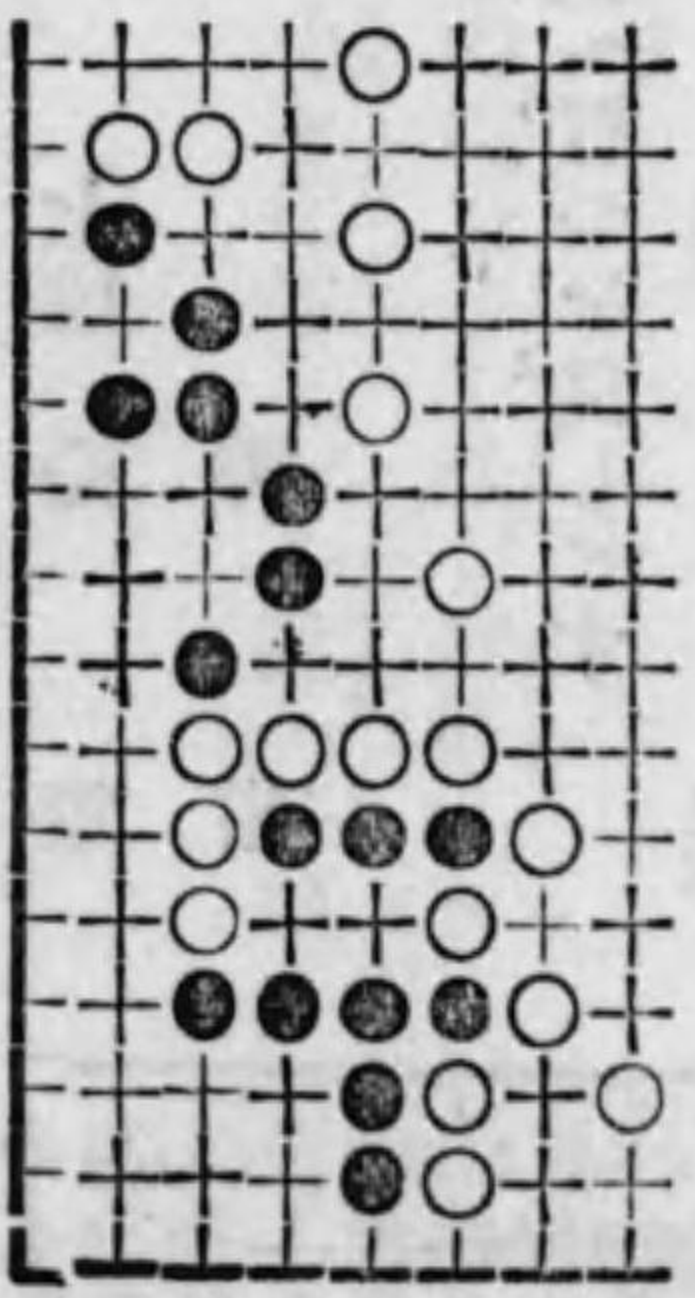


# 奇策妙手

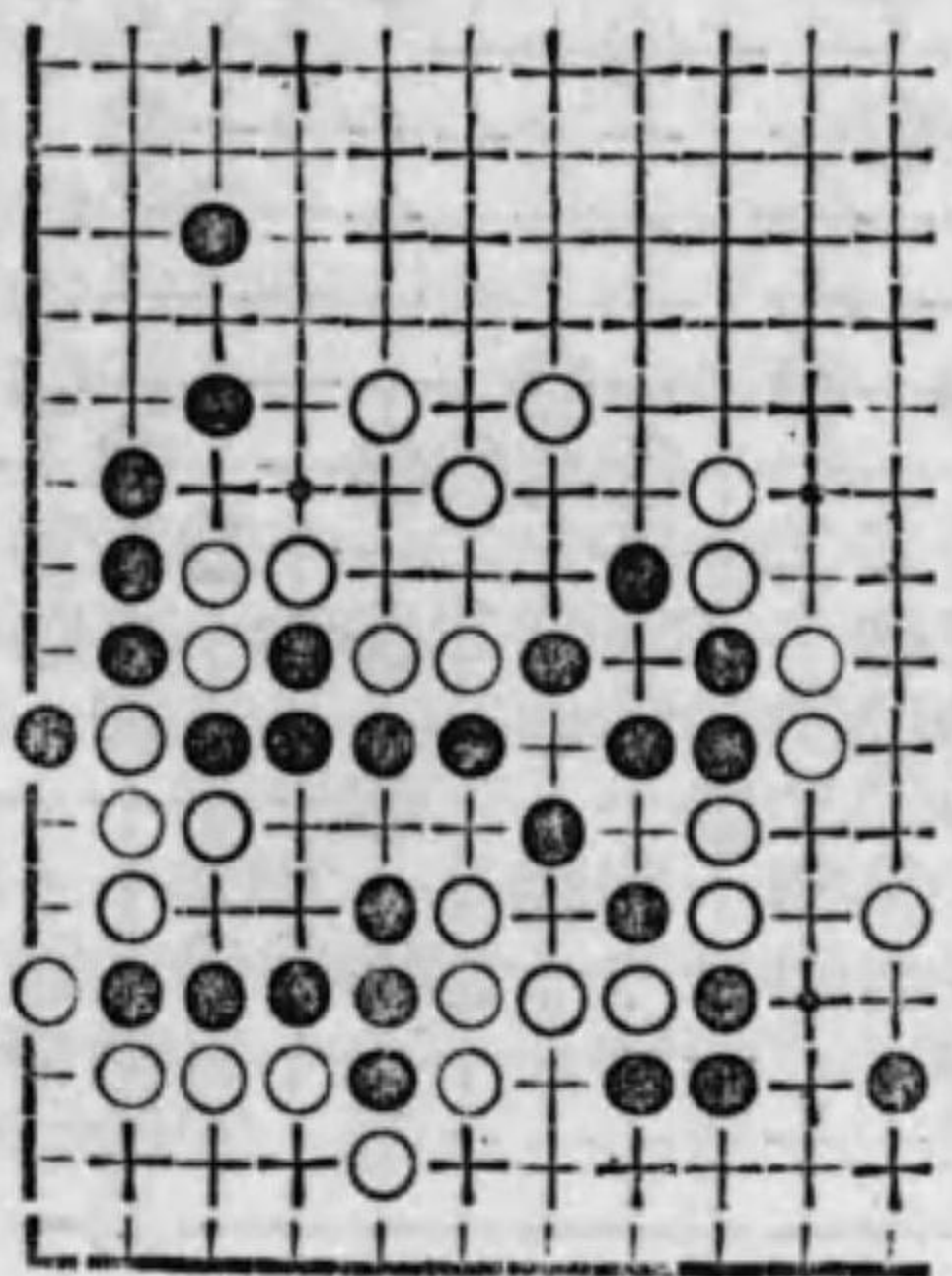
黒先にて隅の  
白三子を獲る  
手段を考へよ



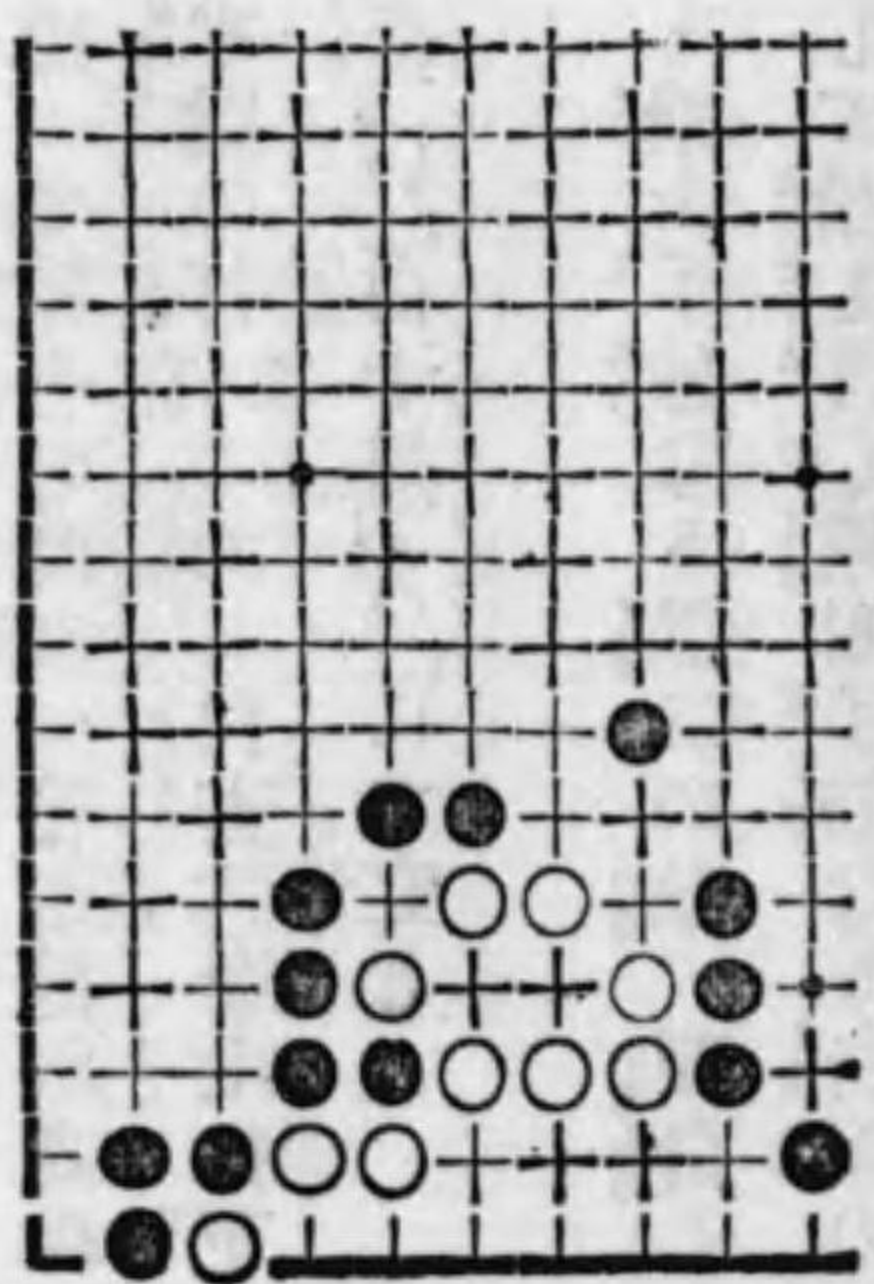
白先にて劫と  
なる手あり



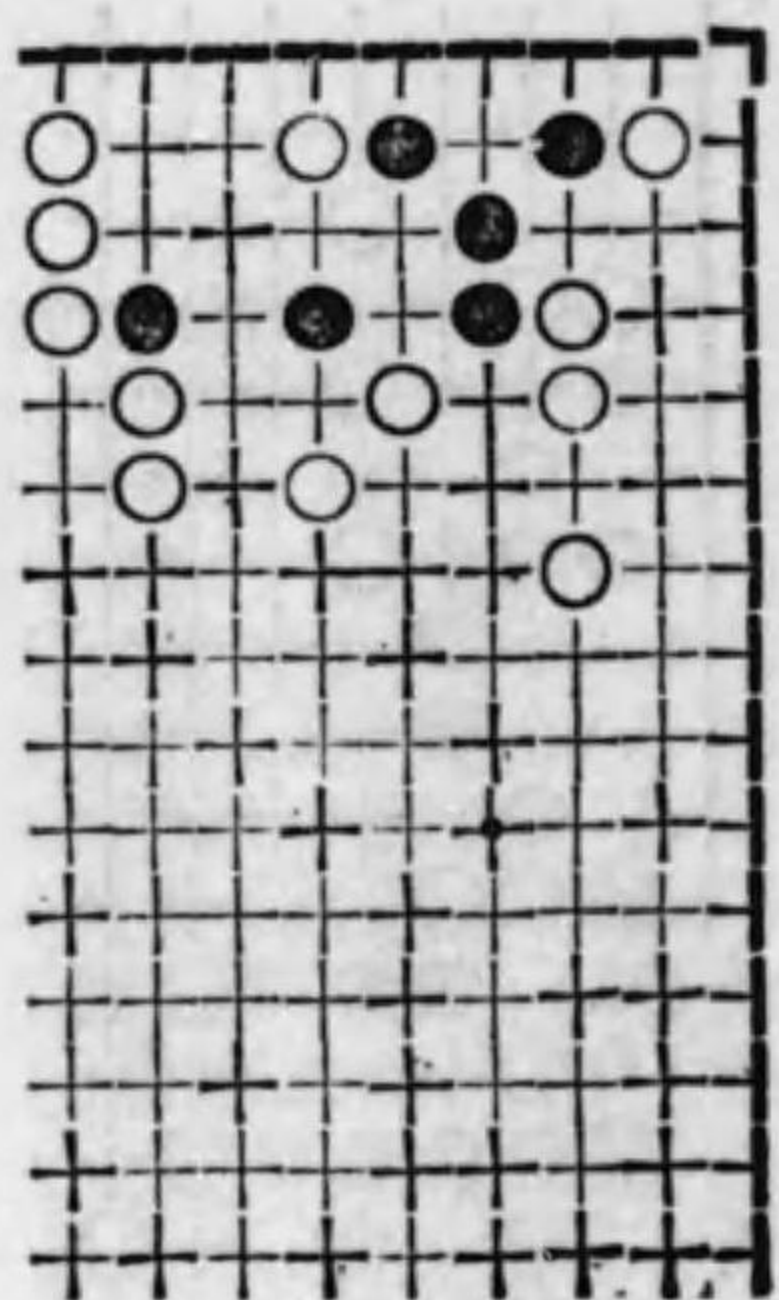
黒先にて劫となる手段あり



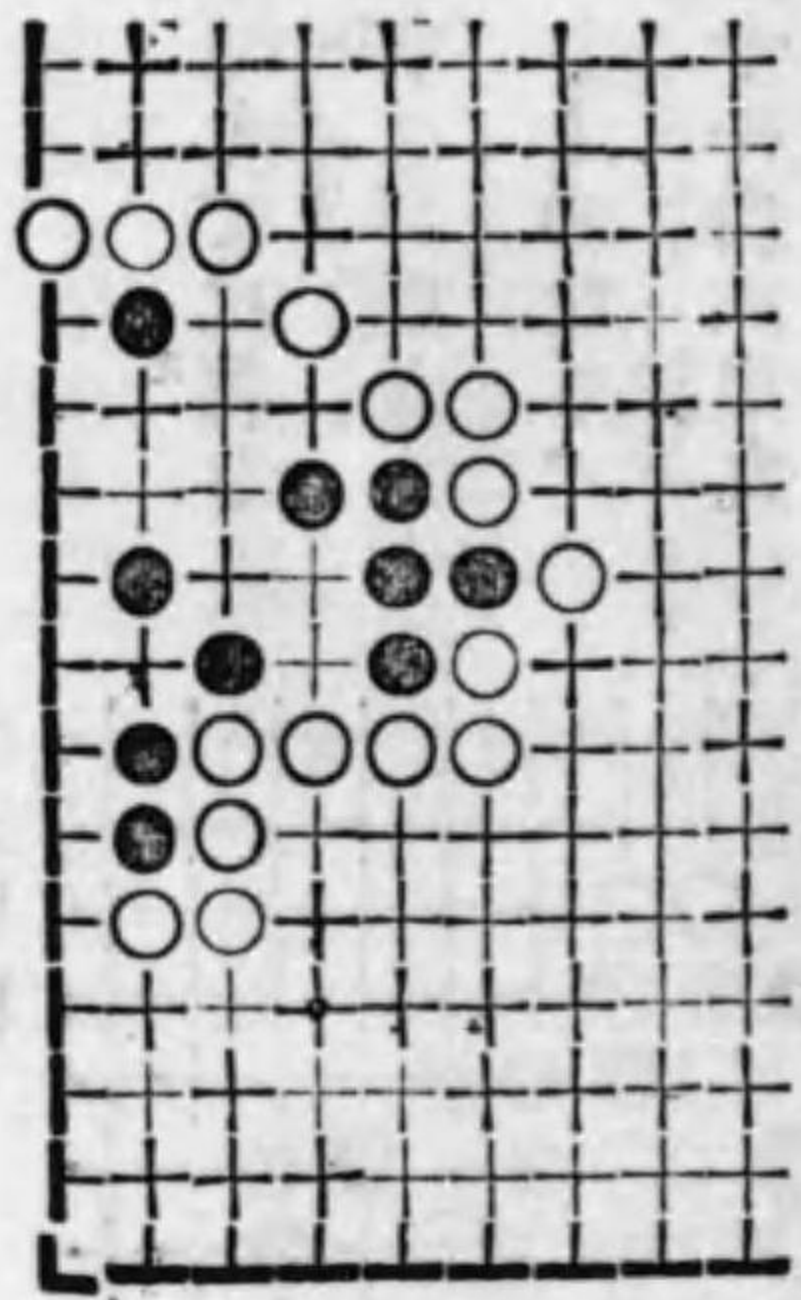
黒先にて矢張劫となる



白先にて黒を殺す



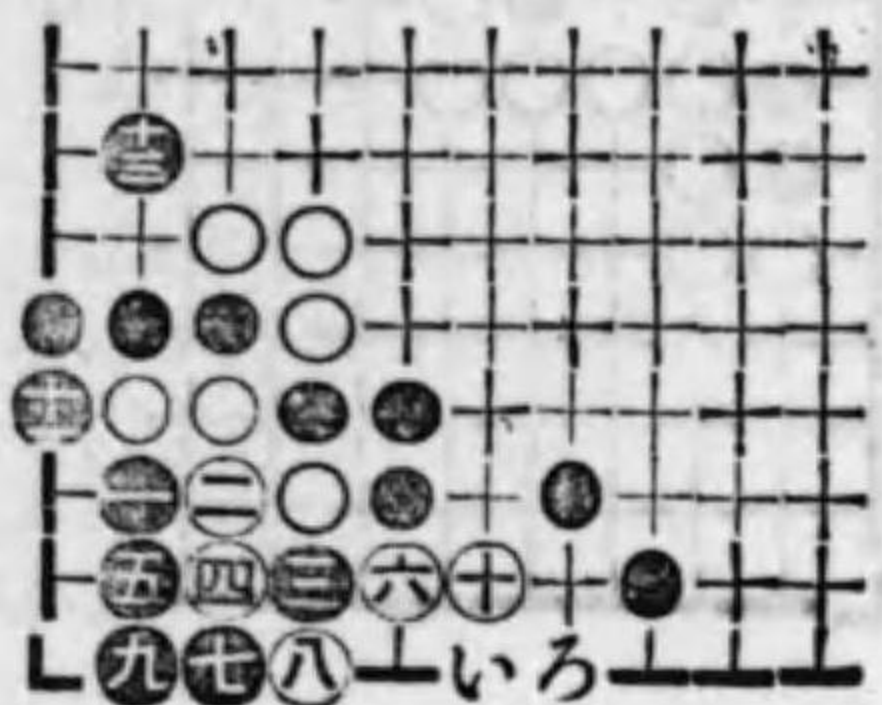
白先にて劫となる



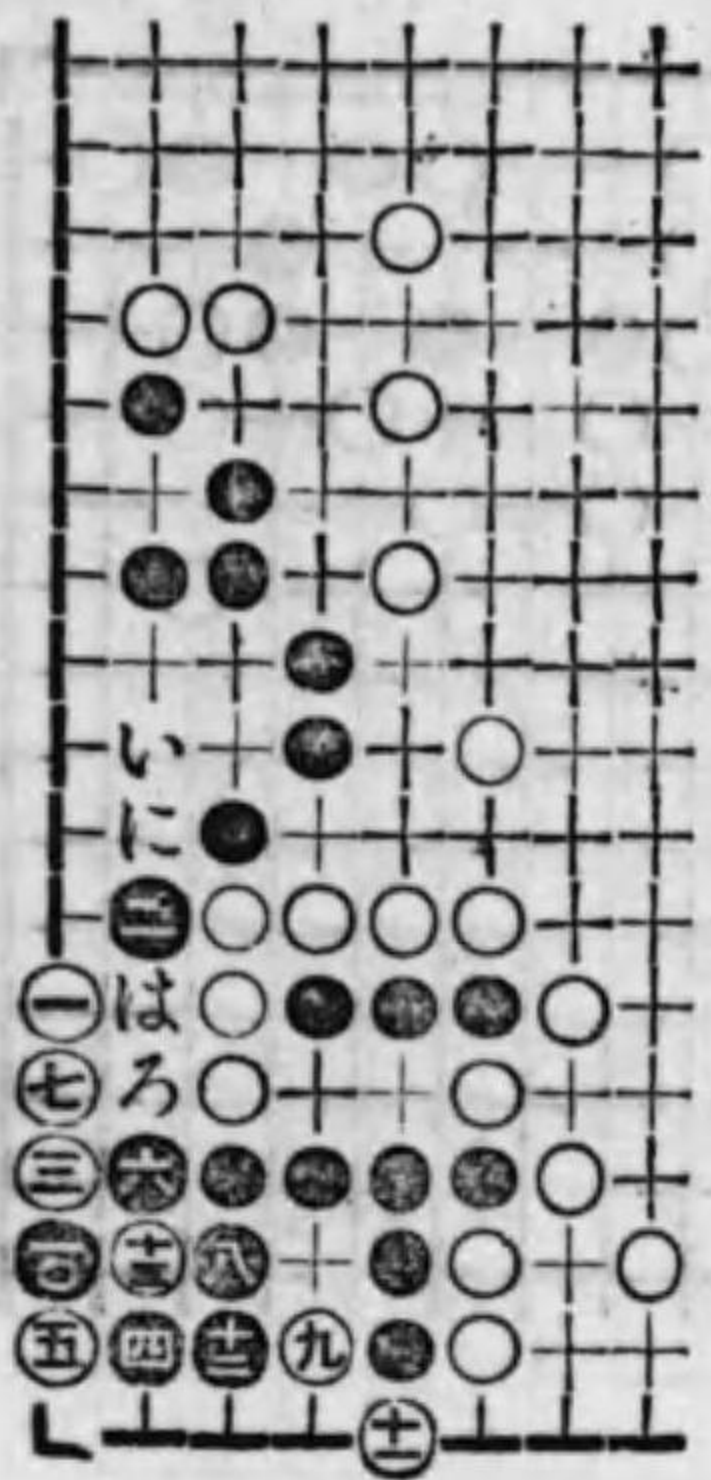


黒先勝

本圖は碁形としては餘り面白からざれども手筋としては善き手ゆゑ此處に示すなり黒一と頂け三と緯ね五と押す手順最も善し總べて攻合の時は一手中も隙かさぬ様打つべきものなり、即ち本圖の打方の如し白若六を七に下がらば黒十一白六黒九白八黒「い」白十黒「ろ」にて宜し

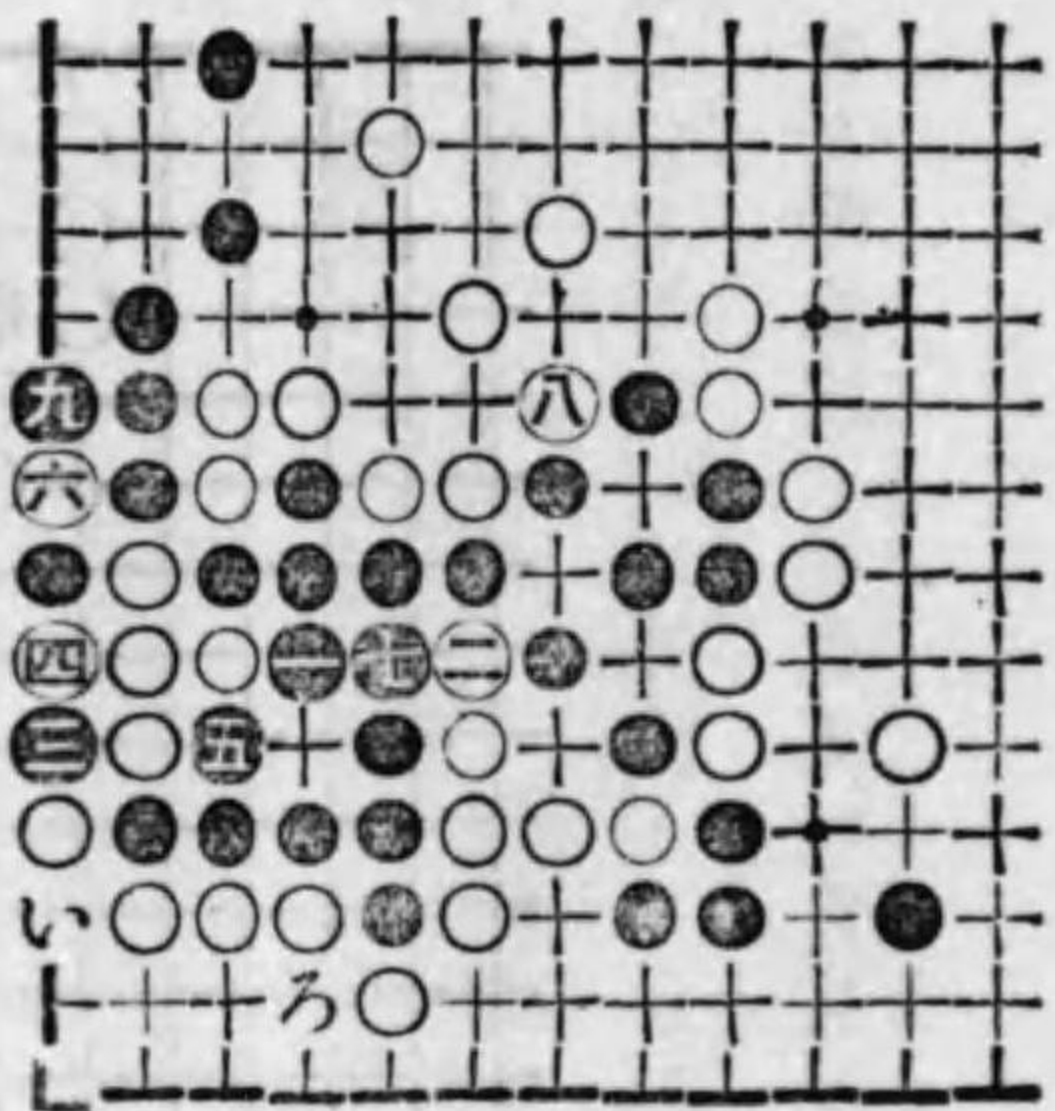


白一と飛ぶ手妙なり黒二の粘、面白し白三手筋として最も善し黒四手筋なり白五の時黒六の次に八と打ち眼型を作る所面白し、これにて即ち劫となるなり最初白一と飛びたる時黒六なれば白「い」へ大斜走にし中央の黒死す、又黒六を三へ飛ばし白六黒十三白「い」にて黒死なり又黒「ろ」へ緯ねなば白「は」黒「に」なれば白三へ飛ばせば隅は劫となるなり



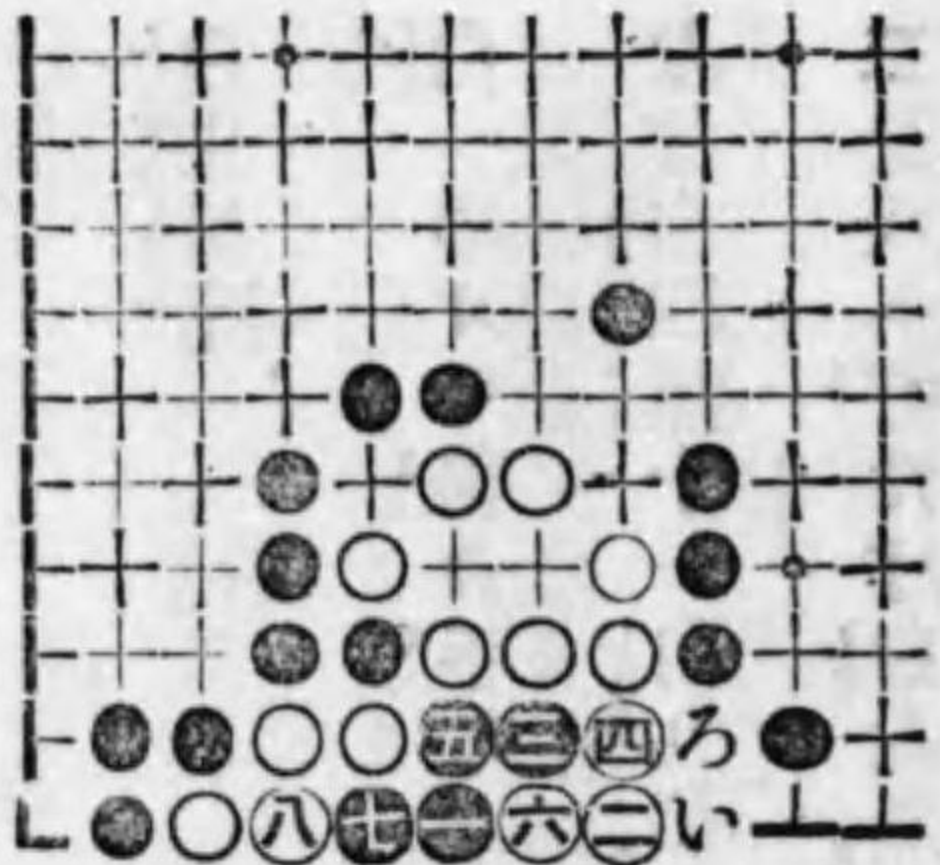
黒先劫

本圖は餘り六ヶ敷手にはあらざれども實際に出來たる型ゆる初學者のために其手順を示し置くなり此の時白「い」へ粘ば黒「ろ」へ切る手のあるものゆるに劫を提れば善し



黒先劫

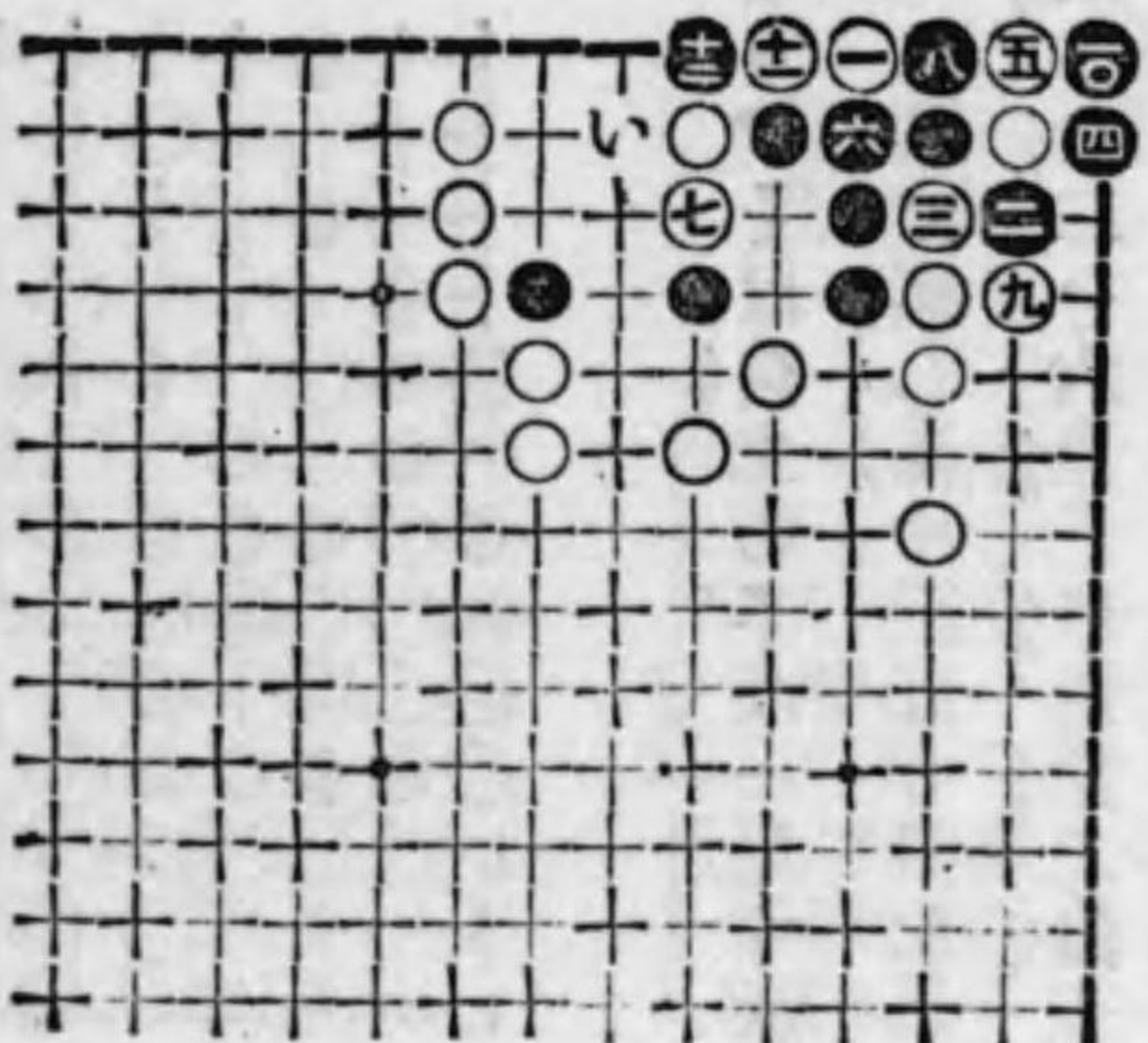
此手順の如くにては白の死なり、そは白二の手は一見すれば手筋の様なれども此の型にては甚だ悪し黒に三五と打たれて後切りにて死となるなり依て白二を六黒三白四黒二白五黒「い」にて即ち劫なり其の時黒五白六黒七白八黒五へ切る手はあれども白には「ろ」へ眼做る手あり白「い」を五に粘ぎても劫なれども同じく切るなれば「い」に約へて劫とする方本手なりとす



白先黒死

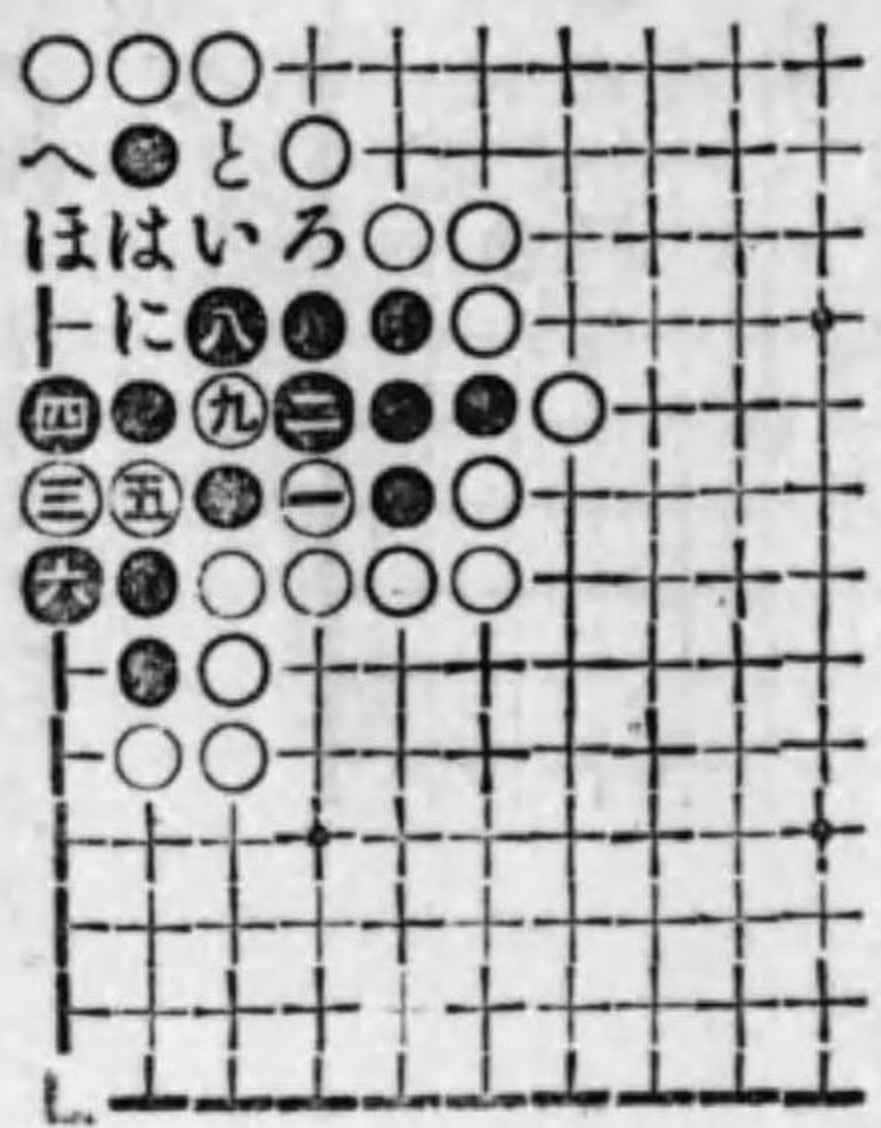
白一のオキ善き手なり黒若し四を五へ縛ね  
 ならば白四黒十一白九黒「い」白八にて善し黒  
 二を八へ打たば白七黒二白四にて善し黒又  
 四を八へ打たば白五黒六白七にて同型なり  
 又黒二を七へ打てば白八にて宜し

⑤十一へ打込む

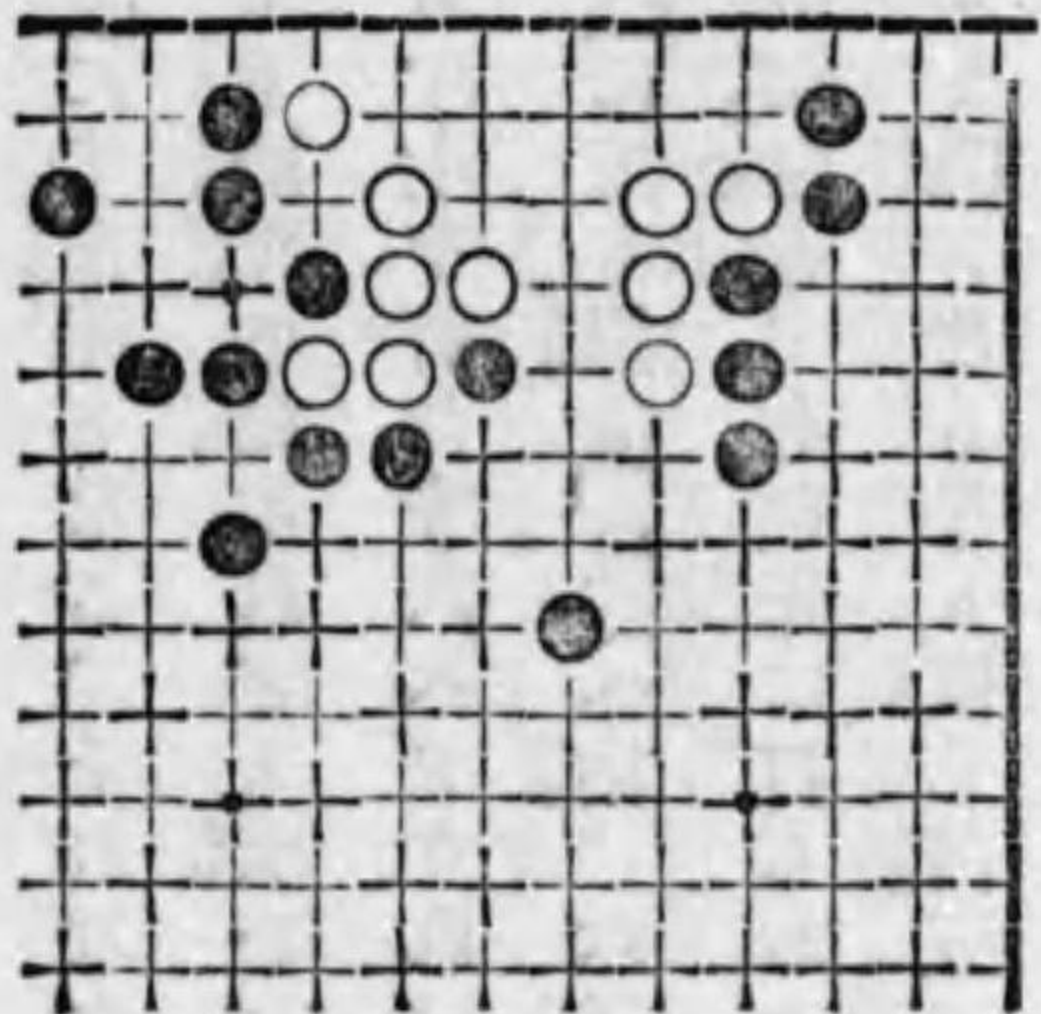


白先劫

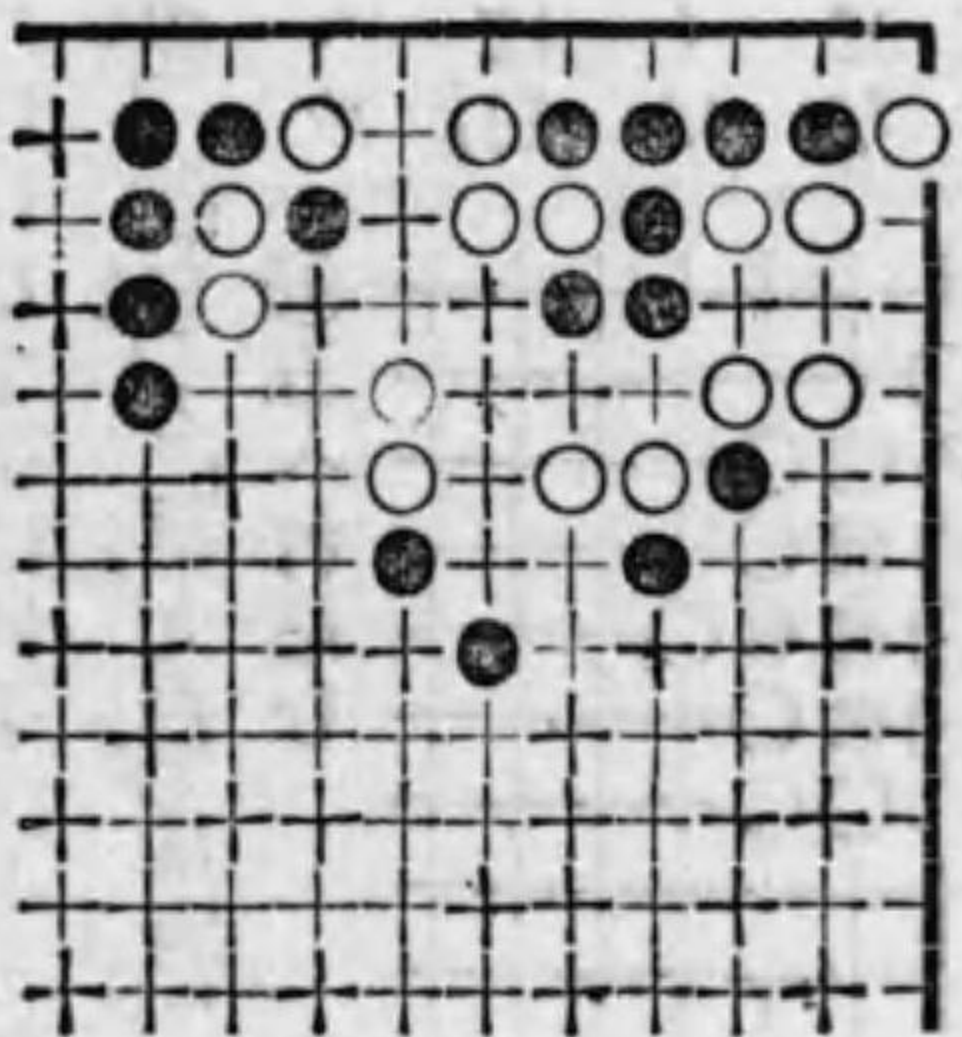
本圖は置碁に實際出來たる型なり元來黒の碁形ダメツマリゆる白手段あるべき筈なり  
 然し初學者としては一寸六ヶ敷、白三とオキ五と二目になす手は妙手又七と打ち込む  
 手も妙手なり白七の時黒若し八を三へ提れば白八黒「い」白「ろ」黒九白「は」黒「に」白  
 「ほ」にて黒死となる、それなれば白五と打たず八へツ  
 ケても同型の様なれども大いに相違せり何となれば白  
 が五、七を打たず八へツケれば黒「に」白「い」若しくは  
 「ろ」にても黒は「は」へ粘、六子を捨つるゆる黒活とな  
 る最初白五、七を先に打ちおき八とツケれば六子提り  
 黒カケ眼となるなり依し白五、七を妙といふ黒最初二  
 を八へ双べば白二黒「は」白九にて死なり黒又四を五へ縛ば白八黒「い」白「ろ」黒「に」白  
 九黒「へ」白「は」黒「は」白「と」にても劫なれども夫れは白六子を先きへ取りあるだけ白  
 の方優れり四を八に打ちても劫なり



黒先にて白を死に致す

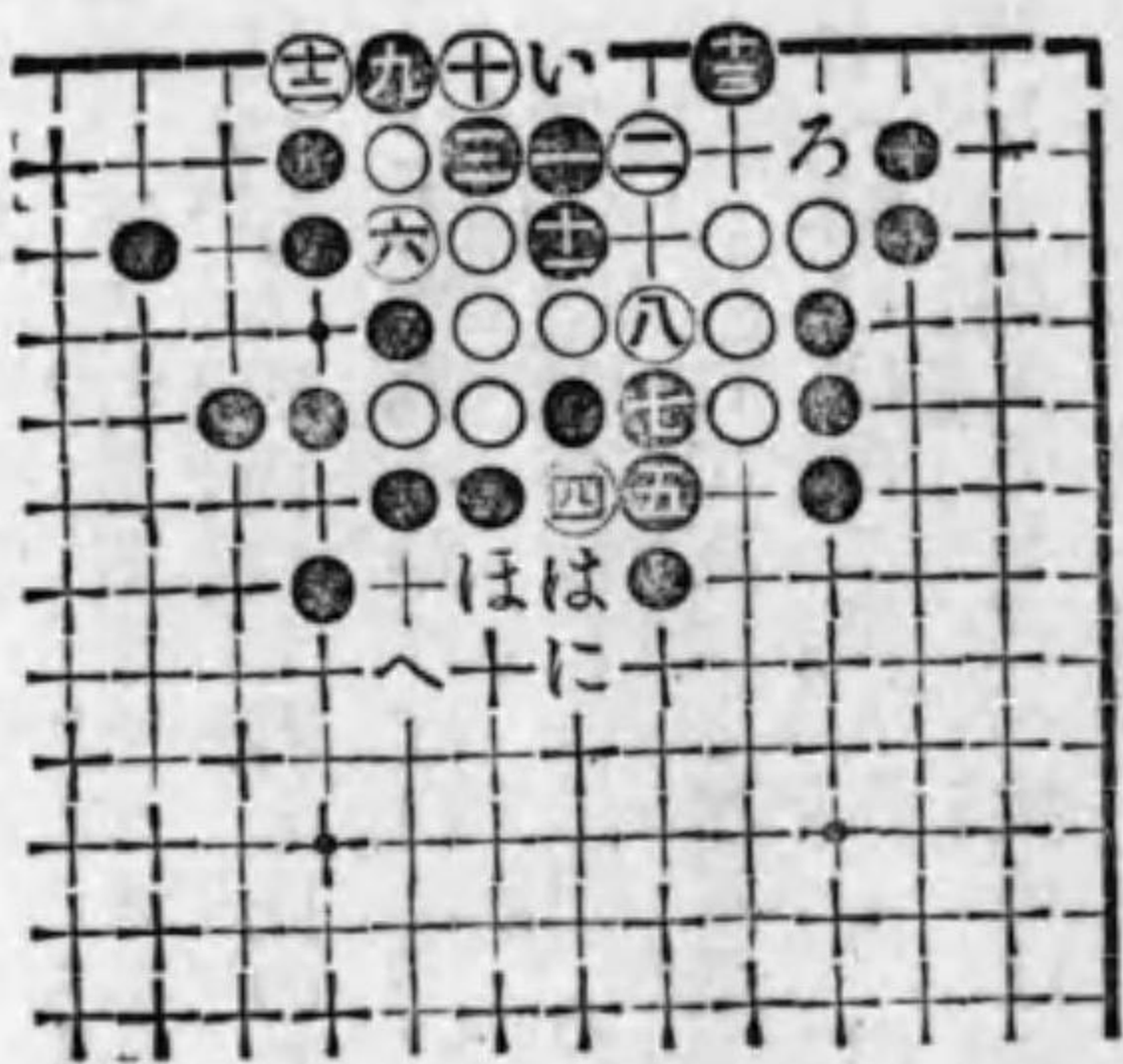


黒先にて外壁の五子と盤(ワタリ)りて連絡す

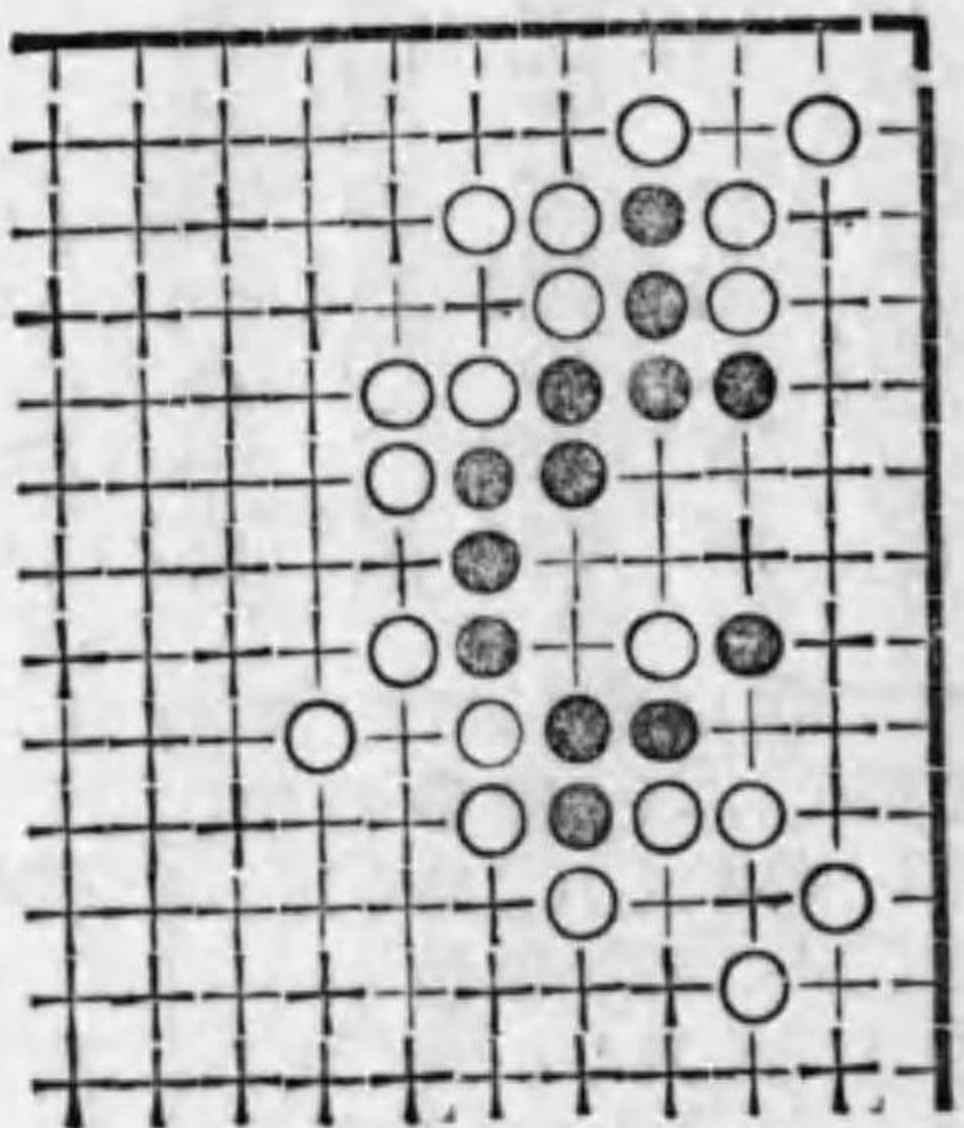


黒先白死

黒一は手筋なり白十の時黒十一と打ちたるは善き手なり此の手を「い」へ打つと白に十一へ打れて白の活となるなり白六を七へ提らば黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」にて黒の運び大に善し

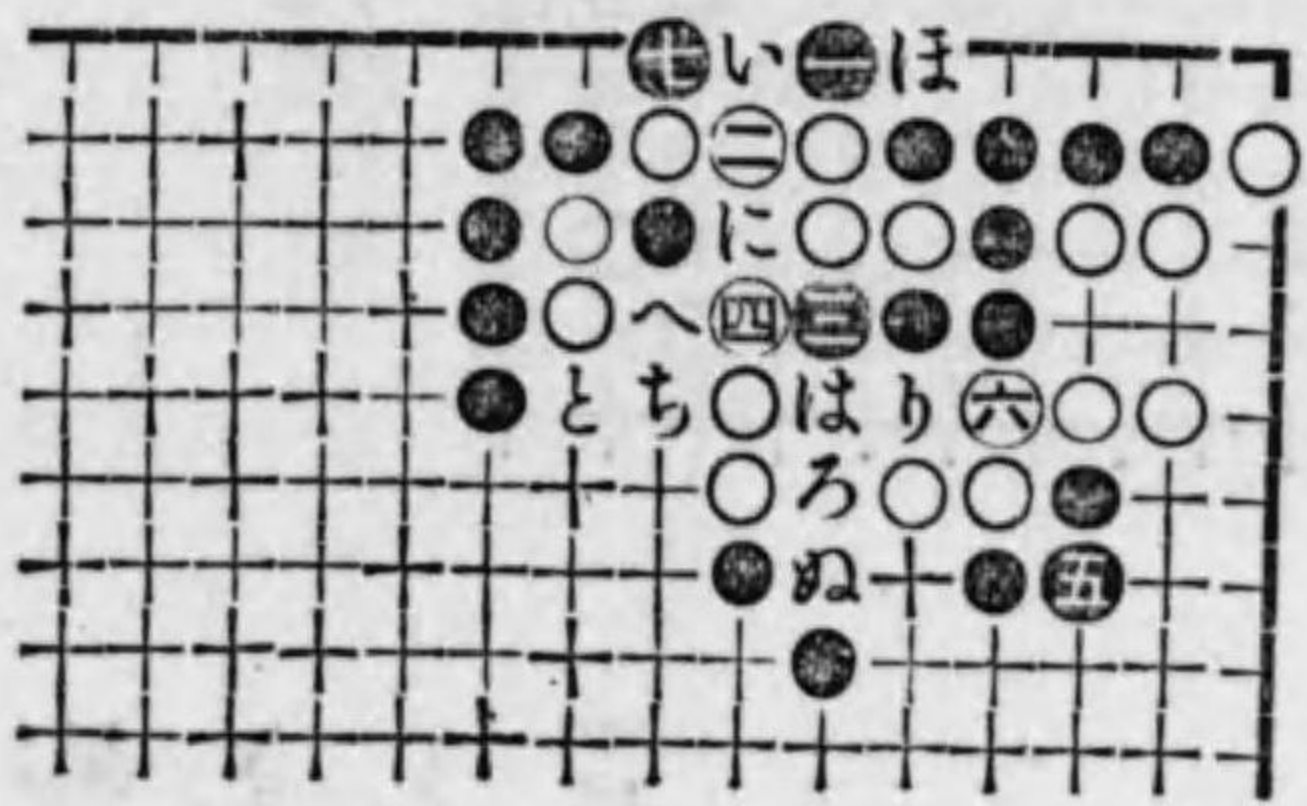


白先にて劫とする手段あり



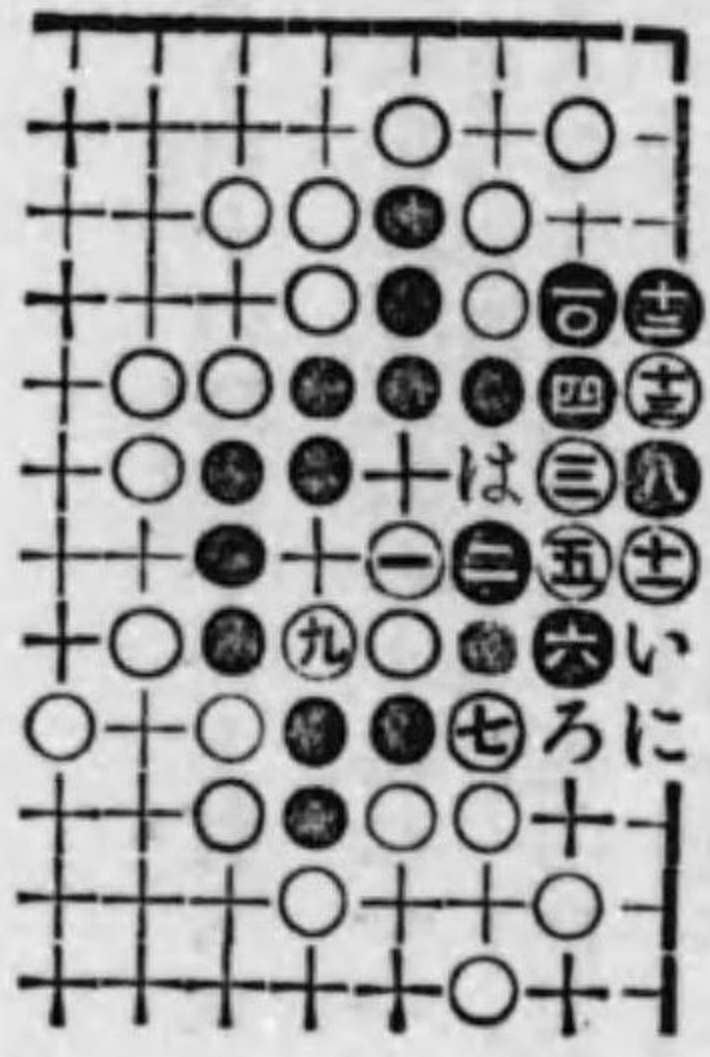
黒先盤

黒一は妙手なり、白若し二を「い」へ約へれば黒三白四黒「ろ」白「は」黒「に」白「は」黒「へ」白「と」黒「ち」にて善し白四を「に」なれば黒「ろ」白「は」黒「四」白「へ」黒「ち」にて黒の方善し白二を七へ下がらば黒「は」白「ろ」黒四にて善し白又「ろ」を三なれば黒「ろ」白「り」黒「ぬ」白六黒「へ」にて善し



白先 劫

白一、三と打ち五と出づる手大に善し黒の八の手も亦面白し若し此の八の手を只活んとして九へ粘れば白に「い」へ縛ねられて黒「ろ」なれば白「は」黒「ろ」を「は」なれば白「に」にて死となる最初黒二を若し七へ粘れば白二黒五白「ろ」黒六白四にて死なり黒又五を三へ尖めば白五黒六白十一黒九白四にて黒死になり



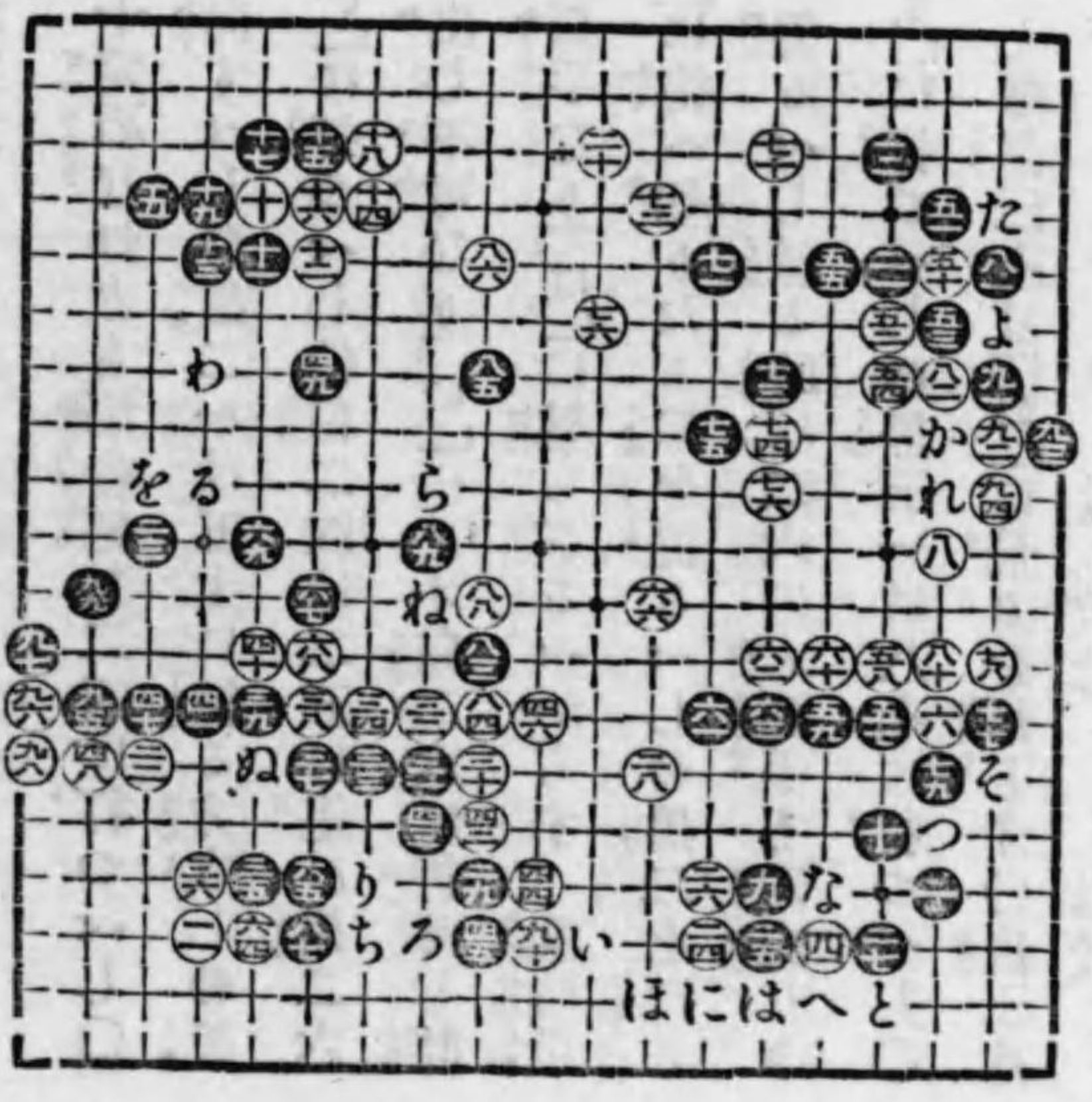
實戦の研究

互先 中押勝 (第三十一圖)

○白六の手早し五十の處にカ、ルべし○白十定石なれども場合悪し二四に打つべし○白二十悪し黒三の位低ければ五十に打ち趣向すべし●黒二一は五十に締る方宜し●黒二三の手面白からず二五に約ゆるか或は「い」に打つべし○白二四は二五に這ひ黒二六に伸びし時二四と打つべし●黒二五の突き出し不可なり「い」にツメ白二六に押せし時「ろ」に二拆すべし○白二六は碁法になき大悪手なり「は」に盤らざるべからず、其時黒「に」に切れば「ほ」に押へ「へ」に切れば「と」に抱へ切りたる黒を提るべし●黒二七悪し「は」に突き抜くべし○白二八にても「は」に盤るべし然る時は二六の大悪手も差支なきことゝなるなり○白三十の手面白からず「ち」に打つべし●黒三一は八七に打つべし○白三四悪し「り」に打ち黒の應手を試みるべし●黒三七は「ぬ」に飛ぶを形とす○白三八より四六まで平凡にして面白からず三八の手にて「り」に打ち黒の應答により手段すべ

し○白四六のカケツギ緩し九十に約へる外なし●黒四九筋違ひなり此處を打つなれば六九に飛ぶ方優れり何となれば白より「る」に打たれ黒を「の時白」わに來れば四九の手遊離して悪しければなり此場合「か」を好點とす○白五十悪し此處八二に打つが普通なれども「る」と二三の肩を衝き黒の應手を試みよ○白五二悪し五三に引き黒五二に押し來らば五四に縛ねて打つべし然るに圖の如く五十の一子を捨てたるは損なり●黒五五惡手にはあらね

圖一十三第



ご八一に打抜く方味善し○白五六空手なり六四に曲るかさなくば八一に下り黒よ「白九一黒」たの時六四又は「は」に打つべし●黒五七手順悪し八二に押し白「か」黒九二白

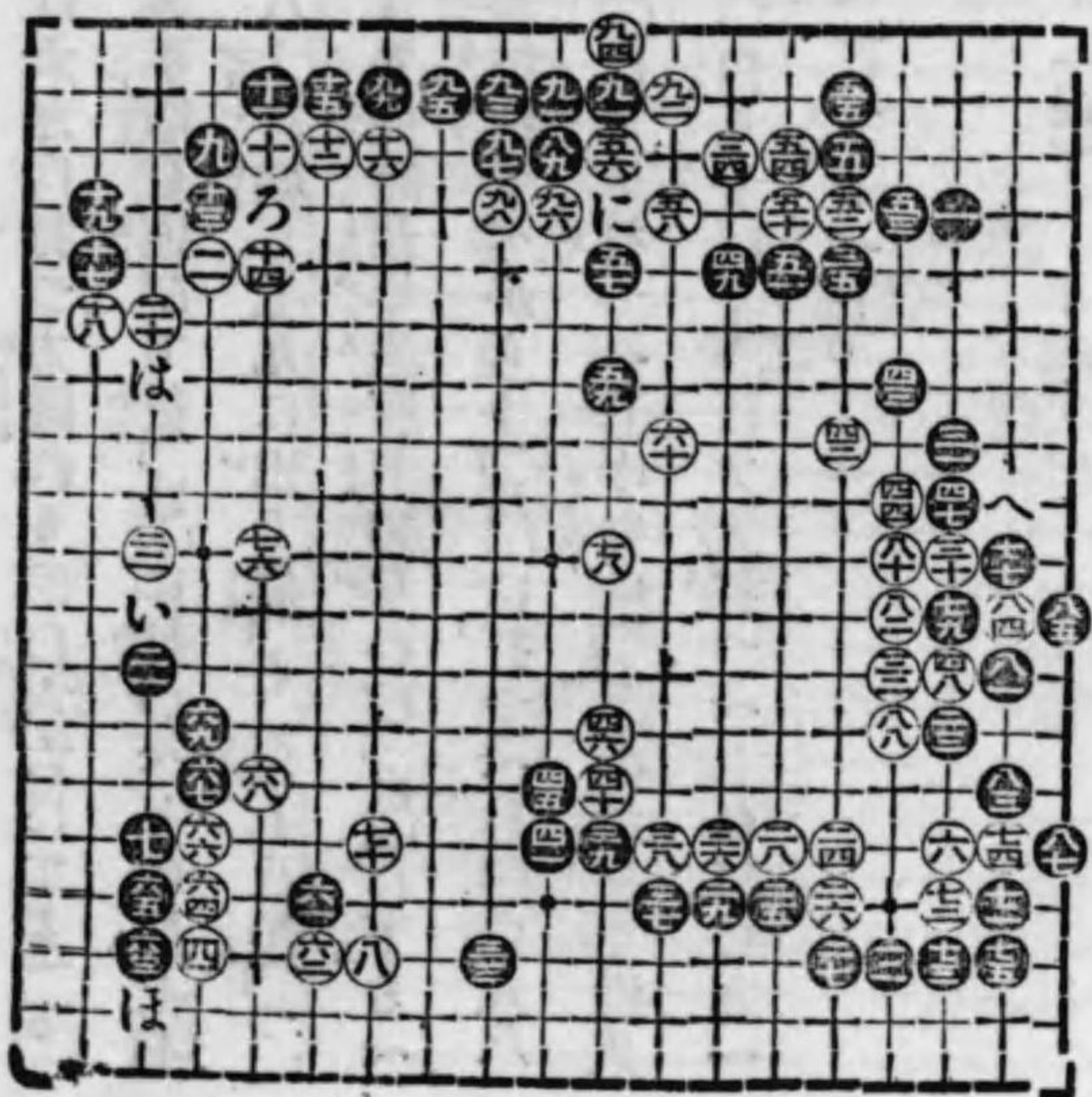
「れ」と打ち徳をなして後にすべし●黒六一は六九に打つ方優れり○白六六にても「る」に打つべし○白七四は八一に下り前評の如き手順を運びて後「は」に打つべし●黒七七打ち過ぎなり八二に押し利得すべし○白七八大に緩し七九に出で黒「そ」白七八黒「つ」となりし時「は」に盤るべし●黒八三打過ぎなり此時最早黒勝算確なれば「は」に下るべし「は」の處は本局の要點なり○白八四緩し好機逸すべからず「ね」に打つべし○白八八緩漫も甚だし先づ「は」に縛ね黒「な」の時「よ」にアテ打つべし中央は「ら」の邊まで進入の出来る處なり●黒八九は九一に縛ぬべし○白九十は「よ」にアテ打つべし●黒に九一九三と打たれては白の敗なり●黒九五「は」に下るべし○

互先 (第三十二圖)

○白八面白からず「い」に夾むべし○白十二は「ろ」に引くを宜しとす十九までの打ち方昔の定石にあれど白甚だ損なり○白二十は「は」にコヌムべし●黒二一の二間析き當を

得たり○白二二は四七の邊に析くを宜しとす○白二六、二八の趣向俗なり單に三十に  
 夾むべし○白四二は四九に並飛すべし●黒四三は四四にコスミ出し白の應手を試むべ  
 し●黒四七は矢張四九に單關すべし○白四八は七七に下るべし後に黒より七七に縛ね  
 られて其應答に窮せしにあらすや○  
 白五十より五八までの趣向面白から  
 す五十の手にて「に」に守り五八の手  
 にて六五にコスミツグべし○白七二  
 は唯七四に約ゆべし●黒八三は八四  
 に粘ぎて仔細なし○白八六と劫を粘  
 ぎたるは鈍極れり「へ」に切るべし●  
 黒八九の趣向面白からす九一の手は  
 九三に二段縛ぬべし●黒九五は九九  
 に打つべし○白九六は九九に出づべ

第三十二圖



し九八にても同斷。

本局白の惡手甚だ多くして黒には格別の批難なし其中道にして勝勢を定めたるは偶然  
 ならずといふべし。

黒九十九手迄。

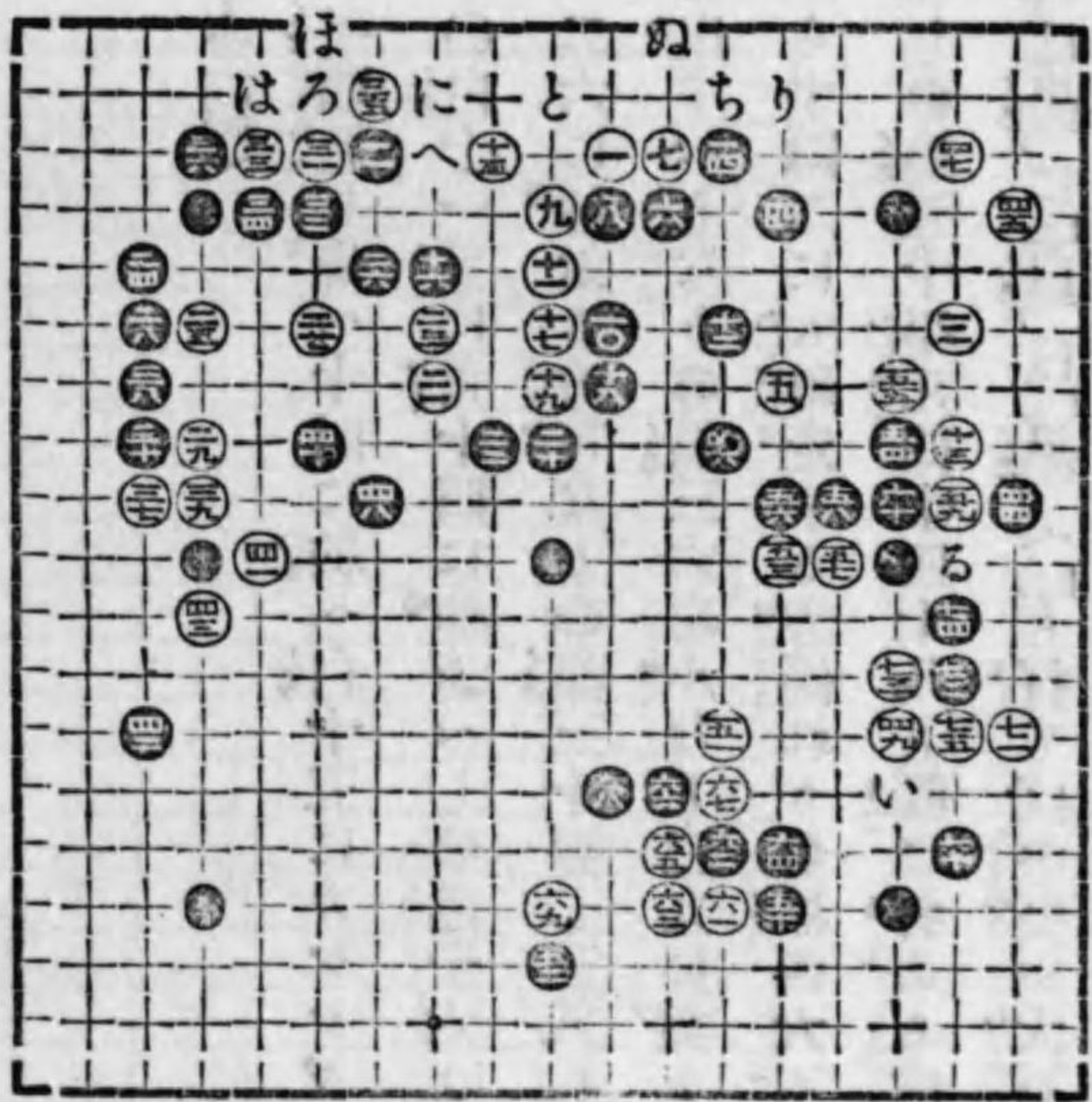
七 目

(第三十三圖)

○白五の趣向如何他に工風ありたし●黒十手順惡し先づ十四に約へ白十五にカケツギ  
 し時十と打つべし十二に至りても同斷とす○白十一兎に角十四に伸ぶべし●黒十六よ  
 り二三迄の運び善し然るに二四は調子惡し二六に伸ぶる方可なり●黒三十惡し三八に  
 伸ぶべし○白三一時機早し先づ三七へ縛ぬ出すべきなり●黒三六事小なり三九に突き  
 當り三十の惡手を整ふべし●黒四十面白からす四二に大斜走する方優れり●黒四六不  
 可なり五六に打ち白四七の時「い」に守るべし●黒五十平凡四四十八と既に打ある處  
 なれば先づ「ろ」に切るべし其時白「は」なれば黒「に」白「は」黒「へ」と打てば中央の大石  
 連續する能はずして且つ活形にも苦しむべし故に白「は」の手にて「に」に引く外なし

因て黒「は」に二子を提る而して白若し手を抜かば黒」と打ち白石死形となる因て白「ち」黒「り」白「ぬ」となり黒五十に轉せば大に善し●黒五四は五八にコスム方安全なり○白五五緩し少しく無理なれども白としては五八に覗き黒六十の時五五と打つ方黒に紛れを生ぜしむべし○白五七は打たずして五九に出で黒五七若しくは六十に應せし時「る」に突出せざれば本形にならず○白六一より六九迄無理なり兎も角「る」に出で徐々に進行する外なし●黒七十は「る」に約ゆべし七四の時も同斷「る」の處に双方共注意を拂はざりしは遺憾のことなり。 白七十五手迄。

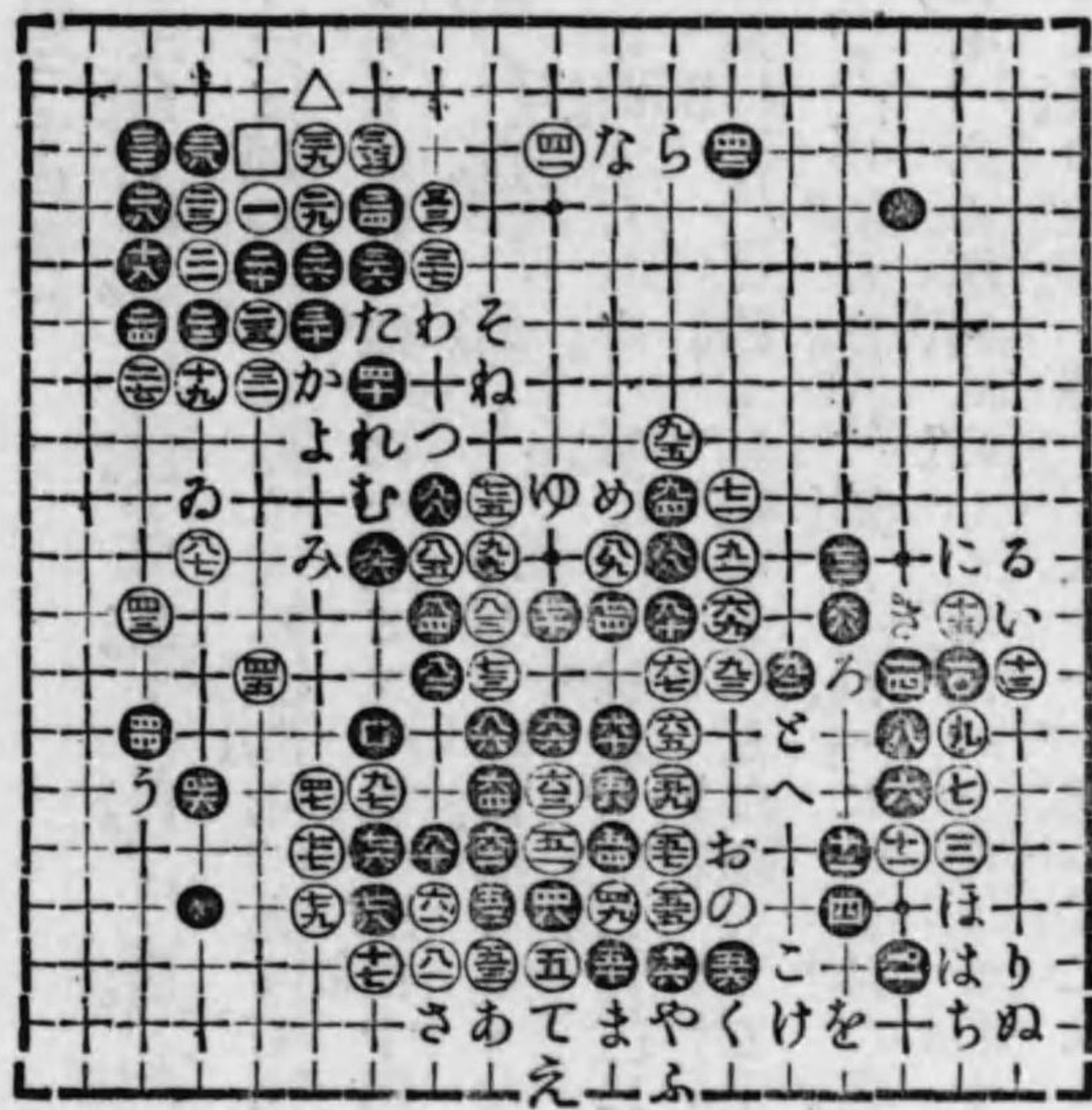
第三十三圖



○白十一惡し十五に預け打つべし其時黒十三白十四黒「い」白「ろ」黒十一白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」となるが普通の定石なり白十三と緯ねる手になりては最初七、九と打ちたるが共に惡しくなりゆくなり然し十一と先きに打ち後ちに十五とツケ黒十三白十四黒「い」白「ろ」黒「と」白「は」黒「ち」白「り」黒「ぬ」白「に」黒「る」となしては白取らるゝなり是れ十一の曲りあるが爲めなり若し十一の曲りなき時は黒「ち」と緯ねし時白「ほ」に續く手筋あれども既に十一の曲りありては最早「ほ」に續く意味なきゆる白惡し尤も上隅に黒の置石ある場合には黒「に」の手にて「ち」に緯ね白「ほ」黒「を」白「に」に伸び黒「る」と連行し白を取る手もあるゆる最初白七、九の趣向は宜しく考ふべきなり●黒十四惡し十五に伸ぶべし白に十五と打たれては黒の方惡し●黒十八は一步進みて二八に入るべし○白十九、二一は定石を一段間違ひをるなり斯く十九、二一と打つは白一が□印にある而して黒二八の時白二黒一白二三と緯ね込む定石は極めて普通なりされば白十九は三二に應ずべし二九まで白無理なり●黒三十惡し三一に切り白三十黒三六

と打つ手になれば如何なる結果となりても黒の方悪しき筈なし白に三三と打たれては黒少しく割合悪し●黒三四悪し「わ」に飛ぶ型なり○白三七打ち過ぎなり△印にカケツグ外なし●黒三八悪し三九に切れば四目提れるなり故に白三七を悪手とは云ふなり●黒四十筋違ひなり「か」に押し白「よ」の時四十と曲る外なし○白四一緩し「か」にアテ黒「た」白「れ」黒「そ」白「つ」黒「ね」白「な」と打つべしさなくば廣く「ら」の邊まで析くべし●黒四二穩かならず「か」にコムべし、後ち「ろ」に打つ意味と「わ」に縛ぬる意味にて此の黒石を保護すべし○白四九五一無理なり四九は五二に受くる外なし●黒五六緩し五七に押し白「の」

圖四十三第



黒「お」白五六黒「く」白「や」黒「ま」白「け」黒「ふ」白「こ」黒六一白「え」黒「て」白「あ」黒八一白「さ」黒「を」にて黒の攻合勝なり白五九の時六二に押さば攻合は勝なれども黒に六一と行びられ白八十黒五九となり面白からざるゆえ斯く五九と押したるなるべし一理なきにあらず●黒六十は善悪を問はず六一に伸び白七八又は八一の時六十と伸て大に戦ふべし○白六一悪し前評の如く六二に押せば二目は提れるなり五一、六三の二目を捨て六七と打つ手になりては白悪し●黒六八悪し「き」に押し白「に」の時正中の星に二間に飛ばし黒優勢なり●黒七二悪し「ゆ」に飛ばべし○白七三悪し「ゆ」に帽すべし●黒七六より八十まで悪し「め」に飛び白左方の六子を取りに來らば黒之を捨て中央の白を攻撃する手段に出づべし●黒八二より八六まで又悪し八二は打たずして「め」に飛ばべし○白八七何たる緩手ぞや今や中央の戦鬪 酣 なければ「み」に飛び黒一方の出口を塞ぐべし是れ勝敗の決なり○白八九大悪かゝる手は碁法になき手と知るべし此局二目の細碁に終りしは不思議なり○

黒百手迄○





好點なれども「ね」の斜走を先きにするべしされば黒も五の手にて五三を先きにするべし●  
 黒五七打たずもがな「つ」に出て戦を挑むべし○白六六面白からず八四にツケ連絡を  
 計るべし○白七十打たぬ方宜し○白七三前評の三三と意味同じ「な」に押すべきなり●  
 黒七七悪し八二に下る外なし○白七八大悪八二に捲り黒七八の時「ら」にアテるを手筋  
 とす●黒七九大損八十に縛ね白七九なれば黒「む」にて攻合勝なり●黒八三空手なり、  
 「う」に押すべし○白八四、八六早し八四の時「う」に押し黒「の」の時九三と打ち連絡を  
 計るべし○白九八大悪黒に「か」にツガルれば却て「の」に切らるゝ疵を白石に残すにあ  
 らずや此碁黒より「お」に出で白「く」黒「や」と劫争を打たるゝ憂ある處ゆる白「く」と守  
 り後白「ま」に切り黒「り」白「ふ」とツクル意味を狙ふべし「ふ」のツケは手筋なり参考と  
 すべし。白百手迄。

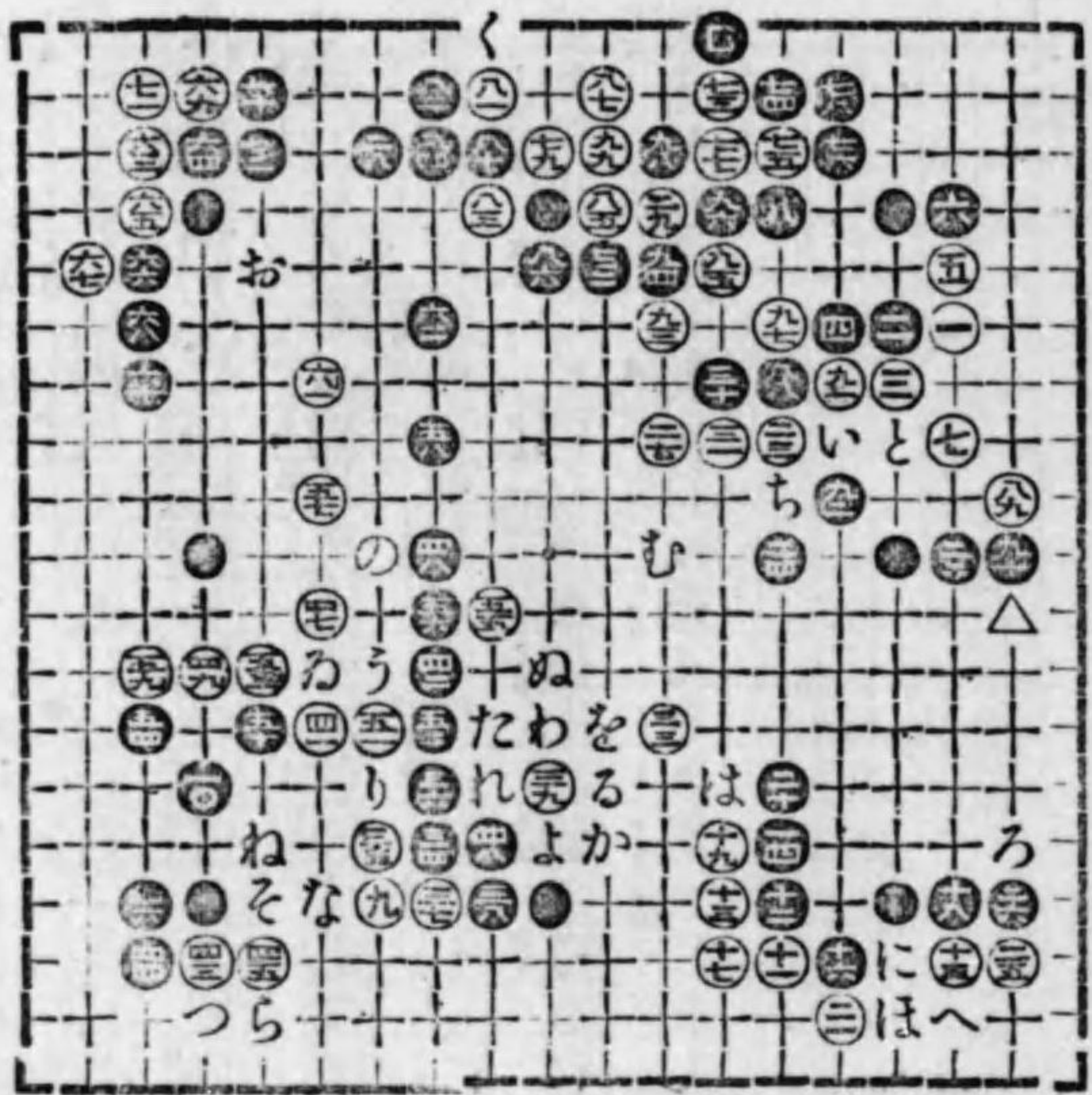
八子 十四目勝

(第三十六圖)

●黒十は先づ「い」にカケ白九十に走りし時△印にツケ此の白に壓迫を加へて後にすべ  
 し●黒十八は此の場合二一に下り白「ろ」に打ちし時十九に曲るべし然る時は三白子出

路に苦しまん○白十九の押し無謀なり二一に打つ外なし●黒二十緩し二一に下るべし  
 其時白若し二十に縛ねば黒は「は」に切るべし●黒二四は「に」にグヅミ白「ほ」に出で  
 なば「へ」と切り隅に徳をなしておくべし●黒二六又緩し「い」にツケコシ白九一黒八八白  
 九二黒三一白「と」黒「ち」と白を壓迫  
 すべし●黒三四面白からず「り」に冠  
 し白三四にコスマば黒三九白三六黒  
 「ぬ」と打つべし●黒三八は三九に飛  
 ぶ方手筋なり然し圖の如く突き當り  
 しも又悪しからず○白三九と所謂筋  
 に来りたる時四十と續きては白の術  
 中に陥りしものなれば四十の手は  
 「る」にツケべきなり其時白「を」に應  
 ずれば黒「り」と曲り白四十に切れば

圖六十三第



黒も「わ」に切り白「か」なれば黒「よ」に切るべく白「か」に打たずして「た」に打たば黒「れ」に切りて善し此の「り」の點は双方の要所なり●黒四四緩し四五に緯ね白「そ」に切らば黒四間に緯ね白「つ」黒「ね」白「な」黒四六と續き「り」に切點残り黒の方働きある形勢となるなり●黒五十悪し白に五一、五三と抑止せらるゝ處ゆえ五十は打たずして五七の處に帽するを優れりとす●黒五四必要なし「む」に飛べし●黒五六働きに乏し「う」に曲り白「わ」にツギ黒「の」と双べば自ら白の出路を遮むに便なり●黒七二餘り堅きに過ぐ「お」にカケツグべし●黒九二は損なり直ちに「く」に緯ねれば劫となり黒大に善し然し譜の如くにてても黒勝なり。

●劫トル ●粘

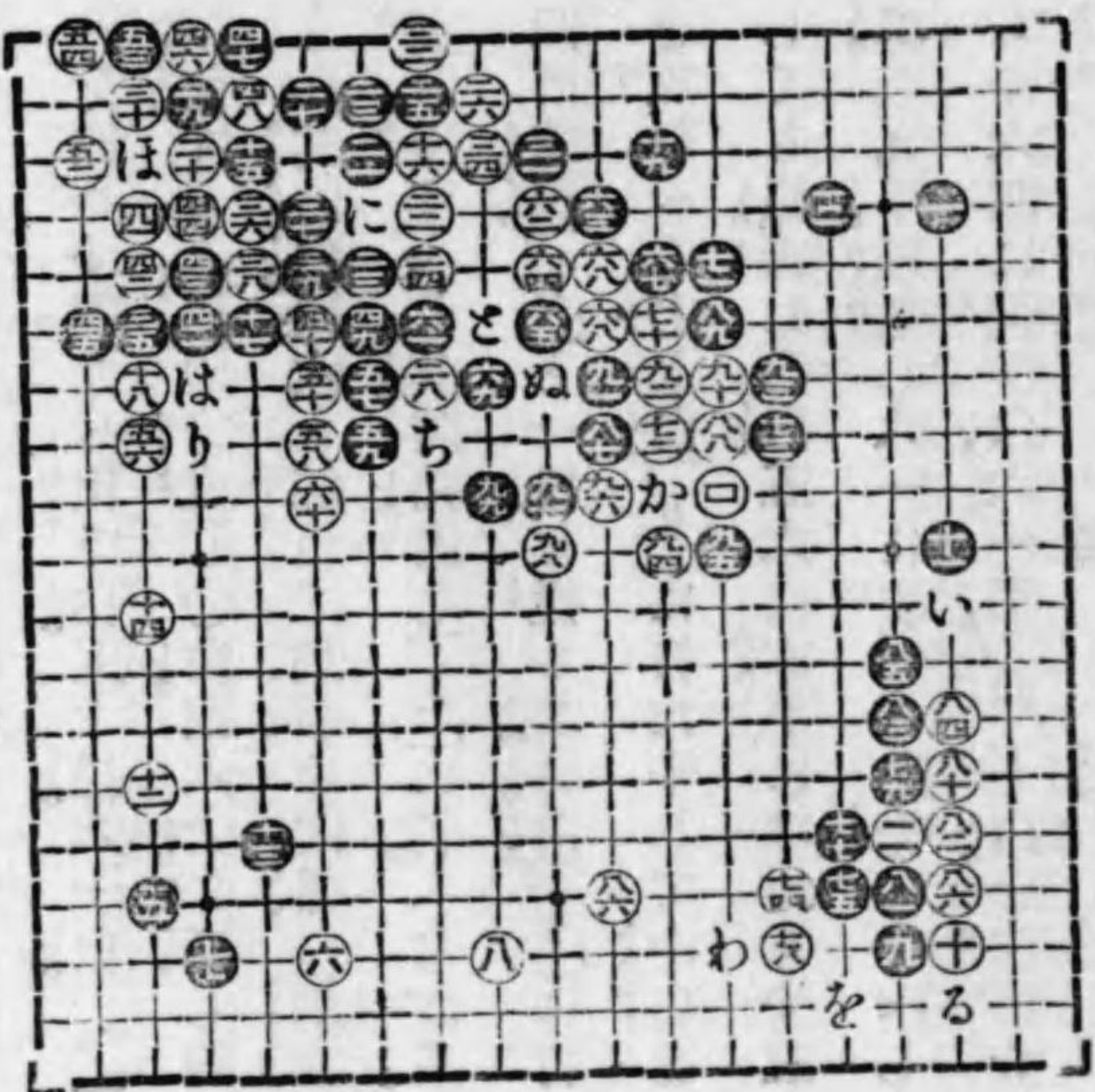
互先勝

(第三十七圖)

●黒十一は「い」まで進むべし○白十二、十四時機尙早し「ろ」十五、三六の三點を選び打つべし○白十六悪し十四とある場合ゆる四一か四三に打つべし●黒十七は四三にか

ケても善し○白十八位低くして面白からず此場合三八にツケ黒三九白四三黒三七なれば白四十と切るべし故に黒三七は恐らく二一にツケルなるべし其時白二二黒四十の時十九に析き黒十八と打ちし時白二十とコスミツケ打つべし又白十九に析く手にて「は」に飛ぶも善し○白二十面白からず二二に斜走すべし●黒二一事を好む手なり三六に伸びにて仔細なし○白二二緩し「に」に緯ね黒二七の時三三に捲るべし○白二八は先づ三二に緯ねべし●黒三五打ち過ぎなり四三にコスミ白四二に受けたる時四九に伸びなば白六一に續く位のものなり其時五三と緯ねて此一段の黒を納まるとも或は五三を四四にアテ白「ほ」にツ

圖七十三第



ぎたる時五八と外部に斜出して宜し○白三八、四十は少しく無理なれども白として  
 詮方なし●黒四三、四五悪し先づ四三のダメを詰めず四九へ出で白五十黒六一白へ  
 なれば黒五七白五八黒六九と切れば如何に變化するも黒の方宜し○白四六大に悪し四  
 九に約へなば黒窮し黒は「に」に打つ外なからん其時白四六と縛ねて劫争せば黒に劫立  
 の場所なし●黒五五の劫粘大悪先づ六一に突き出すべし其時白若し「と」に約へなば黒  
 五七白五八黒六九白六五なれば黒六二白六四の時黒「ち」と一目を提る其時白「り」に打  
 ち左側の黒を取らば黒九二に打ち中央の白を攻むべし若し白「り」に打たずして中央を  
 防禦せば黒「り」に跳り出し活路安全何れにしても黒善し○白五六は本手にはあらず五  
 七に續き黒を壓迫するを以て本手筋とす●黒五九手順悪し六一に出づるを先にすべし  
 五九と出でたる以上最早六一の出は面白からず六四に飛び白六一黒「ぬ」と白を攻め立  
 つべし○白六四は筋違ひなり六五へ飛ぶか或は六六に縛ぬる手筋なり●黒六五急に過  
 ぎて悪し「ぬ」に斜走し徐々に攻勢を取るべし白に七二と打たしめては敵を樂となせり  
 ○白七四面白からず八一か七八に打つべし●黒七五悪し「る」に縛ね白七六に引きし時

黒「を」にカケツグは普通なれども此場合七八にツケ白「わ」に約へし時七五と打ち早く  
 眼形を保つ工風をなすべし○白七六は七七に約へざれば手筋に外る●黒七七は七八に  
 縛ぬる方優れり●黒八七以下悉く手筋なり、○白八八悪し兎に角「か」又は九六に打つ  
 外なし○白九十も九六に縛ぬる方優れり譜の如く黒右側に大地域を作りては白敗勢な  
 り是れ最初三八、四十無理の結果なり然し六四の手にて六五又は六六と打ちなば斯く  
 の如く黒に地境を作らしめざりしならん白の爲めに惜む。

白百手迄。

三子

(第三十八圖)

●二目ツグ

●黒十四の切りは定石にある手なれども黒として事は好む手なりされば十七に縛ぬ  
 る方宜し○白十五悪し「い」か「ろ」に打つべし其時黒十五に下り白十九黒五七白十七  
 黒「は」白「に」黒「は」(此の「は」の下り注意すべし)白「へ」黒二七の處に飛びとなるが  
 普通の定石なり●黒二十悪し三三か二四に打ち白の出切りを防ぎおくべし、○白三一